

D R E A M E R

ドリーマー／時空を超えて

A Novel

by

Richard L. Miller

リチャード・L・ミラー 作

Japanese Translation

by

Asako Kawakubo & Junko Tanaka

川久保麻子・田中純子訳

Translation Edited

by

Makiko Tajima Asano

田島万紀子 翻訳編集

Copyright March 2000 and May 2007 by Richard L. Miller, All rights reserved

No part of this book may be reproduced or transmitted in any form by any means, electronic or mechanical, including photocopying, recording, or by any information storage and retrieval system, without permission in writing from the publisher.

For Information, address:

Two-Sixty Press
P.O. Box 7888
The Woodlands, TX 77380

The author gratefully acknowledges permission for use of lyrics from the following songs:
Respectable: Worlds and Music by Kelly Isley, Ronnie Isley and Rudolph Isley © 1960 Ronnie
Runs Tunes; By Permission, Isley Management;

Baby, I Need Your Lovin': Words and Music by Eddie Holland, Lamont Dossier and Brian
Holland © 1964 (Renewed 1992); JOBETTE MUSIC CO, INC. All rights Controlled and
Administered by EMI BLACKWOOD MUSIC INC on behalf of STONE AGATE MUSIC
INC (A Division of JOBETTE MUSIC CO., INC) All Rights Reserved International
Copyright Secured. Used by Permission

Cant Help Falling In Love: by George David Weiss, Hugo Peretti and Luigi Creatore
© 1961 by Gladys Music Inc., Copyright Renewed and Assigned to Gladys Music
(Administered by Williamson Music) International Copyright Secured. All Rights Reserved.
Reprinted by Permission.

The Thrill Is Gone: Words and Music by Rick Ravon Darnell and Roy Hawkins
© 1951, 1979 Powerforce Music (BMI);

It's Now Winter's Day: Words and Music by Tommy Roe © 1966 by Low-Twi Music.
Sister Love. Words and Music by Curtis Mayfield © 1963 by Warner/Tamerlane 1963.

The author would like to express appreciation to Japanese translators Ms Junko Tanaka and
Ms Asako Kawakubo, and Japanese translator/editor Ms. Makiko Tajima Asano for their
excellent work translating the original text into Japanese.

This Japanese/English edition of DREAMER
ISBN 978-0-9669414-4-9

DREAMER Original Edition
Orig. ISBN: 0-966914-1-1
13-digit ISBN: 978-0-9669414-1-8

目次

CHAPTERS

パート 一	シグナル	1	SIGNAL
二	記憶チャンネル	11	MEMORY CHANNEL
三	マグネティック・タイド	53	MAGNETIC TIDE
四	高速道路	73	HIGHWAY
五	ノイズ	101	STATIC
六	ジュークボックス	123	JUKE BOX
パート 二			
七	レイチェル	151	RACHAEL
八	星空の向こう	169	ABOVE THE STARS
九	コア	189	CORE
十	周辺視野	199	PERIPHERAL VISION
十一	エンジェル・ラジオ	222	ANGEL RADIO
十二	レオナルド	244	LEONARD
十三	リスベクタブル	251	RESPECTABLE

CHAPTERS

パート目 十六 十七 一八 十九 二十 二十一 二十二	一九六六年十二月 コルトレーン 窓 リプレイ 地平線 稲妻 観察者	337 354 380 385 398 410 424	DECEMBER, 1966 COLTRANE WINDOW REPLAY HORIZON HEAT LIGHTNING OBSERVER
パートIV 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八	一九六七年初 スカイライン 帰還 信徒たち パイロット・ウェイブ 終章	434 447 455 472 483	MORNING SKYLINE RETURN CONGREGATION PILOT WAVE
十四 十五	ゲイル 同調	290 310	GAIL ENTRAINMENT



—

現在の状態をもたらした過去が無数にあるように、現在の状態から発展していく未来もまた数限りなく実際に存在する

「フィジックス・オブ・インモータリティ（不滅に関する物理論）」フランク・ティプラー

Signal

ー シグナル

夜九時。第十四ラボは静まり返っている。僕はしばらくのあいだ、黒い革張りの誘導チェアに身体を横たえるように座って、薬が効くのを待つ。三十秒は経つただろう。思ったとおり、部屋がぼやけ始めて、空調システムから冷気が出ているのに、とても暖かくなってきた。まるで誰かが暖房を入れたみたいだ。僕は喉にマイクをつけて、ヘルメットのストラップを締める。突然、レオナルドの声がヘッドホンから聞こえてくる。

「マイケル、聞こえますか。数を数えてみて」

唇を動かさず、口も開かずに、僕は息をして、一から十までの数字を思い浮かべる。

「大きくはつきりと聞こえます。少しの間、体を楽にして。音声サインを入力しますから」

僕は大きく息を吸い、顔を上げ、誘導の前にいつもするように、天井のタイルの穴を数え始めた。五十九まで数えたところで、レオナルドの声がもう一度聞こえる。「オーケー、マイケル。気分はどうですか？」

「ああ、大丈夫だ」 自分の声がヘッドホンを通して聞こえてくる。金属的で、まるで機械みたいな声。銀行のATMが出すような不快な音にそっくりだ。これが嫌いなんだ。

「全身でシグナルを送って」

深呼吸をして、左半身で動きを意図する。うねるようなさざ波が背骨のあたりを下りて、また上がっていき、そして頭の上まで届くのを感じる。もう一度、深呼吸。ヘッドホンの中で、レオナルドの抑揚のない単調な声が響く。

Dreamer 1

Signal

「ええと…、すべて正常ですね。脳波も異常なし。驚きましたね、どれも順調に作動しています…、オーケー、マイケル。青い正方形を思い浮かべて…。ありがと。もうバイザーを下げてもいいですよ」

僕はメタルシールドに手をかけて引き下ろす。目の前が真っ暗になった。最後に見るのは、暗闇に浮かぶ二つの緑の点だ。僕が向こうへいつの間、眼球の動きを追跡しようとする機械。

「上を見て。下を見て。右左。じゃあ、ナンシー伯母さんの裸を想像して。ハハ、冗談ですよ。よし、瞳孔計も機能しているようです。もうすぐ行きますよ」

「よかった」 自分の声がヘッドホンの中で響く。金属的で機械みtainな声。

「忘れないで。ロックしてから、スキャンです。そしてロック解除。コールする前には必ずロックしてください」

「了解」

「夜なら、テレビの画面を見るようにして。外だったら、星と月の位置を確認して。いいですか、太陽が地平線から十八度下に傾いたら、夕方は終わりです」

レオナルドの言葉が終わらないうちに、ヘッドホンから、機械の唸るような音と、それとは調和しない小鳥のさえずりのような音が聞こえた。そして今度は別の音だ。エレベーターが動き始める時のような音。

「…ラジオから音楽が流れていたりしたら、曲名を教えてください。それから、常に時間と天候を確認するように。もし雨が降っていたら、それは重要な…」

Dreamer 1

エレベーターのような音の音程と音量が上がっていき、僕は体が軽くなるのを感じる。おそらく誘導前催眠のせいだろう。椅子から浮いている自分を想像してみる。上へ、そして別の次元へ。

Signal

「じゃあ、数学的コプロセッサを見てみましょう。十二と九十一を足すと…、ありがとうございます。どこでもいいから行きたい場所を思い描いて。いいですよ。前頭葉、後頭葉ともに、とてもいいシグナルが出ています。次に、『ゲティスバーグの演説』を暗誦して」

『ゲティスバーグの演説』なんて知らないよ」

「オーケー。何でもいいですよ。ビートルズはどうです。ビートルズのファンでしょう」

僕の頭の中で音楽が響いた。一九六七年度の春の曲が、まるで川のように流れ込み僕を包む。

すべてが夢。

「来たぞ。シータ派と…、周波同調。いつてらっしゃい、ミッチェルさん。よい夢を」

僕は皮膚の鼓動回路に身を沈め、ピラミッド型ベッツ細胞を横切り、曲線状の円蓋を通り抜ける。液体のように、僕は自分の皮膚に溶け、黒い椅子を通り抜け、その下の晴れた空へと落ちていく。

火曜、午前十時。誘導からちょうど十四時間が経った。僕は厚い皮製の椅子に埋もれそうになって、ラボ所長のデビッド・パウンドストーンが机の上を引っ掻き回しているのを見ている。数分おきにパウンドストーンは手を止め、薄くて茶色い髪の毛を掻き上げるか、丸い縁なし眼鏡を押し戻す。ぼさぼさのあごひげと、半袖のオックスフォードシャツとカーキ色のズボンのせいで、まるで、恐竜の発掘をしているオックスフォード大学の古生物学者といった風情だ。

僕はパウンドストーンの後ろの窓越しに広がる、テキサス州サンアントニオの夏の街並みに目をやる。レンガとガラス窓からなる茶色がかった風景だ。所々にメスキートの木が見える。禁止されているのでニュースを聞くことはできないが、外の気温は

Signal

三十五度を超えているに違いない。額で目玉焼きが焼ける暑さだろう。たとえラボから許可が下りたとしても、あんな加熱炉に足を踏み入れるのはごめんだ。

「すみません、マイケル。探しているものに限って、いつも見つからないんですよ。—ありました、あなたのファイルです」パウンドストーンは申し訳なさそうに含み笑いをする。「机の上にあります。ハハハ」

「ハハハ」僕も真似をして笑い、最高に愛想のいい笑顔を作る。パウンドストーンの欠点に文句をつけたくはない。僕の個人履歴に響くかもしれないから。

「これです」パウンドストーンはファイルを開き、眼鏡の位置を直す。「ここへ来てから二週間ですね。そして昨晩が十回目の誘導でした」彼は顔を上げた。「何か覚えていますか」

「あまり覚えていません」僕は首を横に振る。「でもベッドに入ってから、やたらと夢を見ました。すごく映像が鮮明で、ほとんどが小学校の時の夢です」

「ああ、それはかなり頻繁に起こる現象です」パウンドストーンはうなずく。「誘導テクニックに対する脳の初期反応が、鮮明な夢という形で現れます。コントロールできませんでしたか」

「いいえ」質問をしようとして、僕はためらう。しかし、構うもんか。「自分がどこへ行くのかコントロールできるようになりますか。たとえば、一九六六年のある特定の日に行きたいとしたら、いつか行けるようになりますか」

パウンドストーンはオックスフォード流に肩をすくめながら眉を上げてみせる。「そうですね、その確率は低いですね。以前にも申し上げたように、理論上は可能です。被験者の中にも、優れたコントロール力を持つ方がいます。たとえばオート・プリアヤ、コルトレーンはそうですね。しかし、そんな能力に恵まれている人はごく僅かです。それは最初の日に説明しましたよ」

Dreamer 1

Signal

「分かっています」 次に何を言われるか想像できた。僕はグラフ曲線の膨らんだ辺りにいる。そこには平均的な人間たちが大勢いて、誰も行く場所を選ぶことなどできない。ある瞬間には小学校二年の算数の授業に座っていて、次の瞬間には不味い学校給食を吐いている。「僕が希望したのは――」 僕の言葉は、ほとんど聞き取れないほどに消え入る。

パウンドストーンは微笑んだ。「分かります。ほとんどの方が行く場所をコントロールしますが、できる人はごく僅かです。マイケル、あなたもその他大勢の人々と同じように、記憶バンクに落ちていくだけで、コントロールすることはまず無理でしょうね」

まったく最高だね。一万四千ドルと、三か月を費やして、初めて遊んだ砂場を訪れるというわけか。ウラジオストックへの片道航空券でも予約しておけばよかった。

パウンドストーンは一息つくくと、自分用のメモに走り書きをする。「あと一回、催眠セッションを入れましょうか。今日の午後はどうです。いつもの時間」

「ええ。いいですよ」 パウンドストーンが手帳に時間を書き込むのを僕は見ている。ラッチングのカバーの黒い小さな手帳。おそらく日本のデザインだ。パウンドストーンのような専門職の人間は日本のデザインに飛びつく。六〇年代風のレトロなデザイン。記憶の旅でも、彼らの方が上を行っているというのか？

「退行催眠をするのは、解放するためです」 パウンドストーンが僕に話しかける。「そのあとには、なんらかの情報をキャッチし始めるようになるでしょう」 パウンドストーンは顔を上げて、眼鏡越しに僕を見る。「ですが、もちろんすべての記憶が楽しいものではない――」

「分かっています」

Dreamer 1

Signal

「実際、好ましくない材料というのが、リコール失敗の最大の原因です。潜在意識は思い出しにくいのです」 彼はひと息つくと、一瞬笑みを浮かべた。「あなたのケースも、そうかもしれませんね、マイケル」

「僕の場合は違うと思いますよ」 僕は立ち上がった。「今日の午後ですね。それじゃ」

「午後です」 パウンドストーンは握手をしながら言った。「四時に」

エレベーターへ続く誰もいない廊下を歩きながら、僕はこのプログラムに残るべきなのか迷う。行きたいところへリコールできないなら、時間と金の無駄じゃないのか。

僕はエレベーターのこのボタンを押し、ガラス張りの最上階のラウンジへ行く。ドアが開くと、そこには誰もいなかった。カーペットが敷かれた灰色の広いラウンジ。なぜかバロック風なサン・アントニオの街並みが見渡せた。

僕はカーペットの上を横切り、窓際のソファに座り込んだ。メートル近い高さの窓の外には、目の高さくらい位置に、なんだかみすばらしい白い雲が三つ浮かんでいる。その真下には、一〇〇台ほどの自動車の群れ。テキサス型のフリーウェイの渋滞に巻き込まれて、まったく身動きがとれない。見ているうちに、真下の喧騒から立ち上る熱が雲をかき消していく。

残されたのは、埃っぽい青空だけだ。

ここに最初に来た日へ僕の思考は戻っていく。パウンドストーンが時間旅行者の一団に説明するのを僕は聞いている。ホールに反響する。パウンドストーンの声は、僕たちにこう語りかける。最新のニュース、テレビ、ラジオ、この建物を出ること、すべて禁止だが、そういう制限はあっても、この旅行にはそれだけの価値があると。パウンドストーンは僕たちの勇気を褒め称え、僕たちを「真の意味での開拓者」と呼んだ。「人類が宇宙へ飛び立って以来、最も画期的な旅、つまり記憶の旅へと皆さんは飛び立つのです」。

Dreamer 1

Signal

張り詰めた雰囲気の人々に囲まれて、僕は心の中で、自分がこれから見ることに、聞くことに、感じることに、経験することを、すべてをリストにしていた。一九六三年十一月九日のCBSイブニングニュースで、クロンカイト(当時のニュース解説者：ウォータ―・クロンカイト)がロンドン・パラディウムでのビートルズの映像を流したことに。一九六四年のある日、まさに最初のフォード・ムスタングが町にやってきたこと。僕はメモを取り、さらに数年前に遡り当時の流行の車を見る。爆弾みたいなグリル、こうもりの羽みみたいな翼、プッシュボタン式のトランスミッション、ぐるっと回りを取り囲んだ窓ガラス。「ディック・トレイシー」の悪役に似た、クロムめっきの歯を見せてにやりと笑っているような車だ。

もう少し遡って、別の世界へ入り込んでみようか。ブーメラン、星型、アスタリスク、三角形やロケットの絵が散乱した世界。空飛ぶ円盤型のランプやカルダーのモバイル。どれも繊細なラインで、どんなに重くても、どれにも取っ手が取り付けてある。そして真空管のラジオだ。夜に音楽を流していたラジオ。サム・クック、ザ・プラターズ、そしてリトル・ステイビー・ワン

ダーの初レコード『フィンガー・ティップス・パートⅡ』。

本物のアメリカン・ヒストリー。戻るには最高の場所だ。

そこにとどまることはできなくても、その旅で一儲けできるだろう。

僕はサン・アントニオの摩天楼を眺める。コンクリートから突き出た巨大な長方形のクリスタルだ。今この瞬間にも、誰かが、あの辺にいる誰かだ、ポストンにある僕の広告代理店に電話をかけて、商品を買りたいが助けが欲しいと訴えているだろう。そして、言うことは皆同じだ。「六〇年代の趣が欲しいんだ。ベビー・ブーム世代は購買力が高いからな」

「おっしゃるとおりです。非常に人気が高く、かつ効果のあるツールです。初期のソウル・ソングとセットにしましょう。ザ・フォア・ア・トップスを聴いたことがありますか。ない？ では、トミー・ジェームスとシモンデルズは—？」

Dreamer 1

Signal

二十世紀なんとかのハリウッド・プロデューサーのようなクライアントがまた来るかもしれない。緑のシルクスーツを着たポニーテール以外には頭髪がないような男。一九六八年の歌をベースにした映画を作りがつていた。一九六八年の歌なら何でもいいと言おう。「どうしよう」、男は言った。「君が歌を探し、僕はストーリーを探す。当時は、シリアスなことがいろいろあったそうじゃないか」

僕は出来上がった映画を見なかったが、共同経営者のジェリーは見た。「支離滅裂だ」とジェリーは言っていた。まさに六〇年代と同じだ。しかし六〇年代のあらゆることと同じように、映画は大金を稼ぎ出した。

だから、ここを逃げだして自分の屋根裏に隠れることができなくても、あの場所で商品のリスト作りくらいはできる。もしかしたら掘り出し物が見つかるかもしれない。

「バンドで、一九六〇年代のリメイク・ソングを作りたい？ リトル・ジュニア・パーカーの『ドライビング・ウィール』はどうですか。一九六一年五月にチャート入りしています。もつと都会的な曲？ 一九六二年のナタニエル・メイヤーとザ・ファビュラス・トワイライツの『ビレッジ・オブ・ラブ』がいいでしょう。デトロイトのバンドです。無名ですが、いいバンドですよ。皆、最近のオリジナル曲だと思うでしょうね」

その曲を初めて聴いた二月の暗い夜を覚えている。通り過ぎる貨物列車みたいに、僕の古いRCAの真空管ラジオから大音量で流れていた。僕はラジオのボリュームを上げすぎて、兄のアールを起こしてしまった。「いい曲だな、マイケル」、アールは言った。「お前、いい趣味してるな」

ああ、兄さんは間違っていたけど、でもいいんだ。少なくとも僕はその歌で金を稼いだ。そして運がよければ、兄さんのあの台詞をもう一度聞けるだろう。

Dreamer 1

Signal

ひよっとしたら、バウンドストーンが間違っている可能性もある。僕マイケル・ミッチェルはグラフ曲線の真ん中にはいないのかもしれない。もしかしたら本当に訪れる時を選べるかもしれないんだ。友達にもう一度会えるだろう。そしてプログラムの参加者がほとんど全員そうしているように、寄り道をして今まで付き合った女の子全員に会いに行くだろう。

一人目はブレンダ・レイシーだ。緑の目、柔らかいプロンドの髪、小柄だけど均整のとれたボディ、怒りっぽくて、斬新的なキスに関しては誰もが認めるエキスパートだ。雪が降った三月の、あの素晴らしいプロム(高校のダンスパーティー)の夜に帰ろう。

あの時、彼女は胸元の開いた黄色いイブニングドレスを着て、彼女の母親のスタインウェイで「ムーン・リバー」を弾いた。そうだ、一番初めにブレンダを訪れよう。その次も、その次も彼女に会いに行こうか。

でもジル・ジャクソンの方がいいかな。美人で、少し背が高すぎたけど、見透かすような青い目で、長い茶色の髪をいつもポニーテールに結んでいた。公衆の面前で僕に飛び出し型ナイフを突きつけてきた唯一の女の子だ。なぜだか分からなかったが、僕の友達は皆、感銘を受けていた。自転車に乗ってエルクフォークにあるジルの父親の山小屋へ行って、小さな簡易ベッドの縮模様のマットレスに寝そべり夜の音を聞いたあの日に、帰るのもいいかもしれない。

それとも高校一年生まで遡って、パム・カースウェルに会いに行こうか。ハート型の顔で、薄茶色の髪をした、アーモンドのようなふつくらとした唇のパム。二人で上半身裸のまま鉄橋の斜めの支柱に座り、神様について語り合い、流れ星を探したあの夜に帰ろう。ショートパンツだけ身に着けて、高い鉄橋の上にはいた。パムは、月明かりの中で天使のように見えた。

だがパムのあとは、ブレンダ・レイシーに戻るだろう。あんな子は他にいない。輝くような笑顔となめらかな完璧な脚。一体、どうして僕たちは別れたのだろう。あれは何と関係があったのか。

思い出せない。

Dreamer 1

Signal

オリエンテーションで、男と女は同じ過去でも別々のことを覚えている傾向があるとされた。そして、一般的に別々の出来事にトラックバックすると、選択の機会を与えられたら、プログラムに参加した女性は大体ハイロード（公道）を好み、家族や友達に会いに行く。一方、男は大脳皮質の裏側を目指す。お気に入りのガールフレンドたちが住む、熱くて小さな記憶の束を探しに行くのだ。

僕はそれを探すためにここへ来た。それを認めよう。小切手を切り、スーツケースに荷物を詰め、皆に別れを告げて、飛行機に乗り込み、ここにやってきた時にも、頭にはそのことがあった。毎夜一時間半の間、人生の楽しかった時代を旅するつもりだった。心配事も責任もない。ただ心地よく温かく、やさしい思い出の中へ。脳のハイウェイに飛び乗って最高の場所へと旅をする。神経系ロードマップにある小さな明るい点の数々へ。

そして今、もちろん小切手が換金された後だ、ロードマップはないとパウンドストーンは言う。途中の標識さえないと。

記憶バンクをナビゲートすることは不可能に近い。

お気の毒さま。

僕は窓越しに曇ひとつない空を見上げる。頭の中でパウンドストーンの声が聞こえる。「がっかりしないでください。プログラムの終わるころには、少なくともいくつかの情報を取り戻すことができますよ……」

いくつか、では十分じゃない。

僕はすべてを取り戻すためにここに来たのだ。

Dreamer 1

二 記憶チャンネル

Memory Channel

正午。僕はカフェテリアでボウルに入った激辛チリと、シェフが「ミガス・ナチヨス」と名づけた得体の知れない物質を、なんとか腹におさめようとしている。

テーブルの向かいには、まるまると太ったオットー・プリアが、「ミガス・ナチヨス」の二杯目をがつがつと食べながら、満面の笑みを浮かべてお話し中だ。オットーは僕と同じように第十四ラボに割り当てられている。引退した神経精神病学者、つまり医者だ。そのオットーがこの食べ物を目そうに食べているということは、おそらく毒ではないという印だろう。少なくとも、少量ならばの話だが。

Dreamer 2

オットーの隣では、物言いは乱暴だが気さくなジム・ケラーがギリシャ風サラダを几帳面なくらいきれいに食べ終えようとしている。オットーと同じように六十歳代後半だが、おそらくオットーよりも十キロは重い。だがオットー博士と違って、ケラーには長時間の過去トリップの経験がない。初めての長い旅行が今週予定されている。

なのに、ケラーはそれほど緊張しているようにはみえない。たいてい自分がテキサスA&M大学で教えていた頃の、難解な化学の概念をネタにしてジョークを飛ばしている。「オットー、ペンを貸してくれよ。最近手がけた特許の化学構造を見せて

「やろう。アミノ・ワールドだ。分かるかな。ア・冷ミーン・なオールド・旧ワールドさ」

また始まった。この小さな図を、誰もが以前に見たことがある。仕方なく、僕たちは一応笑ってみせる。僕の隣に座っている普段は辛口のゲイル・バンクスでさえ笑みを浮かべる。彼女は小さなボウルに入ったフルーツサラダをついている。キウイとメロンの角切り、そしてブドウ。ゲイルは臨床心理学者だったと先週ケラーが言っていた。あるいは看護師か新聞記者か、そんなところだ。つまるところ、ケラーもよく知らなかった。

「ねえ、オットー」 意地の悪い笑みを浮かべてゲイルは言う。「ミガスって、スペイン語でどんな意味なのか知ってる？
アリよ」

「アリか…」 オットーはモジヤモジヤの眉をつり上げた。「そうか。でもなかなか旨いぞ！」

「ラッセル・コルトレーンはどんな様子か、誰か知らないか？」 僕は訊く。

「最悪よ」 ゲイルはまたブドウをフォークでつついた。「ランが二十二時間になったところで、レオナルドに連れ戻しされた。トレースがフラットになりかけたって」

Dreamer 2

「まさか」 ケラーが言った。「コルトレーンは誰よりもすぐいはずだろう」

Memory Channel

「プリントアウトを見たけど」とゲイル。「波形がほとんど消えていた。静止しているみたいだったわ。レオナルドはラッセルがエクリプスに向かっていると思って、緊急用の赤いスイッチを押して連れ戻したの」

「一ヶ月前、私もレオナルドに連れ戻されたよ」ケラーが言った。「一九五二年の夏だった。ワシントンのペンシルバニア通りを歩いていてね。いい夜だったよ。その時レオナルドの声が聞こえた。何処にいるかと聞くんだ」

ゲイルが僕の方をチラリと見る。もう聞いたことのある話だ。

「しかし、だ」ケラーがクスリと笑う。「あの夜は、全部自分で決めてやるつもりだった。だから返事をしなかった。そのあと五分か十分経った頃かな…。まるで稲妻に打たれたみたいで、戻ってきたときには誘導チェアの上に派手に吐いてしまっ
たよ」

Dreamer 2

「無理もないさ」とオットー。「緊急停止は、大脳皮質に直接電気ショックを与えるんだ。そんな目に遭うのはごめんだから、私はいつも気をつけてるよ。できるかぎりね。コルトレーン氏はどうしてる？」

「大丈夫じゃないかな」ゲイルが言う。「わりと平気だったみたいだと、レオナルドが言ってたわ。チェアから立ち上がって首を一振りすると、自分の部屋に戻って行ったって」

「まったくタフな男だね」とケラー。

Memory Channel

「タフっていうより、変わってるのよ」ゲイルは黄緑がかったメロンの塊にフォークを突き刺す。「ここ来て二週間目にはロングランができたんですって。つまり、二日間もチェアに座りっぱなしよ」

「たいしたもんだ」オットーは笑みを見せる。「私なんて、ロングランができるまでに一か月もかかったのに」

「過去に行ったまま二日間も過ごすなんて、変な感じでしょうね」ゲイルが言う。

「そうでもないさ」オットーは肩をすくめる。「標準的な一時間のセッションと変わらんよ。長い映画を見ているようなものだ。どっちにしろ観察することしかできないがね」

「私としては、その点が気に入らないのよ」ゲイルはそう言うと、僕をちらりと見る。

「過去で長い時間を過ごすと」オットーも僕の方を見る。「こういうおしゃべりが、背景で聞こえるようになるんだ。まるでラジオみたいにな」

「ラジオ？」僕は尋ねる。「ラジオに周波数を合わせちゃうってこと？」

「お前さんの頭だよ」ケラーが割って入り、長い指で僕の額を指差す。

「頭の中には記憶のレコードも入ってるんだ。当時間こえた音なら、本気で耳をすませばどんな音でも聞こえてくる」

「つまり僕は、そのときただのテープレコーダーだったというわけか」僕は椅子の背もたれに体を預ける。食欲は失せて

いた。

Memory Channel

「そういうときは、マイケル。まさにテープレコーダーだ」 オットーは笑みを見せる。「それが我々人間のやっつることだ。つまりテープに人生を記録しているんだよ。なぜ人間がそんなことをするのか神様にしか分からんが、とにかくそういうことになつてる。そして催眠と誘導チェアの力を借りると、どこかの時点に戻って、点滴が効き目を発揮する間は、そこにどどまることができるってわけだ」

「そうだ、オットー」 ケラーが言う。「ガス・シヨルダーノの話をしてやれよ」

「ああ、そりゃいい」 うなづくオットー。「ガスはすこかった。誰よりも長く過去にとどまって、とびきり詳細な情報を手に入れて戻ってきた。一九四一年のある火曜日に関の曲がラジオで流れていたかガスは記憶していたらしい。おまけに、そのラジオの外観を、ダイアルの刻み目まではつきりと覚えていたんだとき。ゼイが言ったが、ガスほどの周辺視野を持つている人間は見たことがないそうだ。生まれつきの才能だよ。やつこそナビゲーターのキングだ」

「そんなところまで遡るなんて、想像もできないな」 僕はつぶやく。しかしそれは嘘だ。僕には想像できる。

「どっちにしろ」とオットー。「自分が生まれた後にしか、遡れない。前世とやらに戻ろうと思っても無理だぞ」

Dreamer 2

Memory Channel

「重要なのは時間的な距離じゃない」 ケラーはサラダから三角に切ったチーズを取り除きながら言う。「脳がどうやって記憶を整理するかが重要なんだ。生まれて初めての誕生日の記憶が、一ヶ月前の出来事の隣に置かれているかもしれない。そのおかげで、このトリップは一層面白くなるというわけさ。つまり過去を旅すると、どこに辿り着くのか皆目見当もつかないのだ」

「特にロングランではね」 オットーは頷く。

「そうかしら」 ゲイルは最後に残ったメロンにフォークを突き刺す。「一度に二日以上あのチェアに座っているなんて、どう考えても変よ。心理学のちよつとした研修を受けたことがあるから分かるけど、あそこではどんなことでも起こりうる。たとえば『分裂』よ、つまり多重人格が現れるの。レオナルドが言ってたけど、まるで古い新聞紙みたいに、ズタズタに切り刻まれて戻ってきたドリーマーがいたらしいわ」

「まったく、レオナルドらしい言い草だね」 オットーが苦笑いを浮かべる。「いいかい。あらゆる正常な人格は、複数の知性から構成されている。そうでなかったら、運転をしながら同時に会話をして、ラジオを聴くなんて芸当ができるわけが—」

「自分の人格が分裂して勝手なことをやり始めるなんて、私には耐えられない」 ゲイルが口を挟んだ。「ズタズタになるなんて、考えるだけでゾッとするわ」

Dreamer 2

「そうだな、多重人格というのは別に気にならないけど」 僕は周りを見回して言う。「二日間も針を腕に刺しっぱなしっていうのは閉口するね」

「なあ」 ケラーがカウボーイのような悪戯っぽい笑顔を僕に向ける。「あそこにいる間は、水分を取らなくちゃいけない。私が嫌なのはあのチューブだよ……」 ケラーはちらりとゲイルを見る。「つまり、分かるだろ？」

「みんな、生理学上の基本ルールをお忘れなく」 ゲイルは席を立つ。「水を飲んだら、おしっこが出るのよ」

腕をまっすぐに伸ばしてカフェテリアのドアを開け、さっそうと歩いていくゲイルの水玉模様のスカートが揺れるのを僕たちは見つめる。

「私はゲイルが大好きだよ」 少しして、ケラーが口を開く。「ダブル・タイムのパートナーになったら、楽しいだろうねえ」
「ダブル・タイム？」

「ジムのお気に入りのお空想さ」 オットーが言う。「同じ過去を共有している、すでに知り合いの2人を過去へ送るのがダブル・タイムだ。そして喉頭マイクを使って会話をする。二人は過去を一緒に体験し、感想を述べ合うんだ」

「感想ねえ」 僕は苦笑する。

「そういえば！」 ケラーが僕の方を振り向いた。「レオナルドが言ってたが、二ヶ月前にダブル・タイムを試したカップルが

Memory Channel

Dreamer 2

Memory Channel

いてね。何かがとてもうまくいったのだろう。チェアを離れると自分たちの部屋へ直行したそうさ。しかも真昼間だぞ！」

「その話はレオナルドから聞いたよ」 オットーがケラーに言う。「二人は我々と同じくらいの歳だったらしいぞ、ケラー」

オットーはケラーの背中をたたく。「奥さんを連れてくるといい」

「ルイズは嫌がるよ」 ケラーは首を横に振る。「こういう類のことを信じない、骨の髄まで現実的な女なんだ」

「妻もそうです」 僕は言う。

「そりゃ残念だな」 ケラーは肩をすくめた。

「ええ」 僕は椅子から立ち上がりながら言う。「本当に」

……★……

Dreamer 2

「ヘンダーソン・コッドハム・ミッチェル・ランバート法律事務所です」

「やあ、ケイジー。マイケル・ミッチェルだ」

Memory Channel

「あら、どうも、ミッチェルさん。奥さんと代わりましょうか」

「いる？」

「今ちょうど出かけるところだとは思いますが。ちょっと見てきます」

カチツという音がしたかと思うと、ボストン周辺のハイウェイの交通情報が聞こえてくる。昼時のトンネルの渋滞、マス通りの軽い衝突事故、ボイルストン通りでの人身事故。もう一度カチツという音がして、聞きなれた声が聞こえてくる。「リンダ・

ミッチェルです」

「やあ…、リンダ？」 ためらいがちに言う。これではまるで、お伺いを立てているみたいじゃないか。実際そっなのかもしれない。

「マイケルなの？ テキサスはどう？」

「退屈だよ。食事は悪くないけどね」

「それで、もう自分は見つかったの？」

「いいや。君は見つかったのかな」 僕は言い返す。

Dreamer 2

Memory Channel

「ねえ、マイケル。人生に背を向けているのはあなたの方よ。私はとにかく生活費を稼いでるんだから」

「勘弁してくれよ。僕は仕事で来てるんだ。広告用に六〇年代の題材を見つけよう」と

「やめてよ、マイケル。そんな言い訳、聞きたくないわ。あなたのお目当ては、あの頃のバックシートでのお楽しみだけでしょう。彼女の名前、なんだったけ？」

「だれ？」

「確か高校時代にあなたを振った、ぼっちゃりとしたブロンドの子よ。誰だっけ、ブレンダ・ルーシー……」

「レイシーだよ。ブレンダ・レイシー。もし会ったら、君がよろしく言ってたと伝えておくよ」

「そうでしょうとも」

「もういいよ、その話は。実はね、誘導チェアに座ってセッションを十回受けたけど、まだ何も思い出せないんだ」

「そうですね。ねえ、マイケル。あなたの口ぶりは、刑事訴訟のクライアントに似てきたわよ。『そういう理由ではありません。それに、何も覚えていません……』ってね。」

「やめてくれよ、リンド」

「「めん、ちよっと待って」

Dreamer 2

Memory Channel

交通情報が再び聞こえてきた。ボルストンの人身事故は片付いたが、トンネルの渋滞はまだ続いている。

「もしもし？ ワシントンのオフィスから電話が入ったの。クライアントが起訴されそう。罪状が十七もあるのよ」

「それはお気の毒だね」

「クライアントにとってはね。私たちにとっては、料金を請求できる時間が増えるということ。えっと、そっちの食べ物はどうなの？ おいしいメキシカン・レストランは見つかった？」

「いや、まだだ」 まったくリンダらしい。相手を産つぷちに追い詰めたすえ、がらりと話題を変えてしまう。

「シニア・パートナーが来月サン・アントニオへ行くのよ。彼がいいレストランを知りたがってる。ヴァンがテキサスのグルメブックを持っているんだけど、サン・アントニオはリストに載っていないの。あなたならいい店を知ってると思ったのに」

「ドリーマーは建物を出ることを禁じられてる」

「逃避行に一万四、五千ドルもつき込んで、おまけに一步も外へ出られないなんて。一体どんな所なのよ。缶詰になってダイエットする減量センター？」

Dreamer 2

「やめてくれよ、リンダ。建物の中に隔離されるのは、契約の一部なんだ」

「ええ、知ってるけど、言わずにはいられなかったの。」「ごめんね。だっておかしな話じゃない。まるで家賃の高い刑務所にいる

みたい。夜には鍵をかけた部屋に閉じ込められるの？ 首に縄でもつけられるわけ？」

「違うよ」

「やだ、そんなにむくれないでもいいわよ。ちょっとからかっただけじゃない。ねえ、給食について話して。日に三度、ちゃんとした食事がでるの？」

Memory Channel

「カフェテリアの食事はとても美味しいよ。体重を減らすのは難しい」

「本当に体重を減らした方がいいわよ。お腹にスペアタイヤを乗せてるみたいになってきたわ」 リンダは一息ついて、僕がタイヤを見る時間を与えたかと思うと、すかさず次の弾を撃ち込んでくる。

「ねえ、戻ってブレンダに会ったら、この年月であなたの体重がどのくらい増えたか言うのかしら？」

「もし聞かれたらね」 僕は腰のあたりについての脂肪のかたまりを見下ろす。三十二サイズのベルトは最後の穴になっていた。髪は薄くなり、白髪混じり、おまけに今や太りつつある。見たこともない中年男がここにいる。もしこの男性をご存知か、どこかで見かけた覚えがあったら、ぜひご連絡ください…

Dreamer 2

「マイケル、聞いている？ マイケル？」

「ああ、聞いているよ」

Memory Channel

「メキシコ料理は控えたほうがいいわ。脂肪分がたっぷり入ってるらしいから。心臓発作を起こしてほしくないの。チーズ・エントラーダひとつで一〇〇〇カロリー以上あるとテレビで言ってたわ」

「またテレビを見ているのか」

「ためになる番組だってあるのよ。それに、ヴァンが持っている本には、ありとあらゆる食べ物のカロリーが載っていて」

「ヴァンは君の私設図書館員にでもなったのかい？」

「いいえ、でも彼は読書家よ。ビジネス雑誌じゃなくて、本物の本を読むの。そこで、本は読ませてもらえるのかしら、マイケル？」

「なあ、リンダ、もう切らないと……」

沈黙。リンダがギアを切り替える音が聞こえてきそうだ。話題を変えて、さっきの崖っぷちから後退する。僕は時計にちらりと目をやる。リンダと五分間会話するのは、プロボクサーと十五ラウンド戦うのに等しい。

「昨晚、ポールから電話があったの。脚本を読んでもらってるやつよ」

「ポールの書いた脚本を読んでもらってる？ いい話じゃないか！」僕は電話を引き寄せる。ありがたいことに、子供に

関する話題は非武装地帯にある。

Dreamer 2

Memory Channel

「どこかのエージェントの担当者が、ポールの脚本はホームコメディに向いていると言ってくれたの。リーディング料はたったの三千ドルで済んだわ」

「三千ドル？ 脚本を読むだけにか？」

「それが業界のやり方なの。いつもそういう人たちの相手をしてるんだから、あなたも知ってるはずでしょう」

「三千ドルも払ったのか！ なんてことだ。リンダ、僕がタダで読んでやったのに」

「あなたはテレビコマーシャルの制作者だけど、ホームコメディに関しては素人よ。制作会社に対して強いコネもないわ。おまけにテキサスまで出かけていって自分探しを」

「まさか金を送ったりしてないだろうね？」 僕はさえぎる。

「もちろん送ったわ。息子のためだもの。それに、たったの三千ドルよ」 リンダの声はまた辛辣さを増す。大型銃が持ち

出され、弾が装填される音が聞こえるようだ。「ねえ、マイケル。産千ドルなんて、あなたがドリームランドでの休暇に注ぎ込んだ大金と比べたら、ニワトリの餌みたいなものよ。」

Dreamer 2

まったく見事な攻撃だ。

Memory Channel

「マイケル？ マイケル、聞いているの？」

「耳の中に入った毒を拭き取ってた」

「いいトライだけど、前に聞いたセリフね。マイケル、もう行くわ。お金を稼がなきゃいけないから。あなたが帰ったら、話の続きをしましょう」

「ああ、どっちが家を取るとか？」

「あのね、前にも言ったけど、家はあなたにあげる。私は家に相当するものを頂くわ。いい夢をみてね、ネモ船長」

カチリ。

僕は切れた受話器を見つめていた。換気装置の唸る音だけが低く響いている。

……★……

Dreamer 2

午後四時。リンダとの対決でまだムカムカする胃を感じながら、僕はバウンドストーンのオフィスへ続くドアを開ける。薄暗い部屋で少しのあいだ催眠状態に入れば、リラックスできるかもしれない。

Memory Channel

だがそれはできそうもない。どういうわけか、パウンドストーンは珍しくブラインドを開けていた。僕の目に飛び込んできたのは、午後のきらきらとした黄色い太陽の光だった。

「どうぞ掛けてください」 パウンドストーンは、デスクの前の椅子をすすめる。「昼食はどうでしたか」

「ナチヨスを食べました」 まぶしさのあまり僕は目を細める。太陽がちょうど後ろにあるので、パウンドストーンが燃えて輝く光の塊のようにみえる。

「ナチヨス、ですか」 パウンドストーンの眼鏡が小さなハロゲンライトのようにきらめく。「まあ、四時間経過していますから、おそらく問題はないでしょう。精神科医の大半は認めようとしませんが、直接催眠を行うと、少々吐き気を感じる人がいますから」 パウンドストーンがデスクの上の何かに目をやると、頭のとべんの禿げた部分に太陽の光が反射して、それがまっすぐに僕の目を射った。「レオナルドが言うには、気分が悪くなるのは催眠のせいではなく、ここのカフェテリアの食事が原因だそうです。本当に気分は悪くありませんか」

Dreamer 2

「平気です」 だが正直に言えば、僕はここから出て行きたくて仕方がない。この研究所から、テキサスから、この場所から逃げ出したい。

「部屋を少し暗くしましょう」 パウンドストーンはそう言うと、デスクから離れる。「暗くする間、デスクの上の小さな像

「意識を集中してください」

Memory Channel

パウンドストーンが部屋を歩き回ってブラインドを下ろしている間、僕は像に意識を集中させる。日時計を抱いた天使で、青銅でできている。天使の羽は体の両脇にカーブして柔らかく広がり、まるで舞い降りているようだ。あるいは舞い上がるのかもしれない、どちらなのか僕にはよく分からなかった。部屋が暗くなるにつれ、銀色の光が天使の羽を昇っていき、そのあとに、幾筋もの細い影が取って代わった。瞬く間に、天使は闇に包まれ、暗い部屋で輪郭だけしか見えなくなった。

「マイケル」 パウンドストーンはデスクへ戻る。「仮に人生のある特定の年に戻ってくださいとお願いしたら、そして確実にそれをあとで思い出せるとしたら、戻りますか？」

「もちろん」

「大事なものを失っていたとしても？」

「ええ、それでも行きます」

「ならば、行けますよ」

Dreamer 2

ソファは皮の誘導チェアと似ている。まるで液体を触っているように柔らかく滑らかだ。ここに来て最初の二週間で、僕は

Memory Channel

催眠に関してあらゆること、つまり催眠とは何か、何が催眠ではないのか、どう作用し、どんなふうに関与するのかを学んだ。

一週目に学んだことを思い出しながら、緊張とリラクゼーションの波動を足元から体の中心を通るようにして頭上へと送る。そして最後の波動が体を離れると、僕の体は重くなり、硬くずっしりとしたおもりのようにソファの中へ深く沈みこむ。

自分の思考が電波のように飛び交うなか、まるでラジオの周波数に合わせるかのように、僕はパウンドストーンの声に意識を集中して、その声をつなぎとめる。もう少しすると、パウンドストーンはトランス状態とはどんなものか例を挙げて説明してみせるだろう。そして彼は僕の信条や経験、生い立ちを呼び覚まし、中脳を中心の暗い部分へと僕を導いていく。

エレベーターだ。きっとパウンドストーンはエレベーターを使うに違いない。

「当時の経験をすべて追体験します。あなたはそこにあるものを、五感のすべてで体験します。あなたは、そこで聞こえるはずのものを聞き、見えるはずのものをみます…」

Dreamer 2

ほとんど無意識の状態で聞いているのだが、視床の奥底のどこか、僕の中のある部分があるフレーズが現れるたびに、それに注意を向けて、聞き取り、チェックマークをはずしていく。それは、「あなたはくします」という確信に満ちたフレーズだ。

五感に働きかけるコマンドであり、心地よい体験を約束してくれる言葉。標準的なテクニクだ。これがディー・トランスな

Memory Channel

ら、パウンドストーンは他のテクニックを取り入れてみるだろう。アフェクト・ブリッジ、ピラミッディング、プレッシャー、コンフュージョン、もしかしたらそれらすべてを一度に使うかもしれない。

「マイケル、あなたは一九六三年の感覚を思い出します。見たもの、聴いたもの、そして音楽を。一九六三年の匂いや感情を思い出します。その感情に意識を集中して、追体験してください…、そして追体験する間、エレベーターに乗っている自分を想像してください」

またエレベーターだ。催眠セラピストはエレベーターがお気に入りには違いない。

「ここは現在であなたは最上階にいますが、一九六三年は一階です。エレベーターが降りていくと、あなたは深い安らかな眠りへと入っていきます。人生で起こった出来事の映像を見ながら、一九六三年の我が家へとあなたは降りていくでしょう。

その間ずっと、あなたは安全で守られています。一九六三年に見たり聴いたりしたたくさんのお話を、さらに体験します。そして何が見えるのか、私に話すことができるようになります」

Dreamer 2

そして今、静寂が訪れる。突然僕は、自分がうつつぶせになり、平べったい金属のようなものを掴んでいるのだと気づく。暗闇の中でも、自分がほとんど水平に横になっていることが分かる。

「おい、マイケル」 子供の声が僕を呼ぶのが聞こえる。「今、何時だい？」 大昔の親友の声だ。その子の名前はエバン・カ

Memory Channel

「コースウェルだった。いや、だったではない、コースウェルだ。」

「腕時計が見えない。暗すぎるよ」と僕の声。甲高く、恐怖でうわすってる。

「見えないのか？ ラジウム入りだって言ってただろう。だったら夜でも見えるはずだよ」

「調子が悪いみたいだ」僕は暗闇の中を見回して、その奥にあるものの形を見つめる。何かの上層部分の輪郭だ。

僕は橋の上にいる。鉄橋のてっぺんにいて、今は一九五〇年代の終わりか、六〇年代の初めだ。視界の隅の方に明るい光が見える。三日月だ。空には星が瞬いている。遠くで、鼻にかかったようなあの独特な汽笛が聞こえる。

「最初の踏切を通過してるぞ」コースウェルが言う。「長い汽笛が〜回聞こえるはずだ。短めのやつと、長いやつと」

その通りだった。

Dreamer 2

「カーブを曲がってる」とコースウェル。「橋の手前だ」コースウェルの声は聞こえるのに、姿が見えない。当然だ。僕の目は固く閉じられているのだ。カチツという音がする。そしてもう一度、同じ音。僕の心臓は激しく鼓動し、胸を突き破って飛び出して「ようとしてるみたいだ。」

エバンは笑う。「列車が通る時に橋を渡らないかと、バカ兄貴を誘ったんだ。そしたら、死にたくなんかなくてほざくんだ、

まったくどうしようもない弱虫だぜ、あいつ」

Memory Channel

ほんの一瞬、僕は目を開ける。僕が立っている橋桁の幅は六十センチくらい。両手で思いっきり縁を掴んでいるので腕が痛い。十メートル下方には、揺れる線路が走っている。その二十メートル下には、ソルト・リバーの黒くのっぺりとした水面が広がっていた。

何の前ぶれもなく、目も眩むような白い光が地平線上に弧を描いて現れ、木々を焦がした。ディーゼル機関車の低いエンジン音が聞こえてくる。

鉄橋が揺れ始めた。

「すごいや」 エバンが言う。「給水塔の時よりもいぞ」

僕は息を吸おうとするが、できない。体中の筋肉が硬直して動かない。

光線があたりに広がり、近くの木々を照らしていく。そして光線は僕たちの前方を捉えた。列車の前面に取りつけられたライトは回転灯で、時計と反対に回りながら竜巻のような光を振りまいている。

鉄橋のてっぺんは、真っ暗闇に包まれたかと思うと、眩い、焦がすような光に繰り返して照らされる。僕は真っ黒に汚れた自分の両手を見る。橋桁の端を握りしめ、まるで金属と溶接されたようにぴたりとくっついたままで、やはり同じように交互

Dreamer 2

に光を浴びていた。

ディーゼル機関車が、汽笛を鳴らしながら鉄橋を渡り始めた。

橋桁がガタガタと激しく音を立て、突然左右に揺れた。僕の左側、鉄橋の反対側で、エバンの体が大きく揺れているのが見える。片方の脚が橋桁からぶら下がっている。僕は固く目を閉じた。

数分後、轟音は遠のき、僕はあたりを見回した。向かい側に、橋の上にいるエバンのシルエットが見える。橋桁の上に座って両足を宙にブラブラさせていた。その映像が動いて、列車を追いかける。回転灯は今ほ町外れの建物を照らしている。そしてとうとう、最後尾の貨車、遠ざかっていくのが見えた。車掌車だ。点のような赤い光が次第に遠くへ消えていく。僕は顔に風を感じた。いつかエバンはこの世を去り、彼の妹と僕はここに来て彼を思い出して泣くことになる。

僕は黒い橋桁を押しつけ、現在の方へと向かう。頂上へ。

Dreamer 2

コリンズの我が家の二階に僕は戻っている。夜も更けて、僕はベッドで『マーズヒルのミステリー』を読んでいる。部屋の向こう側の窓際のベッドに寝ているのは兄のアールだ。僕の記憶の中にあるそのままのアール。笑うと口をゆがめた笑顔になり、刈り上げた濃い茶色の髪が少し伸びている永遠の十七歳。アールはダイヤ模様の趣味の悪いパジャマを着ている。僕の知る限り、ベッドで靴下を履くやつなんてアールだけだ。しかも夏でも履いている。アールの言い分はこうさ。タバコで家が火事に

なった時の準備をしておきたいんだって。もともな話じゃないか、まったく。

僕の視線は、小さなライトに照らされた赤茶色のドレッサーに移る。外からは、絶え間なく夏の虫の音が聞こえてくる。ベッド脇の机に置かれた目覚まし時計は一時十分を指している。すべてが現実としか思えない。

雑誌を読んでいたアールが顔を上げる。「なあマイケル、おれ、冷蔵庫をあさってくるよ。ペプシと、チーズサンドイッチを作ってもいいな。チップス付きでね。お前にも何か持ってこようか」

「僕が取ってくるよ」 僕の甲高い声が聞こえる。子供の声だ。

「ホントに？」 アールの、あの口をゆがめた笑みが広がる。「本を読んでいるのに、悪いよ」

「構わないさ。どうせ一度読んだ本なんだ。それに、お腹がすいて死にそうだし」

「。パパとママを起こすなよ」

今、僕は一階にいて、冷蔵庫の中をかき回している。マヨネーズ、ハンバーガー用のパン、クラフトのスライスしたハーブ入りチーズ、ペプシの大ビン。そして「ガイ」印のポテトチップの袋だ。半分透明に見えるほど、油っぽいやつ。

待てよ。ポテトチップを冷蔵庫に入れてるって？ 六〇年代のやり方に違いない。

僕はトレイに食料をすべて乗せて二階へ戻る。アールはサリーとのデートでうまくやったんだろうと僕は思いつく。サリー

Memory Channel

Dreamer 2

Memory Channel

「といちゃついたあとアールはいつも腹を空かせてた。」「お前もそうなるって。一度アールに言われたことがある。」「今に分かるさ」

それはどうかな。だけどこれは認めるよ、アールの彼女は可愛い。

二階に戻ってトレイをアールに渡すと、サンドイッチをひとつ手に取り僕は読書に戻る。

時計がカチリと音を立てて進んだ。

アールが大口を開けてサンドイッチにかぶりつき、木製の小さなラジオのスイッチを入れるのを僕は見ている。茶色い布地が張られたスピーカーからコーラスが聞こえる。「ダブリュー、エル、エス、シカゴ……」

僕は本を閉じ、机の上に置く。僕は本当に十一歳だ。兄は本当にそこにおいて、雑誌を読んでいる。一階には、本当に父と母がいて、寝室で眠っている。町外れでは、親友のエバン・カースウェルもラジオをつけているだろう。この世界で、WLSかKAA Yか何かを聴いているんだ。僕は目を閉じた。すると暗闇が押し寄せてくる。

Dreamer 2

視界の周辺から、切れ切れになった映像の断片がゆらゆらと現れる。どこか別の所からやってきた映像だ。断片はやがて視界を埋め尽くし、重なりあつてひとつの映像を作り出す。泣いて真っ赤になった母の目だ。母はありえないほど若くみえる。

今の僕よりも若い。

Memory Channel

「お悔やみのカードくらいくれてもいいんじゃない？」母は言う。「アールが子供の頃からの知り合いなのよ。アールは、あのおちのお嬢さんとお付き合ってたこともあったの」「

すべてがぼやけていた。映像がものすごいスピードで動いている。男の人が見えた。二十年以上前に死んだ僕の父だ。同じように若い。父は肩をすくめる。まさに父そのもの、それはすべてを語り、もう知りすぎているくらいおなじみの場面だ。そして父の声が低く響く。「他人の気持ちを思いやれる人がいれば、それができない人もいる。別にその人たちが悪いわけじゃなくて、そういう能力を持っていないだけのことなんだ。別に責めるつもりはないよ」

「でも、ジヨエルが入院したとき、うちは花を贈ったのよ」

「また贈ればいいさ」父は険しい表情をしている。「さあ、墓地に行かないと。マイケル、大丈夫か？」

「うん、パパ」すべてがぼやけている。喉が痛い。寒くてどんよりと曇った十一月のある日、花が、一列に並んだ明るい色のグラジオラスが見える。葬儀場の擦り切れたカーペット、オルガンの演奏。町の人たちが集まっている。閉じられた棺の横を、人々が一列になって進んでいく。その青銅の棺の中には、兄が横たわっていた。

Dreamer 2

こんなことになるとは知らず、僕はそのしばらく前に、兄さんと一緒に夕方のニュースを見ていたのを思い出した。ニュース

Memory Channel

ではイギリスのバンドが取り上げられていた。今、僕はその歌のことしか考えることができなくて、その曲を何度も頭の中で繰り返す。フロム・ミー・トゥー・ユー。

未来と過去は、大きな車輪のようなものだ。そして車輪は回った。未来だったものは、今は過去だ。そして視界から遠ざかっていき、消えた。

突如として、僕はハウンドストーンのおフィスに戻っていた。僕が見てきた悲嘆のために、頬は涙にぬれ、喉が締めつけられる。いや、自分の居た場所での悲嘆、というべきだろう。

「どうぞ」ハウンドストーンがティッシュを差し出す。「使ってください」

「すみません。あれ、こんな…いや、みつともない…」

「いいですよ」ハウンドストーンは僕の肩をたたく。

「少しがんばりすぎかなと、思っていました」

僕は鼻をかむ。そしてあふれる涙を抑えきれず泣き崩れてしまった。声をあげてぼろぼろと涙を流す。こんな泣き虫だなんて、情けない話だ。

Dreamer 2

Memory Channel

サン・アントニオに夜が訪れた。だがあの場面がまだ頭を離れない。暗くて、湿って、冷たくて、そして恐ろしい光景。思い出すというのはこういうことなのか。静かに響く換気装置の音に混じって、はつきりとハウンドストーンの声が聞こえてくる。

「簡単な記憶チャンネルを通して、確認可能な情報を取り戻すのは―」

チャンネルだって？ 僕の記憶はあの鉄橋での夜の周波数に合ってしまったのか？ 兄の死にも？ じゃあ父さんと母さんと一緒に過ごした夜は、どこに行ってしまったんだ？ 夏の夜空を流れていく衛星をみんなで見上げた夜は？

簡単な記憶チャンネルね。よく言ってくれるよ。少なくとも僕は思い出すことはできたんだ。

それだけでも大したものじゃないか。

僕は窓の外に目をやり、低く垂れ込める湿った雲の下に広がる、オレンジと黄色の光に輝く街を見つめる。今は夏だが、この風景は三十年前の秋に見た光景と大して変わらない。

僕はそのチャンネルを探して、見つけ出す。そしてそのチャンネルへと切り変えた。

百人の髪を短く刈り上げた新兵を乗せたフロンティア・ジェットが着陸する。寒い十一月のミズーリで基礎訓練を終えてき

.....★.....

Memory Channel

たばかりだ。僕らは飛行機のタラップを降り、湿った空気の中に足を踏み入れる。そして平らなアスファルトを横切って、金属製の踏み台を昇り、待機していた緑色のバスに乗り込む。まるでリビングルームのカーペットのようにびっしりと生えた緑の芝生に感激して、立ち止まる者もいる。

サン・アントニオは、サイエンス・フィクションの世界から抜け出したような街だ。冬でも草は緑で、シャツ一枚で過ごせるほど暖かいかと思うと、わずか三十分間で気温が二十度以上下がることもある。ダウンタウンではスポットライトの光が渦巻くようなオレンジ色の雲に反射し、それはまるでアルバニアのモスクのように、巨大な塔となって街から立ちのぼっている。

そして、川だ。その曲がりくねった様は、あたかも記憶の姿のようであり、広いセメントの歩道に導かれるかのように流れている。緑色に輝いて見える長くうねうねとした川。始まりはなく、終わりもない。草木と遊歩道にはさまれて水面に陽光輝く流れが、終わることのない輪を作り出す。

Dreamer 2

僕は一九七〇年のサン・アントニオにチャンネルを変える。霧雨のせいで街が雨を描いた水彩画のように見えた、あの二月の金曜日。基地を出て、ケリー通りでバスに乗って川へと向かう。そこにいくつもあるレストランの一軒で、僕は長い手紙を書く。青インクの確信に満ちた文字で、言葉が紡ぎ出される。ビールをもう一杯飲み、もう一ページ書く。やがて、その店の窓

Memory Channel

ガラスのように、言葉が曇ってぼんやりとしてくるまで、僕は書き続ける。そしてレストランは閉店し、僕は投函することのできない手紙を持って兵舎へと帰る。

その手紙はいつも同じ書き出しで始まった。「稲妻のような君へ」

この思い出に僕は微笑み、チャンネルを出発点に戻す。現在であるこの場所へ。

家に電話しよう。

「マイケル、あなたなの？ いま何時？」

「十時半だ。まだ起きてるだろうと思ったんだけど」

「いいえ、横になってたわ。三百ページの宣誓供述書を持って、ベッドに入ってたところよ」

何かが聞こえる。

「階下の電話を誰かが使ってるんじゃないか？」

「うるん」

「確かかい？」

Dreamer 2

Memory Channel

「家にいるのは私だけ。ねえ、ここに誰がいるのならあなたに言うわよ」

「ただ電話したかったんだ。いろんなことがうまくいってるかなと思ってね」

「そうなの？ 大丈夫よ」

お馴染みのリンダだ。最高の防御こそ優れた攻撃。それに、本当に誰かが一緒だとしたら、リンダならきつとそう言うに違いない。わかったわ、言ってみよう、という感じで。

「実世界では何が起きているのか知りたかったんだ。聞かせてくれよ」

「ニュースで何が報道されているかっていう意味なら、教えられないわ。だって契約書にそう書いてあったもの」

「じゃあ、仕事のことを話してくれよ。クライアントは刑務所にぶち込まれたかい？」

「ぶち込まれたのは、うちの弁護士なんてとても払えない人たちばかりよ。そういえば、自分の土地に、四ヶ所も有毒物の廃棄場があったってことが分かったクライアントがいたの。実際には、FBIが見つけて指摘したんだけどね。あなたが電話してきた時読んでいたのは、そのクライアントの宣誓供述書よ。ねえ、ポールに新しい彼女ができたって、話したかしら」

Dreamer 2

「知らないぞ」

Memory Channel

「そう、私たちの息子がカリフォルニア・ガールをつかまえたのよ。プロントで青い目で、ローラーブレードを持ってるの。でもね、彼女のわがままにポールは嫌気が差してるみたい。修士論文を代わりに書いてと頼まれたらしいわ。『バベットの晩餐会の構造分析』ですって」

「修士論文を書けと頼まれた？」

「ポールはそう言ったわ。おまけに、それに対してなんのお礼をする気もないらしいの。修士論文を代わりに書けば、ポールが自分の論文を書くときにいい経験になるだろうって言ったのよ。私、ポールに言ったわ。ポール、せめて何かお礼をもらいなさい。それならフェアよ。他人の修士論文を書くなんて、簡単にできることじゃないものって」

「『バベットの晩餐会の構造分析』？ 一体、何をすっていうんだ。レシピの分析でもするのか？」

「私を知るはずないでしょ。ノルウェー料理の本だと思ってたんだから」

ガサガサツという音が聞こえた。まるで紙をこすりあわせたような音。そしてカチツという音。僕は耳を受話器に押し付ける。「リンダ、本当に大丈夫か。電話が盗聴されているか確かめる方法はないのか？」

Dreamer 2

「マイケル、うちの電話は盗聴なんかされてないわ。本人に無断で盗聴するのは違法なのよ。今夜はひどい雷雨なの。おそ

らく雷の仕業よ」

「多分、そうだろうね」

「ねえ、一度の電話で話せるのは数分だけと決められてるのよ。契約書に書いてあったわ」

「ああ、知ってるよ。ただ声が聞きたかったんだ。外の世界の空気を吸いたくてね。ここにいて息が詰まり始めた」

「お気の毒。でもね、自分でサインしたのよ」

「わかってるよ」

「ねえ、まだ仕事が残ってるの。専門用語が並んだ有害物質の供述書をもとに、明日、証言しなきゃいけないのに、この分野について何ひとつ知らないの。わかってくれる？」

「わかるよ」

「じゃあね。バイ」

「じゃ、また」

僕は受話器を置き、窓に近づく。

窓の外では、燃えるようなオレンジ色の雲の下、古い街並みが金色に輝いている。そう遠くない所には、一九六九年と同じ

Memory Channel

ように百八十メートルのヘミスフィア・タワーが今もそびえ立ち、その最上部が霧の中に隠れている。もちろん川も昔と同じようにそこにある。ただ、川沿いのレストランやバーの数は以前よりも増えた。ネオンの灯りも、遊覧船の数も、コンクリートも、すべてがその数と量を増やしている。だがそれでも、僕の記憶の中の風景ではすべてがもっと賑やかだ。

僕はカーテンを閉めて、シャツと靴をぬぎベッドへ倒れこむ。ここにテレビはない。パウンドストーンとスタッフが、外界のメディアに触れることを一切禁じているからだ。あるのはベッド脇の壁に取り付けられたベージュの金属製スピーカーだけで、そこから、おそらくバレエ組曲「グイーヌ」だろうか、かすかなメロディが聞こえてくる。生まれて初めてこの曲を聴いたのは

映画『二〇〇一年 宇宙の旅』だった。宇宙船がぼつんと漂いながら木星のそばを通り過ぎる時に、この曲が流れていたっけ。

僕はズボンを脱ぎ、毛布をかぶって明かりを消す。かすかに聞こえる宇宙音楽に混じって、換気装置の静かな音の唸りが聞こえてくる。暗い部屋の向こうで僕が今夜最後に見るのは、サン・アントニオのナトリウム灯に照らされてオレンジに輝くカーテンだ。

Dreamer 2

「グイーヌ」が頭の中にあるぼんやりとした茶色い世界に流れ込み、さまざまなイメージが浮かんでくる。初めて会った時のリンダ。僕の妻となる女性だ。東海岸の大学から編入してきた、きついジョークがお得意の学生。言うべきこと、ぴったりする場所、何でも分かっているという感じだった。グリニッジビレッジで一緒に食べたハンバーガー、そしてカンザス・シティのホ

テルで一晩中愛し合った夜。その後、リンダが入学したボストンの法科大学院。リンダに会うために通ったローガン国際空港へのフライト。そして、とうとう最後に中西部を離れた日のことを思い出す。サヨナラ、カンザス・シティ。

Memory Channel

インターンとして広告会社での初めての仕事が頭に浮かぶ。そしてレキシントンで借りた牧場風の家。ウォルデン湖の近くだった。生まれたばかりのポールを初めて家に連れて帰った日。リンダが担当した最初の大きな訴訟。祝賀パーティ。そして僕たちは初めて本当の家を手に入れた。まるで軍艦のように灰色に塗られた家だったな。ビデオカメラを抱えて、大きな白いアヒルを追いかけるポール。五匹の白い「ドナルド」は、どれも見分けがつかなかった。名前を呼ぶと、五匹全部が寄ってきた。

僕はボストン一帯が気に入っている。広い森がけっこうあり、緑の草原が広がっていて、寒々しい文明の果ての土地という、東海岸に僕が抱いていたイメージとはほど遠かった。何年か経つうちに僕は地下鉄にすら慣れた。薄暗い歴史ある図書館にも、神々しいばかりの秋の日々にも、骨まで凍るような冬にも慣れた。そしてニューヨークシティまでの長く殺伐とした通勤にも。いや、あの通勤に慣れるのだけはだめだったな。ちょうど僕とリンダの関係と同じように。

Dreamer 2

おっと、ノイズになってしまった。

もっとフレンドリーなラジオ局に変えなきゃいけないのかもしれない。ニューイングランドの夏のサンセットなんかどうだろ

Memory Channel

う。景色のいい道路をおんぼろのシボレーのミニバンで走る。バックシートではポールが眠り、デビーは「ミスターベア」をかじっていた。ラジオに曲がかかるとリンダがボリュームを下げる。「オーケー、マイケル、この曲のタイトルは？」

『グッド・バイブレーション』。ビーチボーイズだ。初めてヒットチャートに入ったのは一九六六年の十月。そのあと一位まで上がった。十四週間チャート入りしていたんだ」

「そんなことまで知ってるなんて、信じられない」

「これが仕事だからね」 僕がボリュームを上げると、誰か別の人が目に入る。遠くに誰かがいる。もう夕暮れは消えて、ミニバンと家族も一緒に消えていく。僕はレキシントンに向かって北上する彼らを見つめている。でも僕が音楽の聞こえる方に意識を漂わせると、別の声が聞こえた。パウンドストーンの声だ。この研究所の講堂で、新しいドリーマーたちを歓迎して、彼が初めてスピーチをした時だ。

Dreamer 2

「もちろん、私たちのプログラムには、目標があります。それはいわば『検証できる記憶の回復』です。これは、頭脳は昔の記憶をどこまで保つことができるのかに関心を持ち、私たちに資金を提供してくれる方たちと、私たちが共有する目標なのです」

「ほら」 彼女は言った。「ここから春が始まるの。ちょうどこの場所からね」

Memory Channel

雑草を押しつけて、新緑の芝がびっしりと広がっていた。僕たちの目の前で、小さな灰色の湖が風に水面を震わせている。

彼女のスウェットの色はグレー。曇り空と同じ色だ。僕は背中に地面の感触を感じ、草が擦れあうかすかな音を聞く。

「春がもうすぐ始まるわ」 彼女の声が聞こえる。若くて、慣れ親しんだ声。僕は彼女を知っている。そして彼女の指が僕の指に絡みつくのを感じる。

高く薄い雲の切れ間から太陽の光が差し込んでいる。そして突風がアシの葉をカサカサと揺らし、草の上と僕の体の上を撫でていく。青空から吹き下ろす涼しい風だ。

空中には小さい絹の玉が風に揺れている。クモたちのパラシュートだ。

「話して」 彼女が言う。「エバンのこと、話して」

「被験者は簡単な記憶チャンネルをとおして、自身が持っている情報にアクセスする方法を学びます。データは、独立した研究所によって評価、分析されます。こうすれば、記憶回復のテクニックを改良することができます。現在、私たちは驚異的とも言える、信頼指数九十五パーセント領域を達成しました」

Dreamer 2

「いいか、マイケル。これは売れるんだ。多分、大儲けできるぞ」 エバンはテニスシューズで石をひっくり返す。「この辺りに、たくさんいるんだ」

Memory Channel

「ここにはトカゲなんかいないよ」 僕は言う。

「絶対にいるよ。あちこちにね。まあ聞けよ。トカゲを箱に入れて、少しの間ペットとして飼う。そして売るのがさ」

「僕の犬が食べちゃおうよ」

「じゃあ、犬が食べないようにしろよ」 エバンは懐中電灯で地面を照らして、別の石をそっと動かす。石の下には何もいなかった。エバンは薄汚れた野球帽を脱ぐと、袖で額の汗をぬぐう。

「ねえ、何やってるの」 子どもらしい高い声が響いた。

エバンは振り向き、声のする方に懐中電灯を向けると、光は二人の少女を照らし出す。おそらく十歳か十一歳になるかならないかだろう。二人はいぶかしげに僕たちを見つめていた。背の高い子は長いブロンドの髪でかわいい笑顔。背の低い子は小さな卵形の顔をしていて、バカげたことは大嫌いといった真剣な顔つきだ。赤いニットのノースリーブを着て、ジーンズにテニスシューズを履いている。豊かな黒い髪を後ろでポニーテールにまとめているのに僕は気づく。

Dreamer 2

「トカゲを探してるんだ」 エバンがぶっきらぼうに答える。「だから向こうに行ってくれよ。怖がってトカゲが逃げちゃうよ」

「トカゲ？」 背の低い子が言う。「こんな暗闇で探すなんてバカげてるわ。どうせまだ見つかってないんですよ。違うっ」

Memory Channel

「子どもと話しているヒマはないんだよ」 エバンが低い声でつぶやく。

「あらあら、そんなに忙しいのね」 背の低い子が言い返す。「一生懸命お仕事ってわけ？ あなたたちも、その懐中電灯も。その懐中電灯、電池を替えなきゃいけないんじゃない？ 光が黄色くなってるわ。たぶん、すぐに切れちゃうわよ」

「ねえ、その展示場ですぐにバンドの演奏が始まるの」と背の高い子。「私たちと踊りに行かない？」

「ダンスなんかしてるヒマはないんだよ」 エバンは言いつと、石をゆっくりと動かす。

「いいわ」 背の低い子が腕組みをする。「誰か、『アラモ砦のデイビー・クロケット』を見たことある？」

エバンと僕は顔を見合わせる。

「見てないみたいね」 その子は笑って長い棒を拾った。「じゃあ、教えてあげる」

「あのねえー」 エバンが言う。

「黙って聞いてよ」 その子は続ける。「すごく大事なことの、メキシコ人が攻撃の準備を整える間、トラビスはみんなを集めて言うの。『いいか、向こうには大勢のメキシコ人がいる。やつらをやつつけるかここから逃げ出すか、どちらかだ』」

背の高い子は、訳がわからないという顔でその子を見る。「レイチェル、トラビスがそう言ったの？ デイビー・クロケットじ

やなくてっ」

Dreamer 2

Memory Channel

「どっちでもいいわ」 背の低い子は言う。「そしてね、彼は剣を抜いて、それで地面に線を引いたの。そしてこう言ったわ。

もし「こ」に残るなら「この線を踏み越えろ。もしそうでないなら、「こ」から立ち去れ」

エバンは、訳が分からないという顔をする。「マイケル、あの子、何言ってるんだ」

「さあ、もし君たちが二人のきれいな女の子をダンスに連れて行きたいのなら、君たちは——」 その子は小石の歩道の上に棒で線を描いた。「この線を踏み越えろ。簡単でしょ？」

「無駄だよ」 僕はその子に言う。「子どもとダンスはしないんだ」

「その判断はどうかと思うな」 その子は言う。「でも、「こ」だわらなくてもいいわ。つまり、誰にでもセカンドチャンスはあるの。あなたみたいな男性にもね。そうでしょ、「こ」？」

「この子たちが男性？」 フロントの巻き毛の子は、唇をゆがめてみせる。プレスリーの仕草だ。「レイチェル、私はそうは思わないけど」

Dreamer 2

「バンドの演奏はすぐに始まるわ」 小さな女の子が言う。「どうするの？」

エバンはしかめ面で彼女を「らむむ」。「あっち行けや」

「分かったわよ。チャンスを逃すのね」 その子は棒を放り出した。「行こう、「こ」」。この子たち、トカゲと一緒にいたいっ

て」

光が差し、ドーム型の空は黒から青へと色を変える。茶色い野球帽と縞のシャツを着たエバンがここにいる。本物でないことは分かっているが、僕は今エバンを見ている。ボーイスカウトのバックパックと水筒。見慣れたいつものシャツ。

早朝。土曜日だと僕には分かる。そして僕たちは線路脇の砂利道を歩いている。エバンが話している。

『『ガンスモーク』でチェスター役だった俳優がいるだろ。彼は何かやらかして、そのために処刑されるんだ。電気椅子でね。

そして彼はこう言う。こんなことをしても何にもならない。なぜなら世界を自分が夢見て作り出しているのだからって。でもどっちにしろ、彼は処刑されてしまう」

「何が起きたの」

「停電だよ。そしてすべてが初めからもう一度だ」

「番組全部が？」

Dreamer 2
「いや。でもこうなるって分かってた」 エバンはゆがんだ笑みを浮かべる。太陽の光がまぶしくて右目を細めている。「列車から飛び降りた男の話をしたっけ？」

遠くで機関車のエンジンの音がする。

Memory Channel

また、パウンドストーンの声だ。「過去は危険な場所であり、過去に戻るのが不可能なものには理由があるのだと主張する研究者もいました。我が財団は当然そのような考え方には賛同できません」

兄のアールが僕を見つめて首を横に振る。アールは一着しかないスーツとネクタイに身を包んでいる。「なあ、これは映画なんだよ。それだけさ」

僕は泣けない。泣いてはいけないんだ。

「みんなお前の頭の中にあるのさ。大きなリールが回っているんだよ。映写機か何かを通して、それをお前は見てるんだ」

「それはどこへ行くの？ 終わった時のことだよ」

「もうひとつのリールに巻き取られる。そしてお前が死ぬ時に、その人生の映画をもう一度見ることになる」

「今、エバンがやっているのは、それ？ 自分の映画を見てるの？」

「そのとおりだよ」アールはゆっくりとうなずいた。「エバンは自分の映画館の椅子に座っている。自分の守護天使を連れてね。そして皆でその映画を見ている」

Dreamer 2

「最後まで見てしまったら、どうなるの」僕は見上げる。すべてがぼやけている。

Dreamer 2

Memory Channel

「エバンが死ぬところまできたら？」

「そうしたら、彼らは立ち上がって守護天使がエバンを映画館の外へ連れて行く」アールは言う。雨空の下、彼の黒い瞳はキラキラと輝いていた。

「そして、天国へ行くんだよね」それはほとんど要求に近かった。

「そうさ」アールは腕を僕の肩に回す。「まっすぐに天国へ昇るんだ」

僕は目を開く。エバンもアールも消えていた。でも雨はまだ降り続けている。雨音が聞こえる。

窓の外でも雨が降っていた。この世界の誰もいない空っぽの通りの上に、雨は降り続けた。

Magnetic Tide

三 マグネティック・タイド

ようやく朝が来た。

雨で汚れた窓の向こうに、荒れ模様の薄暗い空が見える。コロコロと不安を掻き立てる雷鳴がベネチアン・ブラインド越しに聞こえてくる。肩のあたりが重く、おまけに眠気も取れないまま、省エネのために生温いシャワーを浴びていて、嵐のときにシャワーなんか浴びないほうがいいんじゃないかと気づく。稲妻が建物に落ちて、水道管を伝わってこのシャワールームを直撃し、僕の裸の尻から煙が出る有様が目に浮かぶ。慌ててシャワーを止めると、電話が鳴っていた。僕はベッドルームに駆け込んで、三回目のベルで受話器を取る。

「マイケル、リンダよ。起こしたかしら」

「いや」

「ねえ、昨晚電話をくれた時、そっけなくしてごめんなさい。仕事が忙しくて疲れ切ってたの。タイミングが悪かったわ。怒ってないわよね」

「もう怒ってないよ。それより宣誓証言はどうだった？」

「証言って、どれのこと？」

「宣誓証言の準備中だと言ってたっけ？」

「瞬の沈黙。そして、「ああ、あの証言のことね。来週に延期になったの」
「へえ」

Dreamer 3

Magnetic Tide

「でも、宣誓証言をするのは私じゃないの。ジュニア・パートナーがする予定よ」

「そうなのかな？ 君はその準備をしようと思ってたけど」これが僕だ。びしょぬれのまま素っ裸でベッドに座って、長距離電話で妻を問い詰めている。これ以上情けない状況が、人生で他にあるっていうのか。

「マイケル、うちの会社はいつも六月が一番忙しいの。それに、トムが辞めてからずっと人手が足りないわ。私は朝も昼も夜も、働きつくめだったわ。おまけにあなたったら、えっとー、テキサスでそんなものに関わってるし。一体、なぜテキサスなの？」

「サン・アントニオは大きな軍事都市なんだ。そんなものは、おそらく軍から財政的な援助を」

「テキサス、サン・アントニオ、まったく理解に苦しむわね。私は大きなプレッシャーの下で仕事をしているのに、あなたは手も貸してくれない」

「かもしれない」僕は一瞬ためらう。だが、リンダに対して正直になって何が悪い？ 「このプログラムを止めて、家に帰ろうと思ってるんだ」

長い沈黙。リンダは僕がこんなことを言うとは想像すらしていなかったらしい。「マイケル、プログラムを止めたんですか？ あんなに大金を払ったのに？」

「ああ、君に言われてよく分かったんだ、これは時間の無駄だって。だから、止めて返金してもらおうと思っている」

「それで、もし返金されなかったら、どうするの？」

「弁護士だろ。君が金を取り返してくれるさ」

Dreamer 3

「契約書を見たけど、つけいる隙のない完璧な契約書だったわ。解約したら、お金とはサヨナラするしかないわよ。いくらだったかしら。一万四千ドルプラス部屋代が一日九十ドルもするのでしょうか？」

「そのくらいかな」

「そんな大金を注ぎ込んだのよ、やり通した方がいいんじゃないの。つまるところはあなたの中年の危機って事ね。」

「少なくともロシアへ逃げ出したりはしなかったよ。本当にそうしようかと考えていたんだけど。ウラジオストクへの切符を手に入れるとこだったんだ」

「それは先月のプランでしょ。その前はシアトルにオフィスを開くことを話していたわ。そして、その前は売り払ってニューヨーク北部で、何をやるつもりだって言ってたかしら、自転車の修理？少なくともこのテキサスでの脳のこととは実際にやるから、それだけでもましね、とにかく。それにビジネスの役に立つかもしれないって言ってなかった？」

「まあ、おそらく古い曲の二つや二つは同じで見つけるとは思っけど、でも、」

「ねえ、メキシコのオフィスから電話がはいったの。急がなくなっちゃ。この事は後で話しましょう。」

カチツという音がした。僕はベッドに座ったまま、切れてしまったホテルの電話を見つめていた。

急に閃光が走った。外は雨になっていた。

.....★.....

Magnetic Tide

今朝の朝食は天候と同じようにわびしいものだった。選択肢はコーンフレークかウィートかオートミールだった。ローウェル・アンダーソンは、背が高く、無口で、黒い髪の二十代半ばの若者だが、そういうものには目もくれなかった。そのかわり、どこかからか角切りのメロンを手に入れてきた。

「昨夜、神経学者たちがパーティを開いたんだ」ローウェルは南カリフォルニア特有のゆっくりとした口調で話す。「ケータリング業者が出し忘れたらしい」

ゲイル・バンクスがローウェルを非難めいた目つきで眺めたあと、僕の方に視線を向ける。今朝のゲイルはカジュアルな服装だ。タンクトップとバギーショーツで、長いハニーブロンドの髪をポニーテールにまとめている。おそらく三十代半ばだろうが、今朝のゲイルは健康的な二十六歳としても十分に通用する。

「そうだ」ローウェルが続ける。「部屋にスモークオイスターと、ファヒタ・ナチョスがあるんだけど。よければ食べに来ませんか」

「いただくよ」ケラーが顔を上げる。「普段はオイスターを食べないんだが、調理してあるものなら頂くよ。ビブリオ菌と戦う必要がないからな」

「屋上でピクニックをしましょうよ」ゲイルは僕をちらりと見る。「エレベーター・ハウスに座って、雨を見るのはどう？」

「びしょぬれになるぞ」オートミールをかき回しながら、オットーが言う。「それに、この一週間芝の手入れがされてない」

「楽しい計画にケチをつけたい人は、他にもいる？」ゲイルはテーブルを見回す。「それともオットーだけかしら」

「コルトレーンに聞くといいよ」ケラーが言う。「おそらく、やつなら行くさ」

Dreamer 3

Magnetic Tide

「そういえばー」ゲイルはテーブルを見回す。「コルトレインはどこ？」

「自分の部屋にいたろう」ケラーが言う。「緊急停止性偏頭痛に苦しんでるさ」

テーブルはドツと笑いに包まれが、僕は少し微笑むだけでシリアルを食べ続ける。何年も前に大学の教授からこんな話を聞いたことがある。女は精神的に十六歳から歳をとらない。一方、男は運がよければ十二歳を超えることができるが、普通は九歳で成長が止まるそつだ。教授がどこでこの考え方を仕入れたのか知らないが、今朝の僕の周りの状況は、その確たる証拠とていい。

「そつだな」ケラーが言う。「レオナルドはすぐに緊急停止ボタンを押しすぎるが、あのジュークボックスの使い方を知り尽くしているのは確かだ。昨日のことだが、私が一九七〇年代を訪れていた時、あるテレビ番組に目が留まった。『ハワイ・フアイブ・オー』だ。私の居場所がレオナルドに分かるかどうか確かめたくて、番組のことをレオナルドに話してみた。物理学者が原子爆弾でホノルルを吹き飛ばすと脅迫する物語でー」

「その番組、覚えていますよ」僕はうなずく。「一九六九年の春ですよね？」

「違うな」ケラーは首を横にふる。「一九七三年の十一月二十七日だ。レオナルドは、ほんの一秒半の間考えて、そして言つたよ。それは火曜の夜で、私はジョージタウンにいるのだからうってな。凶星だった。そして、雨が降っていると聞いた」ケラーの瞳は大きく見開かれた。「私はその場面をロックして、周辺視野をチェックしてみた。すると本当に。どしゃぶりの雨が降つた」

「なるほどね」ゲイルがうなずく。「私は子供のころ『マニックス』をいつも見てたの。ストーリーをレオナルドに言えば、放送日が分かるってわけね」

Dreamer 3

Magnetic Tide

「面白い話がある」 オットーが言う。「私の妻は以前、天文学に凝っていてね。ある夜、おそらく一九五一年だったと思うが、妻がこう言ったのを私は聞いたんだ。木星がちょうど頭上の真上にあって、何か別の星が東の地平線上にあるってね。私はその場面をロックしてレオナルドにその話をした。するとレオナルドは、またたく間にその日、時間、天候を言い当てたよ。たいしたものだ」

「レオナルドがすごいのは分かったけど」ゲイルはオットーを見る。「向こうに行っているときに、頭の中に響く機械みたいなレオナルドの奇妙な声と話をするのは、まだ少し変な気分よ。おまけに、その声の持ち主は、脂っぼい長髪で小さな丸眼鏡をかけたコンピューターおたくなのよ。慣れるのは難しいわ」

「それでだー」オットーは何か企んでいるかのように、身を乗り出した。「レオナルドにひとあわ吹かせる手はないかと考えていて、いいことを思いついたんだ。もし私が望みどおりの場所と時間に行くことができれば、ほぼ確認不可能なデータをレオナルドに送りつけることができる。何年かさえ特定できないはずだ」

「何をするつもりなの、オットー？」ゲイルが尋ねる。

「言わないでおこう。見に来るといいさ」オットーは席を立つ。「今日の午前中、神経学者の団がラボを訪れるんだ、そこで私は十歳以下に戻る。ラボの上のギャラリーにイスがあるぞ」

「レオナルドをからかうつもりですか」僕は言う。「向こうから」

「ここからな」オットーは自分の額を叩く。「見に来てくれ」

Dreamer 3

Magnetic Tide

九時四十五分、ケラー、ゲイル、そして僕は、厚い曇りガラスのドアを開け、ドリームラボに足を踏み入れる。コンピュータ『VOXボックス』の前で背を丸めているレオナルドの他には、僕たちしかいなかった。

「やあ、皆さん」 レオナルドは顔を上げ、ワイヤーフレームの眼鏡の位置を直す。機器が放つ弱い光に照らされたレオナルドは、まるでデニムのシャツを着たニキビづらの大学院生のようだ。「オットーのトリップを見に来たんですか」

「そうよ」 ゲイルが言う。「オットーに誘われたの」

「オットーはすごいですよ」 レオナルドは眼鏡を押し上げると、ケーブルを配電盤につなぐ仕事に戻る。「やらせのデモンストレーション顔負けのパフォーマンズを見せてくれます」

僕たちはラボを取り囲むカーペットが敷かれた階段を上り、ギャラリーの最前列の席を取る。六メートル下には、誰も座っていない革の誘導チェアと、黒いプラスチック製ヘルメットが置かれた、光を反射して輝く金属のカートがある。レオナルドが動き回っている間、メドウサの髪のようにヘルメットから伸びたケーブルが、機器に取り付けられたプラスチック製の灰色の多岐管へと繋がるのを、僕は目で追いかける。ザ・ビッグ・アイロン。ザ・エンジン。グレーマシ。レオナルドが、そう呼んでいるのを聞いたことがある。僕にとって、それはイラつく合図だ。ヘッドセット内のスピーカーから響く甲高い音が僕の脳波を捉えて、体が眠りにつくまで離してくれないからだ。

「何をしてるの？ レオナルド」 ゲイルが尋ねる。

「メモリーボードを交換しているんですよ。今朝、Bグループのドリーマーがエクリップスを損傷しかけて、コアが滅茶苦茶になりました。スタックが完全に破壊されてね。どこにいるんだかさっぱり分からなくなりました」

「大変だったわね」

Dreamer 3

Magnetic Tide

「よくあることです。その人が誘導チエアに座ると、必ずシステムを壊すんですよ」レオナルドは自分の頭を軽く叩いて言う。「ここに問題を抱えていて、そのために超空間へ引きずり込まれるんでしょうね」

「レオナルド、そんなこと」ゲイルは言う。

「コンピュータでも同じことが起こります。第十ラボの旧式の大型コンピュータがそうです。常に気をつけていないと、バーティカルを失って、フラットになってしまいます。自分の小さな宇宙にチャググってしまうわけです。そんなときは赤い緊急ボタンを押して、最初からやり直さなければいけません」

「レオナルド」ゲイルは首を振る。「あなたって真正正銘のおたくね」

「僕には優しくしたほうがいいですよ、バンクスさん」レオナルドは眼鏡を押し上げる。「向こうへ行っている間、あなたと現実とのリンクは僕だけですからね。ペンフィールド針を使って向こうと話をするのは僕ですよ」

ゲイルは呆れたという表情をする。

レオナルドは僕を見てにやりと笑う。「ペンフィールド針です。ワイルダー・ペンフィールドの名前から名づけられました。一九三〇、四〇年代に手術を行った脳神経外科医です。ペンフィールドは、手術中に電気を通した針を患者の脳に取り付けました。すると患者は人生における、ある特定の出来事を思い出したんです」

ゲイルの方に目をやると、うんざりとした様子で首を横に振っていた。

「この研究所の神経学者も、ある患者の脳皮質に接触する方法を研究していました」レオナルドはにやりと笑う。「効果は同じです。つまり、瞬時に記憶が回復します。ビデオボードを取りつけて、記憶の中を覗く計画だったらいいですよ。その神経学者はSF映画の見すぎだったのでしょうか。未来からのブレイン・パイレーツ(頭脳を荒らす海賊)ですよ」

Dreamer 3

Magnetic Tide

「本気で実行するつもりだったのか」 僕は尋ねる。

「もちろんです！」 レオナルドは笑う。「本気でした。光子銃かマイクロ波か何かを使いたいと考えていたようです。正確に位置を確定できますから。ディスクドライブと原理は同じで、おそらく正確さも同程度でしょう」 レオナルドは肩をすくめる。「でも、僕は彼らにムダだと言ってやりましたよ。そんなもの誰が使うんだってね。大脳皮質を黒焦げにさせたい人なんていると思いませんか？ ちなみに、それでクビになる可能性もありましたが」

「ありがとう、レオナルド」 ゲイルが言う。

「もちろん、アプローチとしてはなかなかよくできていますが」とレオナルド。「いずれにしろ、その方法を考えた神経学者は研究所を去りました」

「どこへ行ったの？」 ゲイルが聞く。「CIAかしら」

「いいえ」 レオナルドは肩をすくめる。「どこかのケーブル・ネットワークに雇われたはずですよ」

十時きっかりにドアが開き、オットーが足を引きずりながら入ってきた。手術用の標準的な緑のシャツ、ズボン、長靴を履いている。レオナルドとひと言ふた言交わしたあと、僕たちに向かって手を振り、眼鏡を取り、滑り込むように椅子に座った。位置につくと、ヘルメットをかぶり、曇りガラス製のバイザーを下ろす。

レオナルドはマイク付きのヘッドホンをつけスイッチを入れる。「聞こえますか。ドクター・プリア」

「よく聞こえるよ、レオナルド」 腕組みをしたオットーが応える。「少し眠ってもいいかな」

「ショータイムまで起きていてください。いいですね」

Dreamer 3

「今朝はどこに行ってほしい？ 五〇年代の初めかな」

「どこへでも好きなのところへ」 レオナルドは肩をすくめる。「僕たちを、アツと言わせてください」

「一九四〇年十一月のマンハッタンへ戻ろうか。いい時代だった。十月十六日に妻のジーナと二人で、カツキルに小旅行をしたんだ。秋の清々しい空気。色づき始めた木々。君にも見せたいよ。本当に素晴らしかった」

「私には見えませんよ、オットー」 レオナルドはスイッチをいくつもオンにする。「あなたには見えません」

「そうだった。だが残念だよ。本当に美しいのに」

「後頭部の大脳皮質にテレビカソード電極をつけましょうか。そうすれば、その美しい木々を皆で見ることが出来ます」

レオナルドは僕たちに向かってにやりと笑いかけると、ラボの照明を落とし、赤いグローランプの穏やかな光だけを残した。

カーペットの階段を上ってくる、くぐもった足音が聞こえてる。薄暗い照明の中、階段の入口に一団が現れた。オットーのセッションを見学にきた神経学者たちだ。彼らは物音ひとつ立てず、一列になって通り過ぎ、ラボを取り囲む椅子に座る。

ドアが勢いよく開き、パウンドストーンが入ってくる。そのあとに続いて、いかめしい顔をしたトム・ゼイ博士が続く。パウンドストーンがレオナルドに何か耳打ちする間、ゼイは注意深くオットーの右腕に黒い長手袋をはめ、肘のあたりにあるストリップを留める。呼吸、心拍、血圧、酸素分圧を測定するのだと、経験から僕には分かる。必要ならば、手首の動脈にある種の麻酔剤を注入する役目も果たす。睡眠誘発剤だ。

僕も経験したことがある。手袋の針から液が体内に入ると、氷水が首のあたりまで上っていくような感覚を覚える。

その間ずっと、ヘッドセットから高い音が聞こえてくるのだ。

ゼイがセンサーをオットーの喉に取り付け、厚いセラミックのシリンダーを上からかぶせた。超感度の喉マイクだ。

Magnetic Tide

「いいですよ、オットー」とレオナルド。「頭の中で、五まで数えてください」
「いちーにーさんーしーご」 VOXボックスから聞こえてくる声は抑揚がなく消え入りそうだが、間違いなくオットーの
声だ。

数席離れたところで、神経学者が座席に取り付けられたライトを点けると、赤い楕円形の光が彼のノートを照らし出した。
すると他にも赤い光が灯った。皆がノートを取っているんだ。

パウンドストーンが、ラボを取り囲むバルコニーを見上げる。「皆さん、あと数分お待ちください。最終調整を行っていると
ころです」

座席のライトの光で真っ赤に照らされた防音タイルの天井を、僕は見上げる。

「準備が整いました」パウンドストーンが言う。「レオナルド、テープを回して」テープマシンのリールがカチリと音を立
てて動き始める。頭上では、空調孔から冷気が勢いよく噴出して、部屋の温度が下がっていく。そのとき、オットーの腕に取り
付けられた手袋が膨らんでいるのが見えた。すでにゼイが何かを注入したのか？

「テープが回っています」レオナルドが言う。誘導番号九十六番、被験者一八〇二、午前十時五分」レオナルドの口
調はてきぱきとして、いかにもプロフェッショナルという雰囲気だ。

「液体窒素をシステムに注入します」

「電気探知装置を冷却するためです」パウンドストーンは観客に説明する。僕は椅子の上の体を見る。喉マイクに取り
付けられた金属の小シリンダーに、細かい氷の粒がついているのが見える。

「いいシグナルが現れています」ゼイが言う。「フリーエ変換完了。ナトリウム・ペンタトール準備」

Dreamer 3

Magnetic Tide

「このシグナルはー」 パウンドストーンは客席の方を向く。「被験者の喉頭で発生し、百万倍以上に増幅、デジタル化されたもので、付随する神経雑音、熱雑音を取り除かれています。ここから、データは四列平行プロセッサへ送られ、そこで時間補正・分析され、センテンスのコンテキストが保たれます。その結果、深い睡眠状態からの声、つまり記憶の世界からのメッセージは、九十五パーセントの正確さで再現されます」

観客席からざわめき声上がる。パウンドストーンの言うことすべてに、神経学者たちは興味を示した。

「今、下りているぞ」

その金属的な声を聞いて、ロボットが液体水銀の池の中に下りていくイメージが、僕の頭に浮かぶ。

「着いた」

「何が見えますか。オットー」

「道路だ。車が走っている」 静寂。落ち着かない様子でゼイが、コントロールパネルをいじっているレオナルドの方を見る。レオナルドがシグナルを懸命に受信しようとしているのは明らかだった。まるで落ち着きを失った二人のフランケンシュタイン博士と、背の低いずんぐりとした怪物だ。こんな映画を見たことがあるぞ。

「どこにいますか、オットー。居場所を教えてください」

静寂。

「コンタクトが途切れました」 ゼイが言う。声に緊張が走る。

「いえ」 レオナルドはコンピュータの画面を見つめている。「まだそこにいます。オットーが考えているのが見えます。おそらく隠れているだけでしょ」

Dreamer 3

Magnetic Tide

「隠れている？」 パウンドストーンは訳が分からないし、恥をかかされたという表情を浮かべる。

「ええ、オットーは以前にもやりました」 レオナルドはあっさりと言つ。「ですが、心配ありません。ハンマーロックでシータ派をキャッチしました。もう一度呼びかけてください」

「オットー」 ゼイはマイクを軽く叩く。「聞こえるか？ 応えてくれ。みんな心配してるんだ」

ゲイルが身を乗り出して、僕にささやく。「オットーはあの人たちから隠れてるのよ。さあ、何を賭ける？」

長く、緊張した瞬間が過ぎると、金属的な声が部屋を満たした。「私はここにいるよ、トム。空中を浮いていたんだ。ここから私の全人生が見下ろせる。非常に興味深いね」

レオナルドはにやりと笑うと、甘ったるいジヨルト・コーラの缶に手を伸ばす

「街の通りにいる」 オットーは続ける。「マンハッタンだ。車から判断すると、そうだな、一九四九年だ。待ってくれ。

見えるぞ、新聞の売店が見える。今日は一九四九年の二月十二日だ。雨が降っている。ずっと雨が降り続けている」

レオナルドはすばやく身を乗り出し、キーボードに何か打ち込む。画面はスプレッドシートとマップを映し出す。

「気温はどのくらいですか、オットー」 パウンドストーンが尋ねる。

「私はウールのコートを着ている。雪が見えるよ。雪が降ったのだから…」

「オーケー」とレオナルド。「その日の午後の気温は五度となっています。曇り空で、街のあちこちで霧雨が降っています」

「今何処にいますか、オットー」 パウンドストーンは尋ねる。

Magnetic Tide

「妻のジーナとセントラルパークを歩いている。ジーナはメイシーズの紙袋をさげている。ブラウスを買ったんだ。小さな青いリボンのついたブラウスだ…」

「ですが、オットー。それでは確認できません」 レオナルドは肩をすくめる。僕は振り向き、神経学者の顔に浮かぶ表情をチラリと見てみる。誰もノートを取っていない。ただじっと見つめて、中には口をポカンと開けている人もいる。

「周辺視野をチェックできますか、オットー」 パウンドストーンが尋ねる。

「ああ、隅々までほとんど見える。私は眼鏡をかけているので、端の方は少しゆがんでいるがね。さらにその外側はいつもと同じだ。グレーのゾーンに火花が散っている。ああ、くそ。タイムシフトがあったようだ」

「オットー、どこにいますか」 パウンドストーンが尋ねる。

「よく分からない」

ゲイルが僕のひじでつつく。オットーのいたずらが始まったのか？

「私は映画館を見ている。どこの街だか分からないな」

レオナルドは眉間にしわを寄せて、キーボードに何かを打ち込んでいる。

「映画館の名前は何ですか、オットー」 パウンドストーンは尋ねる。

「パラマウントだ」

レオナルドは首を横に振る。「オットー、当時の映画館はどれも『パラマウント』という名前ですよ。何の映画が掛かっていますか」

「これは—ええと、『目撃者』と書いてあるようだ」

Magnetic Tide

「ステイブ・コックランとドリス・デイです。それに、ロナルド・レーガンも出ています」 レオナルドが言う。

「これで、一九五一年の初頭まで絞り込むことができます。次に天候を教えてください」

「分からない。街のダウンタウンにいるのだが、すべてが暗い」

「停電ですね、そうじゃないかと思ってました」 レオナルドはキーボードに何か打ち込み、コンピュータのモニターを見つめる。「そんな遅い時間に外で何をしているんです」

「歩いてホテルに帰るところだ」

「足元に気をつけてください。おそらくそこはボストンでしょう。視界は三メートルほどしかないはず。前日の吹雪で、送電線がいくつかダウンしています」 レオナルドはパウンドストーンをちらりと見る。「おそらく一九五一年の二月二日、真夜中の十二時前でしょ」

「オットー」 パウンドストーンが聞く。「あなたがいるのはボストンだと、レオナルドは言ってます。正しいですか」

「私は、そうかもしれん」

「そちらの天候は実におもしろいことになってます、オットー」 レオナルドは言う。「ジュークボックスによると、前日の夜には雪が降り、そして雨、そして凍りつくような寒さを記録しています。なるほど、氷点下十六度。ものすごい寒さだ」 レオナルドは言葉を止め、キーボードにタイプする。「見てください。サビン・ヒル、ケンブリッジ、リビア、ウエルズリーの町で停電になっています。私ならホテルにこもっていますよ」

「そうするよ」

「テレビのスケジュールを教えましょうか」 レオナルドが聞く。

Magnetic Tide

「いや、いい」

「そうですか。スポーツはどうですか？」 レオナルドはモニターを見つめる。「ホリー・クロスがロヨラに八十一対五十六で勝っています」

「ありがとうございます」

「もしチャンスがあれば、明日、アストール劇場へ行って、『マグネティック・タイド』を見るかもしれませんね。足元に気を付けて。凍っていますよ」

静寂。

「オットー？」 パウンドストーンが呼びかける。

「ニューヨークに戻った」

「順調です」とレオナルド。「データをください」

「舗道にいる。ジーナ、私の妻が一緒だ。雨が降っていて、ああ、タクシーを待っているんだ。もちろん感じることはできないが、寒いことはわかる。あちこちに雪を積み上げた薄汚れた小さな山が見える。ジーナはコートを着ている。黄褐色のキャメル地だ。それにナイロンの黒い手袋と黒い靴。私は今、道路標識を見上げている。五番街六十三丁目だ。そうだ、向こうにセントラルパークが見える。ああ、タクシーが通り過ぎてしまった、くそっ」

私は神経学者たちに目をやる。全員が椅子から身をのりだして、このパフォーマンスを呆然として見つめている。

「日にちは分かりますか」 パウンドストーンが尋ねる。

「いや、新聞販売所は見当たらない。だがカーラジオの音が聞こえてくる。ちょっと待ってくれ」

Magnetic Tide

ラボは静寂に包まれた。聞こえるのは換気装置が立てるシューツという音だけ。

「誰かが歌ってる。『マクナマラ・バンドー』」

「ちょっと待ってください」 レオナルドがキーを叩き、モーターを走り読みする。「その曲は、一九四五年十二月六日、ビング・クロスビーがレコーディングしています。そしてミリオンセラーになりました。オットーはおそらく一九四六年の二月か三月にいたのでしょうか。時間と気温を教えてくださいれば、正確な日を特定できます」

「聞こえましたか。オットー？」 ゼイがたずねる。「時間と気温がわかりますか」

「いや分からない。今は街を見ている、雨が降っていて、ひどい渋滞だ。ジーナが今、水たまりに足をつっこんだ。まいったな。私はこれが嫌いなんだ」

「オットー、そろそろ戻りましょうか」 ゼイがコントロールパネルにあるスイッチに手を伸ばす。

静寂。僕は椅子に横たわったオットーの体を見つめる。身動きひとつせず、眠っている体。この世界には属していない体だ。

「オットー」

部屋は静まり返っている。

「オットー、そこにいますか」

「ああ、準備はできましたぞ」

神経学者の中から、安堵のため息がもれる。

「いいぞ、レオナルド」 パウンドストーンはレオナルドに合図を出す。「オットーを戻せ。ゆっくりとだ」

Dreamer 3

Dreamer 3

Magnetic Tide

ブーンという音がする。電気モーターが回転を上げていくような音だ。そしてカチっという音のあと、VOXボックスが静電気を放出する。電気のさざなみが流れると、イスの上の体が飛び上がった。

レオナルドがテープマシンの電源を切った。階下では、オットーがゆっくりと頭に手を伸ばし、ヘルメットを取る。シヨールは終わった。

Dreamer 3

Magnetic Tide

四 高速道路

Highway

ローストビーフをフォークで突つきながら、オットーは首を振る。

「一体、どうすればあんなことができるんだ？」

「私はあの時コンピュータを見てたわ」ゲイルが言う。「まずレオナルドはパラマウントの映画館をリストアップして、あの映画が上映される映画館を絞り込んだ」

「だが、私がポストンにいたとどうして分かった？」オットーは言う。「教えてくれよ」

「あなたが暗い場所にいると言ったから、レオナルドは停電のリストを探してきたの」ゲイルは肩をすくめる。「誰がどんな場所いても、レオナルドは見つけ出せるのよ」

「ワイオミング以外ならね」と誰かの声。見上げると、背の高いラッセル・コルトレーンが立っていた。いつもと同じで、ワークブーツ、ジーンズ、縞のシャツという服装。丸いワイヤーフレームの眼鏡をかけている。

「座れよ、ラッセル」僕はイスを引いて勧める。「レオナルドのせいで頭痛だったと聞いたよ」

「ああ」コルトレーンは細長い体をたむようにしてイスに座った。「サーモポリスの南の二〇号線を走っていて、チェックインするのを忘れてね。そしたら、レオナルドに鎖をひつつかまれて引き戻された」コルトレーンははつが悪そうに笑い、灰色の目が大きく見開かれる。「自分のせいさ」

「私は緊急停止された経験はないけど」ゲイが言う。「痛いのかしら」

Highway

「気持ちのいいものじゃなかったな」 コルトレーンはチーズバーガーを大きな両手でくるむようにして持つ。「体の中身が口から飛び出しそうだったよ。一瞬の間だが、煙の匂いがした」

「まるで雷雨の真只中にいるみたいにな」 ケラーが、大きくうなずく。

ゲイルが不安そうな顔つきでケラーを見る。

「じゃあ、これで」 僕は席を立つ。「今日の午後、誘導チェアのセッションが待ってるんで。レオナルドの指が緊急停止スイッチに触れないといんだけどね」

「ひとつだけ覚えておいた方がいい」 チーズバーガーにかぶりつく合間に「コルトレーンが言う」。

「何だい？」

「t-4波を見失うなよ」

「何だつて？」

「t-4波さ」とコルトレーン。「頭の右端から出るかすかなシグナル波だ。レオナルドは、その波を鷹のように見張ってる。他のラインがすべてフラットになっても、レオナルドは緊急停止ボタンを押すことはしないが、t-4波が少しでもおかしいことになつたら、スイッチを押して、お前さんを連れ戻すぞ。ヒューン、こんな具合にな」 コルトレーンはまじめくさって頷く。

「じゃあ、どうすればそのt-4波を、えっと、見失わずにすむんだろつ」

「問題はそれだ」 コルトレーンは肩をすくめる。「私にも分からない」

「ありがとう」 僕は笑う。「助かるよ」

「ごういまして」 コルトレーンはそう言うと、チーズバーガーにまたかぶりついた。

Dreamer 4

Highway

「ヘンダーソン・コハン・ミッチェル・ランバート」です。

「もしもし、マイケル・ミッチェルだけどー」

「お待ちください」 音楽。イージーリスニング風にアレンジした「ヘイ・ジュード」が流れる。僕は受話器を置き、もう一度掛けないおす。

「ヘンダーソン・コハン・ミッチェル・ランバートです。お待ちください」

「マイケル・ミッチェルだ。妻はいるかな。妻はー」 気づくとまた「ヘイ・ジュード」が流れていた。

そして、ようやく声がする。「リンダ・ミッチェルのオフィスです」

「やあ、マイケル・ミッチェルだけどー」

「あら、ミッチェルさん、こんにちは。ケイジーです。奥さまは来週の水曜まで、出社しませんが」

「いない？ 今朝、電話で話したけどー」

「そうですね？ お昼に家に帰りましたよ。たぶん、明日メキシコで会議が始まる予定なので、今晚発つ予定なのでしょつ」

「妻がメキシコの会議に出る？」

「あら、聞いていませんか？ それはー、あ、すみません」 回線が切り替わり、「ヘイ・ジュード」の最後のパートが聞こえる。

そしてなんともありがたい静寂。続いてツーという発信音。回線は切れていた。

……★……

僕は掛け直す。指が猛烈な勢いでボタンを押す。

「ヘンダーソン・コハン・ミッチェル・ランバートです」

「やあ、マイケル・ミッチェルだ。サン・アントニオから長距離電話をかけているんだけど」

「少々、お待ちください」 今度は、イーजीリスニング風にアレンジした「ハートに火をつけて」だ。拷問のような一分間が過ぎ、受付係が再び電話に出る。

「申し訳ありません。奥さまは今日の午後は休みですし、秘書も昼食のため席をはずしています」

「ケイジーが昼食？ 今、話したばかりだけど」

「そうですか？ ボイスメールがオンになっています。メッセージを残しますか」

「いやいい。妻は今日の午後、出社するだろうか」

「いいえ」

「明日は？」

「ケイジーに聞いてください」

「でも、ケイジーはいないんだろ」

「ええ、昼食に行っていますから。ボイスメッセージを残しますか？」

「いい、あとで掛けなおす」 僕は乱暴に受話器を置く。

Highway

午後四時五分。バイザーが下ろされ顔を覆うと、ラボと遮断される。右腕の袖口がパンパンに膨らんでいる。今回はあの針を使うのだろうか、と僕は思う。

「大丈夫ですか」 看護師がヘルメットの側面を軽くたたく。「筋肉弛緩剤が必要でしたら、そう言ってください」

「ええと、必要ないと思う」 両目を開いて二つの緑色の小さな光を見ると、光は僕を見つめ返す。まるでサイボーグの猫かなにかのように。

「…血圧は一二〇と七〇で比較的落ち着いています」

安心感を与えるレオナルドの声。だが僕はまだ少し緊張していた。今度は何か思い出すだろうか。リンダの言ったとおりじゃないかと僕は思い始めている。どうせ金を使うなら、ロシアへの逃避行に使ったほうがよかったんじゃないか。そうすれば、少なくとも思い出と写真は残ったのに。

「…脈拍は安定しています。七八です。酸素分圧も良好、百パーセントです。心臓の動きもまったく変化ありません。GPRSは順調。PACはなし。脳波計は…、異常な降下とサブデルタが現れて、乱れていますね。いや、冗談ですよ。聞こえたら、小指を立ててください…」

僕は手を上げ、マイクに向かって話しかける。「緊急停止スイッチには触らないでくれ。頼むよ、レオナルド」

「なぜ緊急停止スイッチの心配をするんです」 レオナルドが尋ねる。

「今日中に帰ってくる予定でしょうか」 マイケル

「連れ戻されるのは痛いと思ったからね」

「愛と同じくらい、手厳しいですよ」

Dreamer 4

Highway

「やめてくれよ、レオナルド。緊急停止はなしだ」

「ジム・ケラーの話を聞いてきたようですね」レオナルドは肩をすくめる。「ケラーの頭皮はとても柔らかいんです。一、ニボルトを流したら、あざだらけになりました」

「レオナルドー」

「それほどひどいものじゃないと思いますよ。ちょっとひりひりしますが、ほとんど何も感じません。硬質ゴム製のクシの静電気ほうが強いくらいです」

「自分で経験したことないんだろ？」

「タイム・サーフィンをしたことがありませんからね。違和感と頭皮の痛みを感しますが、すぐに消えます」

僕の負けだと分かった。「スイッチを押す前に教えてくれ。頼むよ」

「t・4波を見失わないでください」レオナルドがこつ応える。

「できるだけやってみる」僕は気持ちを落ち着けるように努める。ここに来るまで、自分がt・4波を出していることさえ知らなかったのに、それをコントロールしなきゃいけないとは。

「オーケーイ、マイケル。音楽が聞きたければ、もう片方の手を上げてください。指一本でメタル、指二本でサイケデリック、中指を立てれば、スタンダードを聞かせますよ。少年ナイフの最高のCDもあります」

か細い音が片方の耳に聞こえる。音はもう片方の耳に移り、そして両方の耳から聞こえ始める。その音はスピードを上げ、唸るような音に変わる。外では、レオナルドがモニターを見つめながら、僕の脳波と合致するように速度を調節する。

僕は目を閉じる。緑色の光も消えた。

Dreamer 4

Highway

「オーケー、上を見てください。ありがとうございます。とてもいいアルファ波が出ています。正面を見て、緑色の四角形を思い浮かべて…ありがとうございます。次は黄色の円形を…。とても順調です。百から三つおきに数を逆に数えてください。計算プロセスもよく機能しています…。次は、この高価なシータ波検出装置が、シータ波をキャッチするかみてみましょう。音楽を流しますよ」

唸るような音が強くなっていく。その後で、少し高い音も聞こえる。

「…波形がマッチしたようですね。さてと、今夜は、私ガイ・ロンバルドがあなたを心の奥底への旅へお連れしましょう…。しっかりと掴まって。そして忘れないでください。目の前に現れる思い出は、本物ではありませんからね」

唸るような音が、ハチの大群のように僕に襲い掛かってきた。さあ始まった。体のいろいろなところが、かみ合っていないようなヘンな感じがする。まるで窓枠から外れかけているガラス窓のようだ。そして足元の扉が開き、僕はその中へ落ちていく。

なんとかして思い出さなくては…。

暗闇は雲に変わり、その雲が晴れると、絡み合った幾筋もの光線が遠くの一点に向かって集まっていく。眩いばかりに輝く、過去へと続く光のハイウェイ。前方に向かって突き進んでいくような感覚が走り、体の中を突き抜けるジェット気流が僕をぐいぐいと引っぱっていく。はるか下に見える風景はこれといった形をなしているものではなく、見たこともない異様なものなのに、一筋一筋の光線をなぜか僕は見分けることができるみたいだ。これこそ直感だ。見知らぬ街でどの角を曲がればいいかを知っているような、あの感じと似ている。

Dreamer 4

Highway

突然、気づいた。僕は前に、ここに来たことがある。目に入るものすべてが、どの過去を表しているのか、僕は知っているのだ。このトリップでは、蜘蛛の巣のように張り巡らされた過去の時から、子ども時代を思い出させる場所へと戻ることにしよう。直感の導きに身を委ねて、待ってあげたい。僕が帰りたいと望む場所が見えるまで……。

光が色のついた帯となって僕の周りを渦巻くしていく。近づくにしたがって、記憶と感情が湧きあがり僕を包みこむ。そして今、聞こえるのは、サイレンの音だ。

はつきりとしたカチリという音が聞こえた。まるで何かをある場所にはめ込んだような音。僕はここにいる。肉体を離れた僕が、スクリーンの前にいて、見つめている。聞こえるのは息づかいと、ドクン、ドクン、ドクンというかすかな心臓の音、そして動脈を流れるリズムミカルな血流の音だ。意識を他へ移すと、その音は消えた。

視界が晴れると、そこにはイスの脚が森のように立ち並んでいた。子どもたちがきちんと並んで、床の上にもうすぐまり、手で頭を押さえている。目の前の光景がシフトすると、僕は、誰かがFUKと書きなぐった金属製の机の裏側を見上げていた。

黒いハイヒールに支えられた細い脚がシーンを通り過ぎる。コツ、コツ、コツ。さあ、みなさん。もし戦争が起こってコリンスの町に爆弾が落ちたら、このサイレンが鳴ります。そうしたら机の下にもぐってください。分かりましたか？」

「はい、キネマン先生」

目の前にいる男の子の靴には穴が空いていて、スポンの尻の部分にはつぎが当てられていた。隣の列には、緑のチェックの服を着た女の子がものすい勢いで笑っている。

「ジル、シュー。笑わないでよ、頼むから」

コツ、コツ、コツ、コツ。靴音が遠ざかると、女の子は顔を出して笑い続け、涙が頬を伝って落ちる。

Dreamer 4

Highway

僕のポケットから鉛筆が数本床に落ち、机の間の通路へと弧を描いてころがり、つぶれたキャンディの隣で止まった。

「なあ、ミッチェル。ロシア人が学校に爆弾を落とすんだぜ。そしたら学校は休みになるぞ」。僕は振り向いて、小さな四角い顔を見つめる。短く刈り込まれた髪、少しひねくれた笑顔に、大きな前歯が二つ見える。映画に出てくるタフガイみたいに、斜めに構えて右目を細めている。エバン・カースウエルだ。

「兄貴が滑車にとりつけるケーブルを見つけたって言ったっけ？ 今日午後、あいつは川のほとりの木の上の小屋からそのケーブルを吊っていた。あれに乗るつもりなんだよ。地面から三十メートルはあったな。兄貴のやつ、落ちて尻をひどく打つにきまつてる。見たくないか？」

「見たいさー」

シーンは消え去り、元の場所に戻っていた。錯綜する光の上に僕は浮いている。

「マイク、そっちはどうです？」

「順調だ、レオナルド。小学校に戻ってみたいだ」

「もう？ そっちに行ってから一分ほどしか経っていませんよ」

「もっと長く感じたけどね。今は光の上方にいるよ」

「超空間に長くどまりすぎないでください。テープに何か残さなければいけないし、残り時間は、この時計であと一時間しかありません」

「オーケー、何か手に入れてくるよ」

「バッファ記憶装置をオーバードローさせないよう」

Dreamer 4

Highway

「わかった」僕はもう一度光に向かって落ちていく。

僕はドアを開け、薄暗い木製のポーチに足を踏み入れる。感じることはできないが、夜気が冷たく、身を刺すようだ分かる。三十メートルほど先に、街灯が、落ち葉で覆われてカサカサとした芝生の上に、眩しすぎる青い光を落としている。

歩道の突き当たりには、茶色い一九六四年のフォード・フェアレーンが停まっている。僕が二十五年ほど前に売った車だ。

僕はコンクリートの階段を降り、車へと向かう。車のドアを開けて、トレーニング用のバッグを後部座席に投げ入れると、車に乗り込む。銀色のキーをイグニッションに差し込むと、一瞬耳障りな音がした後、轟音とともにエンジンがかかった。マフラーはついてなかった。

シートベルトもない。きつと一九六〇年代の半ばに違いない。

何かカチリと音を立てる。まるでプロジェクターのスライドが切り替わる時のようだ。そして目の前に薄暗い廊下が現れる。学生寮だ。この場所を覚えている。僕は大学の一年生で、授業から戻るところだ。でもここには何も無い。僕はパウンドストーンが教えてくれた方法を思い出した。「その時間や場所を離れたいと思ったら、上へ昇ってください」

僕は昇っていく。昇るにしたがって、壁、天井、床、すべてが暗闇の中の一点の明るい光に集中する。記憶の暗闇の中で、一週間ぶん横へ移動してみる。うまくいった。僕はこの場所をナビゲートできるかもしれない。

「マイケル、聞こえますか？」長い木の机の上に詰まれた本の山の向こうから、声が聞こえてくる。「何処にいるか教えてくださいませんか？」

僕は視界をスキャンする。シーンの隅、視界の境界線近くに新聞が見える。場面をフリーズさせて、文字を読んでみる。

「ミズーリに今夜、霜警報発令」

Dreamer 4

Highway

「大学の図書館にいたみたいだ。今夜、霜が降りるらしい」

「じゃあ、真夏ではないってことですね。何か音楽が聞こえますか」

「図書館だつて言っただらう」

「ああ、そうでしたね。失礼。おっと、テープを交換しなければいけません。ちょっと休んでください」

カチリと音がしてレオナルドがいなくなると、僕はひとり、自分の映画のなかに取り残された。何かが流れるように視界をよぎる。女の子だ。分厚い木製の机の間を歩いている。膝より少し長めの丈の緑と白のチェックのシフトドレスを着ている。

靴下はなくペタンコの革靴を履いている。僕は女の子の髪に目をやる。黒髪を大きく膨らませて、両脇で留めてある。

絶対に六〇年代の半ばだ。

一瞬、腕時計が目に入る。僕の腕時計。クリーム色の文字盤に光る針のついたやつだ。

午後三時三十分。

軍の基礎訓練で、この時計をなくしたことを僕は思い出した。今になってその時計を見るのはなんだか不思議な気分だ。現実の世界で、今ごろこの時計は何処にあるのだろう。おとろくどこのゴミ処理場に埋まってるに違いない。

まるで遠くのラジオから聞こえてくるような声がある。『まいったな。やっと今日の最後の授業だ。今日は火曜日だから、

あと三日も残ってる…』

三十年前の僕自身の思考だ。

非常に珍しいことだが、お化け屋敷の乗り物のようにやってきては消えていく自分の言葉を聞くことがある、とハウンドストーンが言っていた。

Dreamer 4

Highway

画面が一瞬暗くなると、シフトした。青い縞の長袖シャツを着た腕が現れる。左手の指にはクラスリングをはめている。本が目に入った。「現代世界の背景」。

目の前の空間で何かが形成されているのに気づく。何か別のものだ。

「マイケル。大丈夫ですか」

「大丈夫だ、レオナルド」

「右側頭葉から速いシータ波が出ているのを検出器が捉えました。何が起ってるんです？」

「分かったら教えるよ」

最初、目の前のイメージは、粒子の粗いフィルムを写したときのように茶色と白が広がっていた。見てみると、次第に図書館の映像に変わったていく。だが、まだ完全に入れ替わってはいない。突然僕は気づく。自分は今、思考の中の思考を見ているのだと。過去から来た心の中の風景。パステルカラーのモザイクの中で少女が動いている。線のない、青、金色、黄色、緑で彩られた印象派のキャンバスのような。草原に立つ少女。黒髪は風に吹かれ後ろへと流れている。少女の後ろには、薄暗い雲に稲妻が光っているのが見える。

「まだ何も分かりませんか？」

「今、CMブレイクを取った」

「t-4波に少し異常が出ています。その何をしているにしても、コントロールCを押し、上空に上がった方がよさそうですね」

少女が僕の方を振り向く。

Highway

「マイケル、心拍数が上がっています。九〇を超えたら、緊急停止スイッチを押します」

「いや、待ってくれ」 少女の映像はかき消えて、新聞のページが取って変わった。線と言葉が並んでいる。記事によると、湖のそばでパーティがあったらしい。

モーションを停止させる方法を教わったのを思い出した。ロックだ。

その瞬間、映画は、動きを止めたまま微動だにしない写真へと変化した。何か手がかりはないかと僕は注意深くシーンをスキャンする。そしてとうとう見つけ出した。大学新聞の右上の隅に「位一九六六年十月四日」の文字を見つけたのだ。これが、今僕がいる場所だ。

ロックを解除する。シーンは動き始めた。

「あどどのくらい時間がある??」

「その時間になったら教えます」

今までのところ、このトリップで訪れた過去は二箇所。僕はその場所を覚えているだろうか。

僕が上昇すると、図書館の壁が崩れ二次元の平面に変わる。そして一つの点になった。

僕は流れていく僕の時間を見下ろす。ひとつの流れのなかに僕の過去が見える。大学に入学した最初の日、あの夏、ドラ

イブインシアターで過ごした夜、昼の工場、高校。すべてが三次元の光のシンダーの一部分で、そして彼方へと遠ざかってく。

別の流れを見やると、軍隊での日々が見える。結婚式も、妻のリンダと子どもと暮らした日々も、光が集まる遠くの点まで、ずっと伸びている。

Dreamer 4

Highway

空間の内側にいるが、時間の外側にいる。これでは思い出せないのも無理はない。覚醒している思考では、理解することも受け入れることもできなかっただろう。

「マイケル、少しの間、逆説睡眠に移行したようです。大丈夫ですか？」

「大丈夫だ。次のパスに入ってみる」

「連絡を途切れさせないでください」

僕は別のシーンに向かって落ちていく。近づくとつれ、イメージは一層リアルになった。一瞬、巨大な広告板のように見えたが、次に、その映像は動き始めた。ひとつのコマから次のコマへ、すばやく移り変わっていく。一秒に二十四コマ、そして五十コマになった。スピードがその倍になり、くっきりとした映像が浮かび上がる。映像が三次元化され立体になる。最初はかすかに、そしてはつきりと。目の前にあるのはもう「過去」ではない。

「現在」だ。

そして僕はここにいる。夕暮れ近い薄暗がりのなか、窓のわきに立っている。石炭の煙のせいで薄もやに覆われた空が、夕日をにじませる。中空には、棚のように広がる層雲からちぎれた雲が長く細くたなびいている。下方には、地平線に沿って消え入りそうな細いもやの帯がかかり、その中で、僕の生まれた町の給水塔が金属的な光をかすかに放っている。給水塔の側面に「Corr...nt...」という文字がなんとか読み取れる。おそらく野焼きの煙だろうか、薄黒いもやが一面に道路を覆い、町まで続いている。

Dreamer 4

Highway

黒っぽいコートを着た男が運転する車が一台通り過ぎた。ふいに僕は、もう存在しない過去を見ているのだということに気づく。あの車の中にいた男は、今は三十歳年を重ね、もうこの世にいないかもしれない。車はクス鉄になっているだろう。もしかしたら、僕の古い腕時計のようにどこかのゴミ処理場に埋まっているかもしれない。

僕は道路をスキャンして、次第に暗くなっていく空の下、何列にも並んだ灰色の家々に目をやる。あの中の何軒が、今も同じように建っているのだろうか。あの家々に住む人たちのうち、何人が今も生きているのだろうか。

家並みから道路へスキャンする。アスファルトの道路に走るヒビを通り過ぎ、路肩のタールと細かい砂利を見る。三十年経った今、この砂利やアスファルトはどこに行ったのだろうか。新しく敷かれたアスファルトの下に横たわっているのか。あるいは掘り起こされて、コンクリートと入れ替わっているのか。

車がもう一台通り過ぎる。一九六一年のマーキュリーコメントだ。軽い事故に遭ったのだろう、後方のバンパーが下方に反り返っている。運転しているのは若い黒髪の女性だ。三十年経った今、女性はこの車を覚えてすらいないかもしれない。上り坂を越えて見えなくなる車を僕は見送る。排気パイプからスモークがたなびき、赤いテールランプが、充血した丸い瞳のように、こちらを見返してくる。

以前ケラーが言っていた言葉を思い出した。「過去に行ったら、あまり深く息を吸い込むなよ。空気にたっぷり鉛が含まれているから、帰ってから具合が悪くなるぞ」

理屈に合わないこのコメントにみんなが笑った。だが空気中に漂っている黒いスモークの帯を見ると、これは今、実際に起こっているのだと思わずにはいられなくなる。だけど、これは記憶の中だけに存在するんだ。脳の中の発光体を刺激する電気的なインパルス。それだけだ。

Dreamer 4

Highway

透き通るような暗闇のなか、かすかな雑音が聞こえ、その上に逆方向のアルペジオが重なる。

耳障りな雑音のなかに、かすかにラジオからの音が聞こえる。これでどこに居るのか正確にわかる。一九六三年三月初めの土曜日、午後五時二十分だ。

初めて「パイプライン」を聴いている。新しい音が、僕の中の新しい回路に記憶される。スクリーンの裏側をこうして漂っていると、奇妙だったあの年を感じる事ができた。暗く、厳しい年、悲しい、嵐のような一年。突然、頭の中にレオナルドの音が響く。「マイケル、戻りました。何が見えますか」

「一九六三年三月の第一週に居るらしい。多分、土曜日だと思う」

「確かですか。待つてください。古いジュークボックスの検索エンジンで見えます。一九六三年の三、がつ、と入力して…、曲タイトルは…クエスチョンマークを入れましょう。そしてエンター。出ましたよ。曲目の記録が出ました。翌週の火曜、ビートルズが「フロム・ミー・トゥー・ユー」をレコーディングします。そっちの時間で午前十一時です」

「ありがとうございます」

「どういたしました。それが仕事ですから。何かあったら呼んで下さい」

車が私道に入ってきた。青い一九五六年のフォードだ。少しの間、車のエンジンはブンブンと音を立てて、そして止まった。

数秒後、僕の父親が車から降りてきて、ドアを閉めると、停めてある兄さんのシエビー・ステイムライナーの方へ歩いていく。

父は立ち止まると、左のフロント・フェンダーのところに目をやる。たぶん、新しいへこみがあったのだろうか。

Dreamer 4

Highway

僕は三センチ前へ進む。三十分くらいに相当するのだろうか。母が夕食の支度を終えたところだ。スウェーデン風ハンバーガー、サラダ、新ジャガ、ブロッコリー、ペプシ。ブルージーンズをはいて袖をまくった兄のアールが階段を下りてくる。僕はラジオを消し、イスを引くと家族と一緒の食卓についた。

イスに座った時、父と母が二人とも、今の僕よりも若く見えることに気づく。兄のアールも席に着く。短いお祈りの後、みんなが料理に手を伸ばした。

この光景を見て、何よりも、父のシャツのポケットに入ったタバコの箱が目が行った。僕がどこから来て、何を知っているのか、手を伸ばして父に伝えたくなる。このタバコのせいで、最後に父は命を落とすことになるのだ。

だけど、僕には伝えることはできない。何か口に出したとしても、レオナルドに聞こえるだけだ。この場所では触れることすらできないので、僕にできることといえば、見守ることだけ。まったく役立たずだ。

この経験のマイナス面は深刻だ。愛する人たちを見ながら、触れることができない。話しかけることもできない。なぜなら、ここはすでに過ぎ去った場所、僕の記憶の中にしか存在しない場所だからだ。でも僕はここにいる。死んでしまった人々に囲まれて漂っている。

自分がハンバーガーに手を伸ばすのを僕は見ている。僕の手は注意深くパンをつかみ、ケチャップを振りかけ、かぶりつく。そしてコーラの入ったコップを持つ。

写真家は写真を撮るとき、自分の影が映らないようにする。影は写真に入り込むだけでなく、そこに他の誰がいることを伝えてしまうからだ。芸術的に見れば、写真家がそこにいるべきではない。存在しているのは、被写体だけだ。

Dreamer 4

Highway

テーブルを見回すと、自分がその場面の一部分なのだと分かる。もともとそこにいなかったら、ここに存在することもできないわけだ。影は僕の前にあった。今僕は、目のなかに浮かんで、誰にも僕の姿は見えない

僕はフロッコーに手を伸ばす。この頃の僕はこんなものが好きだったのか。どうやらそうらしい。目の前の光景が何よりの証拠だ。

「そんなにたくさん取っちゃダメよ。マイケル」 母が言う。「他の人も食べたいかもしれないでしょう？」

「僕の方も食べていいよ」とアール。

「そっだ、もつと食べなさい、マイケル」 パパが言う。「父さんはいいから」

「この年は、家族全員にとって危険極まりない年になると僕は知っている。僕たち家族は苦しみを味わうことになるんだ。僕はそのことについて考え、そしてその考えを手放す。

不意に、また僕は上昇する。

この奇妙な記憶の川をナビゲートすることは可能だろうか。最初に時間を選べば、うまくいくかもしれない。例えば一九六一年七月を選び出し、僕の記憶の配列をこの奇妙な流れに当てはめていく。まず、一九六一年七月を思い浮かべる。六〇年代のなかで、まるで一筋の層雲のように細くて明るく輝く部分。僕はあの七月を思い、当てはめ、それと一体になる。

そして僕は今、下界にいる。今度は部屋の中だ。兄と一緒に使っていた部屋。窓は開いていて、シャツとジーンズ、そして白い靴下をはいたアールがベッドに寝転んでいる。洋服ダンスの上には、茶色い布張りのスピーカーがついたアールのラジオがある。

Dreamer 4

Highway

「聞いてよ、アール。困ってるんだ」

「ああ、どうしたんだよ」 アールはシャツのポケットからペルメルの箱を散り出す、セロハンの中にはジッポのライターが入っていた。数十年後、そのライターはマサチューセッツ州、レキシントンンのドレッサーの引き出しに入ることになる。

「ブレンダのことだけど、僕と別れたがってるみたいなんだ」

「本当かよ」 アールはタバコに火をつける。「どうして分かる？」

「学校でウワサになってる。彼女、僕に飽きたって友達に言ったらしいんだ」

「彼女、一歳年上だったっけ？」

「そうだよ。ブレンダが話すことは、僕が知らないことばかりなんだ。例えば、音楽の授業のこととかね」

「それ、よくないよ」 アールはタバコの煙を吸い込むと、窓に向かって細く青い煙を吐き出した。

「そんなことない。理解できない部分を持つてる女の子なんてブレンダだけだ。絶対に僕はブレンダを愛してる」

「ふーん」 アールは注意深く、タバコを灰皿の縁に乗せる。煙が漂って窓から出て行くのが見える。「付き合ってたのく

らいになる？」

「一週間経った」

「もうキスしたか？」

「冗談だろ？」

「ごめん」 アールは肩をすくめ、灰皿からタバコを取り上げる。「ブレンダが別れたがってる理由は、それじゃないかと思っ
つれ」

Highway

「そんなはずないよ」

「そうだな。で、なんで今夜、野球の試合に彼女を誘わなかった？」

「試合があるなんて知らなかった」

「あんな、もし女の子とデートしたいなら、気を配らなきゃいけないことがあるんだよ」

「たとえば？」

「たとえばってー、とにかくそういうことがあるのさ」 アールはタバコを吸い、すばやく煙の輪をいくつが作ると、タバコを灰皿に戻した。「なあ、明日の夜、サリーとデートするんだ。お前にいい子を紹介してやれると思うよ」

「無理だね。僕はブレンダとステディになるんだ」

「指輪を渡したのか？」

「兄さん、僕が指輪なんか持ってないって知ってるだろー」

「でもな、マイケル、それじゃステディにはなれないよ」 アールはタバコをもみ消した。「いいか、おれたちとダブルデートしよう。ドライブインシアターで今年最後の映画があるんだ。サリーの妹は、おもしろい子だよ」

「やめてくれよ、カレン・バレットだろ。高校生じゃないか！ それにカレンは僕より背が高いし」

「聞けよ、マイケルー」

「兄さん、カレン・バレットは兄さんと同じくらい背が高いよ。ほかに姉妹はいないの？」

「いないよ。お前がデートできる子はな」 アールはにやりと笑う。「そんなことしたら、彼女たちの旦那に文句を言われる」

Dreamer 4

Highway

「マイケル、あと六分です」

「ありがとう、レオナルド」

昇っていく。一九六一年のフレームの中で、僕は少しのあいだ漂って、あたりを見回してみる。多分この場所なら自分でナビゲートできそうだな。この場所がどこであつても。

「あと五分です」

「オーケー」

兄さんとの話を終えられればいいのにと思いながら僕は光の中へ下りていく。でもそれは、我が家の部屋の光ではなく、違う場所に変わっていた。大学の寮の部屋だ。なぜだか僕は五年先へ進んでしまったようだ。無愛想な若い男が僕に受話器を手渡す。

「マイケル、君にだよ。女の子だ」

「ハイ、私よ」 声を聞いても、誰だか思い出せない。若い声だ、ありえないくらいに若い。

「ママとパパが、あなたに電話していいって言ったの。今週末にはここに来れる？」

「無理そうだな。火曜にテストがあつて」

「ねえ、聞いて。あなたが買ってくれたナイトシャツをベッドで着てもいいか聞いてみたの。あなたがズボンをぬがないって約束してくれたらだけだね。そしたらパパとママが許してくれた。もちろん私も一晩中シャツを身に着けてるって約束させられたけど。でも、これってすくなくない？ パパとママはあなたが家族の一員になるって思ってるのよ」

Dreamer 4

Highway

僕の視界は、万華鏡のような模様であふれる。光り輝く半透明の模様だ。。さつき図書館で見たものと同じだ。思考の記憶。記憶の記憶だ。

「三分です」

僕は誰かに毛布をかけてやっている。女の子だ。ベッド脇の窓は雨に打たれて汚れている。街灯の光が壁に反射して輝いている。僕は起き上がり外を見ると、下の路上には僕の車が停まっていた。一九六四年の茶色いフォード・フェアレーンだ。

あたりを見回す。この場所、この年を知っている。すぐくリアルだ。僕が手でシートを整えていると、窓の外の雨足が激しくなった。遠くで雷の音がする。外は嵐なのだろうか。

「マイケル、振幅が落ちています。大丈夫ですか」

街灯の黄色い光で、部屋の中を見渡せる。鏡のついたドレッサー、引き出しの付いた古いタンス、半分扉が空いたクロー

ゼット。床の上の服。ダイヤ模様の壁紙。僕は以前ここに来たことがある。僕は今、ここにいる。

「マイケル、連れ戻します」

突然、シーンは内側に向かって破裂し、すべては燃えるような白いもやの中に消え去った。僕は叫び声を上げる。けどなんの音も聞こえない。空気がないんだ。なにもない。

「やあ」 バイザーが上げられ、ワイヤーフレームの眼鏡の奥に青い目が四つ見えた。「大丈夫ですか」

「ものが二重に見える――！」

Dreamer 4

Highway

「それはお気の毒に」 レオナルドが僕の頭からヘルメットを取る。「いつもなら喉頭マイクを外すまで、話したり咳払いをしないようにお願いするんです。でも、ちょっとした緊急停止をしたために回線が焼き切れまじってしまったんで、話をしても大丈夫です」

「ちょっとした緊急停止？」 僕は頭に手をやる。「ハンマーでぶんなぐっておいて、それはないだろう？」

「ええ、時には、フォークで脳みそを突き刺しますよ」 レオナルドは立ち上げる僕に手を貸す。「アスピリン、要りますか？」

「一体、何ボルトかけたんだ」 かすれ声で僕は尋ねる。

「分かりません。二千くらいでしょうか。でもアンペアは大したことありません」 レオナルドはマイクを取りはずしテープルの上に置いた。「ボルテージは重要じゃありません。アンペアが高いとひどい目に遭うんです。目は元に戻りましたか」

「ああ、大丈夫みたいだ。くそっ、頭皮が燃えてるみたいだ」

「そうですか？ 見せてください」 レオナルドが額のあたりに指を沿わせる。「そうですね、やけどの跡がありますね。マikel」

ぐるぐると回る部屋で、僕は立ち上がろうとする。「ひどい気分だ。これほど辛いつてどうして誰も言ってくれなかったんだ」

「いいですか。あなたが返事をしなかったからです。交信はロックアウトされて、T-四波は乱れ始めました」 レオナルドは機嫌を損ねた大きな飼い猫のようになった。「ウェッジへ行こうとしているように見えたので」

「ウェッジ？ なんの」

Dreamer 4

Highway

「ウェッジ、エクリプス、ライツ・アウト。停止すると火が付きますよ。体外の回路を活性化するってことです。そのためにシート波探知機があるんです。それを防止するためにね」

「ちゃんと英語をしゃべってくれよ、まったく」 めまいが止まるかと思っただけ目を閉じてみるが、無駄だった。

「いいですか。なにも難しい話じゃありません。右の側頭葉からt-4波と呼ばれるかすかですが重要な波動が出ています。もしt-4波が消えたら、あなたも消えるってことです。あの世に行くわけです。私のシフトのときにあなたをそんなところへ行かせるのは申し訳ないし、そんなさまざまな仕事はできません。もちろんお互いの将来にも傷が付きますしね。お分かりですか」

「脳卒中を起したかと思ったよ」

「まさか。それならとてもしゃべれませんよ。瞳孔を見せてください」

レオナルドは、汗をかいた丸々とした顔を僕の顔に近づけると、小さなペンライトで瞳を照らした。「ええ、大丈夫ですよ。少し毛細血管が切れているかもしれませんが、それだけです。おそらく電気ショックのミスフィーチャーでしょう。お望みなら医者呼びましようか」

「要らないよー」

「そうですか。昨日の残りのピザはどうです？ ANS(米国規格協会)規格のペパロニとマッシュルームのピザですよ」

「今にも吐きそうなんだけどー」

「コーラを飲むと、胃が落ち着きます」 レオナルドはデスクからコーラの缶を持ってきた。「ジョルト・コーラしかありませんが。すいません、氷もないんです」

Dreamer 4

Highway

「分かった、もらうよ」 僕は缶を受け取る。ゆっくりと吐き気がおさまっていく。「何ボルトで僕を連れ戻したんだ」
「分かりません。調べてみなきゃいけませんね。あのー」 レオナルドは僕をチラリと見ると、四角いガーゼを手渡した。「こ
れを使ってください」

「えっ」

「舌を噛んだようですね」

……★……

僕は濡れたタオルで顔を覆って、ズキズキと痛む、緊急停止が引き起こしたひどい頭痛をなんとか鎮めようとしていた。結局は無駄だったけど。さらに悪いことには、こめかみの赤いあざは、十セント硬貨ほどの水泡に変わっていた。ミラノ・チューリッヒ間の夜行列車でロシア人のカップルと飲み比べをした時と同じ気分だ。ジャガーマイスターだったか、スリポビッツだったか、そんな酒を浴びるほど飲んだ。目が覚めたときには、大きな釘が頭に突き刺さってるようだったっけ。

今もあの時と同じ感じた。だが違うことが二つある。ひとつは財布がまだ手元にあることと、二つ目は、嬉しくて仕方がないという点だ。

そう、僕は嬉しくて仕方がなかった。レオナルドのせいで、頭に余計な電子を送り込まれたし、強制的に現在に連れ戻されたけれど、それでも僕は嬉しかった。なぜなら――

Dreamer 4

Highway

初めて思い出すことができたから。

僕は目を閉じて、シーンの数々を思い出す。子どもの頃の机の下にいた数分間、そして大学時代に行き、過去に戻って兄のアールに会った。兄さんはカレン・バレットとの最悪のデートをお膳立てしようとしていたんだっけ？ そうだった。僕は兄さんに腹を立てたけど、でもカレンは可愛かった。背は高かったけど、可愛かった。

他には何処へ行った？ たぶん他には何もない。あとは空白だった。

僕はベッドからゆっくり起き上がると、アスピリンをもう三錠取りに行く。

ベッドに戻ると、濡れたタオルが枕を濡らし、丸く黒っぽいシミになっていた。僕は時計を見る。七時、まだ早い。

濡れた枕を乾いたものに取り替えて、ベッドに倒れこむ。僕は本当に過去を訪れることができるんだ！ 僕がいた場所に

戻り、会いたいと願う人たちに会える。家族や友達。そしてガールフレンドたち。

ブレンダ・レイシー。

頭痛はしたが、気にならなかった。痛みに耐える価値は十分にあった。

実際、仕事のために誰かを過去に送り込むこともできるかもしれない。ある時代を隅から隅までしっかりと観察して、それを細部までそっくり頂く。そのままクリップで留めればできあがりだ。中年の危機を、まあ言ってみれば、ビジネスチャンスに変えることもできるかもしれない。それは、ここに來るとき、共同経営者のジェリーに言ったせりふだった。だがこの分だと、本当に何かを生み出すことができよう。

Dreamer 4

Highway

ジェリーがクライアントに売り込む様子が目に浮かぶ。「一九五八年から何か使いたい？ 私たちにお任せください。プッシュボタン、軌道、原子、どんなものでもご提供します。すでに知っているものも、聞いたことすらないものも、あの時代には揃っていますよ」

「それとも、お好みは一九六二年でしたか？ 素晴らしい年です。非常に商業的で、非常に大きな発展を遂げた年です。ブレットランプや放物曲線。そう、持ち運びタイプの大きな四角いトランジスタラジオもありました。車や小型の家庭用品をお探しなら、びつたりの年です」

「ピックアップトラックを販売している？ それなら一九六六年がお勧めです。角ばったラインと金属のダッシュボード。どんなものにも、方位図とコルクがいいでしょう。なぜそんなことを知っているかって？ 今日の午前中、あの時代にいたからですよ」

いや、ダメだ、ダメだ、ダメだ。過去は精神的なアイコンが並ぶ単なる倉庫なんかじゃない。もっと大切に、深遠な場所なんだ。すべてを手に入れようとするより先に、まず過去をゆっくり旅してみなきゃ。あの場所の感触を掴むんだ。今では誰も覚えていない、ヒットはしなかったけど当時の最先端の音楽を聴いてみるのもいいな。

面白そうじゃないか。初めてラジオを目にした時の皆の反応を見に行ってもいい。十六歳の友達と一緒にドライブした時に戻ろう。みんなで曲についてあれこれ語り合ったっけ。僕はただ耳をすましていればいい。もしトラックが何かを売るコマースヤルでその曲を使えば、そうだな、少なくとも、忘れ去られかけた曲をもう一度聴くチャンスの人々に与えられる。

悪くないぞ。六〇年代に戻って、ただ友達とドライブをしてカーラジオを聴いていればいい。

最高じゃないか。

Dreamer 4

Highway

もちろん、音楽を求めて過去に遡るなら、車の中よりもいい場所がある。家のベッドで毛布をかぶっていたあの時に戻ろう。灯りのともった小さなテントのように、中には僕とラジオだけ。僕は注意深くダイヤルを回し、雑音の中に紛れた音楽を聴く。聞こえてくるのは宇宙からのシグナルだ。ネブラスカ州のカーニー、バトン・ルージュのラジオ局、フロリダのどこかから聞こえてくる野球のナイトゲーム。もう一度ダイヤルを回すと、さあ、聞こえてきたぞ。アーサー・アレキサンダーが歌う「ユ―・ベター・ムーブ・オン」だ。

そうすると、僕はもう東ミズーリの平原の我が家にはいない。暗く濁った音の流れに任せて、僕はシカゴに辿り着くだろう。もう一度ダイヤルを回すと、僕は別の「五万フット」の世界にいて、ここでは、ロイ・オービンソンの「ドリーム・ベイビー」やサム・クックの「ツイステイング・ナイト・アウェイ」が流れる。心地よい音楽、ややこしいことのないロマンス、光り輝く黄色のダイヤル。

新しくできた水泡を潰さないように気をつけて、僕はタオルを目からはずす。 完璧だ。

完璧だ、完璧だ、完璧だ。

電話が鳴った。

「ハイ、マイケル、ゲイルよ。ケラーとローウェルと下のバーにいて、一杯おごろうとあなたを待ってるんだけど」

「酒かい？ やめておくよ。もうすでに頭が割れるほど痛くてね」

「知ってるわ。だから誘ってるの。『緊急停止クラブ』の新規会員には、マルガリータがタダでふるまわれるの。有効期限はあと十五分」

「わかった。負けたよ。すぐに行く」

Dreamer 4

五 ノイズ

今は夜だが、夜だとは分からない。バーはどこもそうだが、このバーにも窓がないからだ。だが酒場というものはたいていそうだが、このバーも悪くなかった。スペインの異端審問を思わせるような赤いランプシェードに、何枚もの木製のパネルがはめ込まれた壁、作り物のレンガの床。まるで地下牢といった風情。メイン州バー・ハーバーからロード・アイランド州プロビデンスまでの道沿いにある酒場の半数はこんな感じだ。

コ罗纳ビールを四本空けて、化学をネタにしたジョークを十五ばかり披露したあと、ケラーは店じまいをして帰って行った。その場に残った三人、ローウェルとゲイルと僕は、ブラックコーヒーと脂っぽいナチヨスを囲みながら、かなり酔っ払って、自分たちがここに来たワケを話し合っている。アルコールとコーヒーを浴びるほど飲んだあと、僕はここに来た理由をようやく認めた。申込書に書いた「歴史的、文化的アイコンを探求するため…」などという体裁のいい作り事ではない、本当の理由を。

「ここに来た理由っていうのは…」 僕はできるかぎり悲痛な声を出して二人に語りかける。「イヤになった」

「イヤになった？」 ゲイルが繰り返す。ゲイルの目はひどく血走っている。

「ああ、イヤになった。いろんなゴタゴタがね」

「分かる」 ローウェルはフォークでテーブルを叩く。

「議論がイヤになった」

「そのとおりだ。兄弟」 ローウェルは、よくわかるといった面持ちでうなづく。

「クライアント、弁護士、妻、子どもたちと言いつ争うのに、もうあきあきしたんだ。休みをとって何処かへ出かけるとする。すると今度はチケットを取り忘れた旅行代理店と言いつ争う羽目になる」

「そして飛行機に乗ったらー」ゲイルが言う。「前の席のバカな客が、シートを私の膝まで倒してくるのよ」

「そのとおりだ。まったくやつらときたら」ローウェルが勢いよくうなずく。「飛行機内でスペースを取りたがるんだ。おれはコーラをかけてやるよ。じゃなかったらトイレに行くといつて百回席を立ったりね。ずうずうしいんだよ。なんでもやつてやつらの旅行を台無しにしてやるんだ」

普段は無口なローウェルが、今は腹を立てている。多分、僕がボタンを押してしまったのだろう。

「それでねー」ゲイルはかすれ声だ。「目的地にー、着いたと思つたらあー」ゲイルはテーブルを見回す。「スーツケースがないのよ。モンタナとか、どこかへ行つちやつてさあ」

「あるいは、ホテルの予約が取れてないとか」僕は首を横に振る。

「そのとおり」とローウェル。「僕はいつもそつという目に遭つてる」

「大人は、誰でもそつという目に遭うんだよ」僕は応える。「だから僕はここに来たんだ。少しのあいだでいいから、もう一度子どもに戻りたかつた。責任もなく、面倒な厄介事もないあの頃にね」

「そつだった？」ゲイルが言う。「それは男の子として育つたからよ。男の子は、子どもの頃友達とつるんで、まるで野犬の群れみたいに何でも好き放題にやれるもの」

「ちよつと待てよ、女の子もそつだろう」とローウェル。「僕の妹と友達を見てみるよ」

Static

「私が育ったころは事情が違うの。両親の目が厳しかった。手錠をかけられて家につながれてたも同然よ。高校時代、うちに遊びに来た男の子はみんなウソ発見器にかけられたの。『法律に触れたことはあるか』、『Cより悪い成績を取ったことはあるか』、『女の子のブラウスに手をすべりこませたことはあるか』ってね」

「でも、ゲイル」 ローウェルが、うそだろうと言わんばかりの表情でゲイルを見る。「君の親は、本当にウソ発見器を持ってたわけじゃないよね、そうだろう？ だって確かあれは違法なはずだ」

「あのね」 ゲイルは言う。「私の父は、眼鏡の奥から男の子をじっと観察して、まさに脳の中まで見通したの。あの視線はまるで光線銃みたいだった。おまけにさっきみたいな質問で、男の子を攻め立てたわ」 ゲイルは笑った。「そして男の子が少しでもたじろいだり、まばたきをしただけで、本当のことを言わないと父は判断したの。ものすごくひどい話だけど、でも何だかおかしかった。だって、ようやく私とのデートにこぎ付けたのは、病的な犯罪者タイプばかりよ、プレッシャーがあっても完璧な嘘をつくことができた。私は彼らを信じられなかったわ。だって私にも嘘をついてるのは明らかだったから。でも、いい若者だと父は信じて疑わなかった」

「じゃあ、どっして戻りたいんだい？」 僕は尋ねた。「過去に楽しいことがなかったなら——」

「それほど悪くなかったわ」 ゲイルは微笑んだ。「悪いことばかりじゃなかった。過去に戻るのには、私にとっても休暇みたいなものよ。実際に休暇の一部だし」

「ローウェル、君はどうなんだ」 僕は尋ねる。「ここにいる理由はなんだい？ 君は何かから逃避してるようには見えないけど」

Static

「実を言うとね」 ぼつが悪そうにローウェルは笑う。「本当は僕の大学院のアドバイザーが参加するはずだったけど、彼女がパリで会議に出ることになったんだ。大した選択だよな、過去を旅するか、ルーブル美術館へ行くかだ」

「じゃあ、その人の代わりに来たのね」とゲイル。

「大学はすでに費用を支払ったあとだった。僕は博士課程のために単位が必要だった。だから来ることになった」

「過去トリップに興味はあるの？」 ゲイルが訊く。

「ああ、面白いじゃないか。それにここにいる一部のドリーマーたちとは違って、僕はそれほど昔に遡る必要はないし」 ローウェルは顔を上げ、いたずらっぽく笑みを浮かべる。

「ありがとう、ローウェル」 ゲイルは言う。「その言葉、とっても嬉しいわ」

「もちろん僕も過去には戻りたいよ。十五歳のころに戻りたいと思うことが多いかな」 ローウェルは思い出に浸る。「す」

く幸せな時代だった。この前誘導チェアに座って、父がヨットでアストリアのロンビア川へ連れて行ってくれた時に戻ったよ。

そして鯨を見に行った。楽しかったな。ここを出たら、父に電話するつもりさ。ここであつたことを話して聞かせるよ」 ロー

ウェルはコーヒーを飲み干すと、テーブルを立つ。

「もう帰るの？」 ゲイルは訊く。

「少し眠るよ」 ローウェルは伸びをする。「今朝、朝食の前にセッションがあつたからね」

「朝食前？」 ゲイルが訊く。「レオナルドがあなたを向こうへ送ったの？」

「レオナルドが？」 ローウェルは笑う。「冗談じゃない。レオナルドはすぐに緊急停止スイッチを押しすぎる。僕はゼイ博士のほうがいいな。放っておいてくれるからね。ウワサだけど、僕たちがトリップしている間ラボにすらいらないらしいよ」

Dreamer 5

Static

「私はレオナルドで行くわ」 ゲイルは言う。「彼がいれば、トラブルに巻き込まれずにすむから」

「一体、どんなトラブルに巻き込まれるって言うんだい？」 ローウエルは肩をすくめる。「たかが自分の記憶じゃないか。じゃあ明日」

「あいつの態度は正しいよ」

「それはローウエルがまだ若いからよ」 ゲイルは言う。「私たちの歳になるまで待てば分かるわ。そのときにはローウエルも、私たちと同じようなことに文句を言うに決まってる。高速を走ってるバカや、何かに投資しろとしつこく勧誘してくる電話や、古い車に乗ってるのはアメリカで私だけだと思わせるような「コマーシャル」にね」

「敵しい」と言うなよ。もし「コマーシャル」がなかったら、素晴らしいテレビだって、見れないんだぜ」

「素晴らしい？ テレビが素晴らしいって言うの？」 ゲイルが笑う。

「そうだな、「コマーシャル」がなかったら、もっとひどいものになってるよ」 僕は冷めたブラックコーヒーを飲み干す。「本当わ」

「あなたは「コマーシャル」を制作してるから、そう言うのね。確かそうだったわよね」 ゲイルが言う。

「ああ、そんなところだ」 僕はうなずく。「広告主を相手にしたサービスエージェンシーを経営してる」

「じゃあ、その広告主に」ゲイルは身を乗り出す。「どんなサービスを提供してるの？」

僕は空のコーヒーカップを見つめる。「フォア・トップスが歌う『リーチ・アウト・アンド・アイル・ビー・ゼア』を聴いたことがあるか？」

「あるわ。私の時代の少し前だけど…」

Dreamer 5

Static

「テレビを見る？」

「必要に迫られた時だけ」彼女は笑う。「この質問、何かトリックがあるの？」

「ないよ。フォア・トップスが歌う『リーチ・アウト』を聞いて、何を思い出す？ 最初に頭に浮かぶのは何だい？」

「長距離電話」

「だろっ？ よし、じゃあ『ウドウント・ニット・ビー・ナイス』はどう？」

「それも、私の時代の少し前の曲よ」

「一番初めに何を思い浮かべるかな」僕は言う。

ゲイルは上を見上げて考える。「わかったわ。家を買うこと」

『アップ・アンド・アウェイ』は？」

「それなら簡単よ。写真を撮ること。緑色で紙製の小さな旅行用カメラでね。パノラマのように見える変わったレンズがついてるけど、実際はパノラマじゃないの」

「わかったかい？」僕は肩をすくめる。「そういうことをして僕は生計を立てているのさ。だって『ザ・フィフス・ディメンション』の『』の『』を覚えてる人なんていないし」

「でも、そういう曲は『マーシャルのために書かれた訳じゃないわよね』 ゲイルは無表情で言う。

「何をしているのかと聞いたのは君さ。だから答えるよ。僕は過去を掘り起して宝物を探してる。昔の曲を盗用して、それを使って車を売る男、ってわけだ」

「じゃあ泥棒ね。違っ？」

Dreamer 5

「パートナーと僕は五〇年代六〇年代、七〇年代という沼に引き網をかける。僕たちが探してるのは、ガラスの牛乳瓶、金属製のおもちゃ、オリジナルのバービー人形、流線型の電化製品、旧式のミシン…、そんなものさ。コマーシャルに出演した俳優が撮影現場で一日の終わりにこう言うんだ。『まるでタイムスリップをしたみたいだ』って」

「それ、効果あるの？」 ゲイルは疑わしそうに言う。

「ある。消費者グラフの大部分を占めるのは、六〇年代生まれなんだ。そういう消費者は過去に対してある種の愛着を抱くよ」

「つまりコマーシャル用にノスタルジアを提供するというわけね」 ゲイルはうなずく。

「それが仕事さ」 僕はイスの背に身を預ける。「人の記憶を、ピックアップトラックや不動産屋の記憶とすりかえる」

ゲイルは険しい顔つきで僕を見る。「商売のネタを仕入れるためにここに来たの？」

僕は首を横に振る。「それは家族や職場の皆に対する言い訳さ。さっき逃げ出してきたと言ったけど、あれが本音だ」

「それを聞いて安心したわ」 ゲイルはイスの背にもたれかかる。「一瞬、不安になった」

「僕は参加者の大多数と同じだよ」

「そうね」 ゲイルは少し間をおいてから口を開いた。「白状すると、私は科学や心理学的な側面にとっても興味があるの。

心に関することなら、いつもパイオニアでいたいと心から思ってる。これは人間の経験の、まったく新しい分野よ」

「そのセリフはパウンドストーンのスピーチの受け売りだな」

「当たり前。でも彼は正しいわ」 ゲイルは言う。「このプログラムに参加しているなんて、ワクワクする」

Static

「じゃあ、君がここに来たのは、純粋に科学的興味のためだったというのかい？」 少しとがめるように僕は尋ねる。「高校時代のボーイフレンドといちゃついたり、幸せな気分にかけてくれる楽しい思い出を求めてきたわけじゃないのか…」

「そりゃね、もちろん、長い間、同じ場所にとどまってしまうことにはあるわ…」 ゲイルはようやく笑う。「でもね、考えてみて。自分の記憶バンクの中を歩き回れるなんてことすべてが…なんて言えばいいのかな、革命的なことなのよ」

「君、酔ってるよ」 僕はあっさりと言う。

「もちろん、酔ってるわよ」とゲイル。「でも酔ってても、プログラムに対する私の気持ちは変わらないわ」

「なにか問題があったらどうするんだい」 僕は訊く。「僕らに知らせたくない秘密を彼らが隠してたとしたら？ だってさ、契約をする前に免責合意書にサインをさせられたし…」

「ありえないわ」 ゲイルは首を振る。「もし実際に問題が起る可能性があるとしたら、パウンドストーンはトリップを許可しないと思う。それにね、自分自身の記憶がしまっている場所で、ちょっと遊んでくるだけのことよ。向こうで帰り道を見失ったりすることもないしね」

「じゃあ、聞くけど」 僕は身を乗り出す。「コルトレーンに起こったことは、どうなんだ。あれは…、なんて言うんだっかな。エクリプスだっけ？」

「ああ、あれね」 ゲイルは肩をすくめる。「あれが起こったとき、コルトレーンはロングランをしていたのよ。それに、あれは本物のエクリプスじゃなかった。というのも脳波は完全にフラットになってはいなかった。脳波が完全なフラットになったら、それがエクリプスよ。その時には、もう戻って来られない」

Dreamer 5

「じゃあ、君は安全だって言うんだね」僕はゲイルをさぐるように見つめる。「つまりね、ひどい目に遭うために、一万四千ドルも払うつもりはないんだ。いくら心踊るような体験でも、そんなことは問題じゃない」

「おかしなことに手を出さなければ、心配ないと思う」ゲイルは言う。「厄介なのは、私たち自身の脆い自尊心だけよ」

「最近とくに、僕の自尊心は脆くなってるね」空のコーヒーカーップをみつめる。

「あなたはすごく安定した人に見えるわよ」ゲイルは言う。「過去へ向かって伸びていく自分の人生の流れを見下ろすのは、かなり勇気がいる。一生を一瞬のうちに垣間見るなんて気が遠くなるわ。そしてその流れへ下りたら……」ゲイルは、ふさわしい言葉を捜しているかのように、「一瞬ためらう。」あらゆる映像や感情、人々が、そこに現れるの。そこから目をそらすことはできない。人は死ぬ時に一生の映像を見るところけど、そんな感じよ」

「そっだろ？」僕は勝ち誇ったように言う。「まるで死ぬのと同じじゃないか」

「大したことじゃないわ」ゲイルは肩をすくめる。「それに、そんなこと誰が気にするの？それが誘導チェアの上であっても、人生の最後の瞬間であっても、どっちにしる頭の中にあるちっぽけな映像の中で起こることなのよ。場面をロックするときは、映写機を停止させてるの。同じことが死ぬ時に起きるからといって、驚くほどのことじゃない。誘導チェアの上で死を迎えるわけじゃないわ。結局、自分の人生の最後の超大作を見るわけじゃなくて、予告編を見るだけなのよ」

「誰の言葉だい？」

「自分で思いついた」ゲイルは言う。「そっさいことを考えているのは、あなただけじゃないわ。ドリーマーは誰もが自分の理論を持つてるの。オットーは、向こうで見るものすべては脳が生み出すと考える。ケラーは、ある種の記憶波を追いか

Static

ける意識と過去を脳がサンプリングしてるのだと考えてるわ。ローウェルは何も言わないけど、きっと同じように自分の理論を持っているはず。みんな、過去に戻ったとき自分が見たものを理解しようとしてる」

「そして君は、脳にあるちっぽけな映像機だと考えてる。じゃあ、長時間ロックしたら、どうなるんだい？ フィルムに火でもつくのか？」

「そのとおり。耳から煙が出てくるわよ」ゲイルはナチヨスにかぶりつく。「私には分かるの。だって私、看護婦だから」

1時間後、ゲイルと一緒によろめきながらドアを出て、エレベータに向かう。エレベータのドアが開いたとき、バーのジュークボックスから(本格的なジュークボックスだ)、「フル・ストップ・ザ・レイン」が流れてきた。一瞬、曲に合わせて二人で踊ろうかという思いが頭をよぎるが、思い直す。

自分たちの階へ戻るエレベータのなかで、ゲイルが僕の方を向き直って聞く。「奥さんは、このことをどう思ってるの」

「僕が中年の危機の真っ只中において、現実には直面することを避けてると思ってる。研究所については、特に何の意見も持ち合わせてないんじゃないかな」

「本当に？ 私の夫は、私がここにいるのがイヤで仕方がないのよ。家に帰ってほしいと思ってるわ。食事作りやゴミ出しに飽き飽きしたのよ、きっと」

初めて僕はゲイルの左手を見た。確かに、小さなダイヤが一行にはめ込まれた指輪が輝いている。

エレベータが僕たちを階上へと運ぶ間、僕はガラス越しに、サン・アントニオの灯りが下方へ消えて行くのを見つめる。複雑に入り組んだ街路と大通りが、網状のほんやりとした銀色と金色の光のなかでキラキラと瞬いている。地平線のあたりにあ

Dreamer 5

Static

る三日月は、輪郭がぼんやりとして、よく見えなかった。遠くには、オレンジ色の町の灯が垂れ込めた雲を明るく照らしている。また風が近づいているのか？

エレベーターが僕たちの階に到着し、僕はゲイルを部屋まで送って行く。ゲイルはドアに取り付けてあるセキュリティプレートに手のひらを押し付け、中へ入る。「体内のアルコール分が過剰だと、ドアは開かないのよ。先週、ケラーは締め出されてホールで寝るはめになったんですって。作り物の観葉植物の隣で、床の上に丸くなって寝ているのをメイドが見つけたらしいわ。水、持ってきてましようか？」

「ああ」 僕が待っていると、ゲイルは靴を脱ぎ飛ばして、キッチンに入って行く。「エントロピー」を絵に描いたような部屋だった。脱ぎ散らかした服、ノートが散乱したデスク、赤いマニキュアの瓶は、蓋が開けられたまま、窓枠に置いてある。

「どうぞ」 ゲイルがグラスを僕に手渡す。「この水、グアタルペ川かどこから採ってきたことになってるけど、たぶん水道水よ」

「ありがとう。じゃあ部屋へ戻るよ」

Dreamer 5

ゲイルの部屋のドアを閉め、自分の部屋まで廊下を歩いて行く。廊下は大学の学生寮のような匂いがする。制汗剤、ニス、ホルムアルデヒドが混ざった匂い。おそらく管理人が空調のスイッチを切ったのだろう。

手のひらをセキュリティプレートに載せると、カチリという音がする。僕はドアを押し開けて、真っ暗な部屋に足を踏み入れる。窓の向こうに、今は黒い薄雲にところど隠れて霞んだ三日月が見える。雨が降りそうだ。

Static

服を脱ぐと、明かりを消してベッドに倒れこんだ。少しすると壁のスピーカーから静かな音楽が聞こえてくる。今夜はクラシックの代わりに、ブルースとソフトラジャズだ。ウエス・モンゴメリーの「ロード・ソング」、そしてB・B・キングのナンバー。この曲ならリンダも気に入るだろう。彼女はブルースが大好きなんだ。

僕は電話機を見つめる。電話、家と僕とをつなげるもの。

何度か番号を間違えて、ようやく正しい番号を押す。四回目の呼び出し音のあと、受話器は取られ、リンダの声が聞こえてくる。

「もしもし、こちらはミッチェルです。今、誰も家におりませんので、お名前を…」

僕は受話器を置き、腕時計を見る。レキシントンでは真夜中の一時だ。一体リンダはどこにいる。メキシコにいるのか？

待てよ。リンダはメキシコにいるんだった。ほかの弁護士と一緒に。

いや、メキシコには行かなかったかも。計画を変えたかもしれない。レキシントンに残ると決めたかもしれないじゃないか。

もう一度、かけ直す。

「もしもし、こちらはミッチェルです、今、誰も…」

受話器を置く。暗闇のなか、流れてくる七〇年代の古いヒットナンバーに耳を傾ける。「ザ・スリル・イズ・ゴーン」

窓の外に目をやると、また閃光が見えた。嵐が近づいている。僕はカーテンを閉め思考の中枢に流れ込んでくる音のさざ

波に耳をすます。ザ・スリル・イズ・ゴーン。

スリルは終わったんだ。

Dreamer 5

Static

夢はゆっくりとやってきた。秋の枯葉の焚き火からくすんだ煙が漂うように、視界の端からゆらゆらと現れる。

「『プロセスがどのように機能しているのか、私たちもすべて把握しているわけではありません。この機能が脳の内部で働いている』とは明らかですが――」

太陽が差し込み、木々のあいだに灰色の傾いた影を作り出す。裏庭では、赤いチェックのシャツを着たアールが白いシボレ―をいじりまわしている。いつも緑の野球帽がぶついている父は、集め損ねた芝をかき集め、くすぶる焚き火のそばに小さな山を作っている。羽目板づくりの僕の家では、母が夕食の片づけをしている。

色が鮮やかで、まるで現実としか思えないことに僕は驚く。研究所での時間が僕の五感を鋭くしたのか。あるいは映画がもう一度、再上映されているだけなのか。何でもかまわない。僕は映像のなかに入りこみ、現在から流れ出て行く流れについて行く。全く別の場所へとつながる流れだ。

「もしかしたら、単純な定在波パターンの結果、生じるものかもしれません」

僕は顔を上げ、まるで明かりが消えたような、真っ暗な空を見つめる。今は早朝、そう、夜明け前だ。一面霜に覆われた風景の上に、満月が浮かんでいる。地平線から二十キロほど離れたところには、神秘的な形をしたビルが明るく赤い光を放っている。

僕の手は寒さで感覚がなくなっている。ラジオのスイッチを入れて、三年前の曲を聴く、「ウォーク・ドント・ラン」だ。誰もいない歩道を、五人の少年が西を目指して歩いて行く。春へと向かう八十キロのハイキングだ。

僕はエンジンの唸る音を聞く。アールだ。四八年製のシボレーでゆっくりと近づき、車の窓からランチの入った袋をいくつも差し出した。「ママが持っていけつてさ。腹が減るんじゃないかって心配してた」

Dreamer 5

そういつて、アールは走り去った。

「お前の兄ちゃん、ホントかっこいいよな」 友達の一人がランチの袋をさぐりながら言う。

「そうさ」 僕は笑う。「最高の兄さんだよ」僕はトランジスタラジオのボリュームを上げ、凍ったハイウェイに響き渡るギターの音を聞く。

「過去への旅の中には、トラウマになり得るものもあります。当然のことながらそういつ可能性も…」

そのシーンは消え去り、そして暗闇の中で僕はつややかでやさしい声を聞く。

「スーツがとても似合いつわ。きちんとしたあなたの性格にぴったりだと思いつの」

そう、夢の中ではあるが、ようやくブレンダ・レイシーの登場だ。ブレンダは僕の正面に立っている。ストラップのない黄色いシフォンのドレスを着て、ブロンズの髪を高く結び上げている。「さあ、コサージュを着けてあげる、」 ブレンダは僕の下の襟のボタン穴にカーネーションを滑り込ませる。

少したどたどしい「ムーンリバー」をバンドが演奏し始めると、滑り止めの粉が撒かれた体育館の床へと皆が列になって進んで行く。体育館全体が薄いクレージュ布地とキラキラとした光で飾り付けられているようだ。ボール紙でできた少なくとも三つのウィッシング・ウェルと四つのガゼボ（見晴台）が設けられている。両方とも星、月、彗星、土星といった、おなじみの空のマークで飾られている。レンガの壁には、誰かがマジックで街の輪郭を描いた白い厚紙が貼られている。

僕がブレンダと踊っていると、バンドが視界に入ってきた。黒いスーツとエナメル靴を身に着けた6人編成のバンドだ。バンドの両脇には色が変わるクリスマスツリーのライトが見える。ギタリストがソロを弾き始めた時、ライトは赤と緑に変わり、それから黄色とオレンジに、続いて青と緑に変わった。ギタリストは音をはずすと、キーボードを弾いている小柄な女性の方

Static

を顔をしかめて振り返る。曲は突然途切れ、みんなは木製のダンスフロアの上で凍りついたようにダンスを止める。そして突然音楽は再開し、何事もなかったかのように、みんなはまたダンスを続ける。

ブレンダが体を近づけてくる。「今日は朝四時まで、帰らなくていいの」

「四時？ 車は二時半までしか使えないんだ」

ブレンダは僕を見上げて、大きく目を見開く。「たった二時半まで？」

シーンが揺らめき、完全に見えなくなった。まるで見えない手がチャンネルを変えたように暗闇が変わる。

「どうする？ WとK、どっちがいい？ シカゴのWLSも入るし、リトルロックのKAYも聞こえるよ」 つややかには程

遠い別の声がする。早口のさばさばとした声が聞こえてくる。まるでマシンガンから発射されるスカッターのようだ。

その女の子は、目にかかった黒髪をかき上げるとカーラジオのダイヤルを回す。「それともオクラホマ・シティのKOMAに

しようか。先週あそこに空飛ぶ円盤が来たのを知ってた？ だれかの車の上に着陸したんですって。ママが聞いてきた話なの。

ママは電話交換手だからいろんなニュースを聞いてくるのよ。ほら、これがKOMA」

ノイズしか聞こえない。

僕はハンドルを切りハイウェイに乗る。なぜか僕のフロムの夜は消えてしまった。おそらく成層圏のあたりでUFOと一緒に

浮かんでいるのだろう。

もう一度、ダイヤルを回す。

「パパが去年したことを話したっけ？ 風の骨とロウソク、ドライクリーニングのビニール袋で小さな熱気球を作ったの。そ

れが結構うまく行ったのよ。気球は街を抜けたところで袋に火が移って破裂しちゃったけどね。ダブの酒場にいた酔っ払いは、

Dreamer 5

Static

UFOの攻撃だと勘違いしてた。ある男の人なんか、トイレに逃げ込んで出てこようとしなくて私、大笑いしておしっこをもらしちゃった。だからパンツをはき替えに家に帰ったの」

なぜか僕は記憶の屋根裏部屋に入り込んでしまったらしい。辛いデートの思い出だ。ブレンダはどこだ？ プロムの夜はどこへ行ってしまったんだ？

「選択のメカニズムは依然として説明が困難で・・・」

「ここにいなきゃ行けないから、ここにいる、それだけよ」 ブレンダの声だ。バンドが演奏する大音量の「ルイ・ルイ」にかき消されて、よく聞き取れない。「大学全体のパーティーなの」

僕は受話器を耳に押し付ける。「誰かと一緒なのか？」

「マイケル、聞こえないわ。」「さっさと帰るさかいのよ」

「僕が出した手紙、受け取ったかい？」

「ええ、でもまだ読んでないの。すっごく忙しいのよ。水彩の—」

「何だって？」

「水彩画のクラスを取ったの。すぐに戻るわ。ねえ、誰か電話を使いたいらしいから、もう切るわよ。手紙ちょうだい。バイ」

僕は受話器を置く。するとその時、窓に車のライトが映る。仕事場まで乗せて行ってくれる車だ。「あと一ヶ月すれば、ブレンダは帰ってくる」

「私たちは、人間の経験におけるある次元を探求しているのです—」

Dreamer 5

Static

ガラスに吹きつける砂嵐のように、ベッドルームの窓に雨が打ちつけてくる。木の枝が家に触れるかすかな音が聞こえる。そして、暗闇のなかで次に聞こえてくるのは、ゆっくりとした穏やかなささやき声だ。「私はこう思うの。天国から魂が降りてきて赤ん坊となって生を受けるときには、誰もが心の奥底で知っている。一枚の葉が池に落ちて、さざなみが広がるように。言っていること分かる。」

「ああ、分かるよ」

「存在していることを、私たちは知りませんでした。ですがもちろん、それは常にそこにあつたのです」

僕は立ち上がり褐色の薄暗がりを目をこらす。サン・アントニオに戻っているのか？ 目覚めているのか？ そして、わずかにだけ開いたドアが見える。その向こうには廊下があり、バスルームの明かりがつけっぱなしになっている。僕の左側には、肩の高さのところに窓があり、にじんだ街の灯りを映していた。静かな雨の音に混じって、屋根を伝って雨どいを流れ、ポタン、ポタンと落ちる雨粒の音が周期的に聞こえてくる。

今は何時なんだ？ 時計がない。

このあたりに時計があつたはずだ。

絶対にそのはずだ。

そのときドアが開き、V字型の光が床に広がりベッドまで届く。

「リンダ、君かい？」

「マイケル？」

Dreamer 5

Static

目を開けると、そのシーンは消えてあたりには暗闇が広がっていた。部屋の反対側には、とどころぼやけた窓ガラスに、稲妻が映ってまるでカンテラのように見える。建物に強く打ちつける雨の音が聞こえてくる。

ベッド脇の時計に5:51という数字が見えた。僕は寝ほけまなこを「すって、5:52に変わっていく数字を見つめる。そして5:53になった。

そろそろ六時。ボストンでは七時だ。リンダが起きているころだろう。電話してみようか？

イエス。

電話番号を押して待つ。外の雷雨のせいでノイズが聞こえてくる。二回目の呼び出し音の後、誰かが受話器を取った。

「私が出るわ。もしもし」

「リンダ、マイケルだ」

「マイケル。一体どうしたの？ どこにいるの？」

「サン・アントニオだ。どうやら君の夢を見てみたいだね」

「それって悪夢じゃなかったのかしら」

「違うよ、ただの夢さ。それで君に電話したかったんだ。昨日も君はつかまらなかったし、昨晩は誰も電話にでなかった。君は——」

「ねえ、今、話してる時間がないのよ。タクシーが待っていて——」

「タクシーだって？ 車はどうしたんだ」

Dreamer 5

Static

「ケイジーに聞かなかった？ メキシコシティにオフィスを構えるから、最近はずっと目が回るほど忙しいのよ。今日も新しいパートナーに会いにヴァンと一緒に向こうへ飛ぶんだけど、私ったら、スペイン語が一言も話せないの」

「今日も？ 何度も行っているのか」

「この二週間くらいずっとそんな感じ。本当に忙しかったし、あなたの邪魔をしたくなかったのよ」

「ヴァンも行くのか？」

「当然でしょ。ヴァンは国際貿易が専門で、おまけにスペイン語がペラペラなんだから。今夜には戻れると思うけど、向こうに泊まることになったら、デビーとポールにホテルの番号を伝えておくわ。ねえ、タクシーが待ってるの。行かなきゃ。バイ」

僕は切れた電話をじっと見つめている。胃のあたりが何だかムカムカする。僕はこれが嫌いなんだ。本当に、嫌な気分だ。

午前九時四十五分。雨は小降りになって、サン・アントニオの街は低く垂れ込めた厚い雲に覆われている。ボストンでも雨が降っているのだろうか、僕は考える。

「ヘンダーソン・コハン・ミッチェル・ランバート法律事務所です」

「もしもし、マイケル・ミッチェルだ。妻の秘書と話がしたいんだけど」

「私ですが」

「ケイジー、マイケルだ。リンダが泊まっているホテルの電話番号を知らないかな」

「メキシコのホテルのことですか？ そうですね…、ヴァンの秘書なら知っているかもしれませんが。ちょっとお待ちください」

「電話が切り替わり、イージーリスニング風にアレンジした「マラケシュ・エクスプレス」が流れる。永遠に続くかに思える

Dreamer 5

Static

空白のあと、ケイジーがもう一度受話器を取る。「マイケル、申し訳ないんですが、ドナも知らないそうです。ホテルを予約してるのかも、はっきりしません。たぶんメキシコのパートナーがホテルを手配しているのじゃないかしら」

「じゃあ、パートナーの電話番号を教えてください」

「メキシコ・シティのですか？ ええと、確かこの辺にあつたと思いますけど…。カンクーンにもオフィスがあるんですよ。あのへんの島のひとつにオフィスがあるんです。うーん、見当たりませんね。リンダはいつもポケベルを持ち歩かないし。それに今晚だけですから…」

「二人がどこに泊まるのか本当に知らないだね」

「サン・アントニオのあなたの連絡先を控えていますから、ホテルの電話番号が分かったら折り返し電話します」

「頼むよ。ありがとう」

僕は電話を切る。東海岸はこれ以上手の打ちようがない。ポールに電話しよう。今ロサンゼルスは午前八時だ。まだ学校へ出かけていないだろう。

僕は番号を回す。

「ハロ〜」 眠そうな女の子の音がする。彼女は何という名前だっただろう。ルイス？ それともルーシーだったか。

「もしもし、ポールはいるかな」

「どちらさまですかあ？」

「ポールの父親だ。サン・アントニオから電話してる」

「これって…緊急の用事ですか？」

Static

「そうだ。長距離電話だとポールに伝えてくれ。武器所持で捕まってメキシコの刑務所にいるんだ」
「あら」

何の音も聞こえない。電話が切れたのか？

「もしもし？」

「あの、あとからかけ直してもいいですか。今、ポールは、えーと、ちょっと取り込んでて…」

「やあ、パパ。驚いたなあ！ 元気？ リサのことどう思う？ いい子だろ？」

「誰だって？」

「リサだよ。たった今、しゃべってたじゃないか」

「いい子だ。ママから何か連絡があったかな」

「ああ、今朝メキシコへ行ったんだろ」

「メキシコの何処だか分かるかい」

「何処かな。どっかで会議かなんか、あるんだよ、よく知らないけど。聞き流してたからね。会社の偉い人が集まるんだろ。ママが裁判に勝ったから、それのお祝いなんだ。きっと大儲けしたんだと思うな」

「訴訟に勝ったのか？」

「と思うよ。違ったかな。そうだ、テキサスで『バベットの晩餐会』のビデオを売ってないかな。ダラスとかなら、売ってそうだろう？ パパ、ダラスから遠くないところにいるんだよね？」

「ママから電話があったんだな？」

Dreamer 5

「ああ、もちろん。先週、電話してきたよ。そうだ、僕の脚本の話をしたっけ？ 僕のエージェントがいい出来だけど少し書き直しが必要だったってー」

「ママからホテルの電話番号を聞いたかい」

「ああ、でも別の所に泊まると思うよ。メキシコのもの、だろ？ それにしてもすごいよ。ママは本当によく働くよね。だから、パパもママをゆっくりさせてやりなよ。つまり、ママから聞いているよー、パパ？ 聞いているの？」

「聞いている」

「ママから連絡があったら、パパに電話するように言うっておくよ。それでいい？」

「ああ、電話がほしいと伝えてくれ」

「わかった。一番最初にママにそう言うよ。じゃあね」
最高だ。

六 ジュークボックス

午前十時。

部屋の一番後ろの席に座っているが、大して遠くはない。薄暗い照明の中、講演台に立った小柄な男が、右頭溝とかいうものについて話している。「肉眼解剖学」の世界へようこそ。これも契約の一部だ。

講義に熱心に聞き入る神経学者の一群と退屈しきったドリーマーのなかに、知った顔が見える。向かいの壁の近くにゲイルがいて、黒板に目をこらしている。二列向こうにはケラーが首を胸のあたりまで沈めてぐっすり居眠り中だ。四席向こうには腕組みをしたコルトレーンが座っている。顔を上げているが、目は閉じられてる。

プルダウン式のスクリーンには、図解された人間の脳が映し出されている。心理学の授業で習ったので、僕にも脳の重要なパートくらいは見分けがつく。大脳皮質、小脳、視床だ。だが今でも、どれもスポンジにしか見えない。あるいはオウムガイといったところか。歴史を職業にして本当に正解だった。もし外科医になってたら、大変なことになっていただろう。

「では、このチューブ状のものの横にある、小さな、なんとかいうものにクランプを刺してみましよう」

前方にいる講師はネクタイを直すと、長い木製のスティックで脳の図を軽く叩く。「右頭溝部は明らかに催眠作用を引き起こす箇所であり、そしておそらくこのために、かの有名な臨死体験と深く関連づけられてきたのでしよう」

何の話をしているのか、僕にはさっぱり分からない。しかし今の話を聞いていた神経学者の中から笑い声がもれる。僕の隣には、ツイードのコートを着こんだどこにでもいそうな禿げた男が座っていて、わけ知り顔で笑みを見せながら手元のクリップボードに何か書き込んでいる。

Juke Box

今朝、妻と話して気がふさいでいたが、それが本格的な憂鬱になって僕の心に重くのしかかっていた。まず妻はメキシコへ駆け落ちし、おまけに実の息子は真実を隠してしらを切る。そんなことがあった後だというのに、「魂」という言葉を辞書から抹殺しようとしている脳科学者であふれた部屋に、僕は強制的に座らされてる。

講師の頭は禿げていて、耳の少し上のあたりに頭を縁取るように赤毛が生えていることに僕は気づく。まるで大規模な核爆発のときに出現する光の輪のようだ。水素爆弾ヘア。共同経営者のジェリーがここにいないのが残念だよ。あいつならならこの髪型を次の流行りに仕立てあげるだろう。このすてきな放射状の輪にきらきらした光沢をつけて目立たせようと言うだろう。

そして今、講師は脳の各部位の活動レベルについて話している。隣の席に座っているツイードの男は頷きながら一度手早くペンを走らせる。隣の男はまるつきり禿げているわけではないと今になって僕は気づく。いわゆる「最後に残った五本の髪の毛を頭に撫で付けているようなハゲ頭」とは違う。実際の話、男の頭には一面に髪が生えていた。ただ、その髪は頭皮すれすれの長さに刈り込まれている。これほど短い髪を最後に見たのは、ジャズ・ミュージシャンを見たとき以来だな。

いや違うぞ。昨日、少しのあいだ小学校時代を旅したときに見たじゃないか。

部屋の照明が点滅し、スクリーンにスライドが現れる。また脳の図だが、今度は色付きた。真ん中に小さな赤い渦巻き模様が見える。

「短期記憶は、海馬と呼ばれるこの部分で処理されます」

海馬だって？ どちらかと言えば、馬というより耳じゃないか。でなきゃクエスチョンマークに見える。脳の真ん中にあるクエスチョンマークか。

Dreamer 6

Juke Box

なるほどね。

「さて、右側頭部の小脳扁桃ですが…、感情をつかさどります。ノレピネフリン受容体と関連があり、ある種の激しい感情をとともなう出来事が容易に記憶されるのは、この小脳扁桃のためです。催眠を行っても、ここには手をつけることができません。意識領域のはるか奥底で機能しているからです」

レオナルドは小脳扁桃をなんと呼んでいたっけ、と僕は思う。「ベア・メタル^{地金}」だったか？

おそらくある種のコプロセサーなのだろう。つまるところ、僕が昨日見たものは、光の河などではなく、オーバーヒートした電子によって活性化された内部回路かなにかだったのかもしれない。

僕は耳をかく。この数センチ先には、頭の中のファイル収納棚が納められているのだろう。

「もちろん、催眠によってたいいの情報を回収することが可能です。ですが脳は、特にこの海馬はほとんどの働きを司ります」講師はひと息つくくと、頭の上の輪を搔く。「催眠はソフトウェアだと考えてください。そして脳はハードウェアであり、パウンドストーン博士たちが使用しているマシンはコミュニケーションのための周辺機器と言えます」

非常にわかりやすい。僕はあくびをかみ殺す。

頭に輪を乗せた講師はネクタイを直す。明るい黄緑色をした数字模様のネクタイは、ベルトの下まで垂れ下がっている。そして講師は、長い指を頭上の輪へと戻す。

僕は時計に目をやる。あと数時間後には、また誘導チェアに座って、過去へ旅をすることになっているのだ。今度はどこへ行くのだろう。家族全員で庭に腰を下ろして、打ち上げられたばかりのエコー衛星を眺めた時かもしれない。それとも、さらに昔へさかのぼり、ガスストーブの前で漫画を読んだ、寒く明るい日曜日へと戻るのだろうか。

Dreamer 6

Juke Box

今度は少し仕事も片付けるとしよう。当時の流行や売られていた商品、ドライブインシアターで上映されている映画をチエックしようか。何杯ものめるくなったコーラを飲み、何袋ものしけたポップコーンを食べ、フロントガラスに当たる何万ものコフキコガネ虫を見た日々へ。その後、ラジオをつけてビーチボーイズかビートルズの最新ナンバーを聴くのもいい。そうやって、頭のクエスチョンマークのすぐ上にある屋根裏部屋を引っ掻き回すんだ。

…★…

午後一時。

「やあ、マイケル。入ってください」 レオナルドは解除ボタンを押し、僕はラボへ続く厚いガラス製のドアを開ける。誰も座っていない皮製のチェアに向かって最短距離を直進するのではなく、僕は右へ曲がり、迷路のように立ち並んだコンピュータ端末やパネル、テープドライブのほうへ向かう。

「聞きたいことがあって、少し早く来たんだ。実は―」

「もう少しオタクモードに入って作業しなきゃいけないんですが、すぐに話を伺います。どうぞゆっくりしてください」 レオナルドは壁に沿って並べられた木製のイスを指差す。どのイスにも書類が山積みになっている。僕は書類の山の一つ―イニシャルがC・Rという誰かの脳波記録―を、そっとイスからどけて腰を下ろす。

「昨夜はちょっとした嵐でした。雷が二階のメイン・トランスフォーマーを直撃したんです」 レオナルドは眼鏡を押し上げる。「システムの影響が他にも出ました。そのゴタゴタで、ビッグ・アイロンのサイクルがイカれました。システムに、かなり厄介な問題が生じているかもしれません」

Dreamer 6

「そつだろうね」 僕は隣の書類の山に目をやる。書類には数字がびっしりと並んでいる。何を意味するのか、さっぱり見当もつかない。「ジュークボックスもやられたのかい？」

「いいえ、あれはいわば防弾チョッキで守られているようなものです。専用のポートを持っていますから。このマシンを何とかしなきゃいけないんで、もう少し待ってください」 レオナルドはカバーを開けて、機械の心臓部を覗きこむ。「こりゃひどい。回路が焼けてます。スロートモテムとおさらばだ」

「何だつて？」

「雷がコミュニケーションボックスを直撃したようです。ということは、シーター・バスもやられているでしょう」 レオナルドの声にあきらめが響く。

「何か代わりのものをあてがわないかぎり、ドリーマーが犠牲になるぞ」

彼は言葉を止めると、自分のあごを軽く叩く。「いや、そんなこともない。ワークステーションが使えるかもしれない」

「レオナルドー」

レオナルドは顔を上げる。「すみません、つい夢中になってしまつて。聞きたいことつて何でしたっけ？」

「ジュークボックスが、どんなふうに通くのか見たいんだ」

「ああそう。いいですよ。ええ、別に構いません。すぐに見せましょう」 レオナルドはコードとコンピュータの迷路を縫って、大きなモニターが備えられたキーボードの前に座る。「オーケー、何を見せましょう？」

「そつだな、たとえば、僕がある曲を聴いていると言つて」

Juke Box

「曲ね。了解」レオナルドは耳を掻くと、眼鏡の位置を直す。「ジュークボックスは音楽に関する最高のデータベースと連動しています。何もかも分かるわけじゃありませんが、かなり細かいところまで調べられます」キーボードに何か打ち込むと、モニター上にリストが現れた。「これがデータベースです」

レオナルドはさらに何か打ち込む。

「ロバート・ミッチャム基準を使っています」とレオナルド。「サンダーロード」というフレーズ含むデータベースは、おそらくどこにもあるでしょう。これはシアトル一帯の地域別データです。フリートウッズ、キングスメン、ポール・リビアとレイダース、ベンチャーズ、ウェイラーズ。お次は中西部のリストです」

僕はモニターを覗き込む。レオナルドが入力した文字は、*loc. MDW2*と読める。モニターには複数のウィンドウが現れて、それぞれに別のリストが表示された。レオナルドはウィンドウを少し拡大して、内容に目を走らせる。

「ええと」レオナルドがつぶやく。「チエスマン・スクエア、ボブ・クーバン、ザ・レッド・ブレイザーズ…、フライヤー・タックとメリーメン？ サタデイズ・チルドレン？へ演奏テープのみだね。驚いたな。今までありとあらゆる場所で演奏した、ありとあらゆる無名バンドまで網羅してる」

「じゃあもしも、僕があるラジオ局から流れる曲を聴いたとしたら…」

「その場合は、居場所を見つけ出すのは朝飯前ですよ」レオナルドは肩をすくめる。「そのラジオ局を呼び出してプレイリストを入手し、曲を照合すればいい」

「何のことを言ってるのか、さっぱり分からない」

Dreamer 6

Juke Box

「いいですか」レオナルドは僕の方を向き直る。「非常に単純な話ですよ。主要なラジオ局はすべて、録音済みのプレイリストを使っています。ビルボードのトップ百を調べて、上位四十曲くらいをテープに録音していただきます。たった四十曲ですよ。というのも、三十センチ・リールで録音できるのは、そのくらいですからね。まあなにせよ、全国の主要なラジオ局で放送された曲を網羅してるデータベースがあるのです。例を見せましょう」

レオナルドはモニターを指差す。

「ファイルから、あなたの出身地は中央ミズーリの北部だと分かります。オーケー。六〇年代、ミズーリの昼間のラジオ放送は、二つのラジオ局がほぼ独占していました。カンザス・シティのWHBとセント・ルイスのKXOKです。たとえば、これがWHBのプレイリストです」レオナルドはキーボードに打ち込む。「一九六六年十一月十一日」

モニターにリストが現れた。

「ね？ アウトサイダーズの『リスペクタブル』そして『チェリッシュ』…、『デビル・ウィズ・ザ・ブルー・ドレス』、『ナインティンツクス・ティアーズ』、『ア・サイド・オブ・タウン』、そして『グッド・ヴァイブレーション』。次にニュースをはさんで、また最初から繰り返しです」レオナルドやれやれ、といった表情をする。「この曲が、聴取域に住む十代の若者全員の大脳皮質にすり込まれるまで、何度も何度も繰り返しします。そうやってヒット曲が作られたんですよ」

「でもさ、あのころ流れていた曲の中には、まったく売れなかったものもあるよ」

「もちろんそうです。でもそんなことは重要じゃない。十代の脳は名曲だけじゃなく、ひどい曲も、お話にならないバカげた曲も記憶しますから」レオナルドはにやりとする。「バカげた曲には、ちょっと数字を誇張するんです」

「だろっね」

Dreamer 6

Juke Box

「なににせよ、ラジオ局と聞こえた曲を二曲教えてくれれば、あなたがいるおおよその場所、正確な時期、大体の時刻、次に何の曲がかかるのか言い当ててみますよ。すべてプレイリストに載っていますから。ラジオ局のプレイリストは、たいがい一週間は同じものが使われていました」

「そういうわけだったのか」

「そういうわけです」レオナルドは頷く。「たとえば過去に行ったら、目隠しをされてガールフレンドのビュイックのトラックに押し込まれて鍵をかけられているとしましょう。そこが何年なのか、何月なのか、どこにいるのかも不明。何も分からないう。聞こえるのはフジオの音だけです。でも聞こえる最後の一連の曲が『アーム・ユア・パペット』、『サイコティック・リアクション』、『レイン・オン・ザ・ルーフ』だと分かれば、それで十分。データと照合して、一九六六年十一月二十六日、セント・ルイスのKXOK局だと割り出します。それに…この局はたった一万ワットで放送していたので、場所はミズーリ州かイリノイ州で、時刻は明け方から日暮れまでだと特定できます。DJの名前を教えてください、二時間まで絞り込みます。ビックリするほど簡単ですよ」

僕は頷く。「大したもんだ」

「そうだ。パウンドストーンには黙っててくれるなら、プリントアウトしますよ。曲のシーケンスをいくつか記憶してくれば、ジュークボックスが居場所を割り出す時間を節約できます」

「天気でも同じことができるのか？」

「当たり前でしょ」レオナルドは笑う。「もちろん、天気でもできます。それに惑星、星、小惑星、大きなものなら、数多くある衛星でも可能です」

Dreamer 6

Juke Box

「先週の天気は調べられるかい。マサチューセッツ州レキシントンの天候だ。四日ほど前に嵐があったどうか知りたいんだ。ボストン時間で真夜中ごろだ」

「マサチューセッツ州レキシントンですか？」 怪訝そうな目で僕を見ると、レオナルドは肩をすくめた。「ええ、いいですよ」 モニターに向き直るとキーボードに何か打ち込む。すると瞬時にモニターにリーダー・マップが現れた。「出ました。ボストン郊外のこじんまりとした閑静な町。四日前の夜ですね？ そうですね…」 モニターは少しのあいだ点滅すると、一面に天気図を映し出した。「快晴です」

「どこかに嵐が来てないかな？ 雷や雨や、なんでもいいから教えてくれ」

「いいえ、どこも快晴です」

「間違いない？」

「自分の目で確かめてください」 レオナルドはモニターから離れる。

「どこかで停電はなかったかな？」

「二つ目の質問ですか。質問はひとつまで…」

「頼むよ」

「オーケー…」 さらにキーボードを叩くと、モニターにリストが現れる。「ニューイングランドで発生した停電や警察が関わった事件のリストを探し出しました。ほらね。レキシントン周辺に停電は一件もありません。ゼロです。まったく平穏な一週間でした。もちろん、頻発している押し込み強盗は別ですが、男が観光客を乗せたバスに向かって自分のナニを披露したそうです」 レオナルドは目を細めて画面を読む。「違った。これはニュートンでの事件です」

Dreamer 6

Juke Box

僕はモニターを見つめる。リンダは嵐のせいで回線に雑音が入ると言った。

「わかった。電話線に問題があったかどうか調べられるかな。そうだな、ここの時間で十時三十分ころだ」

「ああ、電話ですか」 レオナルドはにやりとする。「通話しているとき、エコーが聞こえましたか」

「いや」

「じゃあ、衛星回線ではありませんね。ルーターアルゴリズムを通してでしょう。見てみます。ネットワークにオートピ
ン設定がありますから」

「何があるって？」

「。ピンです。電話回線を探査できるソフトウェアパケットです。これですよ」 キーボードを数回叩くと、地図上にグリーン
に光るネットワークが現れた。「オーケー、静かな夜でしたね。ここから発信された電話は…、これがあなたのルームナンバ
ーです。それはダラスに行き…」

「ダラスからアトランタのハブを経由して…ありえることです。次にフィラデルフィアを通り、最後にボストン郊外のメイ
ンハブへ辿り着いています。そして、当然ですが、ローカルラインを通してレキシントンのご自宅に繋がっています。機械の故障も
断線も、ルートの変更もありません。ネットワークはこのくらいシンプルでなくちゃね。ネットワーク全体を見せましょうか」

「いや、いいよ。電話だけでいい。メキシコシティのホテルの情報は入手できるかな」

「メキシコシティですか」 レオナルドは僕をまじまじと見つめる。「マイケル、人生は、そううまくはいきません。テクノロ
ジーにも限界があるんです」

「悪かった」

Dreamer 6

Juke Box

「いいですよ」レオナルドはプログラムを閉じる。「デモを見せたことは誰にも言わないでください。そうでないと、二人ともここを追い出されます。今日、まだ過去へ戻る気分ですか」

「ああ、そうしようと思っ」

「分かりました、一時間もすれば、シータ・バスの交換は終わるでしょう。そのころにまた来てください」
「わかった」

ラボから出るとき、僕の頭にはレキシントンのリーダー画面が浮かんでいた。快晴。嵐なし。停電もなし。一体、あそこで何が起こっていたんだ。

……★……

Dreamer 6

僕は誘導チェアに横たわり、バイザーを下ろし、片方の目で一点ずつ、緑色に輝く二点の光を見つめる。トリップの準備はできているが、まだリンダのことが頭から離れない。なぜ嵐なんてくだらない嘘をついたのだろう。僕が電話で雑音を聞いたからなのか？ 階下の電話で、誰かが僕たちの会話を聞いていたのか。

一瞬だが、四日前、リンダがあ言葉を使った時点に戻ってみようかと考える。リンダの言葉をもう一度聞くんだ。だが、そんなことをして何になる？ そんなことをしても、リンダを問い詰めることはできないだろう。妻はメキシコにいるんだ。おそらく向こうで一泊してくるだろう。前回と同じように。

「マイケル」レオナルドだ。「脈拍と血圧が通常値を超えています。リラックスしてください」

「オーケー、そうするよ」

「青色の円を思い浮かべて」

リンダのことしか考えられない。仕事のパートナーと一緒にメキシコのホテルにいるリンダ。別々の部屋を取っただろうか。前回、こういうことが起こったとき、リンダは別々の部屋にはしなかった。

「マイケル、前頭葉が両方とも非常に面白い動きを見せ始めました。本当に睡眠剤は要りませんか？」

「大丈夫だ」

「そんなに大きな声を出さないで。舌をバークしますよ。いいですか？」

リンダが泊まっているのは、おそらくプレジデント・ホテルだろう。ソナロッサの近くにある大きなホテルだ。あのクソったれヴァンと食事をしているんだろう。もしかしたら一緒に夜を過すそうと考えているかも…

「ビッグ・ドライブをロックして、ロードしました。シート上昇、同調しました」

背中から暗闇の中へ落ちて行く。

不思議なことに誘導チェアに座っていたときに感じていた怒りを、まるでサメが皮を脱ぎ捨てるように、僕はすっかりそへ置いてきた。僕は下方に広がる光を見下ろす。脳の中の小難しい回路が作り出したあの映像にすぎないとわかってはいる。が、それでも美しい眺めだった。まるで蛍が舞い飛ぶ川の上空を飛んでいるようだ。

ひとつの光へ向かってゆっくりと下りて行きながら、下降するときの変化を意識しようとは僕は努める…着いたのか？

最初に聞こえたのは、自分自身の足音だった。どうして僕は自分の足音など聞いたことがないと思っていたんだろう。でも当然だけど、足音はいつも聞こえていたはずだ。自分の息遣いの音も聞こえる。そして両耳のあたりを流れる血流の音。次

に鼓動の音が響く。そこから範囲は広がり、風の音が聞こえてくる。虫の声。鳥の鳴き声、次はアマガエルだ。僕の回りを取り巻く円は拡大していき、その中のすべての音が聞こえてくる。近づくにつれ、その円の範囲はさらに広がっていく。道路を走る車の音が聞こえてくる。アスファルトをこするタイヤの音がする。天候は嵐だ。近くに人の音がする。

円はさらに拡大していく。

ものが見え始める。視界の中央に色が見える。はっきりとした色だ。草色の鮮やかな緑と土色のこげ茶。最初、その緑は百種類くらいさまざまな緑色に分かれていたが、それが次第に千種類もの緑色に細かく分かれ、次にそれは互いに溶け込み、何色かの青とグレーに変わる。なにか動くものが見える。明るい黄色が動いている。

レインコートだ。僕は黄色いレインコートに囲まれて、歩道を歩いていた。立ち止まり、僕はうつむいて濡れた歩道を見ると、黒いゴム長靴の金属製のホックを留める。

声が聞こえる。「長靴のホックがゆるくなっちゃったよ」

感じることはできないが、たぶん靴下が濡れているのだろう。

少しのあいだシーンをロックすると、キラキラと光るコンクリートの中に小さな石が混ざりこんでいるのが見える。歩道の端には黒っぽいコケが生えている。さらに目を凝らすと、セメントの上にハート型の落書きが見える。

すぐそばのアスファルトの上に、スクールバスが現れる。ライトが点いていて、タイヤが雨の中で軋んだ音を立てる。水しぶきが排水溝へと流れ込んでいく。

あちこちにヘッドライトが見える。車が通り過ぎ、早朝の激しい雨の中をライトが揺れる。嵐のせいであちこちに水溜りができ、そこに曇った灰色の空を映していた。地平線のあたりには、地面すれすれに垂れ込めた灰色の雲が、薄暗い雨のカーテンを引き連れている。

感覚が遠のき出すと、ライトの光がにじみ始める。最初に地平線あたりの雨雲が灰色のもやに変わり、次に雨に濡れた茶色い街路樹が、そして道路がにじみはじめた。上空へと僕が浮かび上がる時には、聞こえるのは足音だけになった。

上空で、流れのなかでうごめく別の光に向かって僕は漂っていく。感じるのは自由と期待感。僕は人生という映画の中にいるのだ。

そして本当に、僕はオードリー・ヘップバーンの人生の中にいた。少なくとも、兄のシボレーのバックシートから見たらそう見えたんだ。ドライビングシアターのスクリーンに映る六メートルのオードリー・ヘップバーンは、美しくそして完璧だった。

バックシートの反対側には、やせぎすのポニーテールな女の子が座っていた。茶色いショートヘアで、少し怪訝そうな目をしている。フロントシートの女の子が振り返り、僕たちに向き直った。「マイケル、カレン。二人で何かしてきたら？」

「どうかしら」 痩せた女の子が、腕組みをしながら答える。

兄のアールが肩越しに振り返る。「おまえたち、散歩でもしてきたらどうだい——」

僕は腕を彼女に回して、キスするためのベストの体勢を取っているようだ。見えないので実際のところはよく分からない。どんな所でもどんな時でも、僕はこの瞬間に目をつぶってしまっただよ。

Juke Box

やっと僕が両目を開けた。そして僕は、二十センチも離れていないところにある、二つの目を覗き込んでいた。バカげた考
えが頭に浮かぶ。こんな近くにいいたら、カレンには僕が見えてしまうのではないか。目の奥底でプカプカと浮かびながら自分
の過去を眺めている僕の姿が。

僕の目はまた閉じられた。その途端、黄色い閃光が走った。「いつてーっ!」

「やめてよ!」

目を開けると、数センチのところに依然としてカレンの顔があった。カレンの眉は真ん中にぎゅっと寄せられている。この子、
怒ってる。

サリーがシートの向こうから覗き込む。「どうしたの」

「マイケルが、なれなれしくするんだもん」

「じゃないよ」

「したわよ。ブラウスの中に手を入れたから、ひっぱりたいの」

「なれなれしくするなよ」 どこからかアールのつぶやく声が聞こえる

「大人しくしてないと、二人とも歩いて家に帰らせるわよ」 サリーが言う。「二人ともよ。覚えておいてね」

アールとサリーはシートの向こう側に身を沈めて見えなくなった。僕はカレンをチラリと見て、またもぞもぞと動き出す。

「今度は触ったりしないですよ」 カレンが言う。「私がいつて言うまでダメよ。分かった?」

「ごっ。」

「ダメ」

Dreamer 6

Juke Box

ドライブインシアターの巨大なスクリーンでは、オードリー・ヘップバーンが、ジョージ・ペパードとダンスを踊っていた。カレンが僕をシートに押し倒したので、スクリーンは視界から見えなくなった。

「マイケル、どこにいますか？」 レオナルドだ。

僕はシーンをロックする。といっても何の意味もない。だって、どっちにしろ僕は目をつぶっていたから。

「レオナルド、ドライブインシアターでオードリー・ヘップバーンとジョージ・ペパードを見てる」

『ティファニーで朝食を』ですね。一九六一年の名作だ。テーマ曲はヘンリー・マンチーニの『ムーンリバー』。もちろん、「ご存知だと思えますが」

「ああ、知ってた。ミズーリ州コリンズのドライブインシアターのスケジュールについて何か分かるかい」

「すみません、さっきも言ったように、テクノロジーにも限界があるんですよ。カーラジオはついてますか」

「ああ、でも兄貴が野球中継に変えてしまったんだ」

「野球はやりませんよ。ドライブがパンクしますからね。曲名が分かったら呼んでください」

ロックを解除すると、シーンは突然消えうせた。まるでどこか別の所へチャンネルを変えたみたいに。いや、別の時間というべきか。

今は朝だ。明るい薄雲の向こうに太陽が隠れている。何かが風でパタパタとはためいている。それは僕の青いナイロンのジヤケットの袖だった。腕は金属の手すりに添えられている。折り返しのついた青いジーンズをはいた二本の脚が、宙にぶらぶらと浮いているのが見えた。背中に何かとてつもなく大きなものを感じる。銀色に塗られた金属の壁だ。

僕はコリンズの町にある給水塔に取り付けられた作業用通路にいる。

Dreamer 6

「俺だったら、あんな子と遊んだりしないぜ」 誰かが言う。聞きなれた声だ。「あっちいけよ、って言うてやれよ」

はるか下方の真っ平らな地面の上には、豆粒のような家や道路、そして線路が数本走っているのが見える。一メートルほど離れた隣には、波状になった金属の作業台の上にエバンが座っていた。コーデュロイのジーンズと緑のセーターに、茶色いウィンドブレーカーをはおっている。いつも同じように、ボイスカウトの水筒を肩から提げている。

「言うておくけど、俺はあいつがどんな子か知ってる。だって妹だからな」

「そうだけど、でも……」

「わがままなんだよ。お前だって知ってるだろう？」 エバンが言う。「家族でキャンプに行くと、蚊がいるって大騒ぎしてママに泣き付くんだ。結局、妹が僕のボイスカウトのテントを占領して、僕は外で寝るはめになる。だからパミーが来るときはキャンプに行きたくないんだよ」

いつも機嫌が悪そうでそばかすのあるエバンの妹バムが、カンテラの光に照らされている光景が目には浮かぶ。金褐色の瞳で、茶色がかったブロンドの長髪をブラシでときながら、Tシャツと黄色いストライプの短パンをはいて、寝袋の上に座っているのだ。

冗談じゃない、というふうには手振る。「あいつ、鉄橋までついてくるだろう。確実にね。でも俺たちと一緒に鉄橋の上まで昇れると思うっ。ぜったい無理。途中で目を回して落っこちるよ。そしたら、パパとママがとれほど怒るか——」

シーンが変わった。まるで歯切れのいい編集の映画を見ているようだ。給水塔は消えて、それに変わる風景はゆっくりと揺れている。僕はポーチに吊られた揺り椅子に誰かと一緒に座っている。

「……ママは電話交換手で、パパは五つも仕事を持っているの」

僕は彼女のほうに顔を向ける。

「日曜学校で説教もしているのよ。あなたなら、両親と気が合うと思うな」

女の子はほっそりとして背丈は一六〇センチくらい、真っ黒な髪で、黒い瞳は強い光を放っている。十五歳だ。

彼女だ、レイチエル・サラ・ドミニク。頭のなかのファイル収納キャビネットがきしみながら扉を開け、そして止まった。一九六六年の夏だ。

こうなることは分かった。遅かれ早かれ、こうなる運命だった。でも今は、とにかくここから逃げ出して――

「レオナルド」

「やあ、マイケル。こちらは現実世界です。今、コールしようと思ってたところでした」

「血圧が上がってないかな？」

「そのとおり、上がってますよ。シータ波のトレースも混乱しています。そっちで何か特別なことがあったんですか？」

「どうすれば記憶から抜け出せる？」

「テリを呼んできて抹消してもらおうことは可能です。ミタソフムを点滴すれば、その年を「ミ箱」に放り込むことができます」

「よ」

「二か月だけを消し去ることはできるかな」

「残念ですが、テクノロジーには限界があるんです。そっちでどんなことに出くわしたんです？」

「また連絡するよ」僕は懸命に考えようとする。なぜこれなんだ？ どうして今なんだ？ シャンプーする方法さえ分かれは……。

Juke Box

何も起らない。

それどころか、映画は、ひとコマひとコマ痛みをもって、頭の中の歯車を抜けて流れ続ける。一九六三年製のポンティアックが砂利の敷かれた車道に入ってきて、ライトが消えた。車のドアが開き、白いシャツを着てカーキのパンツをはいた、痩せた中背の男性が現れる。僕はすぐにシーンをロックする。男性の濃い黒髪は短く刈り込まれ、後方に向かってなで付けられている。その風貌とつつすらと生えたヒゲのおかげで、製品を売り歩いて旅をするセールスマンのように見える。あるいは、もしかしたら一九二〇年代のギャングかもしれない。

「やあ、私がボブ・ドミニクだ。最近、娘とよく会っているというのは君だね」

「はい、あの、僕は――」

「レイチエルは、君のことばかり話すんだ。すべてが事実だとは思いたくないが、おそらく事実なんだろう。友達は君のことをマイクと呼ぶのかい？ もちろん友達はいるよね。それとも娘とはかり会っているのかな」

「パパ、いい加減にして」 レイチエルが僕の方を振り向く。「パパは誰に対してもこんな感じなの。気にしないで。口は達者でよく吠えるけど、噛まれても大して痛くないから」

レイチエルがクスリと笑うのが見えた。その微笑は今の僕にはなく、彼女が見ている十九歳の僕に対して向けられたものだ。そして彼女は今、僕の頭の中にしか存在しない。

映像でしかないその父親は、レイチエルを見つめ、そして僕に視線を戻す。おそらく彼女の視線を追ったのだろう。「娘が君の友達をすべて追い払ったに違いない。母親も同じことを私にしたからね。そのせいで私には友達がいないんだよ。こんな大人になりたいかね？」

Dreamer 6

Juke Box

「あなただったら、マイケルに何を吹き込んでんの」丸顔で茶色の短い髪をした背の高い美人が、助手席から現れる。チェックのキョロツトの上にスウェットシャツを着ている。周辺視野の下の方に目を走らせると、テニスシューズを履いているのが見えた。彼女は若い。ありえないくらいに。おそらく三十代前半だろう。

「ワンダ・ドミニク。レイチェルの母です」彼女は微笑んで僕の手を握る。「どうやって二人が出会ったのか、レイチェルから聞きましたよ」レイチェルを振り向く。「あなただったら、わざと新聞を落として、マイケルに拾うのを手伝わせたいよね」

「まあ、そうかな」レイチェルは僕をチラリと見る。「そんな感じ」

まあ、そうかな、か。否定とも肯定ともとれるあいまいな承認というところか。この言い方を聞いたのは、このときが初めてだったろうか。ブレンダも使っていた気がするけど。いや、ブレンダがこんな言い方をするはずがない。彼女はもつとぎつちりとした物言いをする子だった。

僕はドミニク夫人を振り向く。「レイチェルと会ったのは確か五年前です。インディアン・スプリングスに遊びに行ったときです。僕はエバン・カースウエルと一緒に……」

「まあ、あなた、エバンを知っているの？」ワンダは僕に近寄る。「ひどい事故だったわね」

「はい、エバンは僕の親友でした」

このあたりでシーンをロックする。まるでセピア色の写真のようだ。僕はドミニク夫人をまじまじと見つめる。唇は固く閉じられ、眉はカーブを描き悲しげな表情を作っている。次第に粒子がひとつずつ色を変え、シーンは茶色に変わっていく。

Juke Box

今度は暗闇でロックする。僕の思考は、あと数ミリ過去へさかのぼった場所へ落ちて行くための準備をしている。だけど数ミリ先とは、一体どこなんだ？ 大脳皮質で数センチ移動すると、それは一年間に相当するのだろうか。そうかもしれない。そう考えると、ブレンダ・レイシーとの映画がしまわれているのは大脳皮質のどのシワなんだろう。たとえば、あのプロム・パーティーの夜だ。脳のどこかに記録されているはずだ。それをなんとしても見つけ出さなきゃ。

手がかりを探して、僕は暗闇に目を走らせる。何もない。灰色がかった茶色い闇が広がっているだけ。百万枚の写真のなかから、たった一枚の写真を探し出すようなものだ。だけど、ここにあることは確かだ。どうにかして探し出してやるぞ。

ロックを解除すると、茶色い闇は明るくなり始める。僕は次の記憶へと入っていく。ブレンダの記憶だろうか？ そんなにうまくいくはずがない。

ブレンダと一緒にいるのではなく、僕は砂利道を歩いていた。茶色いスエードのブーツは一步、歩きたびに白い砂ほこりを舞い上げている。シャツは腰に巻かれていて、僕は片方の腕で、目にかかる汗をぬぐい続けているらしい。虫の鳴き声に混じって、轟音が低く響いている。遠くで、数キロ先の交差点に光がゆっくりと近づいていくのが見える。

誰かが僕に話しかける。

「でな、男は夢を見ていて、その夢の中で列車にのっけて、その列車は、古い友達が住んでいる町を抜けていくんだ。男は列車を降りたいんだけど列車は止まってくれない。だから男はドアを開けて飛び降りる。男が立ち上がると、そこには古い友達がいる。けどな、友達はみんな死んでるのさ。分かる？」

僕は振り返る。そこにはエバンがいた。シャツも着ないで、頭にバンダナを巻いていた。帽子もかぶっていない。でも水筒はいつものとおり肩にかけられていた。さっきいた給水塔の上で見た水筒と同じものだ。

Dreamer 6

「ああカーズウエル、分かるよ。男は四次元へ向かう列車に乗ってたんだ」

「違うな」とエバン。「俺の解釈では、男が列車から飛び降りたとき、四次元の世界へとジャンプしたのさ。じゃなかったら、男のなかのある部分が町に降りて、その部分は死んでしまったんだ」

「自分が死んだらどうなるか考えてみるよ。一部分だけが死んで、ほかの部分は別のどこかで生き続けるのかい？」

「ああ、多分そうだよ」エバンはうなずく。「四次元の世界でね。じゃなかったら、時間の進み方がゆっくりになるのさ。見ろよ。列車が来たぞ。陸橋に昇るか？」

僕は顔を上げる。一九六一年九月、ミズーリ州コリンズの町外れのくすんだ緑のなかに、ノーフォーク・アンド・ウエスタン鉄道の点のような光が近づいてくる。

「間に合うかな？」

「大丈夫だ。列車はいつも町で停車するから」エバンは走り出す。

「エバン、待てよー」

少し太めの十二歳の少年が、鉄橋へ続く積み上げられた使用済み石炭の山をよじ登って行くのが見える。僕はエバンを追いかけるが、時間の進み方が遅くなっているようだ。エバンが線路へ続く石炭の敷石を蹴り飛ばすたびに、靴の後ろに立ち上る小さな茶色い砂ぼこりが見える。今、エバンは線路の上において陸橋に向かって走っている。前方に見えるライトはさらに明るくなる。何かが起ころうとしている。でも僕にはそれがなんなのか思い出せない。思い出したくないんだ。

僕はシーンをロックして、細かい点までスキャンする。少年と鉄橋と列車。これは初めて起こることだけど、でも以前、僕はここにいたことがある。ロックを解除すると、列車が数センチ近く。僕はもう一度シーンをロックする。

「レオナルド」

「心拍数が少し上昇しています。何かあったんですか」

「ミズーリ州コリンズの鉄道の時刻表が必要なんだ。一九六一年の九月、ノースフォーク・アンド・ウエスタン鉄道だ。知りたいのは…、列車は町で停まっただろうか？」

「それは難問ですね。少し時間をください」

僕はロックを解除して、エバンが側面から陸橋を昇り始めるのを見る。

「マイケル、鉄道のアーカイブを入手しました。待ってください…。ミズーリ州、六一年九月。その月は毎日午前十一時四十分分に工事用列車が通過しています。コリンズには停まりません。最高時速は五十四マイル。別の資料でダブルチェックしましょうか」

列車は橋をすでに半分ほど渡っている。ディーゼルの汽笛が耳をつんざくように響く。回転灯が目に入った。真昼の太陽の下でも明るい。ロックだ！

「レオナルド、戻してくれ」

「分かりました。すぐに戻します。ちょっと待って」

僕はまだ一九六一年にいる。だが同時に一九六一年ではない。その中間にいたのだ。その中間にある、あらゆる場所に。

「レオナルド？」

「ここです。すみません、失敗したようです」

「何が起きたんだ」

「緊急停止のポルテージにちょっとした問題が起りました。どうやら、自分の大脳皮質から抜け落ちちゃったみたいです。ね。ははは、いえ、冗談じゃありません。少し時間をください。右の側頭葉に非常に面白いトレースが出てますね」

「急いでくれ。ここは少しややこしいことになってる」

「マイケル。そこで大声を出すと信号のプロセッサを塞いで、まるでイヌの吠え声みたいに聞こえるんです。特にあなたが今いる場所では、明瞭にしゃべってもらって助かります。はっきり発音するようになってください」

重なり合った固まりのようになった何人ものエバンが見える。ある者は陸橋に向かって走って行き、ある者は僕と並んで立っている。後ろからついてくるものもある。すべてがお互いに混ざり合っている。そしてまぎらわしいこと、もうひとつの固まりがある。ジーンズとブーツを履いて、白いTシャツを着て、こげ茶色の髪の毛の少年。その固まりも線路のほうに延びてる。

この固まりは、僕だ。

「レオナルド、ここから連れ出してくれ」

答えはない。

「レオナルド……」

何も無い。

なぜだか頭上の空がほとんど黒と言えらるほどの濃い青に変化する。そして僕はそこに向かって漂っていく。上空へ。見下ろすと、霧のように車で包まれた道路と、列車が走る線路が見える。すべてがエバンとマイケルの固まりと混ざり合っている。僕は上昇し、木々が動き、混ざり合うのを見る。遠くにコリンズの町がかすんで見える。ビルや木々も、平原や森も。

Dreamer 6

Juke Box

気づくと、今まで来たことのないところに僕はいた。

Dreamer 6

Juke Box

Dreamer 6

Juke Box



Dreamer 6

Juke Box

Rachael

パートII

七レイチエル

空を漂い薄いすじ雲を突き抜けて、僕は天空へと昇っていく。遥か下に見える地上では、時間のなかで凍りついてしまった「ありえたこと」が、幾重にも重なって、霞んだ厚い雲を作り始めていた。もちろん層のひとつひとつを見れば、それは現実にはほかならない。ぼんやりした雲のなかのある場所では、「列車は実際に来なかった」のだし、むこうでは、「僕たちが二人とも線路にいた」のであり、「死んだのは僕だった」場所もある。

どうしてこんなものが見えるんだろう。僕は時間の外側にいるのだろうか。「今」という言葉が何の意味も持たない、瞬間と瞬間にはさまれたあまりに狭い隙間にはまり込んでいるのか。

「レオナルド、聞こえるか？」

静寂。

僕はすじ雲を突き抜けて、霞の中へ昇っていく。まるで風に吹かれて漂う幽霊だ。あるいは放送局のあいだで行き場を失った電波だろうか。

「レオナルドー」

暗闇に瞬く光が見える。遠くの岸辺で光る稲妻だ。レオナルドが僕に合図を送っているのだろうか。それともまったく別のなにかだろうか。

Dreamer 7

昇っていくにつれ、頭上にある何かに引っ張られるような感じがする。それだけじゃなく、照りつける太陽の下で海霧が消えていくように、僕の体は重さを失っていった。

「レオナルド―」

反応はない。遠くの岸辺から聞こえる波の音のような低い唸りが聞こえるだけだ。上空に見える光は穏やかだけれども、輝きをさらに増している。僕は光から遠ざかっているのか？ いや、そうじゃない。

「マイケル」 頭の中に声が響いた。

「レオナルドかい？」

「マイケル、シグナルが途切れています。大丈夫ですか？」

「マイケル、ニコよ」

僕のそばに誰かがいる。

「レオナルド、ここから出してくれ」

「ポイントの動きが安定していません。このポイントをなんとかするあいだ、少しのあいだ待って―」 シグナルが消えていく。まさかこんなことが起こるなんて―！

いくつもの光が合体してひとつになり、低い唸りは耳をつんざくような高い音に変わり、そしてゴーゴーという轟音になった。奇妙な考えが頭に浮かぶ。時間の家に正面ドアがあるとしたら、僕は今、側面の窓から、窓がバタンと閉まってしまっ

に家の中へ入り込もうとしている。そして今、窓が閉まりかける最後の瞬間に、誰かが手を伸ばし僕を中へと引っ張り込む。それは僕が知っている誰か。いや、知っていた誰かかもしれない。

目の前のシーンが突然動き始め、僕は片方へもたれかかる格好になった。何か暖かいもの、柔らかくて、少しかび臭いものが体を包んでいる。車の後部座席に僕は座っていた。横には、白いブラウスとシヨートパンツにサンダルをはいた十五歳の女の子が座っていて、コーンのアイスクリームを食べている。

どうにかして僕は、一応現実と呼べるものに戻ってきて、ポンティアックの中に座っている。カーラジオが聞こえてくる。かかっている曲は「ホエン・ア・マン・ラブズ・ア・ウーマン」だ。

「マイケル、レオナルドです。聞こえますか？」

僕は意図する。ロックだ。すると僕を取り巻いていたものが動きを停止する。これで安心だ。ちゃんとものが機能がする場所に戻ってきた。

「マイケル？」

「聞こえるよ」

「少しのあいだデルタに行っていたようです。インタラプトが遮断されたんでしょう。むこうで眠りましたか？」

「たぶんね。さっきはちよつと混乱して」

「ちびへ戻りますか？ ロンデインサの充電は済んでいます」

「いや、大丈夫だ。もうまわりのものはつきり見える。すべて順調だ」

「そうですね。問題はないようです。シータ派が少し振れていますがおそらくこれはソフトウェアに原因があるんでしょう。助けが必要になったらコールしてください。何かあったときのために、いつでも「」にいます」

ロックを解除すると、ドミニク氏の会話の途中だった。

「一ミズーリまでの運転なんて、簡単なものさ」とドミニク氏。「十マイル走ることにガソリンスタンドがあるじゃないか。ガソリンもある。オイル交換も、タイヤ修理もできる。なんでも来いだ。だがな、メキシコで車を運転してみる。あそこではアタマを使わなきゃ運転できん」

「マイケルに、モンテレイまでのドライブの話をしてあげたらどう？」ドミニク夫人が言う。一リットルはありそうなミルクセーキの瓶を彼女が抱えているのに僕は気づく。

ドミニク氏はイスの背に体を預けて微笑んだ。「ああ、ステイシーがワンダのお腹の中にいた当時、リナレスの町に病院がなかったんだ。だから陣痛が始まったとき、私たちは古いビュイックに乗り込んでモンテレイに向かったんだ。ところが半分まで来たところで、オイルランプが点灯しはじめた。私は道端の小さな売店でクッキングオイルを手に入れた。そしてそれをクラックケースに給油したら、見事に動いたんだよ！」

「でもそのあとで、ガソリンもなくなったのよね。覚えてる？」ワンダが言う。

「石が当たって、タンクに穴が開いてね」ドミニク氏は続ける。「ガソリンは残らず漏れて、車が停まっちゃった。そこは砂漠のご真ん中でね、しかも日曜の午後だった。あの時は絶望的になった。手元にあったのは、ブラッドレーの赤ちゃん用品、消毒用のアルコール、石鹸、そのくらいだった」

「それで、どうしたんですか？」僕は尋ねる。

「タンクに穴を見つけたあと、少しのあいだ神に祈った。そして石鹼を取り出すと、それで穴を塞いで、消毒用のアルコールをタンクに入れた。キャブレターの調節はしなきゃいけなかったが、それで車が動いたんだ！」

「この前、この話を聞かされた時はね」レイチエルがひじで僕をつつく。「ファンベルトも壊れてたのよ。ストッキングか何かで直したんですって。その次は、タイヤがパンクしてリムで走らなきゃいけなかったの。お次はヘッドライトが落ちて…」

「結局、病院へは間に合っただんですか？」僕は訊く。

「ああ。一週間はかかったがな」ドミニク氏が言う。「陣痛は本物じゃなかったんだ。だがオイルタンクの穴を塞いだ石鹼は十日はもったぞ」氏は言葉を切る。「分かったかな。うちの家族はいろんなことをして困難を乗り越えてきた。だがな、神はいつもそばにいてくださった。我々を見守ってくださったんだよ」

「そのとおりよ」ワ نداは言う。「たとえそこがメキシコでもね」

「メキシコだから、特によ」レイチエルが言う。

「オーケー、マイケル。コンデンサが直りました。準備はいいですか？」

「ちょっと待ってくれ」シーンをロックする。ブレندا・レイシーを見つけられるだろうか。試してみたほうがいいだろうか。

「ちょっと待っててほしいという事です。気が変わりましたか？」

「いや、ただあと数分間だけ、ここにいたいんだけど…」

「まだ時間はありますよ。ピザを予約しておきましょうか。ANSI基準ですよ。私のお「リ」です」

「いや、大丈夫だ。アイスクリームを食べてるところだからね」

「どうぞお好きなように。あとで会いましょう」

レオナルドがコネクションを切ったので、僕はさっきまでどこにいたのか思い出そうとしてみる。集中して映像を思い出そうとするが、何も浮かんでこない。どうやらドアが閉じてしまったようだ。ただこれだけは分かる。今、僕はポンティアックに乗っていて、十五歳の女の子が家族について話すのに耳を傾けている。「…ステイシーとエイミーが生まれたら、パパは我が家を『ランチョ・コネロ』って呼んだの」レイチエルが話を続ける。「それって、『うさぎ農園』っていう意味よ。パパったら、きっと映画かなにかで覚えた言葉よ」

「うちの様子にびつたりの言葉だと思ったんだ」ドミニク氏は、カーブでポンティアックを操りながら言う。「そういえば、君はコリンズで育ったそうじゃないか」

この会話は前に聞いたことがある。はじめは、この場面を思い出すことが嫌だったことが、今となっては不思議だ。場面をロックしてスキャンしてみる。ブレンダ・レイシーの手がかりがないかと通り過ぎる車に目をやる。そして思った。かりにブレンダを見つけたとしても、僕に何ができると言うんだ。

何もできない。それが事実だ。僕はいわばドミニク家という鯨に捕まったエーハブ船長同然だ。心の中でため息をつき、場面のロックを解除する。

「…私たちがコリンズに住んでいたのよ。ローカスト通りだった」ドミニク夫人は言う。「レイチエルはそこで生まれたの」

「ローカストってイナゴのことよ。虫の名前のついた通りで生まれたの」アイスクリームをなめる合間に、レイチエルが言う。

「おばあちゃんがまだそこに住んでるわ。マイケルの家から三キロくらいの所よ。歩いて行ける距離」

そう、歩いていける距離だ。その道の途中で十五歳のレイチエルは、ブレンダの家の前を毎日通り過ぎていて。来る日も来る日も毎日だ。なぜブレンダと別れたのか、僕は思い出し始めていた。

「君はたしか高校三年生だったかな」 ドミニク氏がルームミラーのなかで、上目づかいにこちらを見る。

「先月卒業しました。九月にカーズビルの大学へ行きます。ここから北へ百キロほど行ったところです」

「それは便利ね」とドミニク夫人。「週末にはこの両親に会いに帰って来られるわ」

レイチエルが僕をひじでつつく。「マイケル、夏のアルバイトの話をしてあげて」

そのとき世界が一瞬で暗くなり、僕は暗闇の中に沈みこんでいく。

「ここよ」 それはささやき声だった。

「ここよ」

「ここにキスして。そしたら少しだけ下の方へ移っていいわ」 暗闇のなかで、僕は裸の肩の輪郭と、ボタンのはずされたブラウスの襟元を見る。下の方へ視線を移すと、なだらかに高くなった鎖骨が見え、その下には日焼けした褐色の肌が白く変わっていき、非の打ちどころのない丸い乳輪の真ん中に小さな乳首が見えた。

僕はこの光景を知っている。三十年前のこの光景を、隅から隅まですべて覚えている。

どうにかして、とつとつ、僕はブレンダを探し当てた。僕の視界に入ってくる乳首を、僕は見つめる。

「ブレンダ。この夏にずっと君に会えないなんて、さびしいよ」 僕の声がする。

「ううんー」 ブレンダは、ため息と呻き声ともつかないような返事をする。

「ここよ」 彼女は言う。「キスして」

もう一度、世界が暗闇に変わった。

Rachael

「…モンローにある鋳型工場で働いています」 僕の声だ。「先週からこの仕事を始めました。給料がとてもいいんです。一時間一ドル九十セントで、十一時から七時までの仕事です」

ドミニク夫人が、ドミニク氏にちらりを視線をやるのが見える。

僕はボンディアックに戻っていた。

「そっぴいえば」 ドミニク氏は言う。「ラジオ局で働いていたときは深夜のシフトが好きだったよ。静かだな。誰にも邪魔されない」

「コリンスにもう一度住もうって。パパとママを説得してるの」とレイチエル。「でも、二人とも全然その気がないの。私はコリンスが大好きなのに」

「ミズーリ州チエロキーに何の不足もないわ」 ドミニク夫人が言う。「いい学校があるし、州立大学のキャンパスからわずか二十キロ足らずなもの」

また画面が切り替わり、僕は暗闇に包まれる。服がこすれる音が聞こえる。一体ここはどこだ？ ブレンダのところに戻ったのか。

「手をここに置いて。違うの。そこじゃなくてー、ここ」

目を開けると、月明かりのなか、ブレンダのもう片方の乳房、柔らかくまあるい乳房が見える。「どうしてもアートキャンブに行かなきゃいけないのかい」

「ううん」

「ぶっつしてっ」 僕は乳首に顔を近づける。

Rachael

「だって、水彩画が勉強できるもの。んーん、そのまま続けて」

僕は彼女のへその下にある日焼けのラインを超えて、下へと下がっていく。

「うううーん、そうよ、そーゆー」

暗闇。

「チエロキーなんて、最低よ」レイチエルは言う。「去年、ポンポン・チームに入ったの。チアリーダーみたいなもの。分かるでしょ？ でもね、学校がセコくて、ひとりにポンポンをひとつしかくれないの。紙製の青いトーチかなにかを振っているフリをしなきゃいけなかったの。それにね、ミニスカートをはいちゃいけないのよ」

「でもね、それには賛成よ」ドミク夫人が言う。「女の子がミニスカートをはいてもきれいじゃないわ。そうでしょ、あなた？ あなたー？」

「私は答えられんな」ドミク氏は言う。「結婚した男だからな。意見なんて持ち合わせてないよ。特にミニスカートについて言うべきことは何もない」

「チエロキー高校ではミニスカートが禁止なの」レイチエルは続ける。「校長室に行って、床に膝をついて、スカートのすそが床に触れなかつたら、その子は家へ送り返されるのよ。本当にひどいでしょ。ミニスカートをはいちゃいけないし、口臭剤も持つてきちゃいけないしー」

「そうなんだ」ドミク氏が振り返って、僕の間を覗き込む。「チエロキーでは、学校に口臭剤を持つていくことは禁止されてる」

Dreamer 7

「なぜだか教えてあげるわ」とレイチエル。「本当にバカらしいの。一年生の女の子がボーイフレンドと喧嘩して、自殺しようとしたの。ラボリスのボトルを飲み干したのよ」

僕は車のなかをスキャンする。ブレンダの手がかりは見つけられない。彼女はどこへ行ったんだ？ ロックしてみるが、シーンには何の変化もない。まったく同じだ。ドミニク氏は、灰皿にタバコの灰を落としているし、レイチエルはまさにアイスクリームにかぶりつこうとしている。ドミニク夫人は会話に口を挟もつと準備しているのがよく分かる。

もう一度、ロックし直してみる。ロック。シーンは少し進んだ。ドミニク氏のタバコから灰が落ちていく。レイチエルはアイスクリームをもうひとため。ドミニク夫人も一段階進んでいる。

ようやく僕はあきらめて、シーンのロックを解除する。

「…ボトルを全部飲み干したわけじゃないわ」ドミニク夫人が話している。小さな小瓶だったの、あなたが今バッグに入れているようなね」

「どっちにしろ」レイチエルは続ける。「その子が吐き出したら口臭剤が赤かったので、先生は卒倒しそうになったのよ。救急車がきて、もう大騒ぎ。それで口臭剤は禁止よ。少なくとも赤い口臭剤はね」

お願いだ、神さま。

暗闇。

つぎの瞬間、僕はブレンダのもとに戻っていた！ なんにせよ、ブレンダだと僕は信じてる。そうだ、それはずなんだ。シーンをロックする。二度とこの場面が消えてしまわないようにしっかりと。このままずっと続くように。

Rachael

そして今僕はここにいる。ブレンダの形のいいおへそから、十センチ下方へ下がったところだ。僕は視界の隅々まで目を走らせて、彼女の下着の縁を探してみるが、見えるのはただからに盛り上がった骨盤と、日焼けした肌と白い肌とのほんやりとした境界線だけだ。その下には黒いラインがあつて、すべてを覆い隠している。

場面が下方へスクロールしてくれることを祈りながら、僕はそっとロックを解除する。だが、そんなにうまくはいかない。カメラは、つまり僕の目は、下方へ移動するどころか、上へのぼり始めた。胸と首を通り越し、今はブレンダの顔を見つめている。映画がまさに佳境を迎えていたとき、僕はわけの分からないミミを見てたわけだ。ミニスカートや口臭剤や卒倒した教師の。巻き戻しはできないのか？ スイッチはどこにあるんだよ。

場面はふつくらとした唇に移り、少し上を向いた魅力的な鼻を通り過ぎ、ようやく少し開かれた瞳と、乱れたフロントの髪を映し出す。僕が見つめていると、ブレンダは微笑み、ゆっくりとシートに身を沈めた、やった。とっとう。

暗闇。

「レイチェルの言うことはもつともだ。ここは実に狭苦しい町だね」ドミニク氏は言う。「私が大学で社会学を学んだことが、教育委員会の誰かの耳に入ったらしい。するとやつらは、うちの家族は社会主義者だと言っんだ。そこから話がデカくなって、うちの家族がヌーティストだと言っんだ」

何とかしてくれ。この車から逃げ出さなきゃ。今だ。シーンをロックして、集中する。だが、何も起こらない。場面はそのまま、何も変わっていない。ドミニク氏はハンドルを握り、夫人はフロントシートに腕をかけて、レイチェルはちょうど目を閉じて、アイスクリームを舐めている真最中だ。

Dreamer 7

Rachael

手も足も出ない。ロックを解除するとレイチェルがアイスクリームを舐め終えて、そして話し出す。「ブラッドレーがね、弟のことよ、いつも裸で走り回ってたでしょ。きつと誰かがあの子を見かけたのよ。それでうちの家族みんな、あんな感じだと思っただわ」

「あんなウワサを広めたヤツが誰か分かったら」 ドミニク氏が言う。「とっちめてやる」

暗闇。

「夏中ずっとなのか」

「そうよ」 彼女は目を開ける。「夏中ずっとなの、マイケル。もし私に行ってほしくなかったら、そう言っ」

「君に行ってほしくない。行かないでくれ、お願いだから！ ニーに君がいなけりや夏が台無しだ。僕が何をしでかすか分からないよ。気がおかしくなるかもしれない」

「あなたがいないと、私もどうかなりそうよ。でももう遅いの。パパがお金を払い込んでしまったし、私も行くと言ってしまったから。それにね、私行きたいのよ」 ブレンダはシートに座りなおした。僕はシーンをロックし、隅々に目を走らせる。あった。視界の隅のほうに、ぼんやりとした黒っぽい三角形が見える。あそこにあったのか。

「たぶん車で会いにいけるよね」

「それはあまりいいアイデアじゃないかも」

「どうして？」

「ルームメートがいると思うの。それに、大学生がたくさん参加するから、きつとあなた浮いちゃうわ」

「なんだよ、それ」

Rachael

「こうしましょう。手紙を書いて。私に手紙を書いてくれるわよね」

「もちろん書くよ」

「それに、夏のあいだはアルバイトがあるんでしょう？ 退屈するヒマなんてないわよ。アートキャンプはたった二ヶ月で終わりよ」

「ブレンダー」

「ねえ、今夜中に荷物をまとめなきゃいけないの。もう少し楽しみたいなら、急いだほうがいいわよ」

「わかった」 僕は彼女を見下ろす。月明かりに照らされた美しく完璧なブレンダー。僕のフェアレーンのバックシートにいる天使だ。もう暗闇はやめてくれ。頼むから、暗闇よ、もう訪れないでくれ。

視界の隅で何かが光った。二つのライトだ。

車のヘッドライト。

暗闇。

Dreamer 7

「そっだな」 ドミニク氏がうんざりした調子で言う。「ウエストラヤンに引越すことも考えたが、今となってはもうチエロキーから離れられんな」 ドミニク氏は、車道の駐車スペースに車を寄せ、シート越しに僕を振り返る。「なあ、マイケル。銃には詳しいかい？」

僕はシーンをロックし集中する。外へ。上へ昇っていく、そして外側へ。

シーンは一瞬のうちに内側へと収縮する。まるで真空空間へ吸い込まれるセルロイドのようだ。

Rachael

太陽が輝いている。

夕方近くだ。

青と銀色のグレイハウンドバスが、砂利の敷き詰められた埃っぽい駐車場を音を立てて遠ざかっていく。あとには青白い顔をした若者たちが数人残されていた。

この場所には見覚えがある。「集会所」と呼ばれている所だ。人でごったがえすなか、くっきりとしたオリーブ色と茶色の制服を着た軍人が、新兵を睨みつけながら命令を出していた。

恐怖のせいで重苦しい空気が漂っている。一般人なのだろう、チェックのズボンと白い半そでシャツを着た若者が、茶色い泥のうで腕立て伏せをしている。そばには緑の制服をきた黒人の軍曹が若者を見下ろすように立っている。

「疲れたか！」 軍曹が叫ぶ。「いいものを食ってるからそうなるんだ！ 背筋を伸ばせ！」

若者のピンク色をした太い腕は凍り付いたように動かず小刻みに震えている。軍曹の命令に従おうとするのだが、ついに泥のなかに崩れ落ちてしまった。

ロツクする。みなを怒鳴りつけているフットボール選手なみの筋肉をたくわえた大男は、指導教官用の茶色い帽子をかぶっている。肩には上へ向かう袖章が三本、下へ向かうのが二本。E七軍曹だ。軍隊にはもう長い間いるのだろう。

「もうたくさんだ！ このデブめ！」 軍曹がどなりつける。「立ってこっちへ来い！ 貴様の太ったケツを見るのはごめんなんだよ。このマヌケ！」

若者は停めてある車の列のほうへ、一目散に走りだす。

Dreamer 7

Rachael

「そっちじゃない！ このウスノロ！ こっちだ！」 軍曹は反対方向を指さす。「軍隊から逃げられるとも思ったのか、お坊っちゃん？」

太めの一般人の若者は向きを変えて、頼りないおびえきった仲間たちの列へと一目散に戻っていく。ここなら少しは安全だ。

レオナルドを呼び出して、助けを借りるまでもない。ここがどこだか僕にははっきりとわかってた。一九六九年八月二十八日だ。

残りの一般人と一緒にあって、僕は黄色い羽目板の建物に入っていく。誰もがひどく汗をかいていた。恐怖のためと、ここにはエアコンがついていないためだ。今度ばかりは、自分が暑さや寒さを感じられないことに感謝した。

「次は注射をさせられるんだぜ」 若者のひとりが話している。「ベスト予防には、角ばった針の注射を鞆丸に打ち込む。死ぬほど痛いんだ。失神した人を何人も見たよ」

この若者の言っていることは嘘だ、と頭に浮かぶ。自分の思考を捕らえようとしてみるが、自分でもまったく信じられないけど、雑音と混じって聞こえてくるのはビートルズの曲「アイ・アム・ザ・ウォルラス」だ。

「大学生だな？」 口をへの字に結んでしかめ面をした軍曹が、僕の入隊書類を見ている。「徴兵か？」

「そうです」

『そうです、軍曹』だ！ 軍曹は僕を睨みつける。「これが私の仕事なんでね」

もう一度、思考を読もうとしてみるが、相変わらず聞こえるのは雑音ばかりだ。ビートルズの歌はもう聞こえない。歌は僕の耳の奥を流れるザーザーというかすかな血流の音にとって変わっていた。

Dreamer 7

Rachael

「結婚してるそうだな。この欄に相手の名前を書いておけ。おまえのケツが吹き飛ばされたときには、身の回りの品を彼女に送り返しておいてやる」

「すみません、でもー」

軍曹は書類から目を上げる。「貴様、今おれになんと言った？」 軍曹はまっすぐに僕を見つめ、その目は怒りに燃えていた。

「僕の妻はー」

「なんだと！」 軍曹は机から立ち上がった。そして僕に近づいてくる。軍曹の顔と制服が、僕の視界いっぱい広がる。

「結婚はしていません」

「じゃあ、なぜ既婚と書いてあるんだ。国家に対して嘘をついたのか。そうなのか！」

「あの、結婚はしていました。でも今は違います。妻は亡くなりました。今年の夏のことです」

とたんに軍曹の顔つきは和らいだ。「そうか、それは気の毒だった」 大きな手のひらが僕の肩を叩いている。感じることはできないが。

この場所を去ろうと僕は決める。そしてエレベーターが、僕を上空へと引き上げるのに身を任せる。軍の建物と軍曹、周りの風景は引き延ばされ、薄くなり、そして消えた。まるで太陽の下に置かれたままの写真のように。一九六九年夏を彩っていた茶色、黄色、そして緑は混在して、そして白に変わる。満月の下で凍りつくハイウェイのような、銀色に輝く流れの網の目のなかで、その白い部分は小さな点になった。

Dreamer 7

「マイケル、調子はどうですか？ ランプマン・デリバリー・サービスです。ピザはもうすぐ届きますよ。カウントダウンをしましようか？」

「いや、大丈夫だ」

「自分で浮上したいんですね。わかりますよ。喉マイクのスイッチを切りましょう」

「—そうしないと、オーバーヒートしますからね」

バイザーを上げると、ラボが視界に入ってきた。数分前まで鮮明に目の前に広がっていた場面は跡形もなかった。

「大丈夫ですか？」 レオナルドの声がヘッドフォンのなかで響く。

「だと思っ」 僕はヘルメットを取り、喉マイクをはずす。

「最初のほうで、ちょっとしたトラブルが起って申し訳ありません」 レオナルドはそう言っているとチェアに向かって歩いてくる。

「チェアを引いたら、コンデンサが操作不能になったんです。おそらくアノマロン流束が原因でしょう」

僕はレオナルドを見る。

「マイケル」 レオナルドはさらに一歩僕に近づく。「連れ戻してくれと、確か私に頼みましたよね。二十分ほど前に」

「軍隊の基礎訓練の初日だったんだ。その前には…、車のなかにいた…、誰かと一緒に。だけど僕は忘れていたんだ」

レオナルドは訝しげな表情を見せる。「忘れてた？」

「何年も前に起こったことをね」 僕はチェアからずるずると降りた。靴下をとおしてラボの床の冷たいタイルを感じる。

「靴がそのへんにないかな？」

「チェアの下にありますよ」 不思議そうな様子でレオナルドが言う。「ピザを食べる気分ですかね？」

Dreamer 7

Rachael

「いや、君が食べてくれ。また明日会おう」
僕はドアから飛び出しエレベーターへと向かう。

八 星空の向こう

僕はサン・アントニオの夜の空気を吸い込む。この研究所に来てから初めて、頭の上に吸音タイルの天井も、銅製のメッシュも鉄骨もない場所にやって来た。美しい夜空にはとどころに雲が浮かび、ときおりジェット機が横切っていく。

以前このビルを所有していた投資会社は、中西部の林に似せて屋上を徹底的に改造した。芝で覆われた小山、木陰を作るために植えられた三本の小さな木。中央には青いイタリアンタイルで縁取られた大きなプールがライトアップされている。屋上の縁には、ニューオーリンズ風の街灯が一行になって並んでいる。この敷地の小さな一角で、どんなパーティーが開かれているのか想像がつく。

だが今夜は、すべてが暗闇の中に包まれていた。あたりはしんと静まり返って、聞こえるのは機械室のファンのくぐもった音だけ。機械室は、この素敵な場所に辿り着く僕たちの秘密の通り道だ。

僕は草の上に仰向けに寝転んでいる。正しく言えば、ゲイルが屋上に持ち込んだキルトの上に寝転んでいる。ヒューストンに程近いヘムステッドという小さな町で、このキルトを買ったとゲイルは言った。古い本物のキルトで、おそらく三十年は経っているだろう。湿ったようなキルト独特の匂いがある。それは最近刈られたばかりの芝の匂いと、プールの塩素の匂いとさえ、完璧なまでによくマッチしていた。以前の僕なら、この匂いを抽出して、思い出を香水に変えて、それをマーケット戦略に使えないかと考えただろう。だけでもういい。少なくとも今は、そんなことはどうでもいい。

「ポテトチップ、食べない？」 ゲイルがポテトチップの袋を振ってみせる。「美味しくて新鮮よ」

「食べられないんだ。数日前の強制停止のせいで、まだ舌がヒリヒリしてて」

「ワインはどう？ 傷を消毒してくれるわよ」

「勿論、もちろんよ」 僕は目を閉じて、グラスにワインが注がれる音を聞く。どこからか、おそらくはるか下方の路上からだろう、かすかに歌が聞こえてくる。ジヨニミツチエルかな？ あるいはビートルズ？ そうじゃない。それはアコーディオンの音色で、メキシカン・ポルカだった。

「どうぞ」 ゲイルはグラスを僕に渡すと、隣でキルトの上に腰を下ろす。「カルベネとポテトチップは絶妙のコンビネーションね、そう思わない？」

「そうだな」 目を開くと、ジェット機がまた一台。上空で轟音を立てている。「兄貴ならワインとポテトチップの組み合わせを喜んだらうな。子供のころひとつの部屋を共同で使ってた。兄貴はいつもポテトチップの袋とペプシ二本、チーズをはさんだパンを部屋に持ち込むんだ」

「チーズをはさんだパン？」 ゲイルは僕を見る。「チーズ？ それだけ？」

「まあ、そんなもんだ。ハンバーガー用のパンにスライスしたハーフ入りチーズ。兄貴はそこにマヨネーズを塗ってポテトチップのくずをはさんでた。確かにひどい代物だと思うけど、僕にしてみれば、アールが思いついたことなら、別に何でもよかった」

「私には姉がいるの」 キルトの上で伸びをしてゲイルが言う。「いつも喧嘩ばかりしてた。最後には、姉は仕事を見つけて家を出て行ったわ」

「アールと僕は仲がよかった。友達だったんだ」 僕は頭の後ろで手を組んで、寝そべっている。

「どんな兄さんだったか教えるよ。僕が十五歳のころのガールフレンドはひとつ年上で、高校のpromパーティーに誘ってくれた。ものすごく嬉しかった。兄さんと、彼女のサリーはコサーージュと一緒に選んでくれて、僕を座らせて、アドバイスしてくれた。ガールフレンドと一緒にダンスフロアに出るとき、どういふふうに振舞うべきかをね。二人は数年前にpromのキングとクイーンに選ばれたから、その道に関しての『権威』だったんだ」

「楽しそうね」ゲイルが微笑む。

「でも楽しいのは長く続かなかった。promの数日前に、彼女は僕をふって高校生と付き合い始めた。そりゃもう、落ち込んだだよ。そのことを知った兄さんとサリーは、サリーのいとこのジョイスに頼んで、彼女が僕をpromに誘ってくれた」

「ジョイスには彼がいたけど、大学に行っていたのでpromには来られなかった。僕が運転のできる年齢になってなかったから、彼としても、それほど心配はしなかったんじゃないかな」

「promは楽しかった？」

「すごく楽しかったよ。ダンスパーティーが開かれたのはバスケットボールの体育館で、そこにはひと通りのものはすべて揃っていた。数え切れないほどの風船、紙吹雪、ウィッシング・ウエルとかね。バンドも入っていて、メンバーは全員タキシードを着ていた。まるでペンギンみたいに見えたな。僕はスーツを着て、ネクタイをピンで留めてた。幅が五センチくらいしかない六〇年代の細いネクタイさ。女の子はみんな、胸元の大きく開いた、ふわふわとしたクレープ地のドレスを着ていて、まるで花のようだった。カーネーションって感じかな」

「花のように見えなきゃダメなのよ」ゲイルが言う。「そりゃもうものなの」

「だけど、どの女の子よりも、元の彼女よりもね、ジョイス・バレットはきれいだった。本当に美しかった。おまけに僕に下アまでエスコートさせてくれた」

「おいしい役ってわけね」 ゲイルはにやりとする。

「ああ。それもすべて兄さんのおかげさ。いつも僕の面倒をみてくれた」

「お兄さんとサリーは結婚したの？」

「いや、兄さんはいつも空を飛びたがってた。コリンズの郊外にある小さな飛行場でフライトトレーニングを受けてたのを覚えてるよ。一九六三年の夏に学生用の免許を取って、そして、その数か月後、小型のパイパーカブを操縦していてクラッシュした。墜落したんだ。電話を受けて、兄さんが飛行に失敗したと告げられた時のことをよく覚えている」

「お気の毒に」

「家族は兄さんの死から立ち直ることができなかった。僕も立ち直っていないと自分で分かっている。そして何よりも耐えられないのは、最後に生きている兄さんを見た時のことをまだ思い出せないことだ。その日の中で覚えているのは、かかってきた電話だけだ。あとは葬式のことしか覚えていない」 僕は深いため息をつく。

ゲイルは少しのあいだ沈黙すると、ワインの入ったグラスを僕に手渡す。「お兄さんに」

「アールに」 僕がグラスを上げると、空港へ向かうまん丸としたオレンジ色の七三七型機が、轟音を立てて頭上を通り過ぎた。

「見える？」 ゲイルが指差す。「サウスウエスト航空よ。たぶんヒューストンから戻ってきたところ。サウスウエストはいわばテキサスの公共バスね」

「サン・アントニオは賑やかな街なんだろうな」

「観光地よ。それにもちろん、ここには軍隊も駐留してる」 ゲイルは言葉を切って、ワインをグラスに注ぎ足す。「陸軍基地がひとつと空軍基地が三つあるわ。街外れまで足を伸ばせばミサイルの格納庫が見れるわよ」

「ああ、知ってるよ。一九六九年から七〇年にかけて、この街で少しのあいだ暮らしたことがある。大学を卒業してすぐ軍隊に入ったんだ」

「気に入った？ 軍隊のことよ」 ゲイルは僕を見る。穏やかな風が彼女の髪を揺らす。

「この街は好きだった。僕がミズーリを離れたときは酷い寒さだった。だけどサン・アントニオに降り立ったら、暖かくて空気がカラッとしていてね。まるで天国にいる気分だったよ。僕たちは緑色をした軍隊の大型バスに乗せられると、街を抜けて、フォート・サムに連れて行かれた。窓の外には、ライトに照らされた広大な緑のグラウンドが見えた。誰かが言っていたけど、フォート・サムのマッカーサー・グラウンドは、軍隊のエアロ・ドームとしては、当時アメリカで最大の規模を誇っていたらしい」

「エアロ・ドーム」 ゲイルはその言葉を口に出してみる。「エア・ポートより、いい響きね」

「僕はブルックス陸軍医療センターに配属された。そこはベトナムからの負傷兵が送り込まれる病院だった」

ゲイルはボトルに残った最後のワインを僕のグラスに注ぐ。「どんな様子だったの？ ベトナム戦争の頃は」

「陸軍は悪くなかった。ただし、外地に派遣されなければね」

「そうでしょうね。想像つくわ」

「フォート・サムは面白いところだった。ブルックス陸軍医療センターの正面にある円形の車道は、中央部分の歩道と四箇所につながっていた。報道用ヘリに乗った誰かが見つけたんだけど、その配置は、世界最大のピースサインの形を作り出していた

んだ。幹部たちはすぐに歩道を撤去して作り直したんだけど、今度は世界最大の『逆さ』のピースサインが出来上がったのさ」

ゲイルは微笑む。「おもしろい話だけど、本当なの？」

「本当だよ。僕を信用しないのかい」

「してるわよ。多分ね」ゲイルは疑っているような顔つきで僕を見る。

「信用しろよ」

「わかった。じゃ、信じるわ」

なぜだか、妻は今頃どこにいるのだろうかと思はれていた。最良のシナリオは「酔っ払った女弁護士たちと連れ立って、ソナ・ロサあたりで男の尻をつねってる」だろう。最悪のシナリオは、「メキシコシティのどこかのホテルの一室で、酔っ払った弁護士に尻をつねられてる」だ。

「ところで」少ししてからゲイルが口を開く。「この場所についてはどう思う？」「この屋上のことよ」

「ほかとは違う。つまり、最高だ」

「でしょ？」それにガラス張りの展望台フロンジはビルの向こう側にあるから、「ここは誰にも邪魔されないの」ゲイルは微笑む。「いろんなことから逃げ出したくて、時々ここ上がってくるの。でも警察のヘリには注意してね。警察はこの場所のことを知っていて、屋上にいる人に目を光らせてる。たぶん飛び降りるんじゃないかと気をもんでるのよ」

「冗談だろう」

「本当の話よ」ゲイルは起き上がると屋上の隅へと歩いていく。「向こうにあるタワーが見える？ 一か月とちょっと前、第十ラボの男性がおかしくなって飛び降りたの。あそこから飛んだのよ。二百メートルの高さから、虚空へと足を踏み出しちやっただの」

「死んだのか？」

ゲイルは振り返って僕を見る。「死んだのかですって？ なに言ってるのよ。自動車がブロック塀に激突するような音がしたらしいわ」ゲイルはキルトの所に戻ってくると、ポテトチップの袋を僕から取り戻した。「その男性には会ったことがある。初代のドリーマーのひとりだった。この研究所が発足したときからここにいたの」

「どんな人だった？」

「いい人よ。話してると楽しかった。あなたは彼ととてもよく似てるわ」ゲイルは手を伸ばしてチップをつまむ。「彼は国務省の人だったらしい。彼はモスクワで任務についていたんだけど、彼に当時のことを思い出させようとしたの。隅から隅までね」

「誰が？」

「誰かよ。政府かもね。どこかの誰か」ゲイルは肩をすくめる。「なんにしろ、順調に進んでいたのよ。でも最初のロングランを完了したとき、四十八時間もチェアに座り続けたあとね、何かがおかしくなった。誰にも原因はわからない。戻ってきたときには、彼は別人になっていた。その直後に、第十ラボのコンピュータオペレーターが辞職したわ」

「彼のロングランと何か関係があるのかな」

「多分ね。向こうで長い時間を過ごすと、人格が粉々に裁断されるわ」

「人格が裁断か。それ、心理学用語かい？」

「レオナルドがよく使う言い回しよ」ゲイルが言う。「ドリーマーに多重人格が現れた状態を、レオナルドはそう呼ぶの」
「実におもしろいね」僕はワインをひとくちすする。「たしか君は、このプログラムは安全だと言ってなかったかな」

「だってそうでしょ？」ゲイルが僕を見る。「多分フリーウェイを運転するよりは安全よ」

「いいとこ突いてる」僕はチップに手を伸ばす。「じゃあ、人格が分裂したっていうその政府の役人は、ひとりで過去に旅立って、五人に分かれて帰ってきたのかい」

ゲイルはあきれたような顔をする。

「どっやってひとつのチェアに納まったんだろっね」僕はゲイルに向かってにやりとする。「ぎゅうぎゅう詰めだったかな」

「パウンドストーンに催眠をかけられるまで待つね」ゲイルが言う。「小さなマイケルくんが何人も走り回ってるのを目撃するんじゃないの。自分もその子たちに話しかたりして」彼女はにっこり笑ってみせる。「ポテトチップ、本当にもう食べなごう」

「ありがとっ。でも僕の中のどの子たちも、おなか一杯らっ」

「うっーん」ゲイルはキルトの上に寝そべって伸びをする。「じゃあ、今日のレオナルドとのセッションについて話して。どの子たちも、いい旅ができたかしらっ」

「まあまあってとこかな。僕は軍隊時代に戻ってた。基礎訓練の初日だね。その前には、生まれ故郷のシーンを思い出した。子供時代の友達に会ったような気がする。どっつて」とないトリップを

僕はワインを飲みほすとグラスを脇へ置く。

「子供時代の友達のことを話して」

「オーケー。名前はカースウェルだ。とびきり頭のいい子だった。ロケットとか火炎瓶とか、いつも何かに夢中でね。カースウェルはたった九歳のとき、兄さんと一緒に木の上に三階建ての小屋を作ったんだ。町で一番大きいやつさ。まるでマンションみたいだった。びっくりするくらいかっこよかった」

「ご両親がカースウェルって名前をつけたの？」

「それは名字だよ。一緒に遊んでた仲間たちとは名字で呼び合ってた。それがタフガイのやり方だったのさ」

「子供のころ、どんなことをして遊んだのか聞きたいな」ゲイルは体を回して腹ばいになると、両肘をつけて体を起こした。ブラウスがずり上がって、数センチほど肌があらわになっているのに僕は気づく。

「いいとも。僕の母親はなんでも瓶に入れてたから、家はガラス瓶であふれてた。グレーの金属のフタがついた瓶さ」

「覚えてるわ」ゲイルが微笑む。「今でもいくつか持ってると思う」

「そう、カースウェルは、つまりエバンは、瓶のフタが亜鉛できていることに気づいた。おまけにエバンは、亜鉛と硫酸を混ぜると水素ガスができることも知ってた」

「たった九歳なのに、化学の知識があったの？」

「十一歳だったかもしれないな。それはともかく、僕らは近所を回って亜鉛製の瓶のフタをかき集めた。そして薬局に行って塩酸を一瓶と風船をいくつか買った。次にフタを細かく切って、サイダー瓶に詰めて、そこに酸を注ぎ込んだんだ。ブクブクと泡が出てきたところで、瓶の口に風船を取り付けた。あつという間に水素風船の出来上がりさ。ちょっと危険だったけど

ね。酸は失明の危険があったし、水素は爆発するかもしれない。守護天使が勢ぞろいして僕らを見守ってくれてたに違いないよ」

「その風船はどうしたの？ ヒンデンブルグ号^{ヒンデンブルグ}でもしたのかしら」

「いや、風船に僕らの名前を書いた名札をつけた。そして空に飛ばしたんだ。空高く上って、気流によって東へ飛ばされていったよ。風船はきっかり二週間で世界を一周するはずだとカースウェルが計算した。僕たちはそこに突っ立って眺めていた。つまり、風船を追って、東の空をじっと見つめてたのさ。風船は二度と戻ってこなかった」

「カースウェルはとても頭のいい子だったみたいね。大きくなって、原子物理学者にもなったのかしら」

「カースウェルは事故で死んだ。十二歳の誕生日の少しあとだった」

ゲイルは黙っていた。

暗い地平線を眺めていると、頭のなかにカースウェルが浮かぶ。風船に水素をつめて、冷たい3月の風の中に風船を放したカースウェルが。僕が目で見ると、風船は空高く上っていき、やがて色が見分けられなくなった。ただの点だ。そしてやがて消えていった。

僕はワインのグラスを手取る。半分しか残っていないから、飲み干してしまおうと決める。

……★……

身体は平らに腕と脚は投げ出して、ワインのせいで僕は十字架にかけられたようにベッドに横たわっていた。数センチ先にある電話は受話器がはずされたまま、レキシントンの僕の家でベルを鳴らし続けている。ほどなくオペレーターが出てきて、誰もいなのであとでかけ直してくださいと言っただろう。リンダは今夜戻ると言っただけだったわけ？

それとも明日の朝だったか。それとも明日の朝だったか。忘れた。

カーテンが開いているので、ナトリウムランプのけばけばしいオレンジ色の光が部屋中に満ちている。地獄編の第四篇。この場面のネガフィルムは、明るく黄色い空から振る冷たい青白い霧のように見えるかもしれない。まるであたり一面氷で覆われているように見えるだろう。

僕は壁から聞こえてくる音楽に耳をそばだてる。徹底して口当たりのいい音楽。六〇年代後半の、聞いていてこちらが恥ずかしくなるようなヒット曲が、女の子のコーラスでカバーされている。「愛はいたるところにある……」

僕のなかで声がささやく。「ザ・トロックス。一九六八年二月二十四日。フオンタナレーベル」

僕の声、おまえに礼を言っよ。おまえのせいで、何度リンダと気まづくなったことか。おまえは曲が聞こえてくると、その曲を言い当て、僕のなかにいる別の誰かに、ラジオのスイッチを切れと言っよ。そして誰の曲か当ててみるとリンダに言っよ。もちろんリンダには無理だ。おまえのおかげで僕の結婚生活は目茶目茶にされて、この瞬間にも妻はたぶんヴァンという男とメキシコのホテルで……。だからさ、もついい加減黙ってくれないか。頼むよ。

音楽が変わった。スローなテンポで、オーケストラ用として重厚に編曲された……。なんだろう？ 「サマー・イン・ザ・シティ」だ。

ラビン・スプーンフル。一九六六年七月十六日。

文句は言えないな。僕のなかのこの部分、古い曲を記憶しているこの小さな回路のおかげで、うちの会社はかなりの金を稼いでる。「マイケル、一九七一年を題材にした広告を打ちたい… マイケル、古いビートルズの曲には反応を示さないアルファ消費者の心をつかみたいんだ… マイケル、消費世代も対象に入れた曲目リストが欲しい…」
欲しい、欲しい、欲しい。

クラリネットの音色が部屋にあふれる。六十年代初頭のぼんやりとしたメロディ。「星空のむこう」、一九六二年七月だ。

この曲を始めて聞いた日のことを思い出す。コリンスの家の裏庭で芝生の上に寝そべって、シカゴのラジオ局を聞きながら、打ち上げられたばかりのエコー衛星を見ていた。真夜中の二十一時。父さんと母さんはガーデンチェアに座っている。アールとガールフレンド、そして僕は、手足を投げ出して草の上に寝そべり空を眺めていた。最初に衛星を見つけたのは父さんで、小さな点が宇宙の暗闇の中を西から東へと向かって動いていた。

その瞬間、ディック・ビオンディというディスク・ジョッキーが曲を紹介したんだ。「星空の向こう」、タイトルはこれ以上ないくらいその場にどんぴしやり。それはまったくの偶然だったんだけど、僕はミズーリの草原や僕の家のはるか上空の星空の向こうを、まるで衛星になって飛んでいるような気分になった。

「星空の向こう」はヒットしなかった。トップテン入りしたこともなかった。誰もアーティストのミスター・アッカー・ビルクを覚えてはいないだろう。そしてもちろん、僕を覚えている人もきっといないだろう。

オレンジ色の光のなかで目をつぶり、マシンに囲まれている自分を想像する。レオナルドが僕にヘルメットをかぶせ、喉頭マイクと注射バンドを取り付ける様子を思い浮かべる。コンピュータからエレベータのような音が聞こえ、そして鳥のさえずりのような音に変わる。

「同調完了…」

「認識しました」

僕は星空の上から緑に覆われた草原へ降りてくる。ミズーリ州コリンズへ。

僕は立ち上がり裏庭のポーチへと歩いていく。これが夢だということは百も承知だ。でもここなら僕は逃げ出せる。ゼイヤパウンドストーン、レオナルドやあの機械から逃げ出せるんだ。

見回すとそこには父さんがいる。僕の記憶が父さんの体、肩や顔を作り出している。ダークグリーンのスボンとシャツを着て、野球帽を目深にかぶってそこに座っている。あたりは暗いけど、父さんが笑っているのが僕には分かる。今日は何かいいことがあったのかな。そっだといいのに。

僕は母さんに目をやる。ポーチに出したデッキチェアに腰掛けて、両手をひざの上に乗せている。皿洗いのせいでまだ濡れている見覚えのある青いエプロンをしている。僕は皿拭きを手伝っていただろうか。よくわからない。

今は夕暮れ時で、どこかで野球をしている声が庭に流れてくる。コリンズの野球チーム、コヨーテが、このかげろうのような世界のどこかのチームと試合をしている。びっしりと生い茂った楓の木が、夜風に吹かれてざわざわと音を立てる。真っ黒な木陰が、競技場から届く照明を遮っている。永遠に続く僕にとっての春のなかでは、この光景こそがいつまでも僕にとってのまぎれもない我が家そのものだ。

夢のなかで昼になっていた。雲が地表近くに漂い、綿のような塊が低く垂れ込め地面を覆っている。朝の冷気は春の暖かさへと変わり、蒸気は青空に霧散する。午前〇時、流れる雲が残っていったいくつかの雲の断片が、まるで破れたカーテンのように、山々の頂から垂れ下がっている。

まるで皿拭き用フキンみたいな空。僕はどこでこの言葉を聞いたんだっけ。なんにしる、今日のような雲を言い表すぴったりの言葉だ。

再び暗闇が訪れる。競技場からの照明が近づいてくる。野球の試合は音楽のリズムに変わっていた。

僕は毛布を蹴飛ばして、外を見る。そうだと思ったよ、窓に雨が打ち付けている。なぜだろう、今日は火星の隣に三日月が出るはずだと知っていたんだ。でも地平線のあたりには雲が垂れこめて、嵐が近づきつつある。

そして今、僕は激しい雨が降るなか車を運転しながら、ワイパーが刻むビートの合間に、フロントガラスの上をいく筋も小川のように流れる雨を見ている。前方では、雨と木々、まぶしく光るアスファルト、両側を通り抜けていくトラックが跳ね上げる水しぶきが、灰色の景色を織り成している。はつきりとした輪郭のない、ぼやけた風景だ。

水しぶきがフロントガラスに当たり、一瞬のあいだ道路がぼやけて見えなくなる。それに反応して、僕の顔、ちょうど鼻のあたりにアドレナリン注射の針がチクリとささったような感覚が走る。この世界にも恐怖は存在するのだろうか。もちろんそうに決まっている。

じゃあどうして僕はここにいる？ なぜ夢はこの場所に運んだのだろうか？僕はスイッチを切り替えてワイパーのスピードを上げて、デフロスターのスイッチを入れる。すると空気が曇ったフロントガラスに勢いよく吹きつけられ、十五センチほど

の曇りのない丸い部分を作り出す。車の前方で、長細い灰色の影が道路を横切る。まるで獲物を探しまわるカマスのようだ。ライトを点けると、路面に黄色い光が反射する。

もう一台、車が通り過ぎて、水しぶきをフロントガラスに浴びせていく。以前、この場面を見たことがあることをなぜか僕は知っている。何年も前のことだ。僕は右側を向いた。

誰かがいる。隣の助手席に座って、足をフロントガラスに乗せているので、その部分だけ小さくガラスが曇っている。

レイチェル・ドミニクだ。十五歳のレイチェル・ドミニクだった。

頭の中のファイルキャビネットの引き出しが開いて、山のような詰まった写真が床に広がる。レイチェルが歩道に新聞を落とした写真。こっちは父親が45口径の自動拳銃を装填している写真。もう一枚では、彼女が僕のシャツに嘔吐してる。

こっちの大判写真には、西ミズーリのなだらかな山々と平原に位置する小さな町チエロキーへ、レイチェルの両親に会うために車を走らせている僕が写っている。写真は動く。僕が行けたはずの場所、会えたはずの人たち、兄さんや友達、昔のガールフレンドのなかから、そして訪れることができたはずの楽しくわくわくする時間のなかから、僕はこの一九六六年一月、霧雨のそぼ降るみじめな金曜の夕暮れ前を選び出した。15歳のレイチェル・ドミニクと一緒にミズーリ州チエロキーへ向かう途中だ。

夢は続く。ひよこまひよこま続くひよこま。

「私、エンジンの上で料理ができるのよ。この話、もっしたかしら？」 レイチェルがダッシュボードに乗せた足は、ホコリの中にはつきりと跡を残していた。「パパがやり方を教えてくれたの。最初にすべての材料をホイールで包んで、エンジンをかけ

てウォームアップさせる。そして、フードを開けて排気管の上に食べ物を乗せるの。ワイヤーで縛っておけば、運転しても管からすべり落ちたりしないわ。三十分で料理は出来上がり」

シーンは上下に移動する。明らかに、僕が同意してうなずいている証拠だ。レイチエルが一息ついて、フロントガラスにさらに足の跡をつけているのが視界の隅に見える。どの跡も水蒸気の輪が周りを囲んでいた。

「すっごく簡単なの。でも気をつけなきゃダメよ。ホイルをしっかりと閉じないと、食べ物が変わな味になっちゃうの。まるでガレージの匂いみたい。とくにジャガイモはダメね」

この場所で情報を入力して持ち帰り、パートナーのジェリーの送ってもいいかもしれない。僕はハイウェイを走る車をチェックする。ほとんどが六〇年代半ばのフォードかシボレーだ。毎週どこかで開かれているクラシックカーショーで見かけるようなタイプだ。

「そうすると味が台無しになっちゃうの。だからホイルはきっちり封がされてるかどうか確認しなきゃダメ。今度ポットローストを作つてあげる。にんじんとジャガイモを使おう。もちろん肉もね。お腹すかない？」

「すいたよ」

「もし時間どおりに着けば、ママが何か準備してくれるよ。もし着かなかつたら『クク』で何か買っていかなきゃいけないかも。フィッシュサンドイッチは好き？ それとも私が持ってきたポテトサラダを食べてもいいかな。少し食べる？」

「サンドイッチまで待つよ」

「ほんとはね、ポテトサラダは私の好きなもののリストには入ってないの。私の『探求』の話はしたっけ？」

「ごや」

「自分が求める完璧な何かを、誰もが『探求』するべきなの。私は完璧なパイを探求してるわ。私のお気に入りはコナック
クリームパイよ。いちから作り方を習うつもりなんだ」

「僕はチエリーパイがいいな」

「大事なものはね、人生で何が大事なのかを見極めて、できるかぎりそのことについて発見を積み重ねること」

雨が小降りになって、世界は淡い茶色とキラキラと光るグレーの色彩に変わる。古い緑色のピックアップトラックが金切り
声をあげて左側を通り過ぎ、僕のフードに白い水しぶきを浴びせかける。地平線の上に灰色の雲が低く垂れ込めている。
南の暖かい空気の層に持ち上げられているんだ。さらに手前には、木々が雨に濡れた葉を揺らして、薄茶色の背景の中に浮
かぶ黄色い雲のように見える。

車がスピードを上げるとエンジンから低いノック音が聞こえる。どこからか声がする。「くそっ、オイルタンクに水が入った
みたいだ」 僕自身の思考だ。

だがこれはただの夢だ。明晰夢ではあるが、夢であることに変わりはない。

ファイルキャビネットの中のほかの写真が見える。パウンドストーンが僕に、「こつこつ夢を見る可能性があると言っていると
きの映像だ。」明晰な記憶を保持するには、脳は小さすぎます。ですがマシンによってプロセスのロックが解除されると、すべ
てが容易になります。過去の思い出が詰まった夢を見るかもしれませんが。その夢は過去トリップのときに目にする光景と同
じくらいリアルなものもあるでしょう」

ロックが解除されたのは明らかだ。だが僕はいまだに同じもの、同じ場所を見ている。

「ねえ気づいた？」 レイチエルが言う。「雨のなかの牛って、白黒のビー玉みたい」

「気づかなかったよ。雨の中、しっかりと車を走らせることに夢中でね」

僕は、僕自身のまわりを見回す。デフロスターから出てくる暖かい空気と、窓から流れ込んでくる涼しい風を感じる。そして今、夢の中で、どんな匂いがしているのだろうか。僕は想像する。濡れた内装とオイルの匂いにまじって、レイチエルがつけているゼストのヘブン・セントとハンバーガーの匂いだろうか。そりや、最高だろう。

もちろん、これが幻に過ぎないことはよく分かっている。僕が見ているものはすべて、遠く昔に過ぎ去ってしまったことだ。雨も車も存在しない。そしてレイチエル・ドミクも。現実の夢のなかでは、本当は僕はひとりぼっちだ。

「火曜日にクラス写真を撮るって話したかしら？ 生理が始まる日だから、もうにきびができてるの。それって最悪じゃない？ 恥ずかしくて、きつとしゃがみこんじゃうわ。この顔をカメラの前にさらさなきゃいけないのよ」

またトラックが追い抜いて行き、フロントガラスが水しぶきで灰色に染まる。

同じ話を、それとも似たような話だったか、娘から聞かされたことがある。

「パパ、先生たちは鼻ピアスをつけちゃいけないって言うの。クラスを混乱させるからだって」

「そうかもしれないね」

「でも、鼻ピアスはみんなしてるのよ。とにかく、それって言論の自由にかかわる問題だと思うの。裁判を起させるってママは言ってた」

「裁判にかけてママは専門家だ。パパは作ってるのは「マーシャルだからな」

「もう、パパったら。本当に頼りになるわね」

勢いを増した雨が、フロントガラスをくすんだ灰色の幕に変える。

「信じられないよ、この雨！」僕はワイパーの速度を最高にする。

レイチエルが体を寄せてきて、腕を僕の体に回す。「マイケル、この天気はあなたのせいよ。なんでだか分かる？ だってあなたは雨男だもの。あなたに出会う前は十一月の夜更けに嵐に遭ったことなんてなかった。なのにこれを見てよ。あなたがそういうふう話す時はいつも、雨とか雷とか、いろんなことが起こる」

「そっつうふうにして、何だよ」

「分かるでしょ、だから——」

電話のベルが鳴り、夢は消え去った。

目を開ける。朝になっていて、僕はサン・アントニオの自室に戻っていた。窓の向こうに、どんよりとしたグレーの空が見える。だけど外の気温は分かったもんじゃやない。

再びベルが鳴り、僕は向きを変えて電話機に向かう。向きを変えるとき、まるで胃が円周三十センチほど膨張する感じがする。まずいな。

もういちどベルが鳴り、そして切れた。

よかった。誰が電話してきたか知らないが、あきらめたらしい。

寝返りをうって仰向けになり、目を閉じる。鼓動は速くなり、胃はすぐにでも中身を戻してやると、脅しをかけてくるようだ。僕は起き上がろうとする。

成功。

ところが今度は、顔に十キロの重りをテープで張られたような感じがする。もし下を向いたら、あごの下のたるみが伸びて床まで届きそう。昨日の夜、どこかへ行ったのだろうか。思い出せない。コーヒーを飲めばよくなるかもしれない。何の夢を見ていたのだった。デビーの鼻ピアスの夢だったか。

また電話のベルが鳴る。

「ミッチェルさんですか？」

「ああ」

「フロントのセキュリティデスクに、荷物が届いています」

「誰からだい」

「名前を訊きませんでした」

「分かった。階下まで取りに行くよ」

「それから、パウンドストーン博士から伝言があります。今日の午前九時三十分にお会いしたいそうです」

「ありがとう。助かるよ」僕は電話を切って時計を見る。九時までに十分だった。

Core

九 コア

僕はすばやくパウンドストーンと握手を交わすと、デスクの前の革張りのソファにくずれるように座り込んだ。「遅れてすみません」

「構いませんよ」 パウンドストーンは「に」りと笑う。「調子はどうです。何か思い出せましたか？」

「ええ、かなり」

「過去は楽しかったですか。ビジネスに役立つような当時のカルチャーを持って帰ってこれましたか」 パウンドストーンは長い指を尖塔のように立ててみせる。

「いくつか見つけました」 僕は肩をすくめる。「一九六〇年モデルのフォードやシボレーを何台も見ましたよ」

「ああ、そうですね」 パウンドストーンはくすりと笑うと、背もたれに体を預けた。「二年前、われわれが初めてこのテクニックを模索していたとき、何度もトリップを自分で体験しました。その時、毎年毎年、こつもすべてが様変わりするものかと驚きましたよ。車もモデルチェンジします。ある年にはフィンが流行る。翌年にはフラットな実用車が流行って、しかしメタルよりプラスチックが多く使われていたりするんです」

「そついうものですよ。本当にね」

「過去トリップに何か問題はありませんでしたか」 パウンドストーンの口元に笑みがのぞく。おそらく緊急停止の話を知っているのだろう。

Dreamer 9

Core

「レオナルドに連れ戻された話を、聞いているんじゃないやありませんか」

「彼はボタンを押すのが早すぎます。そう思いませんか」 笑みは顔中に広がった。「そのせいで問題は起こりませんでしたか。頭痛とか、吐き気はどうですか」

「ありません」

「レオナルドのテクニックは私自身も経験済みです。痛みは伴うが効果は確かだ」 パウンドストーンは僕の頭部に目をやる。

「その小さな火傷が厄介なことになったら、知らせてください」

「そうします」

「プログラムに対して不満はありませんか」

「いいえ。なぜですか？」

「被験者のなかには、感覚が視覚と聴覚に限られているのを知って、多少不満を持つ人もいます。そういう人はすべてを経験したいのです。触覚、味覚、嗅覚もすべてです。そういうものをトリップで得られないことが気になりませんか」

「確かに、残念だとは思いますが。でも映像と音に関しては、どんな夢よりもリアルだし、現実とほとんど変わりませんよ」

「そうですね」 パウンドストーンはうなずく。「われわれは催眠における暗示でいつもこんな一文を入れます。『感じるものを感じてください、そこにあるものを味わってください』などとね。しかしそれに応えて何かを感じた被験者はひとりもいないようです」

「そんな」 できるんですか？ 」

Dreamer 9

Core

「記憶が脳の中に蓄積されている仕組みの問題だと私は思っています。確かに私たちはすべてにアクセスすることはできません。しかし誰にも分かりませんよ。研究を続ければ、問題の理解も進むでしょう」

パウンドストーンは次に何を言おうか考えているように、一瞬デスクを見つめる。「マイケル、あなたの五回の過去トリップのレポートに目を通す機会がありました。そしてじっくり考えてみたのですが――」

手のひらが汗ばむのを感じる。「何か問題でも？」

「いえ、そうじゃありません」 パウンドストーンは僕を見る。「まったく反対です。あなたはどっやら向こうですばらしいコントロール能力をお持ちのようだ。テープから判断すると、あなたのナビゲーション能力はここにいる誰よりも優れています」

「そうなんですか？」 僕はパウンドストーンを見つめ、テープに何が録音されていたのだろうと思う。

「この件に関してトム・ゼイとも話しましたが、ぜひロングランをやってみませんか」

「なんですか？」

「心理面のプロフィールも申し分ありません。ストレスの管理能力も並外れています。もちろんモチベーションもある。ロングランのすばらしい候補者になれるでしょう」 パウンドストーンは微笑む。

「複数の人格が現れる可能性があると聞きましたが――」

「区分化のことをですか？」とパウンドストーン。「ええ、ありうることだとは思いますが。つまるところ、私たちはそれぞれの人生の場面で、別々の人格を持っていますから――」

「わかります。しかし――」

Dreamer 9

「しかしですね、ほかの人格を導く核となる、つまりコアの人格があるのですよ」 パウンドストーンは善良そうな笑みを浮かべる。「そしてコアはそういった弊害からは無縁であると私は確信しています」

「じゃあ、僕がロングランを行ったとしても、違う人格になって戻ってくるなんてことは無い、そうですね？　というのも、僕は人格にかなり問題を抱えているので」

「保証しますよ。マイケル」 顔一面に笑顔が広がった。「何も問題は起こりません。それに念には念をいれて徹底的な催眠鑑定を行います」

「なるほど。追加料金がかかるんですか」

「もちろん必要ありません」 パウンドストーンは指を立ててみせる。「ただ、結果を公表することに同意するサインをお願いしたい」

「なんの結果です？」

「研究結果ですよ。もし形にして発表することになった場合、その結果のことです。ですが、発表することにはまずなりません。ただ形式上のことです。弁護士がやれとうるさいんです。微に入り細に亘れとね」 パウンドストーンはデスクの上の用紙を「こちらに押ししてよ」す。

「そうですねー」 僕は法律用語がびっしりと並んだ紙切れを見つめる。用紙の下には、サインとイニシャルの欄があった。「こういう合意書を以前にも見たことがある。」損失を肩代わりさせられるような契約じゃありませんよね」

Core

ちらりと苛立ちがのぞく。「単なる形式です。最初の合意書の一部ですから、すでにサインしている内容ですよ。ですが資金提供団体は、被験者がプロセスとそれに伴うリスクを常に理解していることを望んでいます。申し上げておかなければいけません、そのことに関してはすでにお話しているはずですよ」

「しかし最初にサインをしているのなら、どうして――」

「それは、ロングランのためには、さらに踏み込んだサポート方法を使用するからです。たとえば点滴などです」。パウンドストーンは体を乗り出す。「マイケル、来週ロングランを始めてもいいんですよ」

「本当にそう思いますか？」

「最初は、ミニダイヤモンドランからです。おそらく四十八時間以内になるでしょう。もちろんメモリーバンクの中では、それより長いことも短いこともありえます。たとえば、オットーは十時間のランを定期的に行っていますが、記憶の中で感じる体験はもっと長いと言っています。時には数日になることもあるそうです」

「数日ですか」。僕は考えてみる。ブレンダ・レイシーと過ごす数日間か。

「いつもどおり、レオナルドと連絡を取ることは可能です。話す前にシーンをロックすることだけは忘れずに。当然のことですが、そうしないと喉頭の非常に微細な揺れが――。パウンドストーンは自分の喉を軽くたく。「速くなり過ぎて検出器がキャッチできません。この通信に役立つような高速のコンピュータを準備しているところですが、今のところ旧式のスローなプロトコルで我慢しなければいけません」

「向こうで数日過ごせるんですね。考える時間をくれませんか」。僕は用紙をデスクの上に置く。

Dreamer 9

Core

「いいですよ」。パウンドストーンはうなずく。「先に進む決心がいたら、催眠の短いセッションを入れましょう。下位構造まで降下させます」

「どういう意味ですか、それ」

「「自身の意識構造を知っていただけます。先へ進む前に、すべてを適切な形で統合していただけます。それをすると、マイケル・ミッチェルを構成しているいくつもの人格と出会うこととなりますが、どの人格にも分離など起こらないと、それで確認できると思いますよ」

「分離？」

「一時的な混乱です」。パウンドストーンはそっけなく言う。「数分で終わります。心配することはありません」

「わかりました」

「なんにしろ、通常の催眠と変わりません。最初にここにいらしたときに行った誘導前催眠と非常によく似ています。それから、当然ですが仮契約にサインを頂かなくてははいけません。形式だけのものですが、サインがないと先へ進めないんですよ」

「了解しました」。僕は座りなおす。「サインしましょう」

「良かった」。パウンドストーンは契約書類を僕に突き出した。「ペンをお貸ししましょうか」

暗闇。僕は目を閉じてセッションが始まるのを待っている。頭のなかにレオナルドの声が響く。「パウンドストーンが深みに連れて行けるかって？」「冗談言っちゃいけない。あの人は、血の奥底にまで連れて行きますよ」

Dreamer 9

Core

パウンドストーンとの初めてのセッションを思い出す。 — その時に僕は自己の宇宙を旅する方法を学んだ。 — イメージをロックして、シーンを隅々までスキヤンし、ズームインする。このテクニックは、どれもうまくいった。 — つまり僕のナビゲーション能力は悪くない。そうでなければロングランを勧められはしないだろう。

そうだろうか？

「マイケル」 目の後ろの灰色のスクリーンから響いてくるパウンドストーンの声が聞こえる。「以前のように、体が次第に重くなるのを感じます。以前のように、あなたはさらにリラックスします。 — これほどリラックスできるとは考えたこともなかったほど、あなたはリラックスします」

パウンドストーンの声は僕の思考を捕らえ、眠りの淵まで僕を連れて行く。そのあいだ体はずしりと重くなり、つぎに水銀へと変わり、そしてすべてが消えうせ — あとには僕だけが残る。「完全なあなたを形作っているあらゆる部分へと、あなたは降りていきます」

あらゆるところから声が響いてくる。朗々と響く声。「あなたは深く降りていくエレベータに乗っていて、別々に分離されたあなた自身に出会います。なんの不安もありません」

僕はいわば頭のなかの工作室の上にぐらさがって、轟音を立てる上層部分、つまり思考の工場の上に浮かんでいる。「ここから、僕という存在の広大な網の目の上を、感情とロジックが動いていくのが見える。とところどころ輝きを放っている思考という果てしない雲は、ほかの雲と反応して、広大な光り輝く心的組織体を作り出している —、それが僕だ。

「あなたは深く降りていきます。あなたの記憶がある場所を体験します。恐れや痛みは、何もありません」

Dreamer 9

Core

僕はあたりを見回す。その瞬間、僕は子供時代の情景を垣間見る。明るい緑の芝生、晴れ渡った空、白い歩道の夏だ。振り向くと、青い壁紙の張られた小さなベッドルーム。そして今度は、あの雨の金曜日の瞬間だ。学校へ行く途中、ヘッドライトに照らされる濡れた茶色い舗道に黒い雨靴が見える。

「あなたは、行きたい所へ行くことができます。そこで見るべきものを見て、聞くべきものを聞きます。私の声が聞こえたら、右手の人差し指を立ててください」

僕のまわりのどこかで、細胞から放たれた閃光が僕の背骨と腕にシグナルを送る。どこかで、自分の中のどこかの部分が、パウンドストーンが出す要求に従っている。

「あなたは深く降りていきます。今までに経験したこともないほど深く降りていきます」

エレベーターは下降する。僕は体内の時計が規則正しく時を刻む音を聞く。テンポの速い、規則正しい行進曲のようだ。音が大きくなるにつれて、それが完全に調和の取れたいくつものパターンから形成されていることに気づく。誰かがラジオをつければなしにしているんだ。

僕はさらに深く降りていき、ぼんやりとしたシグナルが飛び交うなか、自分の息遣いの音を聞く。まるで遠くで響く雷鳴のように、一分間に十二回のビートを刻む。その反響音が聞こえる。はっきりとした「ころころ」と言う音と、それに続いてゆっくりと空気が吐き出される音。吐き出す。「ころころ」。吐き出す。胸部が動く。

僕は体内も、別のリズムがあることにも気づく。千分の一秒の正確さで光を放つ神経だ。水でできたこの体というマシンにある、耳介、心室、動脈に起こる反応だ。

Dreamer 9

Core

降りていくにつれ、自分が分断されていくのを感じる。この波打つ空洞のなかでは、僕はもはや僕ではない。僕たちだ。そのうちの一人は、上空の表面あたりにいてパウンドストーンの声に耳を傾けながら、抑揚のない単調な口調で語られる指示に反応する。ほかの者たちは、パウンドストーンの言葉の中に手がかりを探して、彼が何を言おうとしているのか理解しようとする。そして僕たちは、このプロセスが展開していく様子を見守っている中心人格の存在を感じる。

「もっと深く」

現実が消え去り、一 霞がかかったような一連の絶え間なく動くスナップ写真に取って変わる。未来へと伸び過去へと遡っていく、一瞬一瞬という粒で構成された細長いハイウェイを、その霞は形作っている。

エレベータが止まる。一 シャフトの暗く混沌とした底の少し手前だ。ここから更に深く行く理由はない。一 この場所にロジックはない。意味も愛も、人間性すらない。問いも答えもない。あるのは渦巻いている動きだけだ。

次第に僕はまた一人へと戻っていく。シーンは合体し、誰かが、あるいは何かがこの混沌から物質を作り出しそれに形を与える。僕は光り輝く僕自身のエンジンの下方に立っている。一 ブンブン、ガチャガチャと音を立てる火花と電子と思考の工場だ。一 それはなだらかな丘の上に置かれている。頭上には紫色の雲ひとつない空に透けて、放射状に走る細かい光の波がどこまでも続いているのが見える。

僕はエレベータに乗り込み上昇ボタンを押し、世界の屋根へ向かって上っていく。一 混沌を抜けて、スイッチング・ステーションを通り過ぎ、門脈を抜け、はるか遠くの上空へ。昇っていく途中で、この場所を覚えていなくては、と気づく。一 この道筋を覚えていなければ、なぜなら僕は、いつかここに帰ってこなくてはならないから。

Dreamer 9

Dreamer 9

Core

「満ち足りてリラックスしたあなたは、目を覚まします」
僕を呼び戻そうとする。パウンドストーンの声が響く。でもそんなものは必要ない。
僕はすでに戻っていた。

十 周辺視野

セキュリティカウンターの若い女性は僕を胡散臭そうな目で見る。女性の長い髪はがっしりとした肩まで伸び、小さなトランシーバを隠している。おそらく四十五サイズのベルトにお腹の肉をぎゅうぎゅうに押し込んでいるんだろう。

「IDを見せてください」

襟の折り返しについているプラスチックのカードを見せる。彼女は肩をすくめ、サインしろと言わんばかりにクリップボードを差し出す。そして靴箱くらいのサイズの小さな茶色い小包を手渡す。特別宅配便だが差出人の名前がない。

「中身は何だろうね？」僕は尋ねる。

「ボトルですよ」彼女は答える。「たぶん何かのお酒でしょう。X線で調べました。こういうものを送るのは法律に違反するんですけどねえ」

「ありがとう」僕は小包を受け取ると、エレベータへ向かう。

部屋に戻ると、包装紙をはがして箱を開けてみる。警備員は正しかった。中身は酒、しかもメキシコのブランデーだった。ナポリオン十三世。カードがテープで貼り付けてあった。

「マイケルへ。気に入るといいんだけど。空港で買ったの。免税品店で一日中時間を潰してやっと帰りの飛行機が取れたわ。たぶん来週、またこちらに戻ると思う。新しいパートナーは気難しいのよ。ブランデーを送るからこれで乗り切つて。元気で。リンダ」

Peripheral Vision

「元気で、って何だよ」 ボトルを見る。けばけばしく大きなボトルのラベルには、サーベルを腰につけて馬に乗った男が描かれていた。文字はすべてスペイン語だ。ナポレオン十三世のボトル一本が、僕に一体なにをしてくるって言うんだ。大脳皮質にニコニコマークでも彫り付けてくれるっていうのか。

ボトルをドレッサーの一番上の引き出しにしまう。酒が漏れたりしてなきやいいけど。

……★……

「誰かさんは、二日酔いじゃないかしら？」 ゲイルは微笑みながら、慎重に薄切りのハラペーニョをハンバーガーにはさんでいる。

「違うよ」 僕はゲイルの隣にトレイを置き、料理をじっくりと眺める。エンチラーダと豆の煮込み、フレンチフライとニンジンの入ったシーザーサラダらしきもの。

テーブルの向こう側には、ローエルとオットーがカーレースに関する細かなあれこれについて話し合っている。その近くでは無口なコルトレーンが、大皿に盛られたメキシカンソーセージとスクランブルエッグを神妙な様子で口に運んでいる。

「最近の車はどれもガラクタだ」 オットーが言う。「これまでにアメリカで作られた最高の車は一九六五年のフォード・ギャラクシー五〇〇Xだ。シヨールームから持ってきたばかりの車でも、時速二百五十キロ近く出た」

「ガソリンを食いすぎるよ」 ローエルが肩をすくめる。「ガロンでせいぜい十三キロがやっとでしょう」

「昔、フォード・ギャラクシーに乗ってたよ」 コルトレーンは思い出に浸って頷く。

Dreamer 10

「外装は黒、内装は赤でね。大型で実にゆったりとした」

「タイヤのついた鯨という感じだな」 ローウェルは首を振る。「まるでリビングルームだ」

「私の車もそうだったよ」 コルトレーンが頷く。

ゲイルが言う。「ねえ、どこかに閉じ込められた男たちって、お互いを攻撃し始めるって知ってた？」

ひげ面のオットーがにやりと笑う。「話の発端は、『存在は本質に先行するの？』という話題だったんだ」

「どちらもあり得ると思うな」 フレンチフライをマヨネーズにつけながらローウェルがつぶやく。「量子力学のトランザクシ

ヨナル理論はそう言ってますよ。実際、それって僕たちが今やっていることに関係がありそうだ」

「ああ、かもな」 オットーはくすりと笑う

ゲイルが胡散臭そうに顔を上げる。

「いいですか」 ローウェルがフレンチフライを二本掲げて見せる。「光を含むあらゆる物理的相互作用には、二種類の波がある。一 つは未来へと旅する波で、もうひとつは過去へと旅する波だ」 ローウェルは二本のポテトフライを押し付ける。

「二つの波が現在で出会ったとき、お互いが相殺される。そこで」 ポテトを口に放り込む。「もし二つの波が過去へと押し

戻されれば、本質が存在に先行する」 ローウェルは曲がったポテトを取り出す。「でも時間の輪が閉じられていたら、

話は別だ」

「そのポテトも食べる気なの？」 ゲイルが聞く。

「もちろん」 ローウェルはポテトをマヨネーズにつける。

「でもね、オットー」 ローウェルが言う。「そういうことに一応の知識は兼ね備えてる者として言わせてもらいますよ。ケラーが言うには、脳は全く夢を見ないしー 言い換えれば記憶を蓄積しないそうです。脳はただ、時間と空間をスキャンして、実際の出来事のサンプルを抽出するだけらしい」

「たわ言だな」 オットーは笑う。「ヨーロッパ人に言わせれば、それは明らかに第一原理から逸脱しとるぞ」

「何の話をしてるのか、さっぱり分らないよ」 僕は白状する。「車の話ならなんとかついて行けるけど、哲学とかその類の話はさっぱりだ」

「冗談でしょう？」 ローウェルが笑う。「あの機械に乗り込むとき、毎回、自分でやってることですよ。夢を見るたびにやってることかもしれない」

「ローウェル、大学での専攻は何だったの？」 ゲイルはポテトを食べながら尋ねる。「心理学。でも哲学の学位も持っているし、副専攻で数学も学びました」

「そりゃすごい。本当に大したもんだ」 僕は自分の皿を見る。「サラダの中に入ってる、この小さな種は何なのか誰か知らないか？」

「カボチャの種だよ」 コルトレーンが言う。「健康にいいぞ」

「ローウェル、あんなー」 オットーが言う。「医者として言わせてもらえば、人は夢を見ている間、過去に戻っているとってお前さんの主張には異議を唱えたいね。夢のメカニズムははつきりしてる。夢は深層でのランダムな活動の結果だ。おそらく神経細胞が余分なカルシウムを排除しているのだから」

「カルシウムね」 ゲイルがつぶやく。「なんにしろ、私の体にはカルシウムが必要なんだけど」

「ケラーがどうしているか、誰か知りませんか？」 ローウェルが尋ねる。少し頭を冷やしたようだ。「第十ラボでロングラ
ンを始めたとき聞きましたよ」

「何も聞いてない」 オットーが言う。「だが順調に進んでるだろう。ケラーのことだから一九五一年あたりに戻って、ど
かの化学会社のオフィスを歩き回ってるんじゃないか」

「なんだか危なっかしいな」 ローウェルが言う。「ケラーがガスマスクをつけるのを忘れないといけれど」

「ヨーロッパですか？」 ローウェルが応える。「過去は変えることができるかと初めて提示したのは、ヨーロッパの医者だった
んだけど」

「ふむ」 オットーが言う。「シユミットのレトロサイコキネシス実験だな。確かにシユミットは単純な遅延選択を実に巧妙に改
良した。だがな、過去は変えたとは一度も主張してないぞ……」

「でも、それ以外にシユミットの実験を説明する方法がありますか？」 ローウェルが打ち返す。

「一体何の話をしてるのよ？」 ゲイルが二人を見る。

オットーは二つの質問を両方とも無視して、コルトレーンの方に向き直った。

「君はシャーマンや祈祷師と付き合いがあったそうじゃないか。彼らなら、こういう理論に対してどう意見を述べると思っ
かね」

「そうだねえー」 コルトレーンはしばらくのあいだ、テーブルを見つめる。「シユシヨーン・インディアンたちは、おそろしくこ
う言うだろう。『もしそれが役に立つなら、おおいに利用しろ』とね。彼らは徹底して現実的なんだ」 コルトレーンは肩をす
くめる。

Peripheral Vision

ゲイルが腕時計に目をやる。「もう行くわ。この議論をもっと聞いていたけれど、今日の午後にはトリップの予定が入ってるの。それに髪がボサボサだし」

ゲイルがドアを開けて出て行くと、オットーが首を振る。「今日の午後トリップがあるからといって、どうして髪型の心配をするんだ？ 向こうでパーティでもあるっていつのか？」

「多分そうなんだろう」コルトレーンは、出て行くゲイルの姿を見つめている。「なんにせよ、ここよりはずっと楽しそうだし」

.....★.....

Dreamer 10

「マイケル、数を数えて」ヘッドフォンにゼイの抑揚のない穏やかな声が響く。今日の午後は、レオナルドではなくゼイが誘導を担当するんだ。僕が目を開けると、ヘルメットのバイザーの暗闇が目に入る。僕は十から一までの数を思い浮かべる。

「ありがと。じゃあ声紋を入力しますから、もう少し待ってください」

カチリという音が聞こえ、もう一度同じ音がする。ゼイが通信制御装置をいじりまわしているのだろう。

「マイケル、ロングランを予定しているそうですね」

「今朝。パウンドストーン博士と話したけど、また結論は出していないんだ」

「あなたは素晴らしい能力を持っています。実に興味深いロングランになると思います。今日は何時間くらい向こうで過し
しましょっか」

Dreamer 10

「分らないな。いつもは二十分か三十分くらいだったけど」
「それは記録で見ました。今日は八時までスケジュールが空いています。二時間くらいやってみますか？」
「二時間も？」
「あなたのEKGから目を離さないようにします。もしよければ、ラベル付きのブドウ糖を投与して、陽電子放射トモグラフィのスリッチを入れてもいいでしょう。痛みは何も感じませんよ」
「それって——」
「側頭葉の活動を追跡する役目を果たします。もし何かトラブルに巻き込まれたら、こっちへ連れ戻します。準備はいいですか？」
「オーケー」 まるで宇宙旅行にでも出かけるような気分だ。
数分間の静寂が過ぎ、ゼイの声がもう一度聞こえる。「いいですね、脈拍が少し落ちるまで待ちましょう。よし。すべて順調です。過呼吸にならないように気をつけて。そうすればいい過去トリップになりますよ」
「分かった」
「マイケル、喉頭マイクを取り付けてますので、何か言いたいことがあったら、それを思ってください、つまり自分自身に語りかけるという事です。いいですね」
了解。

金属的な怒鳴り声がかすかにヘッドフォンのなかに響く。僕の声だったのか？

Peripheral Vision

「結構。シート派をロックします、下方にいろんなものが見えると思いますが、ロックが完了するまで、少しの間そこで浮いててくれませんか。……どうも。どうぞいい夢を」

僕は夏の夜の暗闇へと漂いながら降りていく。漆黒の夜空に羽のように浮かぶ薄雲の向こうに、光り輝く満月が見える。黄色みがかった白熱灯の光が、近くの家々に灯を点す。

レイチエルが僕のデニムシャツの袖を握っている。「来週、ブレンダ・レイシーがサマーキャンプから帰ってくるのよ。彼女に会うつもりなの？ 会ったりしたら、あたし死ぬからね」

「シートリズムを捕らえるために、新しい装置を導入しました」 機械が回転速度を上げるなか、ゼイが言う。「正確な側頭葉リズムをロックするために、設計されました。違いを実感していただけると思いますが」

気味の悪い音がヘッドフォンの中で広がっていく。まるで小学生が同じ音程で合唱をしているようだ。音はさらに大きくなり、僕はなかなか集中できない。体はどんどん軽くなる。ゼイは一体何をしたんだ？ 僕の側頭葉にどんなことをしてるんだ。

音はどんどん大きくなる。悲鳴を上げる乗客と、歌う天使たちを乗せて地上に突っ込むMD八〇ジェット旅客機のように。その時、鐘の音がした。腹の底に響き渡るような鐘の音で、僕の体には振動が走り、体は思考から解放された、下方へ、深い穴の中へと落ちていく。

光が現れた。僕の人生の細長い流れが過去へ向かって伸びている、僕は近づいてみる。これは現実なのか？

「マイケル聞こえますか」 またゼイの声だ。
聞こえるよ。

Dreamer 10

二つのライトが目に入ったかと思うと、一九六〇年型のシボレーが角を曲がって現れる。がっしりとした太い腕がドアに乗せられていた。

「ほら、ルーニーが迎えに来たよ。行かなきゃ」

「明日も会える？」

「多分ね」

Peripheral Vision

「なあ、迎えの車がきてるんだ。仕事に行かなきゃ」

僕の家の前に、二人は立っている。もうとっぷりと暗くなって、おそらく十時十五分頃だろう。僕はジーンズをはいていて、青い長袖のデニムシャツはそこらじゅうに油染みができていた。それと対照的に、レイチエルは淡い色のショートパンツと袖なしのシャツを着ている。白いヘアカーラーで巻いた髪は薄手のスカーフで覆われていた。

彼女の質問に答えるのを避けるためだろうか、僕はまっすぐに地面を見つめている。水銀灯の光を受けて、僕の黒い作業ブーツも、アスファルトも道の小石も、すべてが青く染まって見える。なんとレイチエルは靴を履いていなかった。裸足だった。

ロツクだ。彼女の足に斑点が五つか六つ見える、おそらく蚊か、この土地にあちこちにいるツツガムシに刺されたのだろう。さらに僕たちは、レイチエルの車、水色のマーキュリー・コメットの脇に立っていることに気づく。どうして彼女は運転できたんだ？ 五月に十五歳になったばかりなのに。おそらく法律を破っていたんだろう。

そう、一九六六年の夏はこんなふうだった。完璧な褐色の肌と見事な脚を持つ美しくセクシーな十七歳と、髪にはカール、脚には蚊に刺された跡をつけた無免許運転の騒がしい十五歳のどちらかを選ばなければならなかった。

ロツク解除。

Peripheral Vision

「パパとママがチエロキーへ私を連れて帰ろうとしてるの。もし帰ったら、もう二度とあなたに会えないわ」
「また会えるよ」

「お願いだから、ブレンダ・レイシーと会わないで」

「レイチエル、僕もう行かなきゃ」

「気をつけてね。怪我なんてしないでね」

僕はルーニーの車に乗り込み、ドアを閉める。ルーニーはくるくるとした金髪の温厚な大男だ。彼は大きな掌をハンドルの中央に置いて、運転していた。手首を捻るだけで車が方向を変える。

「ガールフレンドかい？」 青いコメントから遠ざかりながらルーニーが訊く。

「違うよ。ただの知り合いさ」

「ケンカでもしてたのか？」

「ああ、明日ブレンダがサマーキャンプから戻ってくる」

「そりゃ、まずいことになりそうだな」

「ああ」

「お前なら、うまく切り抜けられるさ」 ルーニーはラジオのスイッチを入れる。僕はラジオにダイヤルがないことに気づく。ずっと永遠にシカゴのWLS八九〇にチューニングされているんだ。ギターのサウンドが車内に響きわたる。今まで聞いたことのない曲だ。

「ゼイ博士」

Dreamer 10

「なんですか、マイケル」

「ジュークボックスをオンにしてくれないか。データがある。曲が聞こえるんだ。バンドがこんな歌を歌ってる。『好きな子にはこうしなきゃ』 あとの続くのはこんな歌詞だ。『彼女の手を握るのは誰、どうすれば彼女の気持ちがかかるのか…』」

「ジュークボックスの扱い方が、いまひとつよく分からないんですよ。レオナルドが現れたら、彼に頼みましょう。おそらくすぐに曲名を割り出してくれますよ」

「ありがとうございます」

十時二十五分のニュースの時報が聞こえる。依然として続くベトナムの惨状、米軍の被害は小規模だとラジオが伝えている。ルーニーがラジオを切る。「こんなもん聞きたくないよ。I・A（徴兵甲種合格）を受け取ったばかりなんだ」

「ウンだろ？」

「ウンじゃない。来年の今頃にはベトナムにいるだろうな。先週十八歳になったばかりだけど、きつと十九歳までは生きていられないよ」

僕たちは言葉もなく黙り込み、ルーニーは車を回して、モンローへ続くハイウェイへ乗る。窓が開いているから、風の音しか聞こえない。

僕の計算だと、その三十分後くらいだろうか。僕は工場にいた。数え切れない亜鉛ポットから立ち上がる蒸気が輝く白い靄となって天井あたりに立ち込めている。金属が切断され、折られ、落とされ、粉碎されるガチャン、ガチャンという音が絶え間なく聞こえてくる。

二時間を通える仕事場の中から、工場でプレス機を扱う仕事を僕は選んだ。工場の白いコンクリートの壁と薄汚れたセメントの床には、金属の削リクズと、切り落とされたいろいろな形の破片が散らばっている。そんな光景が、安っぽい蛍光灯のまばゆい光のした、チラチラと輝いている。

僕はプレス機を操作している。鉄のブロックに固定された金属刃と平らなプレートとを備えた、ぐるぐる回る鉄の巨大な歯車だ。思い出した。これが一九六六年の夏のアルバイトだった。足元のスイッチを押すと、ブロックが降りてきて、プレートの上のものをすべて切断する。アルミ、亜鉛、あらゆるものをバツサリと。機械のどこにも安全装置は付いていなかった。

この夏、誰かが腕を失ったんじゃないやなかった。救急車と赤いライトを覚えている。誰かが床に転がって叫んでいる映像が記憶にある。そのとき微笑んだブレンダの映像が浮かぶ。シャツのボタンをはずし、僕があげた指輪をつけたチェーンを首から下げている。その映像は一瞬きらめき、そして消えてしまった。

木製のパレットの上にはまだ切断されていないホーリー社のキャブレターが山積みになっている。その山へ僕の手が伸び、ひとつを掴み、ブロックの上へ乗せる。僕は足元の光り輝く鉄のレバーを見る。まるで、黒い油と金属の削リクズであふれる池に立っているようだ。

カチツ、そしてガチャンという音が響く。光り輝く金属の刃が容器に向かって落下し、キャブレターだけをあとに残す。僕の手は次のキャブレターを掴み、ブロックの上に置く。

カチツ、ガチャン

カチツ、ガチャン

僕の左側には木製のパレットが天井まで積み上げられていて、そこには自動車の送水ポンプや燃料ポンプ、ヘッドライトなどの、きらきら輝くアルミや亜鉛製の部品が並べられている。右側の鉄製の容器には金属の削りカスがあふれそうだが、プレス機から排出される、そのギラギラとして丸まった破片はオイルにまみれている。

それほど遠くないところでは、スチール製の油で汚れた水圧プレス機がガチャンと閉じられ、煙草をくわえた太めの作業員に、茶色いオイルの霧を浴びせかけている。建物の隅では、ドアがぱたんと開け放たれ、亜鉛ポットの鑄型を積んだ黄色いフオークリフトが音を立てて入ってくる。

ミスーリ鑄型工場の夜間勤務だ。

カチツ、ガチャン！ 型抜きされたキャブレターが金属の容器の中に落ちる。僕は木製のパレットに手を伸ばし、次の部品を取る。

僕の思考の中に、ブレンダの姿が絶え間なく浮かんでくるのが見える。『ムーンリバー』をピアノで弾いているブレンダ。そして彼女の家の裏庭のプールで、顔の水滴を振り払らうブレンダ。ブロードの髪が後ろに撫で付けられている。

カチツ、ガチャン！

ある特別な瞬間を除いて、人生とは大体こんなものだろうと僕は気づく。退屈で、同じことの繰り返し。そして時には危険なこともある。刃がガチャンと下ろされ、僕の手から数センチのところで金属が切断される。

カチツ。

Peripheral Vision

どうしたんだ？ クラッチのせいでハンマーが作動しない。僕は金属の歯車をチェックする。――ちゃんと回転している。機械は稼働状態にある。僕はレバーを蹴りあげると、クラッチの内部に金属片が挟まっていたのに気づき、手を伸ばしてそれを取り除く。

なぜか僕は切断刃を見上げている。――平らな金属プレートに取り付けられた、鋭い刃を持った長方形の箱型の金属刃だ。近寄ると、箱型の刃の先端がキラキラ輝いていることに気づく。数え切れないほどの亜鉛とアルミニウムを切り刻んできたからだろう。長方形のギロチンだ。

カチツ。靴で足元のスイッチを踏む。何も起こらない。スチールのブロックは、ピクリともせず宙にぶら下がっている。故障だ。

カチツ、カチツ、カチツ、カチツ。

こんなの退屈だ。シーンをロックする。金属のギロチンをスキャンし視線を移すと、ジーンズとチェックのシャツを着た若い作業員が、プレス機の上に手を振り上げたままの姿勢で動きを止めているのが見える。隣では別の作業員がちょうど煙草を投げ捨てたところだ。白い小さな筒が、床からちょうど半分あたりのところで動きを止めている。――放物線を描いて飛ぶ煙草のスナップショットだ。

この凍りついたような動きのない世界で、何か奇妙な、意外なものに気づく。周辺視野を越えたあたりで何かが動いているんだ。

ガチャン。

この場面の上端に、なにか恐ろしいものの存在を感じる。――何かが近くにある。

Dreamer 10

Peripheral Vision

「マイケル、トム・ゼイです。何かあったんですか？」

「まだ分からないんだ。シーンをロックしたんだけど、周辺視野のあたりで何かが動いているんだ。調べてみる」

「右の側頭葉に異常な波形が現れています。本当に大丈夫ですか？」

「平気だ」 集中力を周辺視野へ移動させるにしがたって、場面がカラーから白黒へと変わっていく。端の部分では、映像の粒子がにじんでいる。

映像の端、つまり僕の知覚の一番端だ。だがまだ何かが動いている。境界線の向こう側で、確かに何かが進行している。僕は決心を固めその奥をスキャンする。バーチャルの僕に視界の端へと向きを変えさせ、直感の赴くままに暗闇の中に目を凝らす。

集中を続けていると、薄暗がりの部分が明るくなり始めて、何かの輪郭が現れる。何かが動いている。

僕にはそれが見えた。動いているのは金属の刃だった。――僕に向かって落ちてこようとしている。デニムシャツと革と皮膚と骨を切り裂き、金属のプレートに達し、あとにはあたり一面に飛び散った血と、切断された白い腱が残される。薄暗がりのなか、何かが床の上に転がる。僕の腕だ。

「ゼー！」

叫んではいけないのだと、その瞬間僕は思い出す。向こうのコンピュータは叫び声を認識できない。ただの雑音としてしか受け取らない。だがそんなことはどうでもいい。どういいうわけか僕は過去への裏口に入り込んでしまった。実際に起こらなかった場所。悪夢のなかに紛れ込んでしまったんだ！

カチッ――。

Dreamer 10

Peripheral Vision

僕は境界線を探して見つけ出すと、そこを取り抜ける。

ロックされた工場が戻ってきた。切断刃の向こうですべてが動きを止めている。落下中の煙草は、まだ床に届いていない。スチール製の長方形ギロチンは、僕の顔から数十センチ離れたところ―それは僕の腕の上でもある―にぶら下がったまま。下のほうへスキャンしていくと、革とブルーデニムのあいだにあらわになった皮膚が見える。僕の腕は無事で、生きていて、その中では血がどくどくと流れている。神経も感覚も触感もすべて無事だ。だが刃が落ちてくれば、大惨事になりかねない。

えい、動け！ 何も起こらない。―腕は胴体につながれている。ある考えがふと頭をよぎる。今までいた場所とは別の時間に戻ってきたのではないだろうか？僕はこの場所でも腕を失うんじゃないか？

ロック解除。ガッチャン！ 腕は動きを取り戻し、切断刃はプレートの上に打ち下ろされる。その瞬間、機械の電気ボックスから火花が飛び散る。金属の歯車が回転の途中で動きを止める。

白いコートを着た背の低い赤ら顔の男がこちらに近づいてくる。

「なにやってんだ、ミッチェル。またプレスをぶっこわしたのか。まったく！ 俺が決めていいんなら、今すぐお前を追い出すところだ！」

「すみません」

僕の声がエコーとなって響く。―指導員もプレス機も工場も、この場面のすべては平面の映像に変わり、点になり、そして消えた。

Dreamer 10

Peripheral Vision

僕はフロント・ポーチに座っている。父と母はポーチの揺り椅子に腰掛けている。太陽はすでに沈み、夏の夕暮れのなか星がいくつかが瞬き始めた。

父の声が聞こえる。「マイケル、ママと一緒にデイリークインまでドライブして、アイスクリームを買いに行くけど、一緒に行くかい」

「いや、ここにいますよ」

「具合が悪いのか？」

「大丈夫だよ。パパ。平気さ」僕はコンクリートの階段を見つめている。

「トミワさんの娘さんが、今朝手紙を置いていったの」母が言う。「だから困ってるのよ」

「彼女に会わなかったのか？」

「出かけてたんだ」

「すぐに帰ってくるよ」パパは僕の肩を軽く叩く。「お前にも何か買ってこよう」

二人が出て行ってから、僕は手紙を開く。手紙はノートに青いペンで書かれていた。インクはところどころ滲んでいる。

『今日ママとパパが来たの。私、パパたちと一緒に帰るのが一番いいと思う。でも少しの間だよ。パパたちはあなたにまた会いたいって。だって私が話すことは、あなたのことはかりなもの。この夏、私に会わなかったら、私のことを忘れちゃうかもしれないけど、お願いだから忘れないで。いつでも愛してる。心の底から。レイチェル 追伸 手紙をくれるなら、レイチェルのeを忘れないで、チェロキーは Cherokee ね』

「マイケル、トム・セイです。お邪魔して申し訳ないですが」

「なんだい？」

「二時間ほどまえにタイトルを知りたいといった曲がありましたね。レオナルドが来ました。タイトルは『シスター・ラブ』で、ザ・リバブル・ラファイブとかいうバンドの曲だそうです」

「ありがとうございます、ゼイ博士」

「やあ、モービー・マイケル。こちら五千五百ワットのレオナルド・ランプマン・チャンネルです。そっちの様子はどうですか？」

「順調だ。曲を調べてくれて助かったよ」

「少し分りにくくてね。ー ポーリング・グリーンの歌詞データベースまで網を広げなきゃなりませんでした。カーティス・メイフィールドが書いた曲です。一九六六年七月にリリースされています。今その頃にいますか？」

「だと思っ。ありがとう」

「どっついたしまして。博士に替わります。じゃあとで」

僕は手紙に目をやると上昇し、そのあとの数週間をまたぐ大きな軌道に乗る。見下ろすと、さまざまな色が連なったその数週間が流れている。そして軌道は僕をある明るい午後の車内へと連れて行く。ちょうど僕は右に急カーブを切ったところだ。車は車道から広いセメントの私道へと入っていく。

少しすると、ブロンズの美しいブレンダが僕の隣に乗り込んできて、僕に体を寄せ、軽いキスをする。高価そうなニットシャツとびきり短いショートパンツをはいている。彼女の脚に目を走らせる。傷ひとつないなめらかな脚は美しく日に焼けている。

「マイケル！ 会えなくて夏中とても寂しかったわ」 突然ブレンダの声が弾ける。

Peripheral Vision

「手紙を書かなくてごめんなさい。ずっと忙しかったの。アルバイトは楽しかった？」

「ああ」 僕は車を私道から出す。「でも少し危険だったかもしれないな。君のことばかり考えてたよ。アートキャンプはどうだった？」

「すごく楽しかった。水彩画の描き方を学んだわ」 ブレンダは少し僕に体を寄せる。

「私がない間、忙しかったみたいね。デビッド・ウエッセルから聞いたけど、デビッドの従姉妹とデートしてたんですね」

「デビッドがそんなこと言ったの？」

「そうよ。すごく信頼のおける情報源でしょ？」 ブレンダは僕の首に腕をからみつける。「どっの子だったかしら？ 何ていう町だったかな…、チカディかしら？」

マヌケで何を言い出すか分からないデビッド・ウエッセルの映像が頭に浮かぶ。僕の顔から十数センチのところにあるブレンダの顔を見る。近すぎるよ。この位置からでは目に焼けた脚のラインを見ることができないことに僕は気づく。「デビッドは他に何か言ってた？」

「そうねえ、彼女の名前はレイチエル・ドミニクだって言ってたわ。今年中学に年生になるのね。ちょっと生意気よね。いつかあなたと結婚するんだと皆にいいふうすわよ」 ブレンダは僕に擦り寄ってくる。「あなたには彼女がいるって、誰もその子に伝えなかったみたいね」

「僕は言ったはずだけど」 まるで尻にかかった動物が助けを求めているみたいなの消え入りそうな声だ。

「もちろんそうよね」 ブレンダが言う。「でも方が一あなたが忘れたのなら、その子の住所か電話番号を教えてください、私から言ってあげようかと思って」

Dreamer 10

「住所も電話番号も知らないし、デートなんて本当にしてない。ちょっとドライブしただけさ」

「ドライブねえ」 ブレンダは頷く。「住所を覚えてちょうだい」

「知らないんだ」

「残念だわ。でもきつとデビッドが教えてくれるわ。私、本気でその子に会いたいのよ。いろいろ情報交換できるしね」

「分かったよ」

「会わせてくれるの？ よかった」

僕は黙りこくって車を走らせる。これから失うことになるいろいろなことを考えているのだろう。彼女の家のプールで過ごした夜や車で過ごした夜――

「マイケル、今日は無口なのね。舌を猫にでも噛まれたのかしら？」 ブレンダは僕を見つめる。彼女の瞳は小さな黒いビーム玉のようだ。そこにバックグラウンドミュージックのように聞こえてくるのは僕の思考だ。懸命に受け答えをひねり出そうとするのだが、なんとも情けなく的外れな返答にしかならない。

「君もアートキャンプで誰かに出会っただろうー」

「カウンセラーが私のことを気に入ったの。――デートに誘ってきそうだったわ。でも私、あなたがくれた指輪をはめていたのよ。私ってバカじゃないかしら。本気でそう思う。だって彼、とてもかっこよかったんだもの。背が高くて日焼けしていて、ウェイトリフティングをやってるんですって」 ブレンダは残念そうに首を横に振る。「大学三年生で医学部に進む予定なのよ」

「それじゃスケジュールが一杯だろうね」

「よかった。だってもしその子が戻ってきたら、私一緒におしゃべりするつもりよ。どっちにしろ、電話番号が分かればおしゃべりできるわね。ストロベリーシーク買ってこないかしら。おなかが減って死にそうなの。食べたならそのあとで」

「マイケル。トム・ゼイです。残り時間があと数分になりました。そちらで特に気になることがなければ、そろそろ戻ったほうがいいかもしれません」

「それなのに私との予定を入れようとしてくれたの。でも戻って見たら、あなたは小学校を出たばかりのちっちゃな子と遊びまわってる。私って本当にバカじゃないかしら。そう思わない？」 ブレンダの声の調子が変わったことに僕は気づく。まるでガラス板のように、滑らかだけど硬質だ。

「彼女は今度二年生になるんだ」僕はようやくそう言うと、デイリークイーンの駐車場に車を入れる。「アイスクリーム食べるだろ？ストロベリーシークがいいかな？」

「いつコリンスに戻ってくるの？」 指で僕の胸を突つきながらブレンダは訊く。

「誰が？」

「二年生になったっていうその女の子よ。名前忘れちゃったわ。彼女はいつこの町に戻ってくるの？」

「分からない」 うつぶくと、僕があげた高校のリングがブレンダの指からなくなっているのに気づく。

「もう指輪ははめてないのかい？」

「家に置いてきたわ。失くすのがイヤなの」 ブレンダはにっこり笑ってみせる。

「ところでその二年生の女の子だけど、もう一度会うつもりなの？」

「会わないと思う」

「ありがとう」僕はシーンをロックし、何かないかと画面をスキャンする。近くの駐車場にはドミニク家の車と同じ一九六二年製の大型ポンティアックに乗った家族連れがいる。— スプリットグリルや巨大な横型ヘッドライトも、ホワイトウォールのタイヤも同じだ。— だがありがたいことに色は違っていた。その隣にはプリマス・バリエントが停まっていて、中にチック・デイベイスとジェニー・ウィリスが乗り込んでいる。ブレンダと僕は数ヶ月前、彼らとダブルデートをしたことがある。車のシートがたたんでベッドになることを、チックとジェニーはすごく自慢していたっけ。

駐車場の端には、ソープライヤをつけた小型の青い一九六一年製のフォード・ファルコンに乗ったトムとローリー・ジェネットの姿が見える。ほとんど見かけることのない一九五六年のデザート・ファイヤードームのオープンカーが道路から入ってくる。コリンズに「デザート」のディーラーがいるはずがない。おそらく別の町から来たのだろう。

でもそんなことはどうでもよかった。頭のなかはブレンダのことで一杯だった。これが僕たちが別れた原因なのか？

「マイケル、トム・ゼイです。あと一分です」

「ありがとう」

最後に僕はブレンダをスキャンする。彼女の瞳は半分閉じられ、口は何かを言いかけて半分開いていた。着ている黄色いニットシャツはおそらくボビー・ブルックスだろうが、正確には分からない。青いストライプのショートパンツは、ただのショートパンツだ。白いサンダルもどこにもあるタイプだ。足の指から赤いネイルがはみ出していて、かみそりが剃りそこなった産毛が— 筋、左脚に残っている

「マイケル、あと三十秒です」

ほかに何かあるだろうか？ 前歯に詰め物は？ 分からない。時計はどうだろう。ゴールドのブロバ、ー ああ、これは覚えている。ブレンダはいつも、セックスの前に時計をはずしてダッシュボードの上に置いていたっけ。ふむ、今日ブレンダはブラをつけてるのかな？

突然シーンは光の海に変わった。

暗闇で目を開ける。見えるのは二つの緑の光だ。急速眼球運動モニター。どうやら戻ったらしい。

喉のマイクフォンをはずすまで、話は控えてください。ー もう大丈夫。ヘッドフォンを取ってもいいですよ

「ありがとう」 僕はバイザーを上げヘッドフォンを取る。「どのくらい向こうへ行ってたかな？」

「二時間です」 ゼイが言う。「夕食を食べ損ねましたね。すみません」

「別にいいさ。向こうでランチを食べたからね」 僕はゼイを見る。「少なくとも、食べたと僕は思ってるさ」

十一 エンジェル・ラジオ

トリップから二時間経った。僕は部屋にいて、自分が考えや記憶を書き留めている、それが消えてしまう前に。外では雲がむくむくと広がりサン・アントニオの街を覆いつつある。レオナルドが、メキシコ湾あたりで熱帯低気圧が発生したと言っていた。熱帯低気圧に巻き込まれた経験はまだないけど、楽しい経験じゃなさそうだな。

僕は街を眺め、青みがかった夕暮れのなかにそびえ立つバロック風の建物に目を留める。一九七〇年にこの街で暮らしたときも、この建物をがあつたことを思い出す。何よりもこの建物の屋根は息を呑むほどすばらしい。一面が金箔で覆われているんだ。むかし家族への手紙にこの屋根のことを書いたっけ。

軍隊のことも書いた。――僕の髪がどんな風に伸びたのか。――週一度しなければいけなかった巡回のこと、毎週土曜日の行進のことも。

建物を眺めていると、ライトが灯って、漆黒の空をバツクに屋根がまばゆいほどの黄金色に輝いた。僕は窓に近寄って、できるかぎり鮮明にこの映像を記憶しようとする。いつかこの場所に戻ってくることもあるとしたら、未来からの客人にはシーンをロックしないでこの風景を楽しんでほしいからね。聞こえるかい？ もし聞こえるなら、君が今が住んでいる未来はどんな様子なのか教えてくれよ。

答えはない。きつと誰もいないのだろう。少なくとも今夜は。

下方で街の光が瞬き始めるのが見える。そう遠くないところにポツンとある信号が赤に変わり、それから黄色に、そして最後には青に変わった。通りに人影はない。だが光の粒が空間を旅して僕の目に届き網膜に当たり破裂して、そこに存在す

Angel Radio

るイメージを再現する。というより、あるイメージを再現するといったほうがいいのかも。僕たちが見ているものは、本当に実在するものの再現なのか？ おそらく違っただろう。

悲しいのは、僕が今見ている色は僕自身が創り出したものに過ぎないということだ。脳の中を飛び回る電子とブドウ糖の産物だ。―どれも実在する本物ではない。千分の一秒前に存在していたうすぼんやりとした影に過ぎない。

もちろん、それは夢のなかでも同じだ。

また信号が赤に変わった。誰もいない通りにぶら下がった寂しげな赤い光。ペンを置きノートを閉じると、電話のベルが鳴った。

ゲイルだった。

.....★.....

Dreamer 11

数分後、僕はゲイルの部屋の前にいた。中から話し声が聞こえてくる。今夜は皆を集めてパーティでもやっているんだろう。部屋中にあふれたドリーマーが脳波と人生の意味について語り合っている。まったく最高だね。それこそ僕が今必要としているものだ。

ドアが開いた。

「マイケル」ゲイルはにっこりと微笑む。「どうぞ入って。散らかってるけど、座ってちょうだい。何か飲み物を持ってくるわ。カルベネでいいかしら？ それしかないのよ」ゲイルはストラップのない膝丈くらいの綿のワンピースを着ている。ブラをし

Angel Radio

ていない。すごくカジュアルで、すごく——リラックスしてる。ポロシャツとカーキのパンツという普段着姿の僕と比べると、本当に心からリラックスしてるように見える。

僕はカルベネをもらおうと言うとソファに腰かける。部屋にはゲイルしかいなかった。——話し声はテレビから聞こえていたんだ。「なんで君はテレビを持ってて、僕にはないんだよ」

「滞在期間が長くなると、テレビを持てるのよ」ゲイルはそう言って冷蔵庫を閉める。

「でも喜んでやダメよ。——有線チャンネルだけなの。クラシック音楽と心理学の講義の番組しか見れないわ。外の世界からの情報は一切ないの」

ゲイルはワインを手に戻ってくるとテレビを消す。「また催眠法のスク립トの話。これ、前にも見たわ」彼女はソファに腰を下ろす。「ところで、マイケル・ミッチェルが大変な過去旅行を計画中だって聞いたんだけど」

「ウフサが広まるのは早いな」

「ロングランをするんでしょ？」

僕はソファにもたれてリラックスしているふりをする。これじゃまるで、初デートの真っ最中の男の子みたいじゃないか。「実を言うと、ロングランをするかどうかまだ決めかねているんだ。今日二時間だけ過去に戻ったんだけど、工場で午後中ずっと過酷してたような気がする」

「とってもステキね」ゲイルは顔をしかめる。「楽しかった？」

「楽しくなんかないよ。おかしなことが起こったんだ。うまく説明できないけど……。まるで僕自身がいくつにも分割されるような感じだった」

Dreamer 11

「多重化が起ったのよ。ロングランをすると多重化が起る可能性があるって聞いたことがある。私たち、心理学の番組を見たほうがよさそうね」ゲイルはテレビのスイッチを入れる。

「別に大したことじゃないさ。確かコルトレーンは、七十二時間のロングランやったんじゃないかなー」

「以前あなたに話したとおりよ。ー そのときコルトレーンのラインがフラットになりかけたの。完全エクリプスを目指しているとパウンドストーンたちは考えたし、ー おまけに呼び戻すこともできなかった。担当の神経科医が真っ青になったらし
いわ」

「結局、どうやって連れ戻したんだい？」

「ゼイが補助機器を持ち込んで、コルトレーンが戻ってくるまで待つしかなかった。でもコルトレーンはびくともしなかった。いわゆる『頑強な人格』を持つてるのね」

僕は振り向いてテレビを見る。カメラが脳の外郭にズームアップすると、そこにはマンガで小さく何人もの人が描かれている。

「このビデオの内容、覚えちゃったわ」とゲイル。「『隠れた観察者』のパートよ」

「隠れた観察者？ なんだいそれ？」

「よくわからない」ゲイルは肩をすくめる。「自己の隠された部分みたいなのらしいわ。1972年、七三年頃にその存在が見つかったんだけど、研究対象にするのは難しかったみたい」

「研究対象にするのが難しい？ その観察者はシャイだったのかい？」

「被験者が深い催眠状態のときにだけ現れるの。深い催眠状態のときには、「時間」という概念にまったく意味がなくなる
と、被験者たちが報告しているわ」 ゲイルは微笑む。「これって聞きかじりだけど」

「僕の子供たちも同じように感じているよ。ー 時間なんて意味がないって」

「隠れた観察者に関する大半の研究を行ったのはレイマ・カンフマンというフィンランドの研究者よ」 ゲイルは続ける。「彼
はある研究で、何人もの『隠れた観察者たち』に質問を投げかけた。君は誰だと実際に訊いてみたの」

「なるほど。それで彼らはなんて答えたんだい？」

「全員が同じ答えを返したの」 ゲイルが言う。『私は魂だ』と答えたらいいわ。いい話でしょ」

「とてもヘンな話だよ」

「ねえ、物理学者が第十次元や平行世界について語ることを許されているんだから。心理学者が魂について語ってもいいは
ずよ。それならフェアだと思うわ」

「フェアかも知れないけどヘンなことに変わりはないよ。お次は、平行自己が存在してそれぞれが魂を持っていると言い出す
んじゃないだろうな」

「何人もの平行なマイケルが、たった一つの魂を共有してるかもしれないわよ。その唯一の魂がマイケル全員を見守ってる
の」

「だとしたら僕の魂はこの人生にきつと飽き飽きしてるだろうな。CIAと一緒に仕事をするような仕事を選べばよかった
よ。ロシア語がもっと上達したかもしれないし、黒パンの焼き方も覚えただろうー」

「どこか別の世界で、あなた黒パンを焼いているわよ」 勝ち誇ったような顔でゲイルが言う。

Angel Radio

「なあ、人生がひとつだけでも手一杯で、山ほど問題を抱えてるんだ。別の世界でも妻はヴァンという男と遊び回ってるのかい？」

「隠れた観察者に訊くしかないわね」

「今度、彼に会う機会があったら訊いてみるよ。彼って言うより、それって言うべきかな？」

「訊くといいわ」ゲイルはグラスを掲げる。「あなたの隠れた観察者と、ロシアでの人生に」

「君のにもね」僕はグラスを上げて、そして下ろす。「ゲイル、まさか君はそういうことを本当に信じてるわけじゃないよね」

「もちろん信じてないわよ」ゲイルは笑う。「でも、お酒を片手に「こういいう話をするのは楽しいでしょ？」

「君は心理学を」

「勉強したわよ、少しね」彼女は微笑む。「臨床心理学で学位をとったの」

「じゃあ、君が心から信じてることとは何だい？」

「何について？ 宗教、それとも政治？」

「過去だよ。誘導チェアに座って過去に戻ったとき、僕たちは本当は何を見ているんだろう」

「電子と火花」

「それだけか」

Dreamer 11

「そうねえ、電子、火花、そして化学物質。つまり記憶を作り上げてるものすべてよ。それを私たちは見ている。頭の中に小さなテレビがあつて、そこでビデオが回ってるのよ」

「それだけだと思うかい」

「それ以上なにかあるのかしら。だって、ジョン・ウェインの古い西部劇を見ても、自分が本当にジョン・ウェインと駅馬車に乗ってるなんて思わないでしょう。映画と同じよ。ただそれだけのこと」 ゲイルは自分の頭をたたいてみせる。「この中で起ってるのはそういうことよ。ガツカリさせちゃった？」

「ノーであり、イエスかな。いや、少しガツカリしてるかもしれない」 僕はワインを一口飲む。それは事実だった。僕はガツカリしていたし、ガツカリしていると認めることがひどく決まり悪かった。

「ねえマイケル。私の考え方が唯一つてわけじゃないのよ」 ゲイルは馴れたしぐさで肩をすくめてみせる。「でもね、ワシントン大学で習ったことによると、それが神経心理学の一般的な見解なの。すぐに戻るわ」 ゲイルはすばやく立ち上がりベッドルームへ消える。僕は彼女の体がコトトンのワンピースの下で揺れるのを見ている。この世界には他に同じくらい大事な問いがあるじゃないか、と僕は思う。

数分後ゲイルは部屋に戻ってくる。「目覚ましをセットしたかったの。明日の朝八時にゼイ博士とのショートランがあるのよ」

「シアトルの大学へ行ったのかい？」

「そうよ」 ゲイルはうなずきながら、ソファに戻る。「広大な太平洋に面した北西部。火山と冬の暴風雨の土地。ラジオをつけるたびに、ファン・デ・フカ海峡の強風警報が聞こえてきた。みぞれが降ったし、アラスカからは冬の嵐が吹きつけてくる

の。ハイウェイ五号線がポートランドまでずっと凍り付いているのを見たことがある。車の運転なんてとても無理。私ったら、少なくとも一か月に一度は転んで尻もちをついてた」ゲイルはワインを一口飲む。「就職活動したのは、記録的な冬の嵐が吹き荒れたときよ。その時博士号を取得しないかぎり心理学じゃ仕事にならないって思い知らされた。だからあきらめて、家にいることにしたの」

僕はゲイルの話半分聞きながら、もうひとりの自分は今頃どこで何をしているのだろうと考えている。ハバロフスクへ向かう汽車に乗っているのかもしれないな。いや、おそらくリンダと口喧嘩でもしているんだろう。ほんの一瞬、以前タワーから飛び降りた男のことが頭をよぎる。もうひとりの彼は今頃何をしているのだろう。今も研究所にいて、ちょうど僕たちと同じように過去トリップの計画を練っているのだろうか。

「家にいるのは新鮮だったわ」ゲイルが話している。「子供たちはよく協力してくれた。私ที่บ้านに居るのが珍しいから楽しかったのよ。でも夫は気に入らなかつたみたい。あの人は博士号以外の学位なんて、なんの価値もないと思ってたから」

「彼は博士号を持ってたのかい？」

「いいえ、夫は投資アドバイザーなの。ちょっと失礼」ゲイルはフロアライトに手を伸ばして照明を少し落とすと、ソファに深く体を預けた。「フィルは私に『社会に貢献するような専門職』に就いてほしいと願ってた。でも私が病院で働くのは嫌がったの。病原菌を家に持ち込むとも思ってたんじゃないかしら」ゲイルは笑う。

「だから医薬品市場の調査会社に勤めた。これがね、理にかなった仕事だったわ。だって私は絵に描いたような消費者タイプ人と暮らしていたから。フィルはサスペンダーを二十本、ネクタイは多分百本は持っていた。色はすべて赤。どれもおんなじにしか見えないの。少なくとも私にはね」

「僕もそういうタイプの人間かもしれないな」僕は言う。「広告業界の人間は、神経質なほど身なりに気を使うか、あるいはその正反対、つまり薄汚い的一步手前のカジュアルか、二つにひとつなんだ。薄汚くはなりたくないから、身なりに気を使うほうを選んだ。でもここにきて数週間になるけど、スウェットとジーンズに戻りつつある気がするよ」

「そうね、この場所は人を変えるわ」ゲイルはワインを飲むと何も映っていないテレビ画面を見つめる。「二週間前、フィルが私を訪ねてきたの。スーツとネクタイに身を包んでやってきたら、ここは日陰でも三十八度の暑さで、しかも彼はダークスーツを着ていたの。考えられる？ 私はTシャツと短パンだった。おまけにここにきて以来、サンダルで歩きまわるのに馴れてしまったの。裸足のときもあるわ。だからロビーでフィルに会ったとき」ゲイルは口元にかすかに笑みを浮かべたまま言葉を切った。「フィルは呆然とした。どうしていいか分からないみたいだった。自分の妻に一体何が起ったのかと、それを見極めようと私をジロジロと見回した。私は部屋に戻ってキッチンとしたスーツと上品なブラウスに着替えて、高価な靴に履き替えたわ。これがうまくいって、私たちはカフェテリアでも楽しく食事をした。私が穏やかな口調で彼に「とっとと消えてよ」って言うまでね。今度フィルがサン・アントニオにやってきても、アラモ砦とか観光地で過「こさなきやいけなくなるわよ」

「彼はなんて言ってた？」

「なにも。ただ私をじっと見つめて、黙って出て行ったわ。それがフィルのやり方なの。翌日、フィルは直接ハウンドストーンに会いに行って、私をプログラムから脱退させると言い出した。法的な手段に出ると脅したのよ。私はハウンドストーンに呼ばれてオフィスに行って、『放っておいて』とフィルに言ってやった。だから彼は帰ったわ。それ以来、電話もしてこない」

「でも、少なくとも君を訪ねてきたじゃないか」

「フィルにしてみれば、自分のためでもあるの。私の様子を伺いにきたのよ。とても独占欲が強い人で、私を監視下に置きたがる。三か月間あの人から離れられてホッとするわ。ここなら別の人と話すこともできるしね」ゲイルはソファから立ち上がる。「私はもう一杯飲むけど、あなたは？ 冷蔵庫にスモークオイスターがあるのよ」

少しすると彼女はワインのボトルと、スモークオイスターとチーズの角切りを乗せた小皿を手に戻ってくる。

「一番好きなことはなんだい？ 過去に戻ることにに関してね」

「いつか教えるわ」ゲイルはにこりとしてオイスターにかぶりつく。「今はダメよ」

「いいじゃないか、教えるよ」

「わかった」ゲイルは微笑むと目を閉じる。「ヘッドフォンのスイッチが入った直後が何よりも好き。暗闇の中へ落ちていって、下には一面にライトアップされた街の光が広がってる。まるで飛行機からニューヨークシティを見下ろしたみたいに。その光は見渡すかぎりどこまでも続いているの」

「僕も同じ光景を見る。あれは一体何なんだろう？」

「脳が心にあの光景を見せてるのよ」ゲイルは言葉を切ると、もう一度オイスターにかぶりつく。「最初のトリップの前、オットーから街の光のことを聞いたわ。白状するとね、私のなかのある部分が、多分子子供の部分がね、オットーが言う光の町は本当に存在するんだらうって思ったの。それは実在する街なのよ」

「脳の中に実在する街か」

「なんて言えばいいかなー、空想の街よ。一九七五年、一九七四年…と名前のついた通りが走っている街。通りには家が立ち並んでいて、明るい色に塗られた家もあれば、なんの色も塗られていない家もある。私は誰かの声色を真似してこう言う」

の。『オーケー、ゲイル・リン。ここが一九七三年だ』 中にはデイスコミュージックと、ワーズ製の窓付けタイプの古いエアロ
ンと暑い夏がある。私は髪が長くて裾の長い綿のワンピースを着ている。他の子たちは、それぞれ長い髪をして―」

「ベルボトムをはいている」

「―ベルボトムをはいて、まるで中古車の小さなセールスマンみたいな」 ゲイルは笑う。「もちろん、ベトナムのことがま
だニュースで流れていたわ。すべてが無味乾燥で味気なくてバカバカしい時代のはずだった」 ゲイルは角切りのチーズに手を
伸ばす。「でも実際に戻ってみると、そこは私が思い描いていた場所とはまったく違った。ただ違うと感ずるのよ。まるでもう
ひとりの私の過去へ戻ったみたいだった。なんて言えばいいのかしら、もっと『自分だけのものだ』と感ずるの」

「頭のなかの幻想の街か、気に入ったよ。頭のなかにあるのは山ほどのワイヤと火花だけで、それ以上のもは何もないと
いう考え方は好きになれなくてね」

「残念だけど、実際はそれだけだと思うわよ」 ゲイルは肩をすくめる。「でも、だからって何の問題もないでしょう？」

「少し前に参加した講義で、小柄な科学者が脳の中の部分をあちこち指し示していた。複数のシグナルが重なり合い、記憶
として形成される様子を説明していたんだ。電話の交換台から送られるシグナルが、側頭葉にあるスクリーンの上に送られ
て像を結ぶように」

ゲイルはうなずく。「そうよ。すく一的を射ている描写ね」

「その科学者は、臨死体験とは、次々に光を放っていく無数の神経細胞にすぎない言っていた。人生はまるで、きしみなが
ら回り続ける機械みたいだな」

「そのきしみが止まったとき、死が訪れるのね」 ゲイルは床を見つめている。

Angel Radio

「あのドリーマーがタワーから飛び降りた理由も、それだったのかもしれない」

「かもね」 ゲイルはうなずく。「でもね、ロングランで人格を粉々に裁断されて帰ってきたせいだっという意見もあるわ。分断されたいくつもの人格が、それぞれ主導権を握ろうと争った」

「その意見には賛成しかねるな」 僕は言う。「もちろん、ありえる話だとは思っけど」

「もちろんありえるのよ」 ゲイルは目を輝かせる。「それが心理学よ。人間の心のなかには、複数のいろんな人格が存在するの」

「その中の1人を知ってるよ」 僕は言う。「そいつは音楽に関することなら、どんな些細なことでも知り尽くしてる。ラジオをつけて曲が流れてくると、それが誰の歌で、いつリリースされたのか言い当ててみせる。でも言い当てるよりも先にまず、そいつは僕を、その曲を初めて聴いた場所へと連れて行くんだ」

「そんな人格を持っていたら楽しそうね」

「確かにね。ある瞬間にマス通りの渋滞に巻き込まれるとするだろ。次の瞬間、僕はミズーリにいるんだ。そこは三月で、大地は一面霜に覆われていて、ラジオから『冬の恋』が流れている」

「知らない曲だわ」

「一九六三年二月二日、ビル・パーセル。コロンビアレーベルから発売された」

「ねえ、その人ってすいじゃない」 ゲイルは僕の腕を軽くたたく。

「だろう？ 彼のおかげで僕の会社は去年二百万ドル以上稼いだ。全米のオールディズ専門のラジオ曲の半数と契約を結んで、二つのクライアントの商品を売りさばいたのも、彼の力さ。おまけに僕を説得してここへ連れてきたのも彼だと思う」

Dreamer 11

Angel Radio

「その人格があなたをここに連れてきたの？」

「そうだよ。誰かのせいにしなきゃ、やっつけられないしね」

「だったらー」ゲイルは言う。「このことは私のせいにしているわよ」ゲイルはワインの残りをグラスにそそぐと、手を伸ばしてライトを消した。

……★……

二十五回かけても、電話は話し中だった。今はテキサスの午前一時、ボストン時間では午前二時だ。話し中なのだから、リンドがメキシコから帰ってきているのは間違いない。受話器を置き、自分の部屋履きに目を落とし次に床を見る。もう一度かけよう。ワインのせいで指が間違った番号を押してしまう。ミシガンにいる誰かに電話をかけ、次はイリノイのカーボンデールにかけてしまった。オペレーターに頼むことに決める。オペレーターは手馴れていた。おそらくいつもこういう類の電話に対応しているのだろう。

「ミッチェル様、四回かけてみましたがお話し中です」

「マサチューセッツ州のレキシントンンの照会オペレーターにつないでくれ」

「それはできません。ミッチェル様」

「なんでできないんだ？」

「別のシステムを使っているんです。直接、先方に電話をかけるしかありません」

Dreamer 11

Angel Radio

「わかった。どうやってかければいい？」

「残念ですが、その電話からは無理です」

「ありがとう！」僕は受話器を置き、もう一度かける。なんと今度はつながった。呼び出し音が鳴る。ずっと鳴り続ける。留守番電話はどうしたんだ。多分また間違って番号を押しただろう。受話器を置きもう一度かけ直す。

話し中。

僕はドレッサーの引き出しから酒のボトルを取り出す。ナポレオン十三世。僕の妻である、ナントカ、ナントカ、ナントカ法律事務所の弁護士リンダ・ミツェルからの贈り物だ。リンダはどこでこの酒を買ったんだっけ？ 手紙を探してみるが見つからない。

引き出しにボトルをしまふ。結局のところ、この酒は天からの恵みとなったわけだ。ベッドに倒れこむと天井のライトが僕を照らしつける。まるでゲイルの赤ワインで酔いつぶれた酒の弱い僕を笑っているみたいに。お返しに僕は自分の鼻をつまんでみせる。

だがライトはなんの反応も示さない。僕は頭のかさぶたを引っ掻く。僕ときたら、焼け焦げて、電気椅子に座らされて、おまけに家に連絡さえつかないんだ。目を閉じて何か楽しいことを考えようとする。メイン州へのドライブにしようか。ニューハンプシャーへの旅行がいいかもしれない。

いや無理だ。悪いね。

電話のことが頭から離れない。最初は話し中で、そのあと誰も電話に出なかった。

Dreamer 11

Angel Radio

いろいろなシナリオが頭になだれ込んでくる。そのどれにも黄色のネクタイとダブルのスーツを着込んだ小ぎれいで尊大な弁護士たちが登場する。そう、あいつらはサスペンダーもつけてる。あの忌々しい一九四〇年代のダシル・ハメットの風貌そのままだ。あれはうちの会社のデザイナーが考えたのだろうか。おそらくそうだろう。誰かに請求書を送ったはずだ。ダメだ。そんなことを考えちゃいけない。気分が悪くなるだけだ。もっと楽しいことを考えよう。心が浮き立つようなことを。

深く息を吸い、息を止め、そしてゆっくりと吐き出す。

アヒルだ、それがいい。アヒルのことを考えよう。家の裏に住んでいるアヒル、白くてフワフワのやつだ。眠っているアヒルは、家から聞こえる物音で目を覚ます。たとえば大きなひきや、電話のベルの音…

ダメだ。うまくいかない。ひきだしを開けてもう一度ブランデーを取り出す。ボトルのワックスをはがしコルクを抜き、ひと口飲む。ナポレオン十三世か。

午前二時。憂鬱の時刻だ。もう一度電話をする。リンダが出たらこう言おう。リンダ、君がくれたブランデーを飲んでるんだ。君が送ってくれた酒だよ。今、飲んでいるところだ。隣の部屋の女性がごちそうしてくれた赤ワインとミックスされてる…。

話し中だ。突然、人生の複雑さに打ちのめされたのか、僕はよろめきながらバスルームへ行くと、ワインとスモークオイスター、チエダーチーズの色鮮やかな混合物を吐いてしまう。僕のなかのある部分、隠れた説得者が観察者が知らないが、そいつがあきれたという風に頭を振って、オイスターが悪くなったのだろうと意見を述べる。ビブリオ菌か何かのせいで僕は「

Dreamer 11

のバスルームの床で息絶えるらしい。僕は床のタイルをじっと見詰め、いくつかタイルがはがれている箇所を見つける。タイルがはがれている箇所はたくさんあった。

時計が三時を指している。間違いを起こす時刻、大失敗をしでかす三時。冷たく青い月が昇る三時。オードブルをすっかり吐き出した僕は、喉の渴きを感じている。グラス一杯のブランデーがあれば最高なものにな。今は三時五分。悟りの時刻だ。壁を見つめながら、この数週間、特にこの数日間、自分が訪れた場所のことを思い浮かべる。僕は楽しい映画のなかにいただけなのか？ いや、それ以上のものだった。それ以上のものであるはずなんだ。

あそこで見た場所や会った人が、どこにでもあるバスルームのスポンジほどの大きさしかない、一キロ程度のゼラチンの中で起こっている火花に過ぎないと考えるなんて、僕は絶対にお断りだ。

もう一杯グラスを重ね、ボトルはさらに軽くなっていく。

もちろん、あのシアトルの男のように、脳にはどこかにスイッチがあるという意見もある。魂に備えられた緊急脱出シートのようなものだろう。

もしかしたら今度、僕はその場所を訪れることになるかな。屋根をつき抜けて飛び出すんだ。

レオナルドの電気椅子が残した頭のかさぶたを引っ掻く。かさぶたが取れた。

おそらく、それが記憶が意味するものなのだろう。つまり「死」だ。

ナポレオンをもう一杯グラスに注ぐ。どういいうわけか壁のスピーカーから音楽が流れていないことに僕は気づく。静寂。ブルースすら聞こえてこない。最低だ。また気分が悪くなってくる。もう一度バスルームへ駆け込んで、便器のなかをカナッペで

Angel Radio

満たす。ゲイルもこんな惨めな思いをしているのだろうか。そうじゃないことを祈るよ。ゲイルは早朝にセッションが入っていると云ってなかったっけ。

三時三十分。理性の時刻だ。空のボトルを小机に置くと、嵐のときに排水溝へと勢いよく流れ込む雨水のように、僕は頭からベッドに潜り込む。

これで眠ることができる。夢のなかで、馬鹿げたことや悪いこと、心が痛むことをしでかしたあの場所へ帰ろう。もちろん過去には感覚がないので痛みを感じることはない。冷たさも温かさも、鋭い刃も何も無い。あるのは体を包む柔らかな綿だけ。だってこれは映画なのだから。僕に感じることはできるのは、映像と音だけだ。

僕は何かに触れたときの感触が懐かしい。本当に懐かしい。頭のなかだけに存在する映画だとしても、なぜ他の感覚と一緒に感触が記録されていないのだろう。思い出を見たり聴いたりするだけでは物足りない。僕は触れたいんだ。でも脳はそういうには機能していないのだろう。テープに記録できないものもあるんだ。僕の経験のある部分は、おそらく永遠に失われて、もう取り戻せはしない。

なあドクター、僕はときどき酔いつぶれて、そしてこの機械に乗り込んで過去を訪れるんです。

楽しいと思いませんか？

イエスであり、ノーだ。僕が歩き回っていたのは、死んだ世界だ。もう存在しない世界。でも僕はその世界を愛していた。愛する人たちと一緒にいて、でも人生のなかでもっとも孤独だった日々。戻ろうか。タワーに上って飛び降りたら、あの日々に戻れるのか。

Dreamer 11

いや、タワーから飛び降りるかわりに、僕は僕の内面へと深く入り込んでいこう。そして光の粒の上空を浮いて、その光の中へまっすぐに落ちていく。ワイヤとスイッチとダイオードの中へ。そこで無数の曲を収納している小さな配線板を見つけるのかもしれない。そもそも、その配線板が僕をここへ連れてきたんだ。

僕は目を開く。壁のスピーカーカーは一九七〇年代の趣味の悪い曲を流している。「マイ・ベイビー・ラブズ・ラブ」これって何かのジョークなんだろうか。胃が締め付けられるような気がするが、少しすると落ち着いた。もう吐くものが残っていないんだ。

午前四時。決断の時刻だ。感謝するよ、リンダ。君がくれたナポレオンはすばらしい効果を発揮している。部屋はぐるぐる回って、波立つ緑色のカーペットは風に吹かれる草のようだ。頭上では天井が紺色に変わり、雲が流れ込んでくる。

不意に僕の顔から数センチのところに、誰かの顔が現れる。エバンだ。まだ十二歳にもなっていないだろう。「マイケル、僕が本当にここに存在してるってどうして分かる？」エバンはフンと笑ってみせる。

「わからない」

額を指差す。「なにもかも頭の中にあるのさ。いつかどこかで結婚して子供を持つようになった頃、座ると過去へ連れてってくれる椅子を発明するよ」

いいアイデアだったな、カースウエル。でも君は未来まで生きることにはなかった。

さらに雲が流れ込んでくる。おまけに部屋がぐるぐる回り始めた。

もう吐きたくないのに、ここさえられなくなってきた。胃の抵抗に耐えかねて僕はまるで胎児のように体を丸める。ラジオの音が聞こえてくる。このベッドルームの四方の壁の向こうには、西ミズーリの平原の人口五百人の町が広がっているのではない

かと夢想する。教会がひとつ、食料品店が一軒、線路が一本だけ走っている。そう遠くないところに、給水塔が暗闇のなか建っている。この給水塔が、この場所への僕を導くアンテナになる。

目の前には高速道路が伸びていて、僕は十一月のミズーリの茶色い平原を突っ切って、静かに車を走らせている。この土地の中心である平原から出て行くこうとしているのだ。助手席には女の子が座っている。彼女のシートベルトは締められ、ブラウスの下に隠れて見えない。小さくてやせっぽちの女の子だ。暗闇に包まれた僕たちは、夢の中へと入っていく。

「マイケル、私、あなたが欲しいの。分かっている？」

また稲妻が光った。

雨が滝のように窓に打ち付ける。雷鳴が部屋を揺らし、僕は目を開ける。

弱い熱帯性低気圧が上陸したんだ。

ナポレオンのボトルが小机から転がり落ちているのが見える。ボトルを見たせいで記憶がよみがえり、強い吐き気をもよおした僕は、立ち上がるとふらふらとトイレへ向かう。

でも吐くものなど何も残っていない。胃の中にもうオイスターはひとつかけらも残っていないのだ。僕はマウスウオシユをひと吹きすると、ベッドへと戻る。外では嵐が激しさを増して、ほぼ数秒ごとに稲妻が走る。

車が通り過ぎ、そのタイヤが濡れた道路で紙やすりのような音を立てるのが聞こえる。どうしてこんな音が聞こえるんだ？

「雨が降っているのかしら」若い女の子の声、彼女の声だ。

Angel Radio

「二月に春が始まるの？ 違うと思うわ。立春は三月、来月よ」 彼女は寝返りを打つ。「雨は好き。メキシコではこんなに雨が降らなかった。四歳の頃メキシコに住んでいたの、話したっけ？ モンテレイの南にあるリナレスという町よ。パパがそのガス工場で働いていた。ガス工場ってなにして訊かないでね。とにかくメキシコには雨は降らなかったの。一度もね」

暗闇のなかにレイチエルが見える。Tシャツを着て、黒髪にカーラーを巻いている。アンテナだ。何年も経った今でも、カーラーを見るたびにレイチエルのことを思い出す。彼女はラジオで、僕は時空をさまよう電波に過ぎないんだ。未来からやってきた定在波さ。

「ふん、ラジオ局ね。そのジョーク、前にも聞いたことがあるわよ」

「パタ。パタと窓に打ち付ける雨の音が聞こえる。」

「ねえ、私、いつも思うんだけど、あなたって関係があるみたい」

「何に？」

「あなたがそういうふうに話す時には、いつも雨が降る」

僕はベッドの上で起き上がる。部屋はがらんとして空っぽだ。誰もいない。窓の外にサン・アントニオを覆いつくす空が見える。依然として厚い雲が立ち込めていた。ベッドから出て窓に近寄る。朝の八時十五分、夜が明けてからだいぶ時間が経っていた。眼下の通りには通勤の車がびっしりと並んでいる。僕はお気に入りの信号を目で探す。その信号はどっとうわわわわ黄色のままなのだ。雨の薄暗い朝に信号は、イラついた通勤の車の列に、いつもと変わらない光を頑固なまでに投げかけていた。

Dreamer 11

Angel Radio

僕はブラインドを下ろし、服を脱ぎバスルームに入る。バスルームは赤ワインとブランデー、そしてスモークオイスターの匂いが残っていた。

電気を消したまま、我慢できる限界まで熱いシャワーを浴びる。研究所はホテル用の四角い石鹸を山ほど用意していたが、それを僕はゼストの石鹸に取り替えていた。つるつるとすべる硫黄の匂いのするやつだ。誰かがゼストの石鹸はオリーブの匂いがすると言っていた。

暗闇でシャワーがブランデーの残り香を洗い流していくのを感じる。シャンプーで髪を洗い、頭をシャワーの真下に突っ込む。ニルヴァーナのシャンプー。長い間市販されている、昔からのブランドだ。目を閉じれば、まるで大学の寮にいるような気持ちになるだろう。

あるいは別の過去を思い出すかもしれない。過去を訪れているとき、匂いと味を感知できないのは残念だ。オリジナルのベスココーラの味をあじわえたら最高の気分だろうな。クラフトのハーブ入りチーズや、マクリンのマウスウォッシュもいい。

コリンズで過ごした夜にブレンダ・レイシーが身に着けていた香り、どんなものでもいい、あれを嗅ぐことができればどんなにいいだろう。そう考えると、ブレンダのキスはどうか。彼女のキスは味がしただろうか。それとも心が締められるような痛み、ただそれだけだったのか、いや、彼女のキスは味がしたような気がする。

シャワーを止めると、タオルを腰に巻いて窓に近寄る。道路の車の流れは完全に止まってしまったようだ。二台の車と巨大な白いトラックが交差点の真ん中で立ち往生して、がっしりとした大男が腕をブンブン振り回している。何かを言い争っているという事は誰が見ても明らかだ。サン・アントニオ警察のパトカーがやってきた頃、僕はブラインドを下ろして、バスルームに戻り歯を磨く。その時、換気装置が止まっていて部屋が薄暗いことに気づいた。

Dreamer 11

Dreamer 11

Angel Radio

停電だった。

十二 レオナルド

研究所では誰もが知っている自明の理だが、ラボの技術者やオペレーターが太陽を見ることができるとは、ごく特殊な場合だけだ。—
たとえば、雷のせいでメインフレームのコンピュータが壊れたときだ。

今朝、カフェテリアは技術者たちであふれかえっている。ほとんどはカフェの奥のテーブルに固まって、資料の山を前に、レオナルドが「おたくの熱情」と名づけたツバを空中に撒き散らしながら、熱心に話し合っている。

多分そのせいだろう。レオナルドは僕たちと一緒に席に座って、ボウルに入ったコンフレークを食べながら、静かにコンピュータのプリンアウトを読んでいる。時折、シャープペンシルを取り出して、一列に並んだ数字の横に印をつけている。

「驚くほどのことじゃありませんよ」 ローウェルがコーヒーをかき回しながら言う。「たったひとつの雷だって、落ちるところに落ちれば町全体の機能を停止させることができる。一九八五年の嵐で、パークレーの街は完全にやられました」

「ああ。だが昨日の雷はそれほどじゃなかったぞ」 オットーが応える。「三十分も続かなかつたんじゃないか」

「どれくらい続いたかは重要じゃない、問題はその威力だ」 ケラーが、ハムと卵をガツガツと食べながら言う。「一筋の稲妻には、無数の電流が流れてるんだ」

「どこで暴風雨が発生したのか、誰か知ってる？」 ゲイルがテーブルを見回す。「レオナルド、確かメキシコ湾のどこかで熱帯低気圧が発生したって言うってたわね」

「メキシコ湾沿岸はどこもかしこも、熱帯性うつ病だらけですよ」 レオナルドは肩をすくめ、数字の列に丸をつける。「いつだってそう
だ」

「そうですねえ」 ローウェルが言う。「思うんだけど…」

「ちょっと、ふたりとも！」 ゲイルはショックを受けたみたいだ。「デイズニーランドに行ったことないの？ テキサスかどこかに大きな水族館があるんじゃないかな？」

「レオナルド、その嵐だが…」 オットーが話題を続ける。「昨日の嵐はどうだったんだ？」

「いやあ、ちょっとしたもんでしたよ」 レオナルドはシャーペンを横に置く。「非常に強力です。前線なんてありません。まるでサン・アントニオのちょうど上空で発生したみたいでした。積乱雲が千二百メートルの高さで渦巻いていて、わずかな時間のあいだに、雲が柱のようによくも立ち昇って、下降噴流もあって、稲妻が走りました。そのほとんどは標準光源、つまり凍結高度の高さから落ちてきました。私は早く来て、第十四ラボのコンピュータを守りました。つまりメインボックスの周りにいわば防壁を張り巡らせたんです。嵐のせいでマシンが煙を吐いたらたまりませんから」 レオナルドは牛乳をひと口飲む。

「コンピュータは無事だったのか？」 オットーが訊く。

「だといんですが」 レオナルドは書類の山を指差す。「もしコンピュータがイカれてたら、FFT回路のコードを点検しなきゃいけません。これがまったく始末に終えないプログラムでね、ええ、ADA 言語で書かれてるんです。ビジュアル・ベーシックXを使おうと思った人間はいなかったのかな」

「でも、おかげで失業の心配はない」 ローウェルが言う。

「まったくそのとおり」 レオナルドが頷く。「もう一年あれば、半分をやり直すんですけどね。スクリプトやオブジェクトコードはすべて忘れて、ペアメタルからやり直しますよ」

「なんだか恐ろしいな」

「心配なく。皆さんがチェアに座る前に、もう一度きっちり診断しますから」

「どんなことが起こるんだい」 オットーがレオナルドを見る。「感電死、なんてことにならないだろうねえ」

Leonard

「そうですね」 レオナルドは言葉を切ると、牛乳をひとくち飲む。「去年、雷が入って第十二ラボのバスがひどくやられました。シータ検知器がモデムラインと混線しましてね。誰かがインフォメーションに電話をするたびに、ドリーマーが一九六二年十一月十四日に戻ってしまうんですよ、ハハハ」

「じゃあ、家に電話できるね」 ローウェルが言う。「『キャプテン・クランチ』のおまけの笛を使ってさ」

「ちよつと二人とも」 ゲイルが不機嫌そうな声を出す。「グループのなかの数パーセントの人にしか分からないジョークって、面白くないさ」

「オーケー」 レオナルドはニリとすると、テーブルから立ち上がる。「ちよつとした話題になったんですが、『ベル・システム技術ジャーナル』が、ある号で多重コードに関する情報を漏らしたんです。その話をしたんですよ。そのコードのおかげで「昔前のハッカーたちは、電話に向かって笛を吹くだけで、世界中どこへでもタダで電話をかけることができました」

「そういうこと」 ローウェルが付け加える。「空軍に勤めていた男が、あるメーカーの朝食シリアルのおまけの箱に入っていたおもちゃの笛が、正確に二千六百ヘルツの音を出すことに気づいた。それはマー・ベル電話会社の回路を動かす周波数とぴったり同じだったんだ。すぐに男は、世界中のどこにでもタダで電話をかけられるようになった。彼は政府から『キャプテン・クランチ』と呼ばれたのさ」

ゲイルはうんざりした様子で首を振る。「そんな話を知ってるのは、オタクだけよ」

「レオナルド、ゲイルの言つとおりだよ」 ローウェルは肩をすくめる。「このジョークはかなりオタク向けだ」

「レオナルド、コンピュータの話に戻るが」 オットーが割って入る。「準備ができるのはいつころになる？」

「わかりません」 レオナルドは肩をすくめる。「シータは完全にやられてましたが、スキヤナは不安定という程度です。まあ、もともとうまく動いてなかったの、ほとんど差はありません」 レオナルドは言葉を切る。「ビッグ・アイロンの準備が整うのは、今晚遅くでしょうね。すみません、タイム・サーファアの皆さん」

レオナルドがカフェテリアを出て行くとき、ゲイルがローウェルにささやく。「タダで電話がかけられたの？」

真夜中、僕とゲイルはレオナルドと一緒に第十四ラボにいて、雷が原因の故障をレオナルドが直そうとされているのを見ている。一時間半のあいだ、レオナルドは無数のケーブルやモニター、電源装置、通信システムに関係する見たこともない部品を交換していた。だが、うまくいかないようだ。

……★……

「まあまったく、くたばっちゃうまえ、このボンコツ」レオナルドは頭を振ってブツブツとつぶやく。そして向き直ると、決まり悪そうに微笑んだ。「言葉が悪くてすいません。何もかもノー・オベです。ハッシュケーブルが問題なんです」

「心配しなくても大丈夫よ」ゲイルが肩をすくめる。「あなたが何を言ってるのか、誰にも分からないから」

「入力フィルタのソフトウエアを、雷がローチしたようですよ」

「入力フィルタってなに？」ゲイルは訊くと、生ぬるいジョルトコーラを一口飲む。「説明して。普通の言葉で説明できるのかどうか知りたいわ」

「オーケー」画面をみつめながらレオナルドが言う。「皆さんが向こうへ行っているときに、我々が受け取る信号は非常に微弱です。喉頭マイクは信号を集めて増幅しますが、増幅するのはアンダーフロー、失礼、つまり信号に付随する不規則雑音なんです」

「その不規則雑音はどこから来るの？」

「微細な電子がお互いにぶつかり合うんです。それにテレビの信号も、――落雷の口笛みたいな音も、――成層圏に落ちてくる隕石もね。木星の嵐の音も拾いますよ。木星もノイズの立派な発生源になります。Vラジオから聞こえるノイズの大部分は、木星から来るんです。皆さんの思考を聞き取るためには、他にもいろんなものをふるいにかける必要やいけません。テクノロジ―は確かに素晴らしいかもしれませんが、簡単にはいきません」

レオナルドの話を聞いていると、自分が外惑星のひとつを回る、ボイジャー宇宙船になった気分になる。

「そうですね」 レオナルドが続ける。「喉頭マイクはあらゆる種類の電氣的雑音を拾います。― 声さえもね」

「声？」 ゲイルが訊く。

「たぶん市民ラジオの声じゃないかな。皆さんの特定の電氣的シグニチャーに合致しない場合には、システムによって除去されます。運がよければ、向こうから皆さんが我々に伝えようとしていることを聞き取ることが可能です。その除去プログラムがなければ、聞こえるのはアンダーフローだけで、コンピュータはそれをキャッチできません。つまりテープには、なにも録音されないことになる。いくら向こうで楽しい時間を過ごしても、それじゃパウンドストーンはいい顔をしないでしょ。そういうわけで、皆さんがチェアに座る前に、除去機能を再プログラムしなければなりません」

「ここに食べるものはない？」 ゲイルが尋ねる。

「これが済んだら、すぐにピザを注文しますけど」 レオナルドが言う。「一番上の引き出しに『錦』がありますよ」

「なによ、それ？」

「日本の豆菓子です。なかなかイケますよ。干した小魚がイヤでなければね」

「やめとく。私はピザを待つわ」

「これだ！」 レオナルドがコンピュータ画面を指差す。「ゼイが除去プログラムをコピーしたんです。こりゃあいい。今夜使うものをダウンロードしましょう。トトリップするのは誰ですか？」

「マイケル、あなた行きなさいよ」 ゲイルが言う。「私はピザを待つから」

「オーケー」とレオナルド。「マイケルの電氣的シグニチャーをダウンロードしましょう。― よし、これだ。シート・モジュールを接続すればいい。眠ってもらっちゃこまりますからね」 レオナルドがスイッチを入れると、ブンブンと唸る音がラボにあふれる。「ザ・ブレインが保有

Leonard

する基礎ネットワークは、かなりファシストですが、シータ・モジュールは、その扱い方を心得ています。四から七ヘルツのシータ・シグナルが側頭葉に現れるのを待ちましょう。そしてロックインするまで、ヘッドフォンに同様のシグナルを導入します―」

「あのね、レオナルド」 ゲイルが口を挟む。「ピザを注文するには、少し時間が遅すぎるんじゃない?」

「店は午前一時まで開いています。マイクロフォートナイトのデスクにプロトコルダウンします」 レオナルドは画面に向き直ると、僕の名前と日付を入力する。「控えめに言っても、シータ・モジュールはシステムで最も重要といつていいでしょう。シータから抜け落ちてデルタ・トリスへ行ってしまうと、いわゆる普通の、なんの変哲もない睡眠状態へと入ってしまいます。あるいは明晰夢を見るかもしれません。プログラムを始めた頃にはよく起こりましたよ。高い夢次元へ落ち込んで、完全に記憶バンクを飛び越えてしまうんです。膨大な時間をムダにしました」

「ただの夢だとして分かったんだい?」 僕は尋ねる。

「簡単ですよ」 レオナルドが肩をすくめる。「夢を見ている人は、山や川など、地理的な目印については正確に描写します。でも他のものに関して、間違っんです。建物が違う形に見えたり、人々がヘンな服を着ていたりね。時には、高度に進化したヤモリみたいなものを見る人もいます。大きな目をした灰色の小さなトカゲですよ。そういう場合は、鎖をひっぱって連れ戻して、最初からやり直すんです」

「なるほど」

「境界線すれすれの奇妙なものもあるんです。ある週、ドリーマーが全員、明晰状態になって、なぜか同じものを見続けました。あのときは本当に緊張が走りました。ゼイがラックランド空軍の友人にそのことを話したら、瞬く間に軍が研究所に押し寄せてきました。急げってね! 国防総省が明晰夢につき込んでいる研究費のことを、どこかで洩らしたんです。― そんな研究、大して重要じゃないのにね。当然のことながら、パウンドストーンは国防総省から小切手を頂いて、金に替えましたよ。そして、パウンドストーンもいいことをしたと思うんですが、シータロックにその金を使っただんです。以来、小さな灰色トカゲは現れなくなりました」

「ドリーマーが見ていたのは、一体なんだったんだらう?」 僕は訊くが、その答えを本当に知りたいのだからか。

Dreamer 12

「オープンスイッチですよ。もしかしたら、お粗末なカフェテリアの食事のせいかもしれない。あの年のケータリングはひどかったですから。誘導ソフトウェアに不具合があったのかもしれない。本当のところは誰にも分かりません」 レオナルドは、日本語で何か書かれた袋に手を伸ばす。「『錦』はどうです？ めちゃいいですよ」

「レオナルド」 ゲイルは言う。「干し魚の入った豆菓子なんて食べないわ。ピザを注文して。それも、『すぐに』じゃなくて、いま注文して。」

「了解、いいですよ」 レオナルドは電話を手取る。「やあ、マーガレット？ レオナルドだ。受話器の横で、パキッとした二十ドル札を振ってるんだけど、音が聞こえるかな？ よかった。マーガレット、君がANSI基準のピザを注文してくれたら、この二十ドルは君のものだ。— そう、ペパロニとマッシュルームの大型のやつ。よく分かかってるね。守衛のところに届けてくれ。おつりとピザ一枚は君のものだ。ありがとう」

レオナルドは受話器を置き、ゲイルに向き直る。「これで、ご満足ですか？」

「ありがとう。いくら払えばいい？」

「二十ドル」 レオナルドはにっこりする。

「そのうち払うわ」 レオナルドの肩をたたきながら、ゲイルが言う。

「別にいいですよ。あなたが階下に行っている間に、メールサーバーにあなたの部屋から盗ませますから」 レオナルドは僕の方を向く。

「ビッグ・アイロンが乗客を乗せる準備を整えたようです。さあ、チケットを拝見しますよ」

十三 リスペクタブル

僕はバイザーを下ろし、暗闇の中へ入っていく。外ではシータ・モジュールかなにかが、エレベーターのモーターのような低い唸りを響かせ始める。ヘッドフォンからレオナルドの聞き慣れた声がする。

「マイケル、数をカウントしてください」

「分かった。いちー、にー、さんー」

「結構。フィルタがシグニチャをキャッチしました。ふむ、ローウェルは今朝二時の予約をキャンセルしたようだ。ー 少し待ってください」

僕は目を開けて、緑色に光る一点の光を見る。

「マイケル。ゲイルは第十四ポに行きます。ということは、あなたさえよければ、あと二時間余分に時間を使えますよ」

「そっしょつか。あとで言っつよ」

「腕カバーをはめますか?」

「いやいい、今回は自分で催眠を試してみる」

「了解。ですが気をつけてください。真面目に言ってるんです。準備はいいですか?」

「ああ、行」

「サヨナラ、タイム・サーファー。どうぞよい夢を」

体が鉛へと変わり、誘導チエアの中へと沈みこんでいく。やがて振動が始まり、暗闇の中へ、星空の上空、過去へとつながるハ
イウェイの上空の空間へと落ちていく。

時間の流れへと向かって、僕は降りる。光は拡大し、空、木々、岩、川を形成していく。誰か僕の近くに座っている。帽子を
斜めにかぶり、シャツは着ていないが、折り返しのついたジーンズをはいている。近くの岩の上には、水筒が転がっている。

エバンだ。

エバンは、茶色く、まだらになった川の表面に向かって、平たい石を投げる。石は二匹のアメンボの上を通り越し、水上を
三回跳ねたかと思うと、小さな音を立てて水の中へ沈んでいった。「昨日の夜、またママがパミーに僕のテントを使わせただ
ぜ。パミーのやつ、テントを裏庭に立てて、クラスのバカな女の子たちを招いたのさ」

「それで？」

「あいつら、家にやってきて、ケチャップとかクラッカーとか、ありとあらゆるスナックを手に入れた。夜中の十二時ごろに、
笑い声が聞こえ始めたと思ったたら、犬が吠え出したんだ。そしたらあいつらは怖がって、家の中に入ってきて、もっとチップス
かなんかをゲットしたんだ。一人の女の子なんて、パパのフォルスタッフ・ビールを盗んだんだぜ」石がまた水の上を渡って
いく。「女の子って、怖くなるって食べるんだ、知ってるか？ だから女の子は男よりも太ってるんだよ」

「そうかもね」

「それでな、ミッチェル、僕のテントはもうひどい有様だった。女の子たちが帰ったあと、ホースで水をかけて洗わなきゃいけ
なかった。ケチャップがあちこちに飛び散ってるんだよ。まるでフードファイトでもやらかしたみたいだよ」

Respectable

十歳の自分の瞳の奥に、プカプカと浮かんでこの光景を見つめながら、この瞬間にブレンダはどこにいるのだろうと思わずにはいらなかった。おそらく、自宅の二階にある、窓が並んだあの広い部屋で、小型グラウンド「アノ」の練習をしているだろう。

不思議なことに、ブレンダはカースウェルが「おつむが働く」と認めた唯一の女の子だった。「彼女は賢いと言ってもいいな」とよく僕に言ったものだ。カースウェルが、あんなふうにな女の子を褒めたのは、あとにも先にも聞いたことがない。

ただカースウェルの妹のパミーは、ブレンダ・レイシーをひどく嫌っていた。数年後に僕がブレンダと付き合ったと知ったら、パミーは僕と口をきかなくなったほどだ。

そういえば、この瞬間、パミーはどこにいるのだろう。おそらく家でテレビを見ているだろう。たぶん「フューリー」か「スカイキング」かな。

そういえばレイチエルはどこにいるんだろう？ おそらくメキシコのリナレスだ。あるいはミズーリ州のどこかの小さな町かも。今レイチエルが七歳だなんて想像ができない。それってすごく若い。まだほんの子供じゃないか。

突然、目の前の川が白くなり、どこにもある五つ穴のノートに変化する。左側に赤いラインが入ってるやつだ。その紙に字が見える。

『『ミセス・マイケル・ミッチェル』 ねえ、この文字を書くの、私初めてよ。初めてにしては悪くないね！ あなたは やさしい人でいて！ もしできたらね ダメならズルい人になって！ このへんでやめて世界史の勉強をしたほうがいいみたい。ずっと愛してる レイチエルより 手紙書いてね お願ひよ』

真ん中には大きく「LOVE」と書かれてる。左下の隅には、「もう一度、愛してる」とあった。

Dreamer 13

Respectable

電話が鳴る。母親が先に受話器をとる。「マイケル、あなたに電話よ。とても小さな子みたい。ボーイスカウトのチームの子じゃないかしら」

受話器を取る。

「ハイ、私よ」 本当に子供の声だ。

「やあ、レイチエル」

「一言いいなかったの。先週、ブレンダなんかかっていう子から電話がかかってきたわ。チェロキーの私の家に電話してきて、この夏、あなたが彼女に出した手紙を私に全部読んで聞かせたの。一言一句、残らずね。彼女の親が、電話料金の請求書を見たら、絶対に頭からゆげ出して怒るわよ」

「コリンズにいるのか？」

「そう、おばあちゃんの家にいるの。でね、何があったと思う？ 私、ここに戻って、パパとママが、コリンズの高校に行ってもいって言ってくれたの。もし月一回、チェロキーに車で連れて帰ってくれる人を見つけたら話だけど。だから、分かるでしょ？」

「何が？」

「だから、どうするのか気持ちを決めて。ブレンダと付き合うのか、それともラインを踏み越えて私とデートするのか」「君とデートする、と思う」

Dreamer 13

Respectable

「聞いて。私とデートするってことは、山ほど仕事を抱え込むことになるかもしれない。毎週末、私に会うために大学からコ
リンスに戻ってきて、そしてパパとママに会うために私を家に連れて帰らなきゃいけないのよ。そして何より大事なものは、――
絶対にウソをつかないこと。何でも我慢するけど、ウソだけは聞きたくない」

「ドライブするかい？」

「うん、――ブレンダ・レイシーの家までドライブしましょうよ」

「それはやめておくよ」

ヘッドライトを点けて私道から出ると、レイチエルは靴を脱いで裸足の足をフロントグラスに、次には車の天井に押し付ける。

彼女の脚はすらりと長く、しっかりと筋肉がついていることに僕は驚く。

「見て」 レイチエルが言う。

「なんでそんなことするのね」

「私って、とても縄張り意識が強い」 彼女は白いブラウスの下に手を入れて、何かを調整する。ブラのひもだろうか？

「他の女の子がこのフロントガラスを見たら、私が助手席にいたって分かるでしょ」

「ありがとう」

「どういたしまして」

レイチエルはシートに身を起すと、綿の青い短パンのすそをまくる。「マイケルのことを深く知るチャンスがもたらえてとて
も嬉しいって、ブレンダに言ったの。彼女、すっごく怒ったと思うわ」

Dreamer 13

「ブレンダは僕の手紙を本当に読んで聞かせたのか。そんなことするなんて信じられないよ」

「信じたほうがいいわよ。私は電話を切らずに、『こう言ったの。』へえー、ふーん、そうなの』ってね。私が話を聞いていると彼女に分からせるためよ。彼女が最後の手紙を読み終わったら、私は電話してくれたことにお礼を言って電話を切ると、大泣きしたの。でも今は大丈夫。たぶん大丈夫だと思うー」

レイチエルは言葉を切ると、もう一度フロントガラスに足を乗せる。さらに足型が付く。明日の朝、パパがこれを見たらどう思うだろうと、僕は考える。

「で、家に帰ってから彼女の家に電話したの。でも彼女は留守だった。あなたと一緒にいるんだろうと思ったわ。でも違ったみたいね」 レイチエルはため息をつく、窓の外を見つめる。「たぶん他の男の子と出かけていたんじゃないかな。私があなただったら、指輪を返してくれって言うと思うけど」

「その必要はないよ。今ブレンダは指輪を僕に送りつけてるところさ」

「よかった。一週間のうちに届かなかつたら知らせてね。郵便局に文句を言うわ」 レイチエルは僕に向かってにっこりと微笑んだ。「その指輪を失くしてもらっては困るの。ー だって指輪が必要になるかもしれないし」

僕はハンドルを切り車を高速道路に乗せると、角を曲がって、深い森へと続いていく砂利の敷かれた田舎道へ入る。周辺視野をスキャンすると小さな家と納屋が見える。僕の記憶では、その家と納屋は一九八〇年代に姿を消し、工場に変わったはずだ。目の前に広がっているなんとも頼りなげな映像と同じように、過去だって安全なわけではない。それは崩されて、建て直されるか、あるいはひとつずつ切り売りされていく。

浮石の上に車がすべりこんでいくのを感じる。シートベルトの恩恵がないから、レイチエルと僕の体は曲がり角で大きく横に振れる。スピードメーターは時速六十キロを保ったままだ。――砂利道を運転するには、あまりに無鉄砲なスピードだ。だが、もう一度言わせてもらおうと、今、僕は十八歳で、免許を取ったばかりのドライバーが持つ、無鉄砲さとスキルを兼ね備えている。

道の上に立ち昇る曇った砂埃を、ヘッドライトが照らし出す。

今まで一台の車にも出会っていないが、同じ方向へ向かっている車が前方を走っていることはほぼ確実だろう。どうやら、十八歳の僕も同じ結論に達したらしい。――スピードメーターが時速五十キロ程度に落ちるのが見える。左手がヘッドライトのスイッチを切ると、一瞬、世界が暗闇に包まれる。驚いたことに、レイチエルは何も言わなかった。

前方では、白い砂利道が暗闇の中に伸びていく白いリボンのようになる。とても長い――分が過ぎ、ヘッドライトを元に戻す。

「車を停めて、雷を見る？」　とうとう彼女が訊いてきた。

「今夜は雷にはならないよ――」　僕が言う声が聞こえる。

「雷になるわ。東の空に少し見えるはずよ。見て。嵐は嫌いだけど、雷は得意なの。すべての動物とある種の人間は、いつ

嵐が来るのか言い当てる」とができるって知ってた？　私もそうなの」

「君は動物なの？」

「一緒にいる人によるの。オーケー、今のはただの冗談よ。だから信用しないで。雷を眺めなくなったら教えてね」

ギアをセカンダリに変えると、トランスミッションのカチリという柔らかい音が聞こえる。そのあとに続いてガラガラという音がはつきりと聞こえる。こんな音がする原因はなんなのかわかったのだろうか？ いや、わからなかったと思う。「代わりにラジオを聴くかい」僕はレイチェルに尋ねる。

「いいわね」レイチェルはもう一度靴を脱ぎ飛ばしてダッシュボードに足を乗せ。すばやくフロントガラスに足を一歩ずつ運んでいく。さらに足跡が増えた。

「チェロキーのことを話してくれよ」おそらく僕は、車に足跡をつけるレイチェルの気を逸らそうとしているのだろう。

「いいわよ。ものすごく辺鄙でつまらない場所。まるでカタツムリみたいに、のろのろしているの。学校はセコいの。チアガールがポンポンをひとつしかもらえなかった話をしたと思うけどー」

「聞いたよ。君のパパとママに連れられてデイリークイーンへ行った時さ。覚えてるかい？」

「ああ、そうだったわね。とにかく、もしパパとママがコリンスに残ることを許してくれたら、チアリーディングのチームに入ろうと思うの。バトンガールでもいいわ。私、脚は太くないし。太いと思う？ ほら、触ってみてー」レイチェルは僕の手を取り、彼女の太腿に置く。

「そこじゃなくて、ここよ。そう。分かったでしょ？ 脂肪なんて少しもついてないわ」

「最高のチアリーダーになれるよ、レイチェル」

「ありがとう。私もそう思う」彼女は、足をフロントガラスに戻す。「私、運動が得意なの。それに夜型よ。考え事はほとんど十時から二時の間に済ませるの。あなたが私と結婚するって決めたときのために、一応言っておくわ」

Respectable

僕はロックして、すばやく周辺視野をスキャンする。レイチエルはまた足をダッシュボードに乗せている。彼女の足跡が車の中一面についているだろうと僕は思う。

「それだけじゃないわ」レイチエルは続ける。「私は完璧主義だし、いろいろうるさく注文をつけるの。好みがるさいってママに言われるわ。これも言っておくけど、――私ってはっきりモノを言うタイプよ。欲しいものがあれば、あなたにそう言う。それに嫌なものは嫌だとはっきり言う」

「覚えておくよ」

「こんなブスでなければ、チャリー・ディング・チームで活躍できるのに」

「何言ってるんだよ」

「やめて、自分の見た目がどの程度かくらい知ってるわ。――世の中には鏡があるのよ。この前歯を見て。まるでシミリスみたい。それにお尻は少し大きすぎる――」

「ねえ、君は本当に――綺麗だよ」僕はレイチエルに目をやり、肩ひもない黄色いイブニングドレスに身を包んだ姿を見る。白い「サーージュをつけている。僕はイメージをロックして、しげしげと眺める。――疑問をはさむ余地などない。これは、かなり綺麗な女の子だ。ブレンダ・レイシーとは違う種類の綺麗さではあるが、綺麗なことに間違いはない。

「綺麗、か」レイチエルは言う。「ほとんどの人は私を『可愛い』って言うわ。前に付き合ってた男の子もそう言った。でもね、その人、ラット・テリヤのことも可愛いと思ってたの――」

「もつとチロキーのことを話してくれよ」

Dreamer 13

Respectable

「オーケー。家について話すわ。チエロキーの町外れにあつて、両脇が給水塔と教会なの。二つの塔のせいで、まるでつさぎみたいに見えるのよ。煙突のところには焦げた跡があるんだけど、それは助祭さまのせいなの。どうしてだかわかる？」彼女は僕を見る。

「分からないな、なぜだい？」

「去年の十二月、教会の助祭さまは、なぜうちの家族がクリスマスの飾り付けをしないのか不思議に思つてみたい。で、パパにプラスチック製の賢者をくれて、煙突に取り付けたの」

「プラスチック製の賢者？」僕はレイチエルを見る。今、彼女はまた体勢を変えて、ドアにもたれかかり足の裏を僕の脚に押し付けていた。

「プラスチック製の賢者を一人ね」レイチエルは続ける。「たぶん、三つを買うお金はなかったんじゃないかな。——おまけに、助祭さまたちはサンタクロースを買うのは嫌だったのよ。——サンタはとても高いもの」

「プラスチック製の賢者ねえ」

「煙突に取り付けたの。でも取り付けたあと、私たちそれをすっかり忘れてしまった。そして暖炉に火を入れたら、賢者が溶けちゃったの。残ったのは帽子だけよ。ほかは煙突を伝つて流れてきたわ。運良く、火事にはならなかったけど」

「助祭はなんて言つてた？」

「助祭さま？ あの人たちのことなんか気にする必要ないわ。あの子供みたいな三人に、溶けた賢者のことを説明するなんて、あなたならできる？」レイチエルは手を伸ばして、ラジオをつける。8年前に流行ったロネットのオールデイズが流れてきた。『ヒュー・マイ・ベイビー』。

Dreamer 13

「この曲、大好き」レイチエルが言う。「オオロギの鳴き声がある」

「カスターネットだよ」僕が言う。

「実際に見た」とあるの？」

「いや、ない」

「だったら、分からないでしょ？」彼女は愛くるしい笑顔を浮かべる。

南へ車を走らせるにつれ、ラジオの雑音が多くなっていく。いまにも音楽をかき消しそうだ。レイチエルが正しいのかもしれない。どこかで嵐が待ち構えているのかも。シーンをロックして、砂埃の向こうに広がる暗闇に目を凝らす、何も見えない。

「レオナルド」

「やあ、マイケル。そっちの様子はどうです」

「今、一九六六年の八月か九月にいる。ミズーリ州コリンズの南方だ。当時、このあたりで嵐が発生してないかな」

「夏の二か月のあいだに、ですか。時期を特定してくださいよ」

「オーケー。『ウドラント・イット・ビー・ナイス』の最後の部分が聞こえて、ロックしたときには、ザ・ホーリースの『バス・スト
ップ』がラジオから流れていた」

しばしの沈黙のあと、レオナルドの声が聞こえる。「お望みどおり答えが与えられました。ジュークボックスによると、あなたがいるのは間違いない一九六六年八月の第一週です。聴いているのはどのラジオ局ですか。リトルロックのKAYかな」

「そうみたいだ」

Respectable

「ええと、そのデータも使った方がよさそうだ。きつと試験にでますよ。一九六六年八月第一週のKAYの曲順は、『バス・ストップ』、『ドライブ・マイ・カー』、『サマー・イン・ザ・シティ』、『ルイジアナ州シュリーフポートにあるサムズ・レコードショップのCMをはさんで、『サンシャイン・スパーマン』そしてニース、続いて『ブラック・イズ・ブラック』、『ウドウン・イット・ビー・ナイス』、『サムズ・レコードショップのCM』」

視界の隅に見えるダッシュボードのラジオの黄色い光をスキャンし、そのままフロアボードの暗闇に目を移し、僕の脚に押し付けられたレイチエルの足の輪郭を見る。霞がかかったようで、よく見えない。

「WSかKOMAの曲順が知りたければ、コールしてください」

「ありがとう、レオナルド」

「こっちは退屈な夜ですよ」

「だろうね」

ロック解除。

「なあ、レイチエル、次に何の曲がかかるか当てっこしないか」

「いいわよ。あなたからどうぞ」

「ザ・アウトサイダーズの『リスペクタブル』。さあ、どうなるかな」

「次の曲ね？ オーケー、きつと、ビートルズの『ペーパーバック・ライター』よ。もしあなたが負けたら、私ともう一度デートするのよ。もうデート四回分の貸しがあるわ」

「取引成立だ」僕は手を伸ばしレイチエルと握手する。

Dreamer 13

ニュースが終わった。僕はホリユームのダイヤルを右側へ大きく回す。ふいに空気はドラムのロール音に包まれ、続いてギターとホルンの音が響く。「ホワット・カインド・オブ・ガール・イズ・デイス　ザッツ・ネバー・エバー・カム・ホーム・レイト―」
レイチエルが目をまんまるに見開いて僕を見る。「当たったわ！　私、感激しちゃった」　レイチエルは僕の腕をつかむ。「どうやったのか教えて」

「たまたま当たっただけさ」

確かにたまたま当たっただけけど、―　ものすごい偶然であることは確かだ。たった今レオナルドがラジオ局のプレイリストを読んだら、次の瞬間、僕の若い自我が曲名を口にした。三十年前に起こったこの実際の出来事を、ぼんやりと思い出すことはできる。たった今僕が驚いたのと同じように、当時の僕も驚いたはずだ。

突然、別の映像がぼんやりと現れる。プロム・パーティーのドレスを着たブレンダが、家の黒いグランドピアノを弾いている。

次は、ブレンダがストライプの水着を着て―

「ねえってば」　レイチエルが足で僕を突付く。

「なんだよ」　ブレンダの映像がかき消えた。

「ねえ、どうやったのか教えてよ。なんでこの曲がかかるって分かったの？」

「魔法だよ。僕は未来を見透かせるんだ」

「もう、マイケルってば―」　知りたくてたまらないという目でレイチエルは僕を見る。「いつもそうなんだから。ねえ、どうやったのか教えて。そして教えるときは笑っちゃダメよ。あなたって笑う時はいつも嘘をついてるんだから」　レイチエルがにじり寄ってくる。「ほら。また私のこと騙そうとしてるでしょ。だってあなた、笑ってるんだもの―」

Respectable

好きだったのは 彼女かい？

ノー、ノー、ノー

彼女を 抱いたかい？

ノー、ノー、ノー、ノー

「あのね」 レイチェルが言う。「土曜日になると、チエロキーの家の庭に座って、道をすれ違う車を眺めてたわ。このすれ違う車の中には、絶対にお互いを知っている人たちが乗ってるはずだって、考えてたの。でもね、誰もそれに気づかなかった。――ただすれ違って、お互いを見ることもしなかった。そのことについてすごく考えたわ」

レイチェルをちらりと見ると、彼女は僕を見つめていた。僕は視線を止めると、たぶん微笑んだのだろう――前方の道路へと視線を戻した。そのとき、シーンにヘッドライトの光があふれた。僕は右側へハンドルを切り、あやうく溝に落ちそうになる。

「干草を積んだトラックだ」僕は言うと、視線を道路に戻す。スピードメーターをスキャンする。時速八十キロも出ている。砂利道だったというのに。

見事な反応だったよ、小僧。

レイチェルが手を伸ばしラジオをつける。「今晚、『サマー・イン・ザ・シティ』がかかるとかな？」

Dreamer 13

「こっしょう」僕はレイチエルに言う。「街に戻ってジンジャーエールを飲んだら、ドライブインシアターへ行くんだ」そこでブレنداに会っただろうか。もちろん、もし会ったとしたら、ややこしいことになるだろう。

「もう遅いわよ」レイチエルが言う。「このままドライブして、刑務所に光が点いているかどうか見に行こつよ」

その瞬間、誰かが照明を点けたように空が明るくなった。車を包んでいた暗闇は消え失せ、薄暗がりの中夕暮れの光に照らされた緑の丘が現れる。砂利道も消えていた。僕たちは州を結ぶコンクリートの高速道路を走っている。

レイチエルはまだここにいる。だが短パンと白いブラウスは、ジーンズと裏返しにした色の濃いスウェットに替わっていた。彼女は話の途中だった。「ブラッドレーよ。私より四歳年下なの。そして七歳のステイシーと、四歳のエイミーがいるわ。子供の扱いは上手？」

「だと思っけどー」

「上手になったほうがいいわ。なぜかという、エイミーはジョークを覚えるところなの。あの子がジョークを言ったら必ず笑ってね。そうしないと、あの子の気持ちを傷つけてしまうから。エイミーの得意なジョークはこれよ。『ある犬が、もう一匹の犬になんと言ったか？』」

「分からないな」

『ボーンハウス納骨堂で会おう』「これって笑えるわよね？」

「ああ、なんでだか分からないけど、笑えるよ。少しね」

「とにかく、エイミーがこれと言ったら必ず笑ってね。運転、替わろうか？」

「いや、大丈夫だ」

「ええ。ターボ・モードのときは、しゃべる前にロックしてくださいよ。消防車のホースから水が吹き出るような勢いで、シグナルが変換機に送られるんです」

「こっちだと、それほど速く感じないけど」

「アイシユタインもそう言ってます。もう一時間、要りますか？ あなたには、全面的な許可が下りています。それに、Eザはどうせすっかり冷めてますし」

「ああ、そうしよっか」

「私、十二歳のとき運転を始めたわ。車はオールズ・エイティ・エイト。あの車を十二歳で運転できたんだから、来年のテストなんて楽勝だと思うの」

ラジオからローリング・ストーンズの懐かしいヒット曲、『ペイント・イット・ブラック』が流れている。レイチエルはボリュームを上げた。「この曲、色を変えるカモメの歌詞のところが好きなの」

「何か別のことを歌ってるんじゃないかな」

「そんなことないわ。カモメ、つまりシーガルの話よ。ねえ、カモメのことを考えたら、お腹が空いちちゃった。私のことを好きなフリをして、タルタルソースのたっぷりかかったフィッシュアンドチップスを「ちそうしてくれない？」

「マイケル、レオナルドです。一時間経ちました。どんな調子ですか」

「いまのところ順調だ。ローリング・ストーンズを聴いているよ。今は夕暮れで、そして――」

ロック解除。するとシーンは消え失せた。僕はコリンスの自分の部屋で、山のようになった毛布の下で、あおむけに横たわっている。窓越しに差し込む光は、凍てつくようなグレーだ。今は冬。アールのベッドは整えられていない。アールがまだ生きているということは、一九六三年以前に違いない。また兄と話すことになるんだ。傍観者に起こる激しい興奮と高揚は調整されるようになっていて以前聞いたことがある。そのとおり僕の感情の色は、黄色、赤、青から、均一なベージュに変わっている。ハウンドストーンによると、それは自我保護のメカニズムで、そのおかげで僕たちは実世界の現在に留まっていられる。それでも、僕は家族にもう一度会えるのを望んでいる。

シーンをスキャンする。ー 冬の暗い部屋だ。ドリーマーが感触を持ってないのを本当に残念に思う。ー 体をスキャンして、自分が九歳なのか、十二歳なのか判断することができないのに。ベッドの端の距離から、自分の身長を測ればいいかもしれないな。

残念だが、この奇妙な世界で僕に許されているのは、視覚と音だけだ。

僕は頭まで毛布を引っ張りあげて、寝返りを打つ。きつと寒いのだろう。鼻をすする音が聞こえる。

分かったぞ、僕は風邪を引いているんだ。今は、僕がインフルエンザにかかったあの最悪の冬じゃないだろうか。数え切れないほど、トイレへ駆け込んで吐いたんじゃないか？ 最高じゃないか。こんな素晴らしい旅行を計画してもらえないなんて、初めてだよ。

小さな手が、毛布の下から出てきてラジオをつける。あまり聴いたことのない曲だ。『キャッチ・ア・フォーリング・スター』
ロックをすると音楽も止まった。

「レオナルド、ジュークボックスの電源を入れてくれ。『キャッチ・ア・フォーリング・スター』って曲が見つかるかな」

「ちょっと待って。ええ、これです。ーペリー・コモ。なるほど。」歌う理髪師ですね。一九五八年一月十一日から二十週間チャートに入っています。十歳のころに好きだった音楽を聴くのは、どんな気分ですかね」

「最悪だよ。インフルエンザにかかっているんだ」

「インフルエンザですか？ 待ってください。ああ、それはありません。その冬に中西部で、アジア産の菌を持つ風邪が大流行しています。ちょっと待って。健康関係のアーカイブを見ているんですが、ー、すこいな。かなりの時間をトイレで過ごしたでし

ょう」

「情報ありがとう」

「どういたしまして。何でもミスター・レオナルド・チャップマンにお尋ねください。みなさんの質問に、即座にお答えします

ょう」

シーンのロックを解除する。僕は天井を見つめている。ーインフルエンザにかかって寝込んでいる退屈しきった少年だ。目は閉じられ、僕は漂っていく。次の瞬間、シーンは変わり、今僕は家の廊下を歩いている。ー僕の家ではない。角を曲がりソファで丸くなった女の子を見下ろす。女の子の黒髪はもつれ、顔は真っ青だ。

「レイチェル、ー起きてー！」

彼女が小さな赤いハートが散りばめられた白い綿パジャマのトップスを着ているのが見える。右の袖口には黄色いしみがあ
る。僕は手のなかにある何かを見る。茶色い小さな薬ビンだ。ラベルには『セコナール』とある。『就寝時に一錠お飲みくださ
い』

『ビンは空だった。』

「あなたが選ぶことですが、でもね、これは忘れないでくださいよ。すべてはすでに起こったことです。そうでなければ、あなたはそこにいないんですよ。そっでしょっ」

「そっだろっね」

「よく考えてください。五十分後に現実世界で会いましょう」

「レイチエル」

ロックする。僕はチエロキーのドミニク家にいる。今は夜だ。僕の厚いコートが椅子に掛けられているのが見える。――きつと冬に違いない。十一月か、あるいは十二月だろうか。

「レオナルド」

「いつもここに隠れていますよ。タイム・サーフインはどんな調子ですか」

「『セコナル』という薬について何か分からないか」

「待つてください。オーケー、分かりました。セコバルビタール。赤いカプセル、100ミリグラム。バルビツール酸系。――通称、赤い悪魔と言われています。一体どこで見たんですか」

「何のために使われるんだろう」

「睡眠薬です。一九七〇年代の後半まで、医者はこの薬の使用に関して非常に甘かったと書いてあります。何事ですか」

「分からないけど、問題に巻き込まれてる」

「それなら、その場を去ればいい。もう一度体験する必要なんてありませんよ」

「そうしていいんだろうか」

僕はシーンを離れ上昇し、部屋は一九六六年十二月の暗闇のなかに消えていく。レイチエルはなすすべもなく、たった一人で、下方へと遠ざかっていく。

それから少し過去へ戻って、十一月を通り過ぎる。カークスヴィルの大学の授業や、コリンスでレイチエルや両親と過ごした茶色い秋の週末の上空に、僕は浮かんでいる。ラジオとフロントガラスに当たる雨の音を聴きながらレイチエルと一緒にチエロキーへ向かったドライブの上空を通りすぎるシーンを過ぎる。

十一月の初旬へ上り、そして十月の最後の週。

シーンは速度を落とし、そして止まる。僕はフロントシートに座っている。ポンティアックだ。緑とオレンジ色が混ざった木々が、車の外に見える。秋だ。スーツを着込んだ人たちが見える。日曜に違いない。

「パパはいい説教をするわよ、まあ見てて」 レイチエルが僕に言っ、ちらりと父親を見える。「きつと耳を疑うわ」

僕はレイチエルの視線を追って、ドミニク氏を見る。ポンティアックのバックシートに退屈しきった黒髪の息子と、下の女の子二人― 両方とも金髪だ― に挟まれて座っている。紺色のスーツ、黒い靴、黒いネクタイを身に付けて、ウエイファーラーのサングラスをかけたドミニク氏は、まるでカンザスシティのどこかのバーからきたサクソフオーン吹きといった風貌だ。

しかし、ボブ・ドミニクはあきらかに説教者に違いない。― しかも聖書の余白に書かれたメモから判断すると、かなり経験を積んだ説教者だ。

僕はこの日を覚えている。ドミニク氏はハンツデールという小さな農村の教会で、説教をすることになっていたんだ。

Respectable

ドミニク夫人は勢いよく急カーブを切ると、ドミニク氏は日曜にはメソジストコミュニティで、先週は長老派のコミュニティで説教をしたのだと、僕に言った。ミズーリの田舎では、プロテスタントの宗派内にはある種の柔軟性があるらしい。

ワンダはハンドルを切って、ポンティアックをハンツデールへ続く脇道へと入れる。「あと十分よ、あなた」彼女は自分の夫に向かって言う。

「もうすぐだ」せわしげに何か走り書きをしながら、ドミニク氏が言う。「ヨハネの福音書十四章一、二節について何か話そうかな」

「あれはいい話ね、ボブ」ワンダが運転席から言う。「私の父の家には、住むところがたくさんある」

ドミニク氏は僕を見る。

「今朝は、ハンツデールの善良な信徒たちと存在の意味について話そうと思っ」

「いいわね、みんな気に入ると思っわ」レイチエルが言う。

「欽定英訳を使ったほうがいいだろう」ボブは口を閉じ、ノートに何か走り書きをすると顔を上げた。「どの聖書をもとに説教をするのかと、まっさきに訊かれるんだ。ミズーリのこのあたりでは、聖書は欽定英訳しか使われてない。独占状態だ」

「欽定英訳聖書のことよ」レイチエルのママが説明する。

「そうだなー」ボブが考え込む。「住むところがたくさんある。おそらく大きな報いを求めている時は、住む場所を次から次へと彷徨い歩く。あるいは部屋から部屋かもしれない。もちろん、それが自分の身に起つたら、私はコーヒーポットの

ある部屋を探すよ。そして玄関の敷物の上で躓くに決まってる」

Dreamer 13

「そんな話をあの人たちにしちやダメよ」レイチエルが言う。「二度と声がかからないわ」

「なあ、マイケル」ボブが僕に向かって言う。「この信徒の人たちは、記憶力がすばらしくいいんだ。どこかで聞いたことのある説教をしたりしたら、いろいろと言われるだろうよ。そんなの恥ずかしいからな」ボブはバイブルに目を戻し、またメモを取る。「やはり『住む場所』で行くよ。ポットにコーヒーは残ってるかな」

「あるわよ、パパ。はい」レイチエルがシートの下をひっかきまわし、ポットを手渡す。

「コーヒーがないと、頭が働かないんだ」蓋を回しながらボブが言う。「ある年インフルエンザにかかったが、一期末試験があつたからその週は寝込むわけにはいなかかった。すると電話がかかってきて、一復活祭の礼拝で説教をしてくれといふんだ。母親に『マックスウエルハウス』のコーヒーを2ポット作ってもらって、教会へ出かけて説教をしたよ」

「そのことを覚えてるわ」ワンダは頷く。「ボブは顎の下が真っ青になってた。歩くことさえできなかった。説教するなんてとても無理だと思つたわ。でも次の瞬間、背筋を伸ばすと、一出ていってすばらしい説教をしたの。病気がかかっているなんて、少しも感じさせなかつた」

「どうやったのか教えるよ」ボブが言う。「歩いて出て行くと、四方の壁がすべて、同じ方向に傾いているように見えた。壁は垂直なはずだから、傾いているのは私である」とは間違いない。そこで、壁とかなんとかすべてに合わせて自分の体を立て直すと、壇上に向かつた。そして説教を済ませて、その場を立ち去つたのさ」

「礼拝の後、すぐに病院に連れて行つたわ」ワンダはそう言うと、教会へ続く道へと車を入れた。「ボブは両側肺炎にかかつていたの。一週間、入院したのよ」

Respectable

その後、レイチエルの父親が教会の長老たちと会っている間、ワンダとレイチエル、子供たちと僕は、赤いレンガ造りの教会の正面玄関を取り囲むように立っていた。見上げると、ステンドガラスの窓が白い筋の入った水色であることに気づく。その上方に広がる十月の空の色とまったく同じだ。それは見事なまでの偶然の一致で、最初にこれを見た後、僕は何度もこの偶然のことを思い出した。

数分後、僕たちは満席の信者席の最後列に座っている。細長い窓から差し込む太陽光に照らされた教会のなかは、満席だというのに広々と感じられ、息苦しさは全くない。おそらくステンドガラスの青色のせいだろう、漆喰の壁や木製の柱の間を縫って差し込む朝の光は、考えられないほど天井を高く見せている。流れる雲が窓の外に見えるのではないかと思う。どうして僕は、このことを忘れていたのだろうか。

囁きが聞こえる。「いいこと教えてあげる」

「なんだい？」僕はレイチエルのほうに体を向ける。彼女は親指で讚美歌集のページを抑えていた。

「もし退屈したら、この賛美歌の題を見るのよ」

「それでっ」

レイチエルが僕に体を寄せる。「でね、『私のベッドで』って付け足すの」

「えっっ」

「「っっ」 僕にページを見せる。「汝の栄えあることが語られたー、私のベッドで」 ねえ、これいいでしょ？」レイチエルはページをめくる。「次はこれよ。『誘惑に負けてはならぬー、私のベッドで』『これはどう？』『私は友を見つけたー、私の

『ハハハハハハ』」

Dreamer 13

「レイチエル、シート」 母親がレイチエルを睨む。

「別にいいでしょ」 レイチエルが母親に言う。「マイケルに教えてたの。パパの説教に退屈した時のためにね」 母親からの返答を待たずに、レイチエルはすばやくページをめくる。「オーケー、いいのがあったわ。『顔と顔を近づけてー、私のベッドですー』」

「今のは傑作だ」 僕はレイチエルに言う。目を上げると、背の低い温厚そうな顔つきの助祭が、信徒たちに話しかけていた。「明日の夜、教会の地階で予定されていた若者ための友愛パーティーが変更になりましたー」

「マイケル！」 レイチエルがひじで僕をつつく。「いいのを見つけたわ。』どうして今、行わないのかー、私のベッドで」 ハハハ

「フロシー・グリーンが今度の土曜のパイの販売会の責任者です。たくさん参加者を期待してー」

『私が血を見るときー、私のベッドで』 おっと、これは忘れて」 レイチエルはページをめくる。『近くへ、もっと近くへ、私のベッドで』 『ひとりではないー、私のベッドで』 ふーん、ブレンダ・レイシーのことみたいね、ハ！」

「レイチエル！」 ワンダが声を荒げる。「静かにしなさい！」

「ごめんなさい」 レイチエルは暫らくのあいだ讚美歌集を閉じる。

一分後、クスクスという笑い声と服のこすれる音が聞こえたと思つと、レイチエルが肘で僕をつつく。僕が視線を落とすと、白い手袋をはめたレイチエルの指が賛美歌の題を指差すのが見える。『星になってくれないかー、私のベッドで』

「ー今日は、ポプ・ドミニク師とご家族を再びお迎えしたいと思います。教会の後列にご家族が座っているのが私には見えませんが、ー皆に見えるように立ってくださいますか？」

ワンダ、レイチエル、子供たちはすぐに立ち上がり、微笑み、また席に着いた。助祭は信徒に向かって優しい微笑を浮かべると、賛美歌集を開く。「起立して、最初の賛美歌を歌いましょう。第四十八番、『今、私を満たせ』」

聖歌隊が歌い始めたとき、レイチエルを見ると、笑いで体が振るえ、涙が頬を伝って流れ落ちていた。通路を挟んだ席に座っている老婦人がこちらを見て微笑む。おそらくこんな光景を前に見たことがあるのだろう。

僕も微笑みを返す。音楽が大きくなり、僕は、太陽が壁の上に細長い光を投げかけているのを見る。見上げると、頭上を流れる雲がもう少しで見えそうだ。この場所を僕は知っている気がする。

僕はレイチエルの方を向く。今はもう落ち着いて、信徒たちに合わせて一緒に歌っている。彼女が顔を上げると、僕と視線が合った。

「あなたと私は繋がってる」 そう彼女が言うのが聞こえる。「知ってた？」

そう言うと彼女は微笑み、賛美歌集に目を戻した。

動きがだんだんと加速しはじめた。教会は下方へ遠ざかり、僕は空へと登っていく。次はどこへ行くんだ？

「マイケル。ドクター・エンボゴです。何か他に薬を見つけましたか」

「いいや、あとのどのくらい時間が残ってるかな」

「約ミッドナイトナイト、ー 二十分です」

「オーケー。おそろくもつと早く戻ると思いつ」

レオナルドから返事はない。たぶん、ジャを食べているんだろう。

Respectable

教会はすっかり消えてしまった。今、ドミニク氏に連れられて、僕は小さな家のなかの部屋を通り抜けている。ドミニク氏は紺色の長袖シャツ着て、ブルージーンズをはいている。周辺視野には、レイチエルが母親と一緒にキッチンにいるのが見える。「うちには客用の素晴らしいベッドルームがあるんだよ」ドミニク氏が言う。「あいにく、その部屋はリビングルームでもあるんだがね。ソファで寝てもらってもいいかな」

「もちろん？」

「よかった。うちに来たお客には、まず最初に冷蔵庫と浴室の場所を教えるんだ。冷蔵庫はキッチンにあって、浴室はここだ」

僕はドミニク氏について、細い廊下を抜けてピンクのタイルがはられたトイレへ行く。「今年の春に、家に入れなくなった」とがあった。――誰かさんが鍵を家の中に置き忘れたせいだね。――だがエイミーのおかげで助かった。我々は地下室からエイミーを洗濯物シュートを通してトイレに押し込んで、中に入ったエイミーがドアを開けたのだ」

「名案ですね」

「だが、それをやってのける時に、エイミーは少し興奮しすぎてね。トイレのドアの横にある鏡を叩き落してしまった。下から二番目の娘のステイシーがそれを直そうとして、かなづちを別の壁にめりこませたんだ。だから便器の向かいの壁には、二十平方センチくらいの穴があるのだ」

「なるほど」

「壁の向かい側はクローゼットなので、誰かがそこに隠れることはまずないだろうが、絶対に誰にも見られたくないなら、穴をタオルを押しさえたほうがいいぞ」

Dreamer 13

「あまりうまくいきそうにないな」

「その通り」 ボブは笑う。「前かがみになってタオルを抑えてなきやならん羽目になることもある。こいつはかなり辛いぞ。フライバシーを取るか、トイレへ行きたい衝動を取るかの選択をしなきやならん」

壁のギザギザとした穴を覗いてみる。そこから、隣の部屋のテレビが見えた。

「修理するとワンダと約束したし、そのつもりではあるが、なんにせよ、この町には壁板を売ってる店がないんだよ。ボール紙を貼り付けてもいいかもしれんな。どうせ数か月後にはウエスラヤンに引越すんだ」

「そうですね」 僕は穴から目をそらして振り向くと、次の瞬間、夜になっていた。今、僕はどこかの砂利道の真ん中に立っている。

「これを見てー」 レイチェルが夜空にある何かを指差す。

ロックだ。

「レオナルド」

「もう戻るんですか」

「どうやら、― 数時間前にいた場所に戻ったみたいだ。一九六六年八月か九月」

「メモリアループに入り込んだようですね。オットーは時々やるんですよ。そこから出たければ大声で叫んでください。テリを呼んで、ダイクのあとにニョクして、核爆弾を一発打ち込んでもらいますよ。そうすりゃ二度と煩わされません」

ロック解除。

車の上の夜空を焦がすような明るい光が放射状に広がり、地平線上にもくもくと立ち上る積乱雲の輪郭を照らし出す。

僕はレイチエルの方を向く。「どうしてわかったんだい？」

「言ったでしょ？ 私、雷のことが分かるの。いつもそうだった。だから気をつけたほうがいいわよ」レイチエルはもっ
たいぶって言葉を切る。「オーケー。実はトリックがあるの」レイチエルは声を落とし、ささやき声で話す。「嵐に話しかけて、
次の雷はどこで起こるか尋ねるの。信じれば、うまくいくわ。見てて」レイチエルは暗闇に向き直る。「ねえ、嵐さん—
左から右よ。いいわね—」

それに応えるように、夜空をつんざく光があふれ、もくもくと立ち昇る積雲を照らし出す。そして曲線が途切れた箇所
から、ぎざぎざの黄色い光が現れる。

左から右へ。

ロック。「レオナルド、一九六六年月の三週目に、コリンズの近くで嵐がなかったかな」

「興味深い質問ですね。待ってください。天候フォルダ、よろしく。ミズーリ、一九六六年—」

「レオナルド？」

「地図であなたの場所を確認してたんですよ。今、画質の最悪なコピーを見てるんですが、でも一九六六年八月二十一日ミ
ズーリ州ペリーに何かあるようです。今いるのは、その頃ですか？」

「おそろく近いと思う。— その夜に雷があったかどうか、教えてくれないか」

「マイケル、夏の嵐は普通、雷を伴いますよ」

「ありがとうございます」

「基礎科学一〇一の授業で習います」

Respectable

「わかった、わかった」

ロックを解除すると、頭上の空で再び光が炸裂した。この光は、僕をフレームから完全に押し出した。錯綜する光と色が、それぞれの場所に収まると、そこは昼で僕は自分の車の中にいた。

そこは別の場所だったが、今度は自分がどこにいるのはよく分かった。先ほどいた場所から二百五十キロ西南に移動して、ミズーリ州ウエスフヤンの小さな学園町にいる。レイチエルと家族が一九六七年一月に引越した場所だ。

シーンをロックする。車の真正面に看板が見える。『クク・バーガー フィッシュ・スティック・フライ・オレンジ 七十五セント』

ロックを解除すると、車のドアが開きレイチエルが乗り込んできた。ニコニコと笑ったフレンチフライの箱の絵が縫い付けられたエプロンをまだしている。

「今日の午後は、すっごく忙しかったの。金曜日ってどうしてこうなんだろう。ーあなたが来るのを、いまかいまかと待ってたわ。ねえ、エプロンを脱がせて」レイチエルが背中を向けたので、僕はエプロンの結び目と格闘する。ようやく結び目はほどけ、エプロンがするりと落ちる。

「ふー、ありがと」レイチエルはエプロンを四角にたたむと、バッグの中にしまつ。「私、ハンバーガーの匂いがするでしょ。ごめんね。でもマイケル、気にしないわよねー来てー」素早いキス。

「リップグロスだ！」僕は袖で唇をぬぐう。「もーっ、なんでそんなもん付けるんだよ」

「なんでそれをシャツの袖に塗りたくっちゃうの？」レイチエルは微笑みながら僕に尋ねる。「大学からドライブしてどうだった？」

Dreamer 13

「順調さ。早く出発してママと。パパに会ってきた。君によろしく言ってたよ」

「私からもよろしく言ってたね。二人は私たちが結婚すること、まだ腹を立てているの？」

「もうほぼ乗り越えたよ。ママは徴兵があるんじゃないかって、そっちのほうを心配してる」

「子供がたかさんいれば、徴兵はされないわよ。とにかく友達のリッツサがそう言ってたわ。ー 私たち子供を五人持つつもりだってママに言うといいわ。私はとても賑やかな家族の出身だし」 レイチェルはバッグをバックシートに置くと、僕の隣に飛び込んでくる。「ねえ、早く服を脱いでシャワーを浴びたいの。私、チーズバーガーの匂いにするのよ」

「了解」 僕は車を発進させ、敷石で舗装された道路を西の町へと向かう。

「私のシフトが始まってからすぐ。パパが来たって話したっけ？ いつものようにフィッシュバーガー、ポテト、コーラを注文して、私にチップをくれたわ。学校からスーパーでの仕事に行く途中だったの。今、仕事を三つしているのよ」

「仕事を三つ？」

「そうよ」 レイチェルは自分の指を数える。「カレッジの講師と、セーフウェイスーパーの在庫管理と、ラジオ局でも仕事でね、そのうちの二つが…」

「眠る時間あるのかな」

「ときどきはね。あ、思い出した！保安官局での仕事にも応募したけど、まだ採用は決まってないの。パパは社会学を教えていたから、社会主義者だ」というより、ほとんど共産主義者だと思われるんだろう、ってママが言ってた」

「ママは君をからかっているんだよ」 僕は車をレイチェルの家の私道へと入れる。

Respectable

「聞いてよ」レイチエルが言う。「この辺りの人たちってみんな、軍隊をもつとベトナムに送り込んだほうがいいと思ってるのよ。額にアメリカ国旗を貼り付けてないと、胡散臭い目で見られるの」

「僕もいつかベトナムに送られるんだろうな」

「子供が五人いれば大丈夫よ」レイチエルは僕の頬に軽くキスをする、

「待つて、— パパの三つめの仕事を思い出したわ。今週の日曜、メソジスト教会で説教をするの。」

それが第三の仕事」

「君のパパが説教をするのかい？ 何時？」

「朝の礼拝よ。だから早起しなきゃいけないの。夜更かししておしゃべりしたり、遊びまわったりしちゃいけないの。すぐに寝なきゃいけないのよ」

遊びまわっちゃいけないと、レイチエルは言ったのか。僕はフォードを二階建ての家の前のカーブにつける。家は白い羽目板に囲まれた、細長い箱のように見えた。ポーチの上には窓があり、窓の反対側には街灯がある。見慣れた光景だ。

私道には車がなかった。家には誰もいないようだ。

レイチエルが車の窓から身を乗り出す。「ママはまだ仕事みたいね。最近、金曜日に仕事をしているの。妹たちはたぶんメリッサの家に行っているのよ。メリッサは飼い猫を獣医さんに連れていかなきゃいけなかったの。私、シャワーを浴びるから、一緒に二階に来る？」

「冗談だろう」

「一緒にシャワーを浴びるわけじゃないのよ。誰かしゃべる相手がほしいだけ」

Dreamer 13

僕はエンジンを切り、車のドアを開け、広い空間に足を踏み入れる。真正面には、一列の雷雲が見える。巨大な灰色の柱が夜空にそそり立っている。その上部では電気が瞬き輝いている。

「よし、雷をてっぺんに向かって走らせてみせるわ」 レイチェルの声だ。

雷雲が少し燻ったかと思うと、巨大な雷鳴が響き渡る。まるで松の板が割れるときのような音だ。そして幾筋にも分かれた光の鋭い枝が、地上に落ちる。

「止めた方がよさそうね。命令したから雲に意地悪されちゃった」

「レイチェル」僕は振り向いてレイチェルを見ようとすると、彼女の世界はすでに少し斜めに回転した写真のようになっていて、そして消えてしまった。僕はまた暗闇のなかにいる。——レイチェルと雷と、自分の過去の上を浮いている。

不意に、僕はこの場所に属していないという強い感覚に襲われる。この場所、このイメージから僕は自分を引き上げ、第十四ラボの誘導チェアまで昇っていく。カチツという音が聞こえ、思考が身体に戻る。僕はここにいるのか？

バイザーのなかで僕は目を開けると、頭上の蛍光灯を見上げて目をしばたかせる。

「早いお帰りですね」ヘッドフォンのからしオナルドの声が聞こえる。「口頭マイクを切るまで何もしゃべらないでください。」

——よし。オーケー、もう話していいですよ」

「どうしたんです」レオナルドが僕に手を差し出す。「まるでスペースシャトルみたいに帰ってきましたね。ついさっきまで向こうにいて強いシータ波を出しながら気象学について話してたのに、今はここに帰ってきて目をパチクリさせてるなんて」

「一九六六年にいたんだ。だがそのあと六七年に飛んで、また六六年に戻った。すごくヘンだった」

「そうみたいですわね」

「彼女は雷を予知することができたんだ。おかしいな。僕はすっかり忘れていて」、

「雷の予知？ 誰がです？」

「昔、知ってた女の子さ。嵐がやってくる時、どこに雷が落ちるか言い当てたんだ。どうやったのかは聞かれても困るけど」
僕はラボを見回す。「ゲイルはまだいるかな」

「ゲイルは第十七フロアの空いているチェアを取りましたよ」レオナルドが言う。「いいですか、そのなぜ雷の予知ができるのかという疑問が気にかかるのなら、そんなことが可能かどうか調べてみましょう。僕はありえないと思いますがね。カフェインの補給をしますか？」

「いやいい。今、何時だろう？」

「午前二時です」レオナルドが言う。「話は変わりますが、あなたが向こうへ行っている間に、パウンドストーンからメールを受け取りました。明朝、オフィスであなたに会いたいそうです。九時きっかりに」

「ありがとう」僕は誘導チェアからずり下ると降りると、靴に足を滑り込ませる。

五分後、僕は部屋に戻るとベッドに倒れこんだ。今夜、夢を見るだろうか。夢なんて見たくない。欲しいのは眠りだけだ。幸福で、空っぽの眠り。天井に星星が瞬く深い洞窟のなかで眠りたい。地平線には月が浮かんでいるかもしれない。三日月だろう。それなら最高だ。

申し分ない。

Respectable

だが、目の前に浮かぶのはレイチエルだけだ。――パジャマのままソファの上で丸くなってるレイチエル。青ざめて、髪はもつれて、目は閉じられている。こんなことが本当に起ったのか。きつと起ったに違いない。でも思い出せない。思い出せないんだ。

過去へ戻らなければ。

電話が鳴る。慌てて受話器と取ろうとして、床に落としてしまう。「もしもし？」

「ドクター・エンボゴです。気象に関する質問の答えが分かりましたよ」

「え、なんだって？」

「レオナルドですよ」

「レオナルド？ まったく、君は眠らないのか？」

「ゲイル・バンクスが誘導チャエアに座つてるときに眠りますよ。ところで、あなたの雷に関する質問をスパム・探索で、ユーズネットに送りました」

「そうなの？」

「ええ、で、ノースダコダ大学の不眠症の男からすぐに返事がきました」

「へえ、そりゃいい、すゝいじゃないか」 僕は目を「する」。「何て言つた？」

「彼が言うには、嵐は内部の雲の空気力学に従つて、電気を放出するそうです。――そのためパターンが不規則になるんです。落雷を統計学的に予測することは可能ではありませんが、あなたのガールフレンドの場合は、単にラッキーだったと

Respectable

というのが彼の意見です。もっとも、彼女がオクラホマ大学の雷観測記録装置にアクセスするコンピュータを持っていたなら、話は別ですが。— そんなことありえないでしょう」

「同感だ」

「彼女はコンピュータを持っていましたか？」

「レオナルド、一九六六年の話だぞ」

「ああ、そうでしたね。白亜紀の時代だ。ハハ。じゃ、また」

僕は電話を切ると、あたりを見回す。

「いったい、今何時なんだ？」

.....★.....

Dreamer 13

今は九時だ。

僕は見事なまでの頭痛を抱えて、パウンドストーンのオフィスに座っている。計算したところ、この一週間で僕は十時間しか睡眠を取っていない。過去にいるときに眠ることは可能だろうか、と僕は思う。九歳か十歳だった頃の、心地よい八月の夜に戻ろうか。窓を開け放して、涼しい夜の空気を入れるんだ。もちろん、アールがラジオの音を下げているかどうか、確かめなきゃ。うん、いいアイデアだ。過去へ戻ってひと眠りするとしよう。心地よい、平和な眠り—。

「で、マイケル、決心はつきましたか？」 パウンドストーンの質問で、僕はハッと我に帰る。「ロングランのことです」

「まだ決心がつきかねません」

「まだですか？」 パウンドストーンは驚いた様子だ。「なにか問題でもあるのですか？」

「そういうわけじゃないけど、奇妙なことがいくつかあったんです。――まるで二箇所に同時に存在していたよう気がしたんです」

「我々はそれを『擬似的な地点同時存在』と呼んでいます。――正常な反応です。脳が明晰夢への対処に慣れてきただけです」 パウンドストーンは言葉を切る。「まだ行き先をコントロールできますか？」

「最近、六〇年代の中期で過してばかりいます」

「そうですか」 パウンドストーンが言う。「誰にでもお気に入り場所があつて、何度でもそこに戻るものです。同じ五週間へ戻つてばかりいる被験者がいますよ。――何度も何度もね。何年ものなかから選ぶというのに、彼女にとっては、その一時期が心地いいものなのでしょう。非常に興味深いタイムループです。それぞれのトリップの特異点を比較して、記憶の働きを説明する機会になりましたよ」

パウンドストーンの言葉を聞いてみると、ドリーマーはコンピュータにつながれた実験動物と同じじゃないかと思えてくる。そのために、僕は一万四千ドルも払ったってのか。

「では、マイケル――」 パウンドストーンは微笑む。

工場を過ぎた時間のことを、パウンドストーンに話すべきだろうか。腕を無くした話を。パウンドストーン博士、ランのあいだにある場所に閉じ込められて、――帰れなくなったらどうなるか教えてください」

パウンドストーンは、この質問に驚いたようだった。「帰れなくなる？ いやいや、そんなことはありません。我々のコントロールは完璧です。ちゃんと連れ戻しますし、数日かけて、戻って原因を説明します。神経上の記憶ループが原因かもしれないし、心理学的な兆候の可能性もあります。——なんにせよ、我々は過去へ戻り、問題を特定しロープそれ自体を除去します。非常に簡単な処置です」

「除去する？」

「催眠か、あるいは他の方法を用いて、あなたの記憶から抹殺するんですよ。約束します、危険性もありませんし、痛みもありません」 パウンドストーンは微笑む。「外科的な処置でもありません。全米保険機関が認可している方法です。——帰ってこれないのではという件についてですが、我々はどんな状況でも被験者を連れ戻すことができます。どんなときでも、いつでも、です」

「ラインがフラットになる可能性はないんですか」

「あるとしても極わずかです」 パウンドストーンは言う。「非常に小さい。ほぼゼロと言っていいでしょう。仮にフラットラインになったとしたら、それはトリップとはまったく無関係の、事前の基礎過程の有無が原因でしょう」

「ラッセル・コルトレーンはラインがフラットになりましたね」

「ああ、その話を聞いたんですね。当然ながら彼の事例について詳細をお話することはできませんが、これだけは言えますよ。コルトレーン氏は、逆説的睡眠に紛れ込んだんです。——それはフラットラインとはまったく別のものです」

「僕は——」

Respectable

「ご安心ください、マイケル。逆説的睡眠は至極正常かつ自然なもので、あなたが眠るときに毎晩行っていることです。仕組みは十分に理解されていませんが、正常なプロセスであることは分かっています。少し考えてみてください。逆説的睡眠は、フラットラインと同じでありえません。まったく別です」

「夢のなかで夢をみるようなことかもしれませんがね」

大きな笑みがパウンドストーンの顔に広がった。「そうかもれません」

「そうですね」 僕は深く息を吸う。「プログラムを続けようと覆います」

「それにはロングランも含まれますね」 パウンドストーンは眼鏡越しの僕を見つめる。

「ええ」

「良かった。セッションあたりの時間が長くなるでしょうから、セッションの数を減らしましょう」 パウンドストーンはカレンダーをめくる。「疲れ果てては困りますからね。では、過去トリップは毎晩ではなく、二週間に一回はどうです？— 最初の頃にやっていたように」

「いいですね」

「では、その方法でいきましょう」 パウンドストーンはカレンダーに何か書き込む。「第十四ラボは、この夏すいています。

もつとスケジュールを入れたければ、そう言ってください」

「そうします」 僕はこの場を去ろうと立ち上がる。

「大学で歴史を専攻したんですよね、マイケル？」

「そうです」

Dreamer 13

Dreamer 13

Respectable

「あなたには天性の素質がある」
パウンドストーンはそう言うと、僕の肩を叩く。「興味深いロングランになりますよ」

十四 ゲイル

電話が鳴る。

目を開けて、部屋の中を見回す。カーテンの隙間から明るい光が差し込んでいる。まだ昼間の光のようだ。パウンドストーンと話した後、僕は部屋に戻りベッドに倒れこんだ。そして今―。

また電話が鳴る。

誰かが僕に電話しようとしている。深く息をつき、目をこすり、腕時計を見る。午後二時三十五分。最高だね。真夜中のトリップのせいで、僕の睡眠サイクルはめちゃくちゃだ。僕は考えようとする。何か夢を見ただろうか？ もし見たとしても、思い出せない。

もう一度電話が鳴る。今度は受話器を取る。

「ミッチェルさん？ セキュリティです。マサチューセッツ、ボストンからお電話が入っています。どうぞ」

「ミッチか？」 僕をミッチと呼ぶ人間は一人だけだ。「ミッチ、ジェリーだよ。元気か？ いい情報は手に入ったかな」

「まだ始めたばかりなんだ。少し時間がかかるんだよ…」

「そうだろうな、分かるよ。なあ、ヒダキに送った提案書のこと覚えてるだろ。おそらくポシヤるだろうと思ってたやつさ。

実は先週電話があつて、代表が昨日訪ねてきたんだよ。ちょっとした歌やダンスを披露した。ビデオクリップを見せたんだよ、

― それで、どうなったと思う？― 彼らのお気に召したんだ！」

「そりゃすげいな、ジェリー。本当にすげいな」

Gail

「あの日本人たちは、最高だね。古いジーンズやビンテージのロックンロールにもすごく関心があるんだ。彼らによると、日本の子供たちはエルビスみたいな格好をして、大きなフジカセを持って、六〇年代のギター・ミュージックでダンスしてるらしい。サーフ・ミュージックが大好きなんだ。ベンチャーズ、覚えてるか？」

「正確には、ベンチャーズはサーフ・ミュージックとは言えないな、ジェリー」

「なあ、どう思う？　なんとヒダキは、アメリカとヨーロッパでの市場キャンペーンを僕たちに任せたいって言うんだ」

「君ならできるよ。状況を知らせてくれ」

「僕にできるだつて？　マイケル、そういうものが一世を風靡した時、僕はたった五歳だったんだぜ。そんなことについて話せたくないよ！　バカにしていると思われるぞ。日本人はそういうことに第六感が働くんだ。だからスペシャリストが必要なんだよ。君がね！」

「なあ、あと一か月したら帰るから、そしたらー」

「来週の金曜に君が必要なんだ。つまり十日後だ。よく考えてくれよ。これは『ボーン・トゥ・ビー・ワールド』なんていう映画を作ったがつてるハリウッド連中の話じゃないんだ。相手は日本人だ、ー世界の支配者だぞ！　六〇年代の専門家が必要なんだよ！」

「考えてみるよ、ジェリー」

「おまけにな、ミッチ、相棒よ、ー君とリンダのことが耳に入った。君も知ってたのとおり、レキシントンは小さな町だから、噂があつという間に広まるんだよ。今、そのことについて話したくないなら、それでもいい。だがこれだけは言っておくが、あ

Dreamer 14

の男はサイテーだぞ。髪をオールバックになでつけてやがる。おまけにウエルダーのサングラスみたいな、あの奇妙なコンセプトグラスをかけてるんだよ」

「それは僕たちが手がけたコンセプト商品だろ。アルファ消費者が使ってることを喜ぶべきだ」

「あんな溶接メガネを手がけたっけ？ あれで金をもらったのか？」

「それは君の担当だよ、ジェリー」

「いいか、ジャンンはあの男を間近で見ただ。少なくとも見積もっても、リンダより十歳は年下らしいぞ」

「誰が？」

「サイテー男だよ。コンセプトグラスをかけてる奴さ」

「ジェリー、ー頼むよ。この件については、自分でなんとかするから」

「分かったよ。でも帰ってくる時には、ーすぐ帰ってくると期待してるがな、ージャンと僕が、客用のベッドルームを用意しておくから。テレビ付きだぞ」

「月曜の朝一番に電話するよ」

僕は電話を切り、床を見つめる。

オールバックだったって？

.....★.....

Gail

僕は電話を見つめる。リンダのオフィスに電話するべきだろうか。あの男のことでリンダを問い詰めるか。あるいはオフィスに電話して、ウエルダーのゴーグルをかけたサイテー男を電話口に出してくれと頼むか。

家に電話して、リンダが家にいるかどうか確かめるほうがいいだろう。僕は受話器を取る。

「もしもし」 リンダの声だ。 — 家にいたんだ。心臓の鼓動が速くなるのを感じる。

「マイケルだ」

「ハイ、マイケル」 リンダが少女のような声を出す。この作り声は前にも聞いたことがある。この後には短い沈黙が続くだろう。 — そのとおりだ。

「なあ、ずっと連絡を取ろうとしてたんだよ」

「聞いたわ。ポールにメキシコシティのホテルのルームナンバーを訊いたんですってね」

「誰かいるのか？」

「ねえ、このことはあなたが帰ってから話しましょうよ。いい？」

「ウエルダーのサングラスをかけてる男は誰だ？」

「何をですって？」

「オールバックにしてる奴だよ」

「オフィスの男性の半数はオールバックよ。一体、何が言いたいのよ？」

「ヴァンもオールバックか？」

「マイケル、それって…、ねえ、あなたまるで高校生みたいよ——」

Dreamer 14

Gail

「ヴァンって誰なんだよ」

「ヴァン？」 リンダは繰り返す。電話からは何の音も聞こえない。リンダの息遣いさえ聞こえないほどだ。電話を切ったのか？

「リンダ？」

「ヴァン・エドワーズのことを言ってるんなら、あなた、新年パーティーで彼に会ってるわよ。ロンドンから来た新入社員なの。覚えてるでしょ」

「覚えてなきゃいけないのか？」

「マイケル、何バカなことを言ってるの。ヴァンは同僚だし友達よ。いろいろ話もしてるわ。奥さんがイギリスにいて、二人は問題を抱えてるの。そうよ、確かに私、彼の手助けをしてるわ。でもここに突っ立って、あなたに一分ごとに私が何をしたかについて報告をするつもりなんてないわ」

「まあ聞けよー」

「聞くのはあなたの方よ、マイケル。こういう話は前にもしたけど、結局なんの解決も得られなかった。今、スケジュールがすごく詰まっているから、私は証人席に座る気なんてさらさらないし、そんな時間もないのよ。じゃ、簡単に言いますよ。ええ、私たちは友達よ。ええ、一緒に時間を過ごしてるわ。それに、メキシコも一緒に行了きました。メキシコで何があったのか、私が何を言っ、何をしたのか、毎晩どれほど遅くまで夜更かしたか、毎朝最初に何をしたのか、そんなことの実況報告が欲しいのかもしれないけど、おあいにくさま、いちいちメモなんて取ってないのよ。何か文句があるかしら」

「リンダー」

Dreamer 14

「どうなの？」

沈黙。気づくと僕は電話を見つめている。

「マイケル？」

「オーケー、そのことについては僕が家に帰ってから話そう」

「もし私があなただったら、帰る前に電話するわね」

「電話？　なんで自分の家に電話しなきゃいけないんだ」

「そのほうがいいからよ」

「リンダー」

無言。電話は切れていた。

僕は受話器を置き、もう一度時計を見る。少なくとも夕食には間に合うだろう。

また電話が鳴る。もう一度ベルが鳴る間、僕は電話を見つめている。電話を切ったあと、もう一ラウンド戦うためにかけなおしてくるなんて、いかにもリンダーらしい。四回目のベルのあと、僕は受話器を取る。

「あなの、リンダー」

「マイケル、ゲイルよ」

「ゲイル？　「ごめんよ、僕はてっきり」」

「話があるのよ。ケラーが大変なの」

Gail

僕はカフェテリアでゲイルの隣に座る。目の前では、ラボ・スーパーバイザーで体格のいいジーン・カップとオットーがこの件について話している。

「ジーン、フラット・トレースだったのは確かなのか？」 オットーはスーパーバイザーに訊く。「振幅が低くなることは時々ありうるしー」

「それは知っています。先生」 その男は首を横に振る。「知っています。ですがフラットのようにでした。遅いデルタ波さえ検出できなかったんです」

「どうしてこんなことが起こったんだ」 僕は身を乗り出して尋ねる。

カップは僕をちらりと見るが、答えようとしてない。

「彼はマイケル・ミッチェルだ」 オットーが口を開き、カップに言う。「マイケルは大丈夫だ。話しても構わんよ」

「そうですかー」 疑わしそうな目つきで、カップは僕を見て、視線をオットーに戻す。「何が起こったのか、我々にもよく分からないんです。ジョエル・ザナックのシフトの時に事件は起こりました、彼は新人なんですよ。トレースの記録の振幅が後頭葉まで落ち込んだんです」 カップはゲイルをちらりと見ると、オットーに視線を戻す。「t-4まで行きました。そして何もなくなりました。シグナルが消えたんです。聞こえるのはノイズだけ。今申し上げたように、ザナックは新人ですが、ゼイの技術チームがリードを貼ったんです。医療チームが心臓、呼吸等をモニターしています。もうかれこれー、私がここに来てからずっとやり続けてます」

「ザナックは電気ショックを使ったのか？」 オットーが尋ねる。

「もちろん使いました。ですがトレースを見ると、シグナルが二分以上も途絶えているんです」

Dreamer 14

Gail

「じゃあ、二分間フラットになったということか」 オットーは眉間に皺を寄せる。「なぜザナックはそんなに待ったんだ？」
「分かりません。アラームが動作しなかったのか、あるいはザナックが眠り込んでいたんでしょう。長いシフトでしたから、そこは調査中です」

「で、ケラーは戻ってきたんだな？ 意識は？」

「じゃあ、今の状況をお伝えしましょう」 テーブルを見回すカップの顔には、心配のあまり何本も皺が刻まれていた。

「ケラーは目を覚ましました。ですが少しぼんやりしているようです。パウンドストーンがいろいろと話しかけるらしいですが、今のところ手こたえはなさそうです」

「フム、そっだろうな」 オットーが眉を寄せる。オットーの目の奥で、歯車が回転しているのが見えるようだ。「脱髄の症状は？」

「分かりません」 カップが言う。「CT検査を予定してるようです」

「時間の無駄だ」 オットーが言う。「七十二時間経過しないと、損傷はCTに表れない。私なら、すぐにMRI検査に送るんだが」 オットーが言葉を切る。「彼らは私にケラーを診させるかな？」

「まだ何も聞いていません、先生」 カップが首を横に振る。「ですが、あなたの耳に入れておいたほうがいいと思ったんです。

― 万が一診察をお願いする場合に備えて」

「分かった」 オットーはゲイルと僕を見る。「もう少し状況が分かるまで、人には言わんようにしてくれ、いいかな」

僕は頷く。「ケラーはこの経験を覚えているだろうか」

Dreamer 14

Gail

「かなりの確率で、何も覚えてないだろうね」 オットーは肩をすくめる。「どうしてここに来たのかを覚えていたら、ラッキーだな」

ゲイルが椅子から立ち上がる。「マイケル、散歩しましょう」

誰もいない廊下を長いあいだ黙って歩いて、ゲイルと僕は第十四ラボと書かれたドアに近づく。ドアの前に来ると、ゲイルが腕時計を見る。「ケラーのこと、本当に胸が痛むわ。あんなにいい人だったのに」

「だった？ カップは意識が戻ったと言っただろう？」

「カップは目が覚めたといったのよ。意識が戻ると目が覚めるは違うわ」 ゲイルは言葉を切り、床を見つめる。「もしケラーが本当に二日間フラットラインになったのなら、そうね、状況はかなり深刻だわ。ケラーが置いてきたものをすべて取り戻すことができるとは思えない」

「ロングランは中止になるだろうか？ ひとつ予定しているんだけど」

「何を言ってるの？ 彼らはロングランを中止するわよ。そして補助金はケラーのモーター波と同じくらいあつという間に消えてしまう」 ゲイルは首を横に振る。「こんな話、したくない」

「おそろくケラーは、フォークボムか何かしたんだろうね」

「フォークボム？」 ゲイルは僕をにらみつける。「フォークボムって、何を言い出すのよ。まるでレオナルドみたいな言い草ね」

Dreamer 14

「でも、起きたのはそういうことだろう。フォークボムさ」 自分が何を話してるのか分からなくなってることに、僕は突然気づく。

「ええ、そうね、確かにそうよ」 ゲイルが辛そうに言う。「ケラーのソフトウェアは少し混乱した。医者がやらなきゃいけないのは、ケラーのプログラムを再インストールして、再起動すること。そうすればケラーは回復するわ。まるで私たちってプラグ&プレイ規格のコンピュータみたいね」

「君は医療の経験があるだろう。かなりリスクは高いのか？」

ゲイルは適切な言葉を探すように、いったん口をつぐむ。「医学的に言えば、ええ、リスクはあるわ。人を二、三日眠らせるときには、いつでもリスクがつきものなの。電解質に支障が現れるのよ。たとえば、血栓ができる」

「血栓？」

「そう、だから足に圧力ブーツを履くの。血を循環させるように」

「知らなかったよ…、だって君は安全だと言ったじゃないか」

「私は間違っていたかも」 ゲイルは言う。「研究所のスタッフは誰も誘導チェアには座らないわ。パウンドストーンは例外よ。あの人たちは危険なことは私たち参加者に任せる。パウンドストーンは補助金を受け取り、私たちはリスクを引き受ける。ケラーがなぜフラットラインになったのか、あの人たちには分からないはずよ。仮に原因が分かったとしても、それを押し隠すでしょうね」

「ケラーは心臓発作を起こしたのかもしれない」僕は言ってみる。「過去で興奮することがあって、だから—」

Gail

ゲイルは立ち止まり片手を僕の胸に当てる。「ねえ、マイケル、分かってる？ 私は看護婦よ。あの人たちは心臓をモニタして、点滴も入れている。ケラーが向こうで心臓発作を起こせば心電図に現れたはずだし、その話を私たちは聞いているはずだわ」

「そっだね、でも」

「聞いて、マイケル」ゲイルは僕を見る。「あの人たちはケラーに何が起こったのか分かってないの。フラットラインは起らないはずのことなのに、実際には起こってしまった。そしておそらく、これが初めてじゃないわ」

「プログラムを止めたほうがいいのだろうか？ そんなに危険だと思っかい？」

「もしかしたらね」ゲイルはそこで考える。「どっちのほうがよくないのかしら。プログラムの医学的なリスクを知ってしまうこと、それとも、そのリスクさえ気にならないほど、自分が過去に執着しすぎると気づくこと」

「タバコみたいなもんだね」

「タバコより悪いわ」ゲイルは言う。「タバコはやめられたもの。私ね、誘導チェアに座ると、いつも同じ場所に戻ってしまうの。そこが戻る価値のある唯一の場所なの」

二人とも床を見つめながら、黙りこくったまま少し歩く。僕のロックポートの靴がゲイルの素足にペースを合わせるのを僕は見ている。

「マイケル」少しして、ノートブックを胸の前に抱えたゲイルが口を開く。「私、ここを出なきゃ」

「フラットラインが怖いからかい？」

Dreamer 14

「楽しいのもあるし、楽しくないのもある」僕はゲイルに言う。「時々、戻りたくない場所に行ってしまうことはあるよ」

「あなたが戻る過去は楽しい？」ゲイルが訊く。

「あながち戻る過去は楽しい？」ゲイルが訊く。

「楽しいのもあるし、楽しくないのもある」僕はゲイルに言う。「時々、戻りたくない場所に行ってしまうことはあるよ」

「違うわ。もっと別のことよ。私、この世界に戻るのが嫌になり始めてるの」ゲイルは深く息を吸うと、ゆっくりと吐き出す。「向こうでは、夢のなかでは、私は美しい夏の日について、鏡の中のティーンエイジの女の子を見つめてる。そして、映画が終わる時、つまり戻らなきゃならない時までに残されている時間を数えてる自分に気づくの」ゲイルは深く息を吸い、そして動きを止める。「違う、違うわ。そうじゃない。本当はね、家が恋しいの。子供たちや、おっきくてのろまなペットの猫が恋しいのよ。十二時間の勤務時間さえ懐かしいわ。それに美しい秋のコネチカットも」ゲイルは無理して笑顔を作ると、また歩き始める。「いつか見に来て」

「行きたいよ」

「あなたはどなの？ 子供に会いたくない？ 仕事はどつ？」

「ああ、もちろん。そうだなー」僕は指を数える。「子供には会いたい。でも一人は大学だし、もう一人は最近再婚したばかりだ。だから最近あまり会うこともない。仕事は恋しい。でもボストンの渋滞と同じくらい仕事には飽き飽きしてるのも事実だ。だからこれも数には入らないな。妻も恋しい。だけど妻とは最近言い争いばかりで、この言い争いは少しも恋しくない。——これも数には入らない」

僕たちはラポの入り口の前で立ち止まり、窓の外に広がる西北の街並みを眺める。メスキートの木と大通りが四方に伸びる街並みの上にゆったりと浮かぶふわふわとした雲を、少しのあいだ黙って見つめている。遠くでは、飛行機がキラキラと輝きながら、地平線へ向かって下降していく。

「あなたが戻る過去は楽しい？」ゲイルが訊く。

「楽しいのもあるし、楽しくないのもある」僕はゲイルに言う。「時々、戻りたくない場所に行ってしまうことはあるよ」

Gail

「私のようにするといいわ」ゲイルは顔を僕に向ける。「好きな場所を探して、そこから離れないのよ」「もつともだと思っよ」

「以前、コルトレーンがこんなふうに言ってたわ」ゲイルは腕を組む。「自分が過去を見つづけるんじゃない、過去が自分を見つづけるんだって」

「自分の過去に見張られてるわけだ」僕はうなずく。「ブロムパーティーの思い出に誘拐されて、人質に取られるんだ」「マイケルったらー」ゲイルは首を振る。「私、真面目に話してたのに」

「誰にでも起こるんだぞ」僕は一九五〇年代のラジオのアナウンサーみたいな作り声を出す。「君にも起こるぞ」ゲイルの顔がほころぶ。「もう、あなたって面白いわね。昔からそんなに面白かったの？」

「結婚する前までね」口に出してから、これは紛れもない事実だと僕は気づく。そして他にも気づいたことがある。ゲイルは今日、口紅をつけている。それに香水もだ。シャネルだろうか。そうだ、絶対にシャネルだ。

「なあ」僕は首を振る。「これって変な感じだよ。まるで彼女を授業に送っていく中学生みたいじゃいか」

「そうね」ゲイルはうなずく。「そんな感じもするかもね」

「君といるととても楽しいって言いたかったんだ。特にあの屋上の夜は楽しかった」

「ボストンには屋上がないの？」ゲイルは微笑む。

「ここにあるようなのはないね。考えてただけど、もし今夜時間があれば、またあそこへ行かないか？ そうだな、十二時ごろはどうだろう。もし君が過去トリップに出かけないならね」

「出かけないわ」ゲイルは微笑む。「今晚はここにいるわよ」

Dreamer 14

午前二時三十分。ゲイルと僕は、ゲイルが持ってきたキルトの上にあおむけになって、二十階の屋上から空を眺めている。街の東側には、何のためだか分からないがさっきまで花火が上がっていたので、今は透けて見えそうな薄いサーモンピンクの煙が当たり一面を覆っている。何かのお祝いだっただろうか。おそらく誰かが街に攻め入ってきたんだろう。メキシコがサン・アントニオを奪回しようとしたのかもしれない。まあ、理由はなんであれ、煙はすばらしく美しい。僕たちの頭上十五メートルも離れていないところを、煙はゆっくりと重なり、また新たな形を作り出しながら流れていく。

ゲイルはプールの端近くまで靴を蹴散らしている。管理人が電気をつけたままにしたので、明るい青緑の光の点が、街の上空を巡回する警察のヘリの目印になっている。僕の知る限りでは、僕たちは街で一番高いところにあるスイミング・プールから一メートル五十センチのところまで寝そべっているんだ。

「最後に行った場所を覚えてる？」 ゲイルが訊く。

「教会にいたと思うんだ。その後、僕はどこかで車を運転してた。お次はインフルエンザにかかって寝込んだ。あまりよく覚えてないんだけどね。数日間だったな」僕はゲイルの方を向く。「最高にエキサイティングだろ？」

「もっと鮮明に思い出せるようになるわ。必要なのは訓練よ。ケラーみたいにフラットラインにならなければね」

「おい」僕はゲイルに言う。「医療関係の話はしたくないといったのは君だろ」

ゲイルは笑う。「あなたの言うとおり。じゃあ、フラットラインの話はなしね。はじめからやり直し。何か当たり障りのない質問をして」

「オーケー。過去の再現力はどうだい？」僕はゲイルに訊く。「完璧なんだろ？」

Gail

「マイケル、すごいよ。ぼんやりする部分はないし、欠落もないわ」ゲイルは伸びびをして微笑む。「レオナルドなら、『デジタル並みの鮮明さ』って言いそう」

「もっと話してくれよ」

「あー、話さないほうがいかも。へんなやつだと思われそうだから」

「話せよ」

「ルールを知ってるはずよ。ドリーマーはお互いにトリップの話をしてはならない。特にトリップから数時間のあいだは。データを損傷するのよ」

「いいじゃないか」

一瞬、ゲイルは僕を値踏みするように見つめると、座り直して脚を組む。「オーケー、教えてあげる。でも誰にも言わないって約束してよ。それからあなたのくだらない広告には、一切使わないこと」

「約束する」

「いいわ」ゲイルは深く息を吸う。「それは高校に入る前の夏だった。ニューヨークのグレン・フォールズの東にある町に住んでたの。バーモント州との州境からそれほど遠くない所よ。五軒の家が固まって建っていたわ。当時は電車の駅があって、近くの大きな街までは十五分だった。ほかの家族はみんな年寄りばかりでね。つまり六十歳とか七十歳の人たちばかりだったの。子供はいなかった。私は子供だった。つまり町でたった一人の子供。両親はトロイの街で働いていたから、夜明けから夕方まで一日中家を空けていたの」

「なんだか退屈そうだな」

Dreamer 14

「何しろ、彼はこの土地のことを知らなかった。初めに私はテレビのチャンネルをすべて見せた。確かニチャンネルしかなかったの。一分くらいしかかからなかった。次に納屋を見せたわ。それからトラクターも。お次は池を見せた。そしてね、私を見せたの」ゲイルは笑いながら、草の中でつまさきをもぞもぞと動かす。

「一週間くらい経ったころ、私たちは『トゥー・ホット』っていうゲームをしたの。二人でわたしの部屋に行くと、突然私が『暑い』と文句を言い始めて、シャツを脱ぐの。そしたら彼もシャツを脱ぐわ。それでもまだ暑かった。そこで私はショートパンツを

「最悪だったわ。私は退屈して、何かしたくて仕方ないのに、車はないし、仕事をするには若すぎるし、夏なのに、ホームドラマやクイズ番組を見るほかに、何もすることがなかった。その時、素晴らしいことが起こったの」

「ある朝、隣の家から大きな物音が聞こえたわ。私は起き出して、二階の窓から覗いたら、男の子がいたの。その子は芝を刈ってたわ。長いブロンドの髪で、頭ひとつ分、私より背が高かった。私が初めて見た時、その子はシャツを脱いでいて、肌はきれいに日焼けしていた」ゲイルは笑う。「その頃の私にとって、日焼けは重要だったの。日焼けしている男の子に、目がいつちやっただよ」

「で、自己紹介したのかい？」

「少しだけ時間がかかった。バスルームで顔を洗って、歯を磨いて、髪をとかして、服を着たわ。お決まりのことよ。彼は、私をバカな子だと思ったでしょうね。でもね、完璧だったの。彼は大きな青い目で、本当にステキな笑顔だった。ミシガンのフラインデルからやってきて、おじいちゃんとおばあちゃんの家で夏を過ごしてたのよ。その日は、彼が来てから三日目だった。私ったら自分にこう問いかけたわ。『ゲイルリン、こんなチャンスに逃す気なの？』って。信じられなかったわ」

「何が起こったんだい？」

「何しろ、彼はこの土地のことを知らなかった。初めに私はテレビのチャンネルをすべて見せた。確かニチャンネルしかなかったの。一分くらいしかかからなかった。次に納屋を見せたわ。それからトラクターも。お次は池を見せた。そしてね、私を見せたの」ゲイルは笑いながら、草の中でつまさきをもぞもぞと動かす。

「一週間くらい経ったころ、私たちは『トゥー・ホット』っていうゲームをしたの。二人でわたしの部屋に行くと、突然私が『暑い』と文句を言い始めて、シャツを脱ぐの。そしたら彼もシャツを脱ぐわ。それでもまだ暑かった。そこで私はショートパンツを

Gail

脱ぎ、彼はジーンズを脱いで、私たちはベッドの中で下着だけになるの」ゲイルはクスクスと笑う。「もちろん、それでさらにエスカレートしたわ。すぐに二人は裸でベッドで横になって、どうかしちゃったみたいに、キスしてイチャついたわ。初めての、—すべてが初体験だったの。それがすべて、その夏に起こったのよ」

「すべての「ふっ」」

「すべて」ゲイルはゆっくりとうなずく。「お決まりのことよ。親が出かけるのを待って、彼はやってきたわ。私は彼にシリアルとトーストとオレンジジュースを用意した。そして彼の手をとって、二人で二階へ行くの。そして服を脱ぎ捨てて、太陽が部屋の温度を上げるまで、ベッドの中でふざけたわ。— 当時はエアコンなんてなかったのよ。それから二人は池へ行って涼んだ。じゃなければ、ホースでお互いに水をかけっこしたの。最高に幸福だった。完璧よ」

「親に疑われた？」

ゲイルは笑う。「そんなことないの。ママは、ドレッサーの大きな鏡がベッドの方へ倒れてたのを見つけたけど、何も言わなかったわ。とにかく、両親が帰ってくる前に、ベッドを整えておいたの。そんな激しいことが繰り返られるなんて、思いもしなかったんじゃないかしら」

「自分だったら、そういう「こと」って気づかないと思うよ」

「そうね、大人って世界を違うふうに見てるのよ。その夏まで、私はいつもこまっしやくれた悪ガキだった。それが今では、両親が夕方帰宅すると、芝は刈られて、庭の雑草取りも済んでいて、食卓の上にはフライドチキンと気の利いたサラダ。ピッチャーにはアイステイ。気難しいティーンエイジャーから、私は申し分ない小さな主婦に変身したの。元気で朗らかでね。なんでもないことにいつもクスクス笑ってたわ」

Dreamer 14

「親は最後まで気づかなかつたんだね」

「そうね、もちろん、両親は死ぬほど心配したわ。私がドラッグやったり、つまりナツメグが何かを吸ったりしてると思ったの。ママは私を大学の精神科医に診せようとしたけど、パパが反対したの。パパは私がまた以前の悪ガキに戻ると思ったのよ。だから両親は何も言わずに、新しく改善されたゲイルを享受したわ。もちろん、毎日刈ったせいで、最後には芝は枯れてしまったと思う」

「男の子のおじいさんとおばあさんは、二人のことについて何て言うてたんだい？」

「それが何より驚いたんだけど、彼らは気にしなかったの。すべてのことを見ないフリしてたし、私の両親にも言わなかった。町の人も何も言わなかった。私が妊娠するのを待ってたんじゃないかしら。おかしいことに、私は全然気にしなかったの。とにかく完璧だったわ。ー 西部開拓農民の妻みたいな気分だったの。二人で裸になっていちやついたあと、私は階下へ行って皿を洗ったり、雑草取りをしたり、彼のために夕食を作ったりしたわ。そして二人でポーチの揺り椅子に腰掛けて、通り過ぎていく電車を見ていたの。たった二ヶ月のあいだに、小さな子供から大人へと成長したみたいだった。本当にバカげた、熱に浮かされたような、エロチックな日々だった」

「過去に戻るときは、ー そこが行き先なんだね」

「そこが行き先よ。芝刈りをする彼を初めて見た日に戻るの。シーンをロックしてくまなく観察するわ。ー 風に吹かれる白いカーテン、輝く緑の草、黄色い芝刈り機、庭に咲く夏の花、そしてごくセクシーなシアーズ・ローバックの新品のオーバーオールを着た彼。それから一週間後に飛んで、一直線にロマンスへ」

「レオナルドは知ってるのか？」

Gail

「レオナルド？ まさか。過去で私が何をしていたようと、レオナルドは気に留めないわ。それよりコンピュータのほうに興味があるのよ。私たちはよく言い争いもするけど、彼はいい相棒よ。私を好きなように遊ばせてくれる」

「ゼイ博士はどうなんだ？」

「ゼイが担当の時は注意が必要よ。博士は見るべきポイントを知ってるわ。つまり、ある種のことを隠しておくのが難しいの。身体に現れてしまうからね。たとえば、夢を見ている時に腕を上げると、筋肉がほんのわずか緊張する。だから私たちはヘルメットをかぶせられるの。――何が起っているのかを彼らがチェックするためよ。そうねえ、たとえば腰の筋肉が、えーっと、協調運動を示すと、それはただ見てるだけじゃなくて、向こうで何か別のことをしてるとことを意味しちゃった」

「向こうにいる時に感じる事ができればいいのにな。見たり聞いたりはできるけど、ほかはダメだ」

「彼らの言うことを鵜呑みにしないで。時には感じることもできるわ。そういうことも起るの」ゲイルは伸びをすすると目を閉じる。「でもそれって、過去へ戻ると、ドレッサーの鏡に彼と一緒に映る自分を実際に見ることができるとはかもしれないな。そうすると、――うん、入り込むのが簡単になる。すぐに背中にシーツの感触と、その冷たさも感じるの。私の手が彼の上に置かれるのを感じて、彼の肌の感触が伝わる。暫くすると、実際にそこにいるような気持ちになる。自分の場所になるのよ。そういう経験ない？」

「過去のトリップでかいっ」

「いいえ、現実の世界だよ」ゲイルは僕に顔を向ける。彼女のむき出しになった脚は、僕の脚からわずか数センチのところにある。スカートの縁がやわらかく肌にかかっている。「窓を開け放した農家の部屋でした」とある？ 風がカーテンを揺らすような部屋で」

Dreamer 14

「いや、でも大学二年の時、ガールフレンドをカンザスシティのモーターへ連れて行ったことがある」

「すっごくロマンティックねえ」ゲイルは皮肉っぽく言う。「振動ベッド用に、二十五セント硬貨をポケットいっぱいに詰めていったの？」

「おい、本当にロマンティックだったんだぜ。僕たちは葡萄とーライ麦、パンと本物のバターを持ち込んだ。いや、多分マーガリンだったかもしれないな。だけど本物のチーズとワインとグラスが二つあったんだ。」

「それなら悪くないわね」ゲイルがうなずく。「Bプラスをあげるわ」

「彼女と僕はモーターを回って、どの部屋の窓が蒸気で曇ってるか見て回ったんだ。そこでは何かが進行中だったんだ」

「おかしなことをするのね。あなたに初めて会った時、すごくビジネスライクな人だと思っただわ。なんていうかー、ベッドまで腕時計をはめていくような人」

僕は少しゲイルに近づき、彼女は少しだけ脚を動かす。「腕時計をはずすよ」

「ダメよ」ゲイルはそう言うのと、唇で僕の唇に軽く触れる。「私にやらせて」

遠くでヘリコプターの音がする。おそらく警察が屋上で何か変わったことがないかと探しているんだろう。たとえば、いちやくくカップルとか。

「誰かが上がってきたらどうする？」

「誰も来ないわ」ゲイルはそう言うのと、僕の手を取る。「私たちだけよ」

十五 同調

Entrainment

声には聞き覚えがあった。

「哲学のクラスを取ったのはだいぶ昔だが、来週の金曜までにレポートを出さなきゃならないなら、やれることをやってみるよ。どの哲学者だつて？」

「ヒュームとカントと、誰か」

「シヨーペンハウエルだな」

僕はキッチンテーブルに座っている。部屋は暗く、壁に取り付けられた小さな白熱灯だけがチラチラとほのかな黄色い光を投げかけている。部屋の隅、冷蔵庫の近くにはピンクのうさぎのぬいぐるみと、何種類ものおもちゃの兵隊が並んでいる。タバコの煙が立ち昇り、天井あたりに灰色の霧を作っている。

ボブ・ドミニクがタバコの箱をすばやく振ると、白いタバコの先が三本出てきた。「吸うかい？」

「やめました。高いから」

「確かに。今は一箱二十五セントもするからな。たった十五セントだった頃を覚えてるよ。コーヒーをもう一杯どうだい？」
ボブがカップに熱い液体を注ぐとき、細いヒビがカップを縁取っているのに気づく。目で追うと、やがてそのヒビは、底から半分あたりで姿を消し、陶器の表面だけが残った。

「私は君のためにレポートを書いて、君から金をもらってもいい。しかし問題が二つある。君は金に困った大学生だし、それに私は物書きではない。というわけで、自分でがんばって仕上げるしかなさそうだな」

Dreamer 15

Entrainment

「大学は好きですが、これほどたくさんレポートを書かされるとは思ってませんでした」僕はコーヒーをちらりと見る。カップの縁に明るい茶色の泡が見える。

「大学はとても楽しいものだが、結婚と似ている。屈辱的作用が起こるからな」

「屈辱的作用？ 蓄積作用じゃないの？」

「いや、屈辱的だ。先に進むにつれ、屈辱的になっていく」ボブはタバコをふかすと、灰皿でもみ消した。「そうだな、哲學のレポートのテーマが必要なら、唯心論について書くといい」

「なんですか。それ？」

「唯心論とは、すべては心に存在するという理論だ。たとえばすべてが頭の中にあるとしたら、君にがそこに座っていて、今にも眠りこみそうに見えることも、確かとはいえない。すべて私の想像だったら、どうする？」

これはとつても面白い状況だと僕は気づく。かつての知り合いの映像が、僕自身の存在に疑問を投げかけているんだ。外は暗く、真夜中だ。ということは僕は一晩中起きているんだろう。ソファの上に毛布と枕が見える。トミニク家を訪ねた時は、このソファに寝ていたのだろう。

「しかし、君がここに存在するはずだと、私は思う」ボブ・ドミニクが続ける。「君の行動は理性的だ。このまずいコーヒーを飲んでない」

「おいおいですよ」僕は言う。「本当です」

Dreamer 15

Entrainment

「君はコーヒーを飲まないよ、レイチエルから聞いたよ。ということは、失礼にならないようにと気を使ってるんだろう。そう、バス・コーラがあるんだ。もう一週間前からある。ブラッドレーがフタを開けっ放しにしたので炭酸が飛んでしまったが、それでもまだなんとか飲めるだろう」

「その唯心論の話を、もっと聞かせてください」

「正直言うと、唯心論を勉強してから何年も経ってるんだがね。――なぜ現実だと分かるのか？これは昔から存在する問題だ。つまり、君の存在は現実なのだ、私には思うことしかできない。君はうちのまずいコーヒーを飲まず、うちの娘と付き合っていて――つまり少なくとも、娘はだれかのクラスリングをはめていて、それには君の名前が彫ってある、――だから、私は君が現実なのだろうと思う」ボブは言葉を切り、箱からセララムをもう一本取り出し、テーブルに置く。

僕はあたりを見回し、長方形の小さなキッチンのはんた壁紙と、リビングルームの青い壁紙を見る。黒い長方形のハイフアイセットの横には、毛布と枕が置かれた緑色のソファが見える。そして周辺視野の隅で、まるで黒いアイコンのようにゆらゆらと「めいている板張りのキャビネットに意識を集中させる。こういうものを最後に見てから、長い年月が流れたんだ。

誰かが玄関に立っている。膝まで届きそうなくほど長くて白いTシャツを着た小さな女の子だ。女の子の黒髪には、ピンクのヘアカーラーがいくつも突き刺さって、まるでヘアカーラーの森のようだ。不意にこんなことが頭に浮かぶ。レイチエルがカーラーを巻いてない時なんて、ほとんどないんじゃないか。

「明かりのせいで眠れないのよ。――晩中話し込むつもりなの？」

「そういう予定だった」ボブが言う。「一緒にどうだい？」

「やめな」

Dreamer 15

Entrainment

「コーヒーはっ」

「いらぬ。眠れなくなつちやうもの」

「どっちにしろ、眠れないんじゃないのか」 ボブが言う。「私たちとコーヒーを飲んだっておんなじだ」

僕はレイチエルを見る。真つ暗なキッチンにぼつんと立っているレイチエル — 僕の頭の中で。

彼女は言う。「もし話を続けるなら、せめて電気は消して。ベッドに戻るわ。 — 明日の朝、私を起したりしないでよ。遅くまで寝るんだから」

「レイチエルについて、ひとつ知っておいたほうがいい」 ボブが言う。「あの子は哲学の話はしないぞ。実際のなんだ。母親とそっくりだ」

ボブはタバコをたいたいて灰を落とす。僕は薄暗くセピア色をした映画を見ている。まるで古いプリントのようだ。人がセピア色が好きな理由が分かる。セピアは記憶の色なんだ。

灰は空中で凍りついたように止まる、その瞬間の重力だ。画面が瞬くと、世界は早朝の光が差し込む濃い紫へと変わる。目を覚ましたレイチエルは、目をこすり僕にすばやいキスをする。カラーはなくなっていた。

レイチエルの顔が僕の顔の近くにあり、頭は僕の肩に乗せられている。唇は輝き、彼女は何を使ってたんだっけ？ 僕はリップグロスと言ってなかったかな？ わけの分からないことが頭に浮かぶ。何年も前の過去の人生で、僕はレイチエルの唇を味わい、そしてそれを忘れてしまった。今、彼女の隣でとベッドに横たわっていると、なぜ忘れることができたのだろうかと思う。

「すぐ戻るわ」 レイチエルが囁く。

Dreamer 15

Entrainment

彼女がベッドを降りるのを僕は見つめる。堅木張りの床を裸足でベタペタと歩き、ベッドルームのドアを抜け廊下へと出る。さらに足音が聞こえ、今トイレのドアの開まる音がした。

レイチェルは、僕がカンザスシティで彼女のために買った青と黒のストライプのナイトシャツを着ている。次の瞬間、イメージが押し寄せてくる。その店はメトカルフ・サウス・プラザの「メイフーズ」だ。値段は十三ドル五十セントだった。まるで先週の出来事のようにはつきりとして鮮明なイメージがさらに押し寄せる。僕が若い店員に二十ドル札を渡すと、彼はおつりとシヨッピングバッグを差し出す。僕はシートをジーンズのポケットに押し込み店を出る。十二月初旬の寒く晴れ渡った日、僕は駐車場まで歩いていく。この記憶が僕を待っていたのかというのか？

今、この場所でぼんやりと天井を眺めながら、頭の中に浮かぶ映像を僕は見つめている。車を運転するカンザスシティからの帰路、ドアに歩いていき、レイチェルの母親が、レイチェルは病院から戻ったと話す声を聞く。

病院？

水の音。ー レイチェルが歯を磨いているんだ。窓の外では、通り過ぎるトラックが車体をこすったらしい。レイチェルがベッドに戻り、僕の隣ですばやくキスして、ゆっくりと口の端まで唇を這わせる。そして今度はふっくらとした愛らしい下唇に戻り、もう一度キスして。ー 今度はもっとゆっくりとね」僕は唇で彼女の唇に触れ、その柔らかさを感じる。上唇の中央にある弓状の縁にすばやくキスをして、ゆっくりと口の端まで唇を這わせる。そして今度はふっくらとした愛らしい下唇に戻っていく。レイチェルが少し顔を上げると、二人の唇がもう一度真ん中で重なり、完璧なX型を作り出す。レイチェルは一瞬身を引くが、すぐに戻って僕の下唇を軽く噛み、前後に動きながら何度も触れてくる。まるで絵筆で最後の仕上げを付け加える、絵描きのように。外では朝の藍色の光が、明るい青へと変わっていく。

Dreamer 15

Entrainment

こんなことすべてを、どうして忘れてしまったんだろうか？

「うーん、今度はねー」レイチエルは途中で言葉を切ると、また唇を這わせる。彼女の舌が僕の下唇に触れるのを感じ、脚が僕の足首に絡みつく。「キスして」

その瞬間、画面が瞬き、気づくと僕はまた暗闇にいる。

床の上を影が躍る。廊下で何かが動いているんだ。僕は起き上がる。廊下へ続くドアは少しだけ開いている。

外では風が強くなって、雨混じりの風が窓を叩いている。

ドアが開き、誰かが部屋に入ってくる。

僕が起き上がると、シーンは動きを止め、そのまま暗闇に変わっていった。

世界と世界のあいだの暗闇で、僕は声を聞く。

いつまでも覚えていて。

だが僕にはできない。それを繋ぎ止めておく錨がないから、シーンは揺らめき、色褪せ、やがて古い写真のようになってしまふ。ーキッチンも、鉄橋や列車も、ベッドもナイトシャツを着た誰かも。かつて知っていた誰かもだ。井戸の底にある写真のように、みるみるうちに消えてしまふ。

目を開けると、見知らぬ部屋にいた。ここでは窓のカーテンは閉じられ、ただ一筋の光だけが差し込んでいる。シーツは違う香りがする。僕はゲイルの部屋にいる。彼女のベッドにいる。

Dreamer 15

Entrainment

ゲイルが僕の方を振り向き、近寄ってくる。薄暗がりの中、僕は自分の指にしっかりと結婚指輪がはめられているのを見る。まだそこにある。

「マイケル……ううん」 寢言でゲイルは僕に何か言っている。返事をしないと、ゲイルは寝返りをうって右側を向く。また寝息がリズムカルになってきた。きつと屋上の夢でもみているんだろう。僕は時計を探し、見つける。小さな四角い旅行用の時計で、窓枠の側に置いてあった。なんてことだ、午後一時だ。

だが、今日は週末じゃないか。

ゲイルは少し体をずらし、足の裏で僕の脚に触れる。目を覚ましそつだ。今頃、リンダはどうしているだろうと、僕は思う。

……★……

Dreamer 15

火曜、午前九時四十五分。

僕は緑色の手術着を着て誘導チェアに座り、レオナルドが機器の最終チェックを終えるのを見ている。数分前に、ゼイトと看護師がやってきて、僕の生え際の少し上あたりにシータ波検出器を取り付け、胸部に心電図リード線を取り付ける。

「腕のバンドは？」 背が高くて顔の丸いきれいな看護師に僕は尋ねる。

「ああ、二つ長い長いセッションでは、血圧と酸素のプロープは誘導が終わってから取り付けています。」「希望なら今つけますけど」「彼女は微笑む。」「起きてから何も飲んでいませんよね？」

Entrainment

「ああ、飲んでない…」

「もし飲んだのなら、カテーテルをいれますよ」

「大丈夫だ。必要ないと思う」

「六時間向こうへ行くことになりましたがー」 看護師は注射器を小さなビンに入れ、透明な液体を吸い上げる。「ー 緊張する必要はありません。筋肉弛緩剤を少しだけ注射しますね。腕とお尻とどちらがいいですか」

「腕に」

「私はお尻にされるほうが好きです」 彼女はそう言うと、アルコールで湿らした脱脂綿で左腕をこする。

「それほど痛くはありません。はい、じゃあ『テリ、痛いよ』って言うてください」

彼女が透明な液体を僕の腕に注射し、そして針を引き抜くと、鈍いずきずきとする痛みが後に残される。「降下する時になっても注射した箇所が痛むようでしたら、教えてください。そのための処置をします」

「教えるよ」 僕は腕をこすり、痛みを揉み散らそうとする。

「承知のように、長時間のランには安定剤を使用しません」 彼女は言葉を切ると、使い終わった針を赤いプラスチックの箱へ捨てる。「ー 声帯が弛緩しすぎて、正常に働かなくなるんです。そうなるとあなたが向こうで言おうとしていることが、こちらで聞き取れなくなるんです」

「実際には、それは翻訳機の問題なんですよ」 レオナルドが言う。「ほとんどの場合、音声器の翻訳回路は、あなたが言わんとすることを把握できます。ただしインプットが適正値を下回ると、音声器はルックアップテーブルに行つて、最も近い翻訳を探します。ルックアップテーブルに参照できるものがない場合、回路はマルコフ連鎖を開始します。ー ドリーマーが

Dreamer 15

Entrainment

過去に言った言葉の再読み込みを行い、文法と語彙にプラグインしリフィングを始めます。実はドリーマーと会話しては、なく、ロボットと会話しているのです。文字通り、『会話ロボット』ですかね。以前ここにいた学校の先生が睡眠剤を大量に摂りすぎて、ハイ状態で訳の分からないことをベラベラとしゃべり出したんです。それでハツシユテーブルが完全にイカれて、翻訳回路は彼女が南プロジェクト・セイリツシユ語を読んできると判断したんですよ」

「本当にそうだったの？」 看護士が訊く。

「あのね、テリ」 レオナルドが言う。「南プロジェクト・セイリツシユ語を話せるのは世界でたった三人しかいないし、全員男なんだよ。考えてみるよ。私が思うに、コンピュータが勝手にでっちあげたんだと思うけどね」

「セイリツシユ語なんて聞いたことないわ。そのテープをいつか聞いてみなきゃね」 看護士はヘルメットを僕の頭にかぶせる。「あまり頭を動かさないようにしてください。t-f波のリード線が緩んだら困りますから」

「どっちにしろ、t-f波なんて役に立ちません」 レオナルドが言う。「防衛省の影響をうけて新たに作られたコンキユレターってことですかね。ガラクタですよ」

「もう、レオナルドだったら——」 看護士はバイザーを下げて僕の目を覆う。

「じゃあ、マイケル、緑の小さなライトが見えますか」

「ああ」

「順調です。目を閉じたまま、上を見るようにしてください、次は下を、左を、右を」

「裸のナンシーおばさんを想像して」 ヘッドフォンをとおしてレオナルドの声がする。「ありがとう。いい瞳孔反応が来ました」

Dreamer 15

Entrainment

「ほんと、この人最低ですね」 看護師の声が聞こえる

「テリ、このフリーズは、誰にでも抜群の効果を発揮するんだよ」 レオナルドは言う。「もちろん女性には効かないけどね。マイケル、頭のなかで数字をかぞえて」

十から一までの数を思い浮かべると、VOXボックスがそれに反応する音が聞こえる。

「うん、インプットはいい調子だ。順調ですよ」 レオナルドが言う。「今回はマシン誘導を行いますか？」
もちろん。

「腕はまだ痛みますか？」 レオナルドが訊く。
いいや。

「では、行きましょう」

小鳥の囁りのような音が聞こえ、—それがやがて天使の歌声に変わる。

「同調しました」

僕はチャイムの音を聞く。思考を体から解き放つ深く響き渡る音を聞いて、誘導チェアの表面から、星が瞬く海へと僕は沈み込んでいく。

下方には僕の人生が広がっている。六時間かけて、それを探検できるんだ。どこへ行くのか。子供時代の穏やかで気楽な日々。責任も問題も何ひとつない。そんな気楽さを楽しんでもいい。

僕の後方、もっとも遠くにある光の点を指す。高速道路の一番先端の停留所だ。

Dreamer 15

光が僕を廻り、形を取り始めると、曇った灰色の午後へ向かっていく動きを感じる。家族と抱き合っているレイチエル、今、彼女は僕と車に乗っていて、高速道路の白線がこちらへ向かって飛んでくる。日曜の午後、レイチエルをコリンズの祖母の家へ送りにいくところだ。僕はコリンズから、さらにカークスヴィルの大学まで運転することになる。この運転にはいつもうんざりしてた。なぜここに降りたのだろう。たまたまここに来ただけか？ おそらくそうだろう。

ウエストラヤンを抜けて北に向かうと、空は目に見えて暗くなり、霧雨は強い雨に変わった。前方には、でこぼことした灰色の雲が地平線あたりを東へ動いていく。レイチエルが雲を指差し、あの雲は母親が使う皿を拭くふきんみたいだと言う。「ママはタオルを絶対に捨てないの。ほつれてくると、お皿用のふきんにするの。その頃にはもう本当にポロポロ。今の空はそんな感じ。お皿のふきんみたい」

レイチエルの話に耳を傾けながら考える。――僕が未来から来たのだと言ったら、レイチエルは何と言うだろう。バカげた考えだ。――所詮、彼女は僕の頭の中にあるイメージに過ぎないのだから。それでも、その問いが頭から離れない。彼女のイメージは消えてしまうのだろうか？ その瞬間、僕はどこか、過去の違う場所へと行ってしまうのか？ あるいは僕の思考は、現実には起こらなかった偽の反応を作り出すのだろうか？ だが、それはずっと分からないままだろう。それでも、これは、かつて何年も好きだった女の子と一緒にいて、彼女が去ってしまうのが怖くて言い出せないという状況とは違う。何を言えばいいか分からないから、言わないだけで。

自分の思い出と接触するのを恐れるという、僕と自分自身のあいだの壊れやすい関係。リアルな記憶は本物の記憶ではない。現実の夢は本物の夢ではない。そう言ったのは、誰だっただろう？ おそらくレオナルドだ。

Entrainment

コリンスへ向かう途中、雨は止み、灰色のボロボロの雲は、急流のように流れる風に吹かれて巨大な平べったい板のように広がっている。

「見て」レイチエルが言う。「寒冷雲よ。― 下側が暗くて、上側が明るい」

強風が車に吹きつける。頭上では空が細かく分裂している。中部ミズーリの町コロンビアを抜ける時、信号機が風で大きく揺れているのを僕たちは見る。

エンジンのノック音が大きくなり、僕の目はゲージをチラチラと見る。― 警告灯のあいだをスキャンしているんだ。当時、針のゲージはなかった。いや当時ではなく、「今」だ。

ノック音が止まった。無意識のうちに僕はシーンをロックし、通り過ぎる車をスキャンしている。これだ。赤と白の一九五七年型フォード。こっちは青い一九六三年型のシボレー・マリブ。

運転をしながらレイチエルの話を聞き、高速道路を見下ろして、道路の表面をスキャンする。路面のヒビは、どれも広がって端のほうで黒くなっている。― 下方へ消えていく白いラインを数え、横を通り過ぎ消えていく黄色いラインをスキャンする。丘の斜面に生えている木々を見渡す。冷たい風の中のこんもりとした低木だ。風景はぼんやりとして、まるで濃い色の縁取りのついた茶色く織りの粗い毛布のようだ。今は夕暮れが訪れて、雲はラベンダー色に縁取られた真珠のよう。真上には、黒っぽい氷をたたえてゆっくりと流れる川のように、厚い雲が東から西へと流れている。

夜が訪れ、僕はヘッドライトを点ける。暗闇のなかを走っていくと、ぼつんと建った農家の白熱灯が見える。ヘッドライトが高速道路沿いの木を照らし出す。ロック、スキャンして、細い枝の一本一本まで数を数えてみる。記憶とは、なんて正確で緻

Dreamer 15

Entrainment

密なのだろうと僕は感嘆する。——これほどの情報をすべてどうやれば保存できるっていうんだ。でも実際、保存されているんだ。

ロックを解除すると、木は滲み、過ぎ去っていく。

ガタガタという音がする。——これはヤバそうだな。——おそらくボールジョイントだ。すぐに故障するんじゃないかな。いや、違った。もう三十年以上に故障したに違いない。目の前にあるものが今は存在しないという「こと」を、どうしても忘れてしまう。

「マイケル、タイヤのジャックがガタガタいつてるわ」レイチェルが僕に言う。「もし止まるのなら、トランクを開けて逆向きにしましょうよ。ある方向だと時速百十キロでガタガタ言うし、もうひとつだと時速九十キロで音を立ててる」

「どうしてだろう」

「分からない」レイチェルは言う。「でもとにかくそうなの」

時速を百十キロから九十五キロに落とすと、音は消えた。

僕たちは町を通り過ぎる。一瞬だけ、反射のせいでビルディングが、空という天井を支えている太い柱のように見える。瞬きをすると、光線は消えて、天井だった稜線は、星と美しく広がる薄雲に変わっている。

レイチェルがラジオをつけると、歌が車内に満ちる。ザ・ヤードバーズの『ハピネス・テン・イヤーズ・ア・ゴー』だ。レオナルドを呼び出す必要はない。どこにいるのか自分で分かる。この曲を初めて聴いたときのことを思い浮かべる。——僕はそのときレイチェルといた。これがあの夜だろうか。おそらくそうだ。

Dreamer 15

Entrainment

夜。両脇にぼんやりと明かりが灯った、制限速度四十キロの村が見える。MFA石油のサインと警官。暗闇の中にポツンと浮かぶネオン。ようやくコリンズの町に車を入れる。僕の故郷だ。

レイチエルを祖母の家へ送り届けた後、両親に会いに車を走らせる。過去でこんなに長い時間を過ごすことができるなんて驚きだ。もう数時間経っているように感じる。僕は正面のドアから中に入り、母親と父親に挨拶をする。初期のセッションで過去で両親を訪ねることは奨励しないとされた。感情が強くなりすぎるあまり、早急に目覚めてしまうのだ。今、過去のこの場所で両親とともにいて、いろいろな感情に襲われるが、その中には予期しなかった感情もある。それは罪悪感だ。皺の刻まれた父の顔を見ると、僕を学校に入れるため父がどれほど懸命に働いたか、父と母が残された息子の僕をどれほど大事にしていたか理解できる。

一時間後、僕は車に乗り込み、大学へと向かう。「もっとゆっくりにできる時において」父親が言う。夏にはコリンズで仕事を見つけると僕が約束するのが聞こえる。

もし、そうしていたなら。

キーを回すと、穏やかでリズムカルなエンジンの唸りが聞こえる。次に水しぶきが見え、小さなワットの影が湖の底に潜っていく。――溺れてるのか。違う。彼らは生きていて、シャツや下着が広がったうずまきの中を、岸まで我先にと泳いでいく。

彼らは浴槽の端まで辿り着いた。――さあ、また水の中へ戻ろ。しかし今度は水面が泡で追われている。水面の下には、一体、何があるのだ。ジーンズか仕事着か？ それともタオルか？

「そこでおもちゃをなくさないでね」母親が言う。「搾り機の中を探したくないでしょう」母親は手を止め、メガネの曇りを拭き取り、顔にかかった髪をかき上げる。そして決心したような表情を浮かべ、白いシーツを搾り機にかけはじめる。

Dreamer 15

Entrainment

「気をつけるよ。ママ」

アイボリー色の洗濯機の側面に、「メイタグ」というプレートが見える。― その下には赤い取っ手のついた吸盤の形をしたおもちゃがみえる。これは何に使うんだ？ 知るもんか、でもかっこいい。世界はこういうものをもっと使うべきだ。吸盤とか車輪とか、手を水で濡らすような機械。いうまでもなく、僕はそう思う。だって僕は今、子供なのだから。

周りを見回すと、湿った地下室の匂いを嗅ぎ、素足の下の冷たく濡れたセメントの床を感じられるような気がする。僕が裸足なのは絶対に確実だ。― だって、あの頃、夏になると僕は必ずといていいほど裸足になっていたから。

地下室の窓を見上げると、並んで干されたシャツが強い夏の強風を受けて大きく膨らんでいる。シャツと枕カバー、服、作業服、ブルージーンズ、シャツ。申し分ない。戻ってくるにはもってこいの場所だ。これは覚えておこう。

母親がシャツを絞って、かごに移すあいだ、僕はおもちゃを濯槽に戻し、もう一度水底に沈むのを見ている。その時、何か聞こえた。

「マイケル―」

この声には、聞き覚えがある。

ロックだ。シーンをスキャンする。母親はここにおいて、洗濯機も地下室も、この時間もまだここに存在してる。なのに、何か僕をこの場所から引き離そうとしている。― あの時間の川へと僕を引き戻そうとする。

「これ、きつとポテトサラダのせいよ」
レイチエルだ。

彼女はソファに横になって、何か半分ほど入った洗面器の上に頭を覆うようにしている。

Dreamer 15

Entrainment

洗面器の中身は嘔吐物だった。

レイチエルは小さなハートが前にプリントされた白い綿パジャマを着ている。縁のあたりに赤く細長い布が見える。エクササイズ用の短パンだ。

この忌まわしい夜を僕は思い出した。ドミニク家族はまだチェロキーに住んでいて、ボブとワンダは子供たちと、家から二十分のところにあるドライブイン・シアターに行っていた。

「レイチエル、今、医者を呼ぶから」

「この町には、医者なんかいないの。自分でなんとかしなきゃ、自分で」

彼女は不意に黙ると、洗面器のなかに嘔吐する。僕は湿ったフェイスタオルで彼女の口を拭う。

「もーやだ、私、眠りたい。死にたいよー」

感覚はないのに、どうしてなのか、部屋が寒く見える。自分自身の思考がフル回転しているのが聞こえる、ーボブとワンダはどこだ？

「ねえ、ママのつわり用の吐き気止めが薬棚にひとビンあるから、持って来て」

「わかった」

映像がソファから玄関へ、そしてタイルで覆われた長方形の浴室へ移る。僕は薬棚のなかを探している。慌てふためいているのだろう、シーンが波打っていて、上部は灰色になっている。まるで調整が必要なテレビ画面みたいだ。見ていると、僕は棚をあちこち引っ掻き回している。

ロックしてしまおうか。どうせこれは三十年以上前に起ってしまったことなんだ。

Dreamer 15

Entrainment

いやそんなわけにはいかない。レイチエルが病気なんだ。僕の手が、半分なくなったクレストの練りはみがきのチューブや、子供用アスピリン、少し溶けかかったゼストのせっけんを不器用に引っ掻き回しているのが見える。薬を探しているんだ。あるいは何か別のものを。

「レイチエル、ここにはないよ」

「あるはずよ。ちょっと待って」 僕がレイチエルを振り向くと、彼女はよろよろと浴室に入ってくる。顔色が真っ白だ。「私が見つけるわ。ああ、ここにあった」

シーンが細かく波打ち始め、次第にぼやけてくる。僕はこの場を去ろうとしているのか？ ロックする。

「レオナルド？」

「はい、そっちの様子はどうですか？」

「僕を戻そうとしたか？」

「いいえ、私が戻したいと思えば、今頃とっくに戻ってますよ。どうしたんです」

「なんでもない。あとで話そう」

ロックを解除すると、部屋はグルグルと回り、訳が分からない混乱状態になっている。視界の下の隅から、なにかネットネットした緑色の筋が便器に向かって延びている。

この夜、僕も具合が悪かったのか？

「レイチエルー？」 彼女がいない。

Dreamer 15

僕はトイレの水を流すと、顔に水をぱしゃぱしゃとかけて、リビングルームによるめきながら戻っていく。レイチェルは真つ青で、胎児のように体を丸めて、目を閉じている。あつという間に寝入ったらしい。少なくとも眠れたんだ。

もう一度、浴室へ行く。

こんなのもちつとも楽しくないぞ。ニコを離れて、洗濯をしている母親のいる地下室に戻るかもしれない。――初めて生でロックンロールを聴いた楽しかったストリートダンスでもいだろう。裏庭のポーチに両親と一緒に座っていた時でもいい。あるいは家族との夕食でも――。

ダメだ。

「マイケル。大丈夫ですか。血圧が急激に下がってます。どうしたんです」

「平気だ。ニコから出ようとしてたんだ。あと少しで戻るよ――」

ロック。だが滲んだ便器しか見えない。僕の胃から胃液が吐き出される。一体どうしたっていうんだ。誘導チェアに座る前に食べた朝食のことを思い返す。あれはなんだっけ？ メキシカンブレックファストみたいなものだった気がする。――参ったな。あれも腐ってたとしたら、一体どうするんだ。上の僕も気分が悪くなっているのなら、すべておしまい、サヨナラだ。おそろくヘルメットの中に吐いてしまっただろう。

ロック。すぐ解除。なにも変わらない。見ていたらさっちまで気分が悪くなってきた。レイチェルはどこだ？

その時シーンがジャンプする。僕はリビングルームにいて、レイチェルの向かいに座っている。レイチェルは動かない。そして僕はあきらかに、ニコ数分間に吐いた形跡はない。おそらく薬が効いたんだろう。僕も薬を飲んだのかと、思い出そうとする。

Entrainment

これを見ていて、次第にすべてが薄暗くなっていくことに気づく。――まるで「ここ」にいる僕と、過去にいる僕とのあいだでシヨートが起ったみたいだ。ソファの上に茶色いビンが転がっているのが見える。拾い上げると、フタはなくなっていて、ビンはカラだった。薄暗くなるなか、僕は手のなかで、ラベルが見えるまでビンを回す。ボブ・A・ドミニク セコナルー〇〇ミリグラム 就寝前に一錠服用のこと。

シーンをロックする。光が消えて、薄暗い。レイチエルはソファの上で胎児のように眠っている。ぴくりとも動かない。レイチエルはこれを飲んだせいで、眠っているのか？

「マイケル、レオナルドです。心拍数が尋常じゃなくなっています。百を超えたら、リールを巻いて、あなたを連れ戻さなきゃなりません」

待ってくれ！ ダメだ！ 電話しなきゃ、彼女を助けなきゃ――

電気が体を走るのを感じる、僕は観覧車のように立ち上がる。立ち上がった後ろを向き、レイチエルから遠ざかっていく。

ダメだ！

シーンをロックしようとする。オペレータに電話しなきゃ。オペレータに電話して救急車を呼んでもらうんだ…住所は一〇

二 メイン、チエロキー――

そのとき、歯車が僕を吊り上げた。どこか別の所へ。

Dreamer 15

僕は今、プールの脇のラウンジチェアに寝そべっている。頭上からりと晴れた青空には、ところどころに青と金色の雲が浮かんでいる。近くでは道路工事の作業員が街路を掘り返している。

Entrainment

自分がどこにいるか分かる。――一九七四年の夏だ。

リンダはまだ部屋にいて、薄いシーツの下に体を横たえている。素足が片方シーツからはみ出し、そのつま先の先には、ティラーズ・ニュー・ヨークの空のワインボトルがある。左の手には、昨夜僕が渡したダイヤの指輪が輝いている。

ジェット機が上空で轟音を立てる。空港の近くにいるんだ。ここで思い出を探すことができるだろうか。昨日の夜のイメージが浮かぶ。滑走路を見渡せる丘に止めた車の中から、ジェット機が着陸するのを見ていた。

ノートに視線を落とすと、一遍の詩が目に入る。『稲妻のような君へ』、軍隊にいた頃に書いた昔の詩だ。さらにイメージが現れる。リンダはそれを読むと、歯を磨きに洗面所へ行く。彼女の脚が美しくすらりと伸びていることに僕は驚く。

リンダは蛇口をひねり、練り歯磨きをしぼりだす。「素晴らしい詩よ、マイケル。――英語を専攻すればよかったのに」「歴史がいろいろ」

「学科の人たちに見せて回ってもいいかしら。みんな気に入るわよ。――とくにヘンリー教授は絶対に。たぶんAの成績をもらえるわ」リンダは鏡を覗き込み、少しの間、熱心に歯を磨くと、僕の方を向き直る。口のまわりに泡がついている。「ヘンリー教授はすごく厳しいのよ、知ってるでしょ」

戻らなければ。

どうしても

この部屋が――ベッド、床、壁、口のまわりに泡をつけたリンダ、すべてがプラスチック膜のように引き伸ばされ、ある一点で碎け散った。ほんの一瞬のあいだ、僕は歯車のでっぺんにいて、その歯車は今動き出そうとしている。

過去へ。

Dreamer 15

Entrainment

そして下方へ、混沌の只中へ。

僕たちは浴室にいる。便器にかぶさるようにして体を二つに折っているレイチエルを僕は支えている。彼女の足がもつれる。僕たちはよろめき、倒れてしまう。さらなる混沌だ。

「吐いたのか？」

「ううん、—— 眠らせて」

僕はレイチエルを立てさせて、便器にかぶさるよう体を支える。さらに何年も前の懐かしいイメージが浮かぶ。僕の具合を悪くさせているものを吐かせるまで、顔が洗面器にかぶさるよう母親が支え続けてくれた。

「離して」 レイチエルが言うが、彼女の声は消え入りそうだ。「もうこれ以上吐けないよ。痛いよ」

「頼むから」

「痛いよ。離して」

「ダメだ、レイチエル！ ポテトサラダのことを考えろ！」

レイチエルは便器に顔を少し入れて、口を開けるが、何も出てこない。僕は向き直り大きなピンクのコップに浴室の蛇口から水をなみなみと注ぐ。

「これを飲むんだ」

「もう吐きたくないよ。できない」

「お願いだから」

Dreamer 15

Entrainment

レイチエルは僕のシャツに水を吐く。僕はもっと水を注ぎ、彼女に飲ませる。そして便器に彼女の体をかぶせるようにする。「レイチエル、本当のことを言うけど、この水はトイレから取ったんだ」

「あぐぐぐううー」レイチエルはヒジを僕の目の前に直角に突き出す。目の前に、赤い蜘蛛の巣が張り巡らされた丸く黄色い光が広がった。そして赤と緑の光の点が変わる。レイチエルの浴室がもう一度現れたとき、すべてはほんやりと二重に見えた。ちようどその瞬間、レイチエルが便器に、壁に、僕に向かって、黄色いゲロをたっぷりと吐き出した。僕が考えていたより、ずっと大量のゲロを。

「一体、どうしたんだ！」僕は振り向く。ボブとワンダ、子供たちだけ。レイチエル以外の家族全員が、恐怖のあまり大きく口を開けて、玄関に立っていた

「レイチエルと僕は具合が悪くてー、薬を飲んだと思うんです」

「なんてことだ」ボブの目が見開かれる。「何錠飲んだんだ」

「分かりません。床にビンが転がってます」

「レイチエルを押しさえてろ」

「ボブ」ワンダが指示する。「浴槽につめたい水を張って。ブラッドレー、製氷皿をあるだけ持ってきて。パパに渡して。レイチエルの目を覚ますのよ。ボブ、救急車を呼んで」

「もう電話しました」僕はワンダに言う。「でも誰も出ないんです」

ボブは僕に近寄り、蛇口をひねり、僕の腕からぐったりとしたレイチエルを抱き取ると、吐いた跡だらけの服ごと浴槽のなかへ入れた。そこには赤い跡もあった。

Dreamer 15

Entrainment

血だ。

視線を落とすと、シャツの上に、僕の手の大きさほどの黒いしみが見える。これは一体なんだ？

「鼻は大丈夫か」 ボブがかすかな笑みを浮かべてみせる。「腫れ上がってるぞ」

「折れたんだと思います」

「鼻から息が吸えるか？」

「はー」

「じゃあ、ただのアザだろう」 ボブは振り向き、意識が朦朧としたレイチェルに水をかける。「私の鼻は折れてるといつもみんなに言ってるが、実はもともとこういう形なんだ。折れてるように見えるだけさ」

ワンダが現れる。「ボブ、回線が混雑してる」

「一番近い病院がウエスラヤンにある、行こう」

数分後。ドミニク家の私道でタイヤが軋む音を立て、起伏のあるアスファルトの上をボブがポンティアックを走らせ、ウエスラヤンのコミュニティ病院へと向かう。助手席には三人の子供たちが身動きひとつせず、まっすぐ前を向いて座り、後部座席にはワンダと僕がレイチェルを挟むように支えている。僕は車が揺れるたびレイチェルを押さえ、氷で濡らした布を自分の鼻柱に押し付けている。

僕は丘を数える。八つの丘、そして四回、ほぼ直角に近い曲がり角を曲がった。スピードメーターの針が右へと大きく傾いていく。数分後、タイヤは高速十三号線の交差点で軋んだ音を立てる。さらに数分後、車は町外れに近づく。――ガソリンスタンド、ハンバーガーショップ。すべて閉まっている。

Entrainment

信号だ、赤。

ボブは非常灯を点け、クラクションを鳴らしながら通り過ぎる。

次も、次の信号もすべて赤。ボブはスピードを上げて信号を通り越す、数分後、パトカーが僕たちを追ってくる、ボブは車の窓を下げ、ついて来てくれと手で合図する。ありがたいことに、道路に他の車はいなかった。僕はレイチエルに回した腕に力を込め、車は角を曲がって、病院の緊急入口へと入っていく。

レイチエルを抱きかかえて白い廊下へ入っていくと、ドアが大きく開く。数秒後、係員が僕の手から彼女を引き取った。

時計が時を刻むのを僕は見ている。一秒、また一秒。僕たちの脳にも、時はこんなふうに記録されているのか。こんなふうにな一秒ごとに？　僕はどのくらいここにいるんだ？　僕は自分の腕を見る。時計には乾いた嘔吐物と血がびっしりとついていて、ポテトらしきものの跡も、そこに見つかった。あるいは玉ねぎかも。僕は一生ポテトサラダは口にしないと決心する。今も食べないし、過去にも口にしなかった。

そしてこれからもだ。

Dreamer 15

「ドミニク牧師、医師のブライアン・ウォーカーです」　医師は短い金髪と、とても疲れた目をした中背の人だった。「お嬢さんの胃を洗浄しましたが、何もありませんでした。セコナールのビンのラベルは一九六二年六月で、五日分、最高量は五粒です」　医師は僕を見る。「君もいくらか薬を飲んだのかな？」

「飲んでないと思います」

「はつきりしないのかね」　医師は苛立ったような顔を僕に向ける。

Entrainment

「いえ。つまり、飲んでません」

「眠くないかな」

「気持ちが悪いです」

「胃の洗浄をしようか」

「いえ」

医者は困ったような薄笑いが浮かべ、ボブとワンダに向き直る。「お嬢さんは少し発熱していますので、インフルエンザか食中毒だと思われます。セコバルビタールと嘔吐抑制剤を間違えたのでしょうか。すべて体内から取り除きましたが、ひどい脱水状態になっています。ですから一晩入院したほうがいいでしょう。水分を補給して、通常の状態に戻します」 医者は僕を見る。「診察を受けなくて、本当に大丈夫かね」

「大丈夫です。すべて吐いたと思いますから」

「原因はなんだと思う？」

「ポテトサラダ」

「そうか」 医者は頷く。「ポテトサラダはひどいんだよ。そうか、あれとターキーがね。感謝祭後の週末にここに来るべきだったな。町中が具合が悪くなったんだ。ターキーインフルエンザと我々は呼んでる」

「彼女と一緒にいたんです」 僕が言う。「もしみんながよければ」

医者はトミニク氏を見る。

Dreamer 15

Entrainment

「もちろん、私たちは構いませんよ」 ボブはそう言う。僕の方を向く。「ワンダと私は家に帰るよ。― 子供を寝かしつけたら、君に着替えを持って来よう。君に合いそうなズボンを持ってんだ」

僕は病室の暗闇に座って、ベッドに寝ているレイチェルを見つめ、彼女の胸が息を吸うことに動くのを見ている。点滴のポットが古いタイプだということに気づく。ガラスだ、そりゃそうだろう。一九六六年にプラスチックの点滴袋なんてなかった。

僕は見ているだけなのに、ある種の疲れを感じている。自分がまるで実際にこの出来事を体験したかのように、しかもまるで初めて体験することのように思える。

シャツを見下ろす。― 小さなポケットプロテクターのついた、半袖で白い綿の仕事着だ。ボブ・ドミニクの気遣いだ。― かつては白いジーンズであったはずのものは、隅にたたんで置かれて、僕はその代わりに、ゆったりとした手術用のズボンをはいている。

鼻を腫らした僕は、暗闇の中ここに座って、ベッドの上の女の子を見ている。チューブから点滴液が落ちるのを見つめ、レイチェルの寝顔を見つめている。

そして今、僕はもう一度見つめる。もう一度だ。僕の過去から来たこの女の子は、青白い顔をして身動きひとつせず暗い病室で眠っている。今僕がいる場所から、何千キロも、何十年も離れたところにいる。

僕は思う。もしここで僕が眠ったら、反対側で目覚めることになるだろうか。
やってみよう。

Dreamer 15

